

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第250集

山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

やま うち
山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これらの先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の山ノ内Ⅲ遺跡は、東側に船越湾を望む山麓斜面上に立地し、平成5・6年の発掘調査によって縄文時代の集落跡と、製鉄関連の遺構群が発見されました。調査に引き続き出土資料の整理を進め、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査に及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成9年3月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 船越 昭治

例 言

1. 本報告書は、岩手県下閉伊郡山田町船越第2地割18番地ほかに所在する山ノ内III遺跡の発掘調査結果を取録したものである。
2. 本遺跡の調査は、三陸縦貫自動車道（山田道路）の建設に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はMG18-0281、調査略号はYUⅢ-93、92である。
4. 調査面積・野外調査期間及び担当者は次のとおりである。
平成5年度 5,500㎡ 平成5年7月26日～10月28日 神敏明・渡辺洋一・稲垣雅宏
平成6年度 3,500㎡ 平成6年4月5日～8月12日 高橋佐知子・渡辺洋一・千葉孝雄
5. 室内整理期間と整理担当者（執筆者）は次のとおりである。なお、I章は工藤利幸が、平成5年度調査の遺構についての事実記載は主に神敏明が、平成6年度調査の遺構と遺物全般についての記載は高橋佐知子が行ったが、執筆責任は本文文末に記した。
平成5年11月1日～平成6年3月31日 神敏明・稲垣雅宏
平成6年11月1日～平成7年3月31日 高橋佐知子
6. 検出された遺構の種類と数は以下のとおりである。
縄文時代
壑穴住居跡21棟 壑穴状遺構2棟 土坑11基 炉跡2基 集石1基 焼土遺構37基
古代
壑穴住居跡3棟 土坑2基 製鉄炉8基 炭窯17基 炭置き場1か所
羽口捨て場1か所 焼土遺構4基
7. 分析・鑑定は次の方々、機関に依頼した。（敬称略）
考古地磁気調査 西谷忠師（秋田大学鉱山学部）
砂鉄・鉄滓分析 田口勇（専修大学）
砂鉄・木炭・鉄滓・炉壁分析 川鉄テクノリサーチ株式会社 分析・評価センター
石質鑑定 佐藤二郎（長内水源工業株式会社）
炭化材樹種同定 早坂松次郎（岩手県木炭協会）
8. 本報告書では、国土地理院発行の50,000分の1の地形図、建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所作成の1,000分の1の用地図を使用した。
9. 土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を用いた。
10. 発掘調査及び室内整理に際しては、次の方々、機関のご協力とご教示、ご指導を賜った。（敬称略）
穴澤義功 尾崎保博 熊谷常正 佐々木健 佐藤嘉広 田口勇 竹下将男
建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所 仙台市立根白石中学校 山田町教育委員会
11. 調査にかかわる諸記録及び遺物の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序 例言

[本 文]

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の立地と環境	
1. 遺跡の立地	1
2. 地形	1
3. 周辺の遺跡	7
4. 基本土層	12
III. 調査方法と整理方法	
1. 野外調査	
(1)調査区の設定と遺構の呼称	14
(2)掘り	14
(3)踏査と実測	14
(4)写真撮影	15
2. 室内整理	
(1)遺物の処理	15
(2)遺物図版	15
(3)遺構図面の処理	15
(4)遺構図版	16
(5)写真図版	16
IV. 検出された遺構と遺物	
1. 縄文時代	
(1)住居跡	17
(2)竪穴状遺構	48
(3)土坑	49
(4)柱穴状土坑	56
(5)炉跡	56
(6)築石	57
(7)焼土遺構	57
(8)廃棄土	70

2. 古代	
(1)竪穴住居跡	71
(2)土坑	79
(3)製鉄炉跡	80
(4)炭窯	90
(5)炭置き場	103
(6)羽口捨て場	104
(7)焼土遺構	104
V. 遺構外の出土遺物	
1. 土器、土製品	
(1)縄文時代の土器	131
(2)縄文時代の土製品	137
(3)古代の土器	137
2. 縄文時代の石器、石製品	137
3. 銭	143
4. 鉄製品	143
5. 鉄滓	143
VI. まとめ	
1. 遺構	198
(1)縄文時代	198
(2)古代(平安時代)	200
2. 遺物	202
付編 1山ノ内III遺跡考古地磁気調査報告	204
2山田町山ノ内III遺跡出土 砂鉄、木炭、鉄滓 および炉壁の分析・調査	208
3山ノ内III遺跡鉄資料検討結果	255
報告書抄録	

[図 版]

第1図 岩手県全図	2
第2図 遺跡位置図	3
第3図 地形分類図	4
第4図 周辺の地形	5
第5図 周辺の遺跡位置図	9
第6図 VIB 8 j 住居跡	18
第7図 遺構配置図	19

第8図 遺構全体図(2)飛び地I、II区	21
第9図 VIB 0 j 住居跡	23
第10図 VIC 7 a 住居跡	24
第11図 VIC 7 d 住居跡	25
第12図 VIC 0 a - 1 住居跡	27
第13図 VIC 0 a - 2 住居跡(1)	28
第14図 VIC 0 a - 2 住居跡(2)	29

第15図	VIC 0 b 住居跡	30	VIC 7 d 住居跡、VIC 7 a 住居跡、VIC 0 a - 1 住居跡(1)	107	
第16図	VIA 1 e - 1 住居跡(1)	31	第59図	遺構内出土遺物3 VIC 0 a - 1 住居跡(2)	108
第17図	VIA 1 e - 1 住居跡(2)、- 2 住居跡	32	第60図	遺構内出土遺物4 VIC 0 a - 2 住居跡、VIC 0 b 住居跡、VIA 1 e - 1 住居跡(1)	109
第18図	VIA 3 i 住居跡	34	第61図	遺構内出土遺物5 VIA 1 e - 1 住居跡(2)、VIA 1 e - 2 住居跡、VIA 3 i 住居跡、VIA 8 i 住居跡(1)	110
第19図	VIA 8 i 住居跡	35	第62図	遺構内出土遺物6 VIA 8 i 住居跡(2)、VIA 0 c 住居跡	111
第20図	VIA 0 c 住居跡	36	第63図	遺構内出土遺物7 VIA 0 d 住居跡、VIB 2 a - 1 住居跡、VIB 3 a 住居跡、VIB 8 b 住居跡、VIB 0 b 住居跡、VIC 1 b 住居跡	112
第21図	VIA 0 d 住居跡	37	第64図	遺構内出土遺物8 VIC 3 f 住居跡、VIC 5 f 住居跡、VIC 7 b 竪穴状遺構、VIB 1 c 竪穴状遺構(1)	113
第22図	VIB 2 a - 1 住居跡、VIB 2 a - 2 住居跡	40	第65図	遺構内出土遺物9 VIB 1 c 竪穴状遺構(2)	114
第23図	VIB 3 a 住居跡	41	第66図	遺構内出土遺物10 VIB 1 c 竪穴状遺構(3)、VIC 9 b 土坑、VIC 1 c 土坑、VIA 1 e - 1 土坑、VIB 2 b - 2 土坑	115
第24図	VIB 8 b 住居跡	42	第67図	遺構内出土遺物11 焼土遺構	116
第25図	VIB 0 b 住居跡	44	第68図	遺構内出土遺物12 IIB 4 h 住居跡、VIA 3 b 住居跡(1)	117
第26図	VIC 1 b 住居跡	45	第69図	遺構内出土遺物13 VIA 3 b 住居跡(2)	118
第27図	VIC 3 f 住居跡	46	第70図	遺構内出土遺物14 VIA 1 d 住居跡	119
第28図	VIC 5 f 住居跡	48	第71図	遺構内出土遺物15 IIC 1 f 炭窯、IIC 2 e 製鉄炉群、IIC 1 d 羽口捨て場	120
第29図	竪穴状遺構	49	第72図	遺構外鉄滓出土状況(1) 飛び地	140
第30図	土坑(1)	51	第73図	遺構外鉄滓出土状況(2) 遺跡全体	141
第31図	土坑(2)	54	第74図	遺構外出土遺物 土器 1	144
第32図	炉跡	57	第75図	遺構外出土遺物 土器 2	145
第33図	VIB 1 d 集石	58	第76図	遺構外出土遺物 土器 3	146
第34図	焼土遺構(縄文時代)(1)	59	第77図	遺構外出土遺物 土器 4	147
第35図	焼土遺構(縄文時代)(2)	61	第78図	遺構外出土遺物 土器 5	148
第36図	焼土遺構(縄文時代)(3)	63	第79図	遺構外出土遺物 土器 6	149
第37図	焼土遺構(縄文時代)(4)、柱穴状土坑群	68	第80図	遺構外出土遺物 土器 7	150
第38図	VIA 2 d 廃棄土	70	第81図	遺構外出土遺物 土器 8	151
第39図	IIB 4 h 住居跡(1)	72	第82図	遺構外出土遺物 土器 9	152
第40図	IIB 4 h 住居跡(2)、カマド	73	第83図	遺構外出土遺物 土器 10	153
第41図	VIA 3 b 住居跡(1)	75	第84図	遺構外出土遺物 土器 11	154
第42図	VIA 3 b 住居跡(2)、カマド	76	第85図	遺構外出土遺物 土器 12	155
第43図	VIA 1 d 住居跡(1)	78	第86図	遺構外出土遺物 土器 13	156
第44図	VIA 1 d 住居跡(2)、カマド	79	第87図	遺構外出土遺物 土器 14	157
第45図	土坑(古代)	80	第88図	遺構外出土遺物 土器 15	158
第46図	IIC 2 e 製鉄炉群(1) a 炉	81	第89図	遺構外出土遺物 土器 16	159
第47図	IIC 2 e 製鉄炉群(2) b 炉、c 炉、f 炉	84	第90図	遺構外出土遺物 土器 17	160
第48図	IIC 2 e 製鉄炉群(3) d 炉、e 炉	86			
第49図	IIC 2 e 製鉄炉群(4) g 炉、1~3号土坑	89			
第50図	IIC 2 e 製鉄炉群鉄滓出土状況	91			
第51図	IIC 2 e 製鉄炉群砂鉄出土状況	92			
第52図	炭窯(1)	94			
第53図	炭窯(2)	97			
第54図	炭窯(3)	99			
第55図	炭窯(4)、IIB 5 h 炭置き場、IIC 1 e 羽口捨て場 1、2	102			
第56図	焼土遺構(古代)	105			
第57図	遺構内出土遺物 1 VIB 8 j 住居跡、VIB 0 j 住居跡(1)	106			
第58図	遺構内出土遺物 2 VIB 0 j 住居跡(2)、				

第91圖	遺構外出土遺物	土器18	……………161	第103圖	遺構外出土遺物	石器11	……………173
第92圖	遺構外出土遺物	土器19	……………162	第104圖	遺構外出土遺物	石器12	……………174
第93圖	遺構外出土遺物	石器1	……………163	第105圖	遺構外出土遺物	石器13	……………175
第94圖	遺構外出土遺物	石器2	……………164	第106圖	遺構外出土遺物	石器14	……………176
第95圖	遺構外出土遺物	石器3	……………165	第107圖	遺構外出土遺物	石器15	……………177
第96圖	遺構外出土遺物	石器4	……………166	第108圖	遺構外出土遺物	石器16	……………178
第97圖	遺構外出土遺物	石器5	……………167	第109圖	遺構外出土遺物	石器17	……………179
第98圖	遺構外出土遺物	石器6	……………168	第110圖	遺構外出土遺物	石器18	……………180
第99圖	遺構外出土遺物	石器7	……………169	第111圖	遺構外出土遺物	石器19	……………181
第100圖	遺構外出土遺物	石器8	……………170	第112圖	遺構外出土遺物	石器20	……………182
第101圖	遺構外出土遺物	石器9	……………171	第113圖	遺構外出土遺物	石器21、石製品、錢	…183
第102圖	遺構外出土遺物	石器10	……………172	付圖	遺構全体圖(1)		

[写真図版]

写真図版1	調査区全景(航空写真)	……………265	写真図版32	焼土遺構(縄文時代)(3)	……………296
写真図版2	遺跡透景、遺跡土層	……………266	写真図版33	焼土遺構(縄文時代)(4)	……………297
写真図版3	VIB 8 j 住居跡	……………267	写真図版34	焼土遺構(縄文時代)(5)	……………298
写真図版4	VIB 0 j 住居跡	……………268	写真図版35	焼土遺構(縄文時代)(6)	……………299
写真図版5	VIC 7 a 住居跡	……………269	写真図版36	焼土遺構(縄文時代)(7)	……………300
写真図版6	VIC 7 d 住居跡	……………270	写真図版37	焼土遺構(縄文時代)(8)、VII B 1 d 集石、VII A 2 d 廃棄土	……………301
写真図版7	VIC 0 a - 1 住居跡	……………271	写真図版38	II B 4 h 住居跡(1)	……………302
写真図版8	VIC 0 a - 2 住居跡	……………272	写真図版39	II B 4 h 住居跡(2)	……………303
写真図版9	VIC 0 b 住居跡	……………273	写真図版40	VII A 3 b 住居跡	……………304
写真図版10	VII A 1 e - 1 住居跡	……………274	写真図版41	VII A 1 d 住居跡(1)	……………305
写真図版11	VII A 1 e - 2 住居跡	……………275	写真図版42	VII A 1 d 住居跡(2)	……………306
写真図版12	VII A 3 i 住居跡	……………276	写真図版43	VII A 1 d 住居跡(3)、土坑(古代)	…307
写真図版13	VII A 8 i 住居跡	……………277	写真図版44	II C 2 e 製鉄炉群(1) a 炉、b 炉	…308
写真図版14	VII A 0 c 住居跡	……………278	写真図版45	II C 2 e 製鉄炉群(2) c 炉、d 炉、e 炉	…309
写真図版15	VII A 0 d 住居跡	……………279	写真図版46	II C 2 e 製鉄炉群(3) f 炉、g 炉、1 ~ 2号土坑	……………310
写真図版16	VII B 2 a - 1 住居跡	……………280	写真図版47	II C 2 e 製鉄炉群(4)羽口捨て場、炭置き場、遺構外遺物出土状況	……………310
写真図版17	VII B 2 a - 2 住居跡	……………281	写真図版48	炭窯(1)	……………312
写真図版18	VII B 3 a 住居跡	……………282	写真図版49	炭窯(2)	……………313
写真図版19	VII B 8 b 住居跡	……………283	写真図版50	炭窯(3)	……………314
写真図版20	VII B 0 b 住居跡	……………284	写真図版51	炭窯(4)	……………315
写真図版21	VII C 1 b 住居跡	……………285	写真図版52	焼土遺構(古代)	……………316
写真図版22	VII C 3 f 住居跡	……………286	写真図版53	遺構内出土遺物 VIB 8 j 住居跡、VIB 0 j 住居跡、VIC 7 a 住居跡、VIC 7 d 住居跡、VIC 0 a - 1 住居跡(1)	……………317
写真図版23	VII C 5 f 住居跡	……………287	写真図版54	遺構内出土遺物 VIC 0 a - 1 住居跡(2)、VIC 0 a - 2 住居跡、VIC 0 b 住居跡、VII A 1 e - 1 住居跡	……………318
写真図版24	VIC 7 b 竪穴状遺構	……………288	写真図版55	遺構内出土遺物 VII A 1 e - 2 住居	……………318
写真図版25	VII B 1 c 竪穴状遺構	……………289			
写真図版26	土坑(縄文時代)(1)	……………290			
写真図版27	土坑(縄文時代)(2)	……………291			
写真図版28	土坑(縄文時代)(3)	……………292			
写真図版29	炉跡	……………293			
写真図版30	焼土遺構(縄文時代)(1)	……………294			
写真図版31	焼土遺構(縄文時代)(2)	……………295			

	跡、VII A 3 i 住居跡、VII A 8 i 住居跡、VII A 0 c 住居跡、VII A 0 d 住居跡、VII B 2 a - 1 住居跡、VII B 3 a 住居跡、VII B 8 b 住居跡	写真図版56	遺構内出土遺物 VII B 0 b 住居跡、VII C 1 b 住居跡、VIC 3 f 住居跡、VIC 5 f 住居跡、VIC 7 b 竪穴状遺構、VII B 1 c 竪穴状遺構(1)	写真図版57	遺構内出土遺物 VII B 1 c 竪穴状遺構(2)、IVC 9 c 土坑、VIC 1 c 土坑、VII A 1 e - 1 土坑、VII A 1 e - 2 土坑、VII B 7 b - 2 土坑、焼土遺構(1)	写真図版58	遺構内出土遺物 焼土遺構(2)、II B 4 h 住居跡、VII A 3 b 住居跡(1)	写真図版59	遺構内出土遺物 VII A 3 b 住居跡(2)、VII A 1 d 住居跡(1)	写真図版60	遺構内出土遺物 VII A 1 d 住居跡(2)、II C 1 f 炭窯、II C 2 e 製鉄炉群、羽口捨て場	写真図版61	遺構内出土遺物 VII A 1 d 住居跡(3)	写真図版62	遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(1)	写真図版63	遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(2)	写真図版64	遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(3)	写真図版65	遺構外出土遺物 土器 1	写真図版66	遺構外出土遺物 土器 2	写真図版67	遺構外出土遺物 土器 3	写真図版68	遺構外出土遺物 土器 4	写真図版69	遺構外出土遺物 土器 5	写真図版70	遺構外出土遺物 土器 6	写真図版71	遺構外出土遺物 土器 7	写真図版72	遺構外出土遺物 土器 8	写真図版73	遺構外出土遺物 土器 9	写真図版74	遺構外出土遺物 土器 10	写真図版75	遺構外出土遺物 土器 11	写真図版76	遺構外出土遺物 土器 12	写真図版77	遺構外出土遺物 土器 13、土製品	写真図版78	遺構外出土遺物 石器 1	写真図版79	遺構外出土遺物 石器 2	写真図版80	遺構外出土遺物 石器 3	写真図版81	遺構外出土遺物 石器 4	写真図版82	遺構外出土遺物 石器 5	写真図版83	遺構外出土遺物 石器 6	写真図版84	遺構外出土遺物 石器 7	写真図版85	遺構外出土遺物 石器 8	写真図版86	遺構外出土遺物 石器 9	写真図版87	遺構外出土遺物 石器 10	写真図版88	遺構外出土遺物 石器 11	写真図版89	遺構外出土遺物 石器 12	写真図版90	遺構外出土遺物 石器 13	写真図版91	遺構外出土遺物 石器 14	写真図版92	遺構外出土遺物 石器 15	写真図版93	遺構外出土遺物 石器 16、鉄、鉄製品
--	---	--------	--	--------	---	--------	---	--------	---	--------	--	--------	--------------------------	--------	--------------------------------	--------	--------------------------------	--------	--------------------------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	---------------	--------	---------------	--------	---------------	--------	-------------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	--------------	--------	---------------	--------	---------------	--------	---------------	--------	---------------	--------	---------------	--------	---------------	--------	---------------------

[表]

第1表	周辺の遺跡(1)縄文時代中期後葉~末葉	第12表	炭化物樹種同定結果
第2表	周辺の遺跡(2)平安時代	第13表	鉄滓、鉄塊系遺物計測表
第3表	周辺の遺跡(3)製鉄関連遺跡	第14表	石皿の分類概念
第4表	周辺の遺跡一覧	第15表	石匙の分類概念
第5表	遺構内出土遺物観察表(1)土器(縄文時代)	第16表	遺構外出土遺物観察表(1)土器(縄文時代)
第6表	遺構内出土遺物観察表(2)石器、石製品	第17表	遺構外出土遺物観察表(2)土製品(縄文時代)
第7表	遺構内出土遺物観察表(3)土師器	第18表	遺構外出土遺物観察表(3)土師器
第8表	遺構内出土遺物観察表(4)須恵器	第19表	遺構外出土遺物観察表(4)須恵器
第9表	遺構内出土遺物観察表(5)土製品(羽口を除く)	第20表	遺構外出土遺物観察表(5)石器、石製品
第10表	遺構内出土遺物観察表(6)羽口	第21表	遺構外出土遺物観察表(6)銭
第11表	遺構内出土遺物観察表(7)鉄滓、砂鉄、鉄塊系遺物	第22表	遺構外出土遺物観察表(7)鉄製品

I 調査に至る経過

三陸縦貫自動車道は、宮城県仙台市と岩手県宮古市を結ぶ延長約220kmの一般国道の自動車専用道路であり、八戸、久慈自動車道とともに、昭和62年6月指定された全国約14,000kmの高規格幹線道路網の一部をなすものである。

山田道路は、山田町関谷と山田町船越の間7,800mの区間であり、国道45号の市街地での増大する交通需要や陸路の解消を目的に一部を昭和62年に三陸縦貫自動車道として事業化されたものであるが、昭和63年には新たに南側延長部を合わせて高規格道路として事業の促進が図られた。

この間の埋蔵文化財包蔵地については岩手県教育委員会が昭和62年度に分布調査と試掘調査を実施し、平成元年9月5日付「教文第415号」で事業について照会し、9月25日付「建東陸調第111号」の回答を受けて建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これを受けて当埋蔵文化財センターは、平成5年6月29日の委託契約に基づいて山ノ内Ⅲ遺跡の調査に着手することとなり、平成5年7月26日から10月28日まで5,500㎡の調査を行った。翌平成6年には残る3,500㎡について4月1日に契約を締結し、4月5日から6月30日までの予定で調査を実施したが、検出された遺構が多かったことから同年8月12日まで調査期間を延長して実施し、8月12日に調査を終えて現場を撤収した。(工藤利幸)

II 遺跡の環境と立地

1. 遺跡の立地 (第1、2図)

山ノ内Ⅲ遺跡は東日本旅客鉄道山田線岩手船越駅の南方約1kmの距離に位置している。遺跡の所在する山田町は、県都盛岡市から東南東に直線距離で73km、太平洋に面した陸中海岸のほぼ中ほどに位置している。町の東方を海岸線に沿って山田線と国道45号が南北に縦断する。東側は太平洋に面し、北側は宮古市、南側は大槌町、西側は川井村及び大槌町と隣接し、総面積は、263.54km²である。

本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「大槌」(N J-54-13-4)、及び2万5千分の1地形図「陸中山田」(N J-54-13-4-1)の図幅に含まれ、北緯39度29分11秒、東経141度58分21秒付近にある。

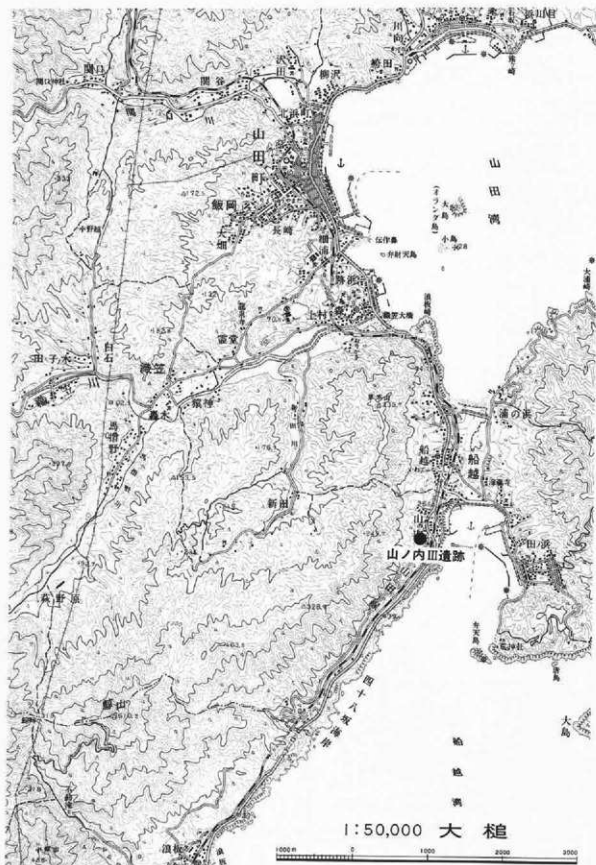
2. 地形 (第3、4図、写真図版1、2)

遺跡が位置する山田町の東側は太平洋に面し、湾と岬が入り組んだ屈曲の多いリアス式海岸特有の海岸線を呈している。したがって平坦面は少なく、山地が海に張り出す地形が大部分を占める。町内の大部分を占める山地は北上山地の中部東端にあたり、太平洋岸沿いに丘陵地や海岸段丘を伴っている。標高300～800mの山地が海岸まで迫る地形のため、低地は河川の流域

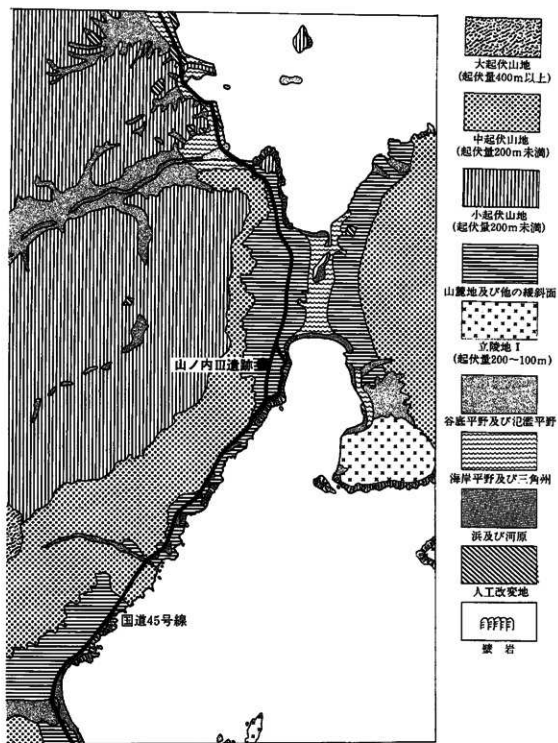
リアス式
海岸
海に張り
出す山地



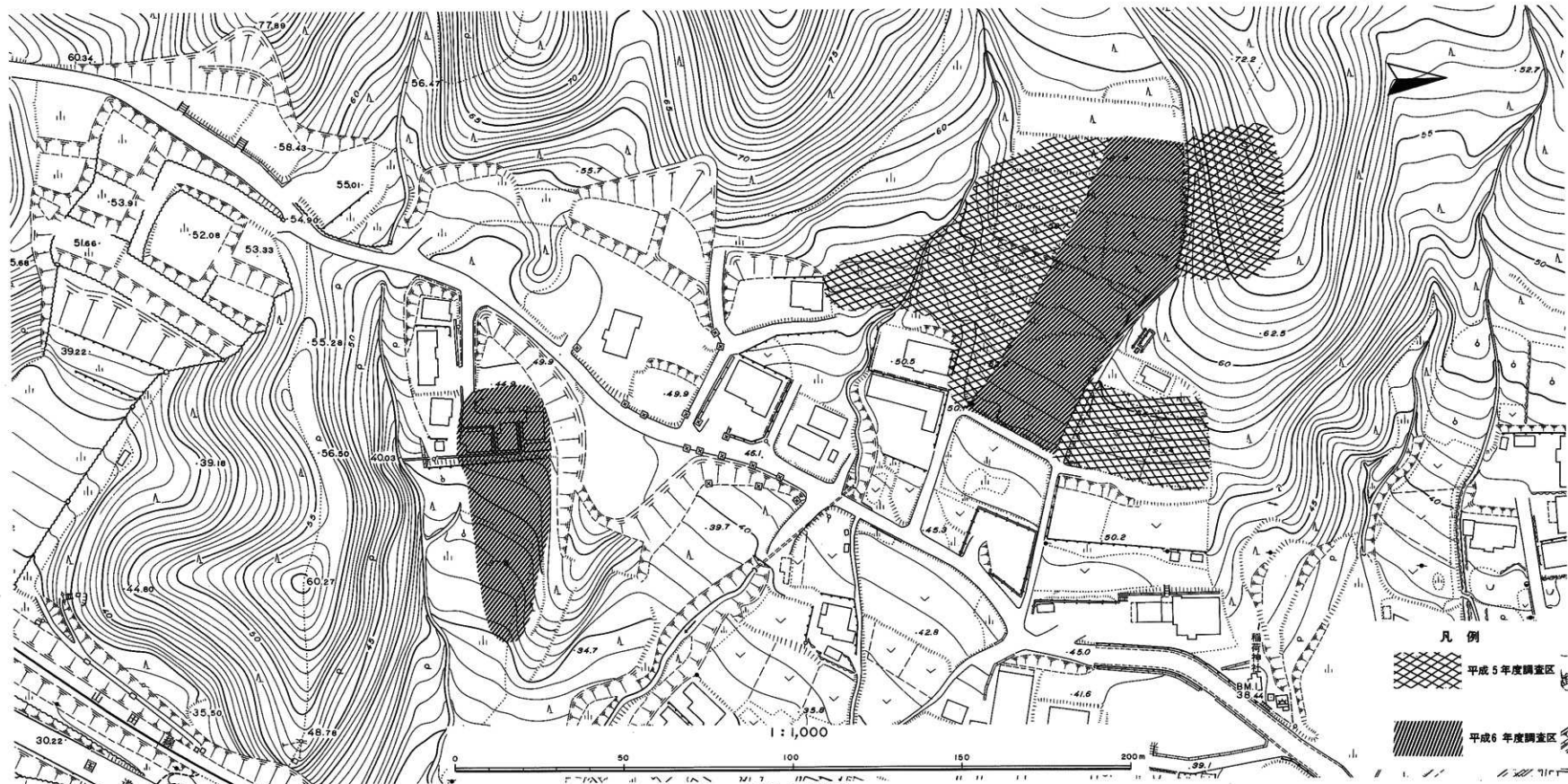
第1図 岩手県全図



第2圖 遺跡位置圖



第3図 地形分類図



第4図 周辺の地形

や山田湾、船越湾に面する比較的狭い範囲に限定される。大槌町と北西部の高滝森(1,160m)から水呑場山(948m)、鳥古山(850m)、山母森(806m)を経て鯨山(610m)に至る尾根は高く険しい。

町内の主要な河川は山田湾の湾奥に注ぎ込む関口川と織笠川である。他に宮古湾に注ぐ津軽石川や織笠川の支流の馬指野川、新田川等がある。これらの川は水呑場山から鯨山に至る尾根の東側を源流部として深いV字谷を刻みながら東流を続ける。上流域で侵食、運搬された土砂はV字谷の中・下流域で堆積し、小規模な平地を形成している。この平地は、大部分が山地である山田町にとって貴重なものであり、主に農耕地として利用されている。

地形と地質の関連を見ると、豊間根から船越に至る国道45号線沿いの細長い地域が、比較的なだらかな丘陵状の地形を示すのに対して、田子ノ木、関口、日当を結ぶ南北線の西側は高く険しい尾根を連ねている。また東側の半島部の十二神山(731m)、大沢山(673m)、露露ヶ岳(504m)も中央の丘陵状の地域から比べると目立って高く突き出ている。これらの相違は中央の南北に細長い地域が風化の進んだ花崗岩からなり、西部や東部の急峻な地域は粘板岩・チャート・原地山層からなっているためである。

風化花崗岩

山ノ内III遺跡は山麓地の緩斜面に位置し、標高は55~72mで、遺跡の現況は山林及び原野であるが原野の一部は水田として利用されていた時期がある。(神 敏明)

3. 周辺の遺跡(第5図)

山田町内の遺跡は、岩手県教育委員会文化課が作成した「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」によると150か所余りが登録されている。遺跡の分布は主に山田湾を囲む小規模な平地を見下ろす尾根の鞍部(特に大沢、船越、織笠などの山田湾北岸及び西岸)、関口川、織笠川、新田川が形成した河岸段丘上、船越湾を望む尾根の鞍部や同湾に注ぐ小河川の谷筋などに多く見られる。

山ノ内III遺跡の周辺には周知の遺跡が多数存在する。また、当埋蔵文化財センターでは平成2年以来、三陸縦貫自動車道路の建設にともなう遺跡の発掘調査を毎年行い、平成8年度現在発掘遺跡数は12遺跡にのぼっている。それらの調査成果も上がっているため、以下本遺跡と関連の深い遺跡について述べる。

今回の調査で出土した遺物には、縄文時代早期後半、前期初頭、前期前葉~中葉、中期前葉~末葉、後期、晩期、平安時代のものがある。これらの中で、中期前葉、後期、晩期の遺物は少数であり、遺構のほとんどが中期後葉~末葉、平安時代のものであるため、主に早期、前期、中期後葉~末葉、平安時代、及び製鉄関連の遺跡について概観することとする。

中期末葉
~ 後葉
平安時代
製鉄遺跡

早期の遺跡としては、大沢の浜川目遺跡(42~44)、図中にはないが豊間根の字名田遺跡があげられる。いずれも未調査であるが、貝殻条痕文、貝殻腹線文の土器が出土している。

前期に入ると遺跡数は増大する。周知の遺跡だけでも、早川遺跡(図外)、猿手遺跡(86)、沢田I遺跡(18)、馬田遺跡(図外)、浜川目遺跡(42~44)、多門遺跡(45)、関口遺跡(2,3)、上野台遺跡(5~7)、後山II遺跡(70)、馬子沢遺跡(図外)、鹿渡遺跡、馬鞍遺跡、字名田遺跡(図外)、上野遺跡(図外)、新田遺跡(100,101)、天王平遺跡(102)、田茂沢遺跡(78)、日当II遺跡(80)である。これらの遺跡からは不整整り糸文や網目状整り糸文、斜縄文を施した織維を含む土器片が出土しているが、いずれも未調査である。

中期後葉～末葉の遺跡としては、大沢川遺跡、上台遺跡、大沢遺跡(125)、猿神遺跡、廻立遺跡、間木戸遺跡、沢田III遺跡、房の沢遺跡、馬田遺跡、上野畑遺跡、浜川目遺跡、多門遺跡、上野台遺跡、越田遺跡など多くの遺跡がある。そのほか当埋蔵文化財センターが調査した遺跡は第1表のとおりである。船越湾や山田湾を望む尾根の鞍部に同時期の集落が形成される傾向がある。

次に平安時代の遺跡として、坊主山遺跡、轟木遺跡、沢田III遺跡、関口遺跡、後山I遺跡、小谷島遺跡、船石遺跡、羽々ノ下遺跡、下田部II遺跡、日当沢遺跡、田茂沢遺跡がある。埋蔵文化財センターが調査した遺跡は第2表にあげられるが、住居跡が検出されたか否かにかかわらず、鍛冶や製鉄などの製鉄関連遺構が検出されている例が多い。また、遺構が検出されていなくても、鉄滓や羽口が出土している遺跡があり、調査区外に製鉄関連の遺構の存在を伺わせる。これらの遺跡は船越湾や山田湾に注ぐ中小河川の谷筋や尾根上に立地している。

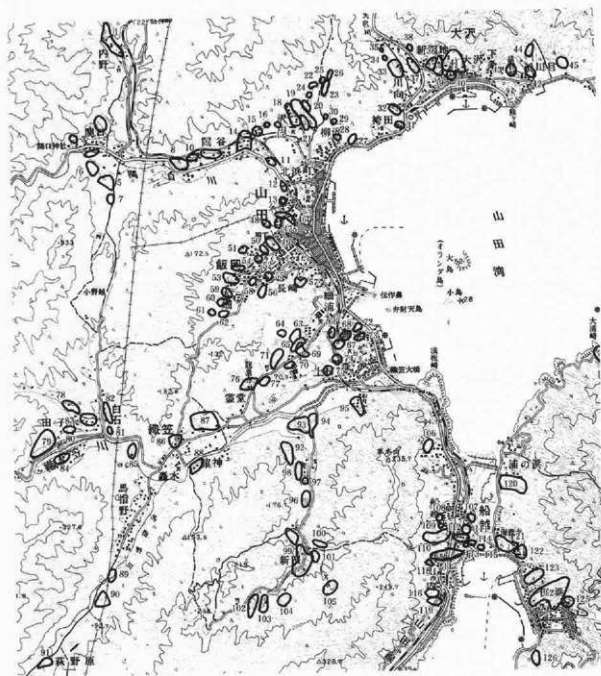
平安時代の鍛冶工房 また、表にはないが本遺跡から南方へ約8.8km離れた大橋湾に面する夏本遺跡では平安時代の鍛冶工房が検出されている。

最後に製鉄関連遺跡について述べる。当埋蔵文化財センターで調査した遺跡で、時代が特定できない遺跡、及び奈良時代と推定される遺跡は第3表のとおりである。湾台II遺跡、大畑I遺跡は出土した遺物から製鉄関連の遺構の存在を伺わせる。また、上村遺跡では奈良時代に属すると考えられる沿岸では最も古い製鉄炉のほか鍛冶炉や炭窯を検出しており、特筆される遺跡である。この他に小谷島遺跡など、未調査だが鉄滓が表土で採集できる遺跡も数多くある。山ノ内III遺跡周辺地の地元住民によれば、「かなくそ(鉄滓)なんかはどこの沢でも拾える。」というくらい山田町では多く目にするもののある遺物であるらしい。このことは、現在までの調査結果は言うに及ばず、この地域で古代から盛んに鉄生産が行われていたことを物語っている。

(高橋佐知子)

参考文献

- 山田町教育委員会 1986『山田町史 上巻』
- 文化庁文化財保護課 1984『全国遺跡地図 岩手県』
- 岩手県立博物館 1990『北の鉄文化』
- 佐々木清文 1990『岩手県の製鉄遺跡(1)』『岩手県立博物館研究報告』第8号
- 1994『岩手県の製鉄遺跡(2)』『紀要』14岩手県埋蔵文化財センター
- 岩手県埋蔵文化財センター 1989『夏本遺跡発掘調査報告書(第134集)』
- 1992『細浦I遺跡・船浦II遺跡発掘調査報告書(第169集)』
- 1993『湾台II・湾台III遺跡発掘調査報告書(第186集)』
- 1994『上村遺跡発掘調査報告書(第202集)』
- 1995『大畑I遺跡・大畑II遺跡発掘調査報告書(第218集)』
- 1995『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(第229集)』
- 1996『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(第246集)』
- 1996『山ノ内II遺跡発掘調査報告書(第249集)』



第 5 図 周辺の遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡(1)縄文時代中期後葉～末葉

遺跡No	遺跡名	調査年度	所在地	遺跡の概要・遺物等	報告書名
64	細浦II	平成元	山田町鎌笠第14地割内	遺構なし。後葉の土器片少量	岩手埋文第169集(1992)
112	両台II	平成3	山田町鎌笠第14地割内	末葉の住居跡1棟・遺構外末葉の土器片	岩手埋文第186集(1993)
113	両台III	平成2	山田町鎌笠第14地割内	中期後葉～末葉の土器片少量	岩手埋文第218集(1995)
53	大畑I	平成5	山田町飯岡第7地割内	後葉～末葉の土器片少量	岩手埋文第218集(1995)
54	大畑II	平成4～5	山田町飯岡第7地割内	集落跡(中期後葉～末葉の住居跡15棟、土坑50基、炭塚土)	岩手埋文第218集(1995)
118	山ノ内II	平成7	山田町船越第4地割	集落跡(中期後葉～末葉13棟、土坑17基、炭土遺構4基)	岩手埋文第249集(1996)
18	沢田I	平成6～8	山田町山田3-8	集落跡(中期後葉、住居跡、土坑)	岩手埋文第246集 平成7年度略報(1996)
19	沢田II	平成8	山田町山田第3地割	中期の住居跡	現地説明会資料

第2表 周辺の遺跡(2)平安時代

遺跡No	遺跡名	調査年度	所在地	遺跡の概要・遺物等	報告書名
63	細浦I	平成2	山田町鎌笠第14地割内	土師器窯の破片	岩手埋文第169集(1992)
113	両台III	平成2	山田町鎌笠第14地割内	住居跡1棟、住居伏遺構2棟のうち1棟は製鉄関連炉を伴う工房跡。鉄滓、羽口、土師器片、須恵器片、鉄製品出土	岩手埋文第186集(1993)
54	大畑II	平成4～5	山田町飯岡第7地割内	集落跡・住居跡4棟、工房跡6棟、鍛冶炉3基、燗4基、炭塚1基。土師器、須恵器、赤褐色土器などの破片、鉄滓、羽口、鉄製品	岩手埋文第218集(1995)
118	山ノ内II	平成7	山田町船越第4地割内	竪穴伏遺構1棟、土坑4基、焼土1基、製鉄炉2基、排滓場、鍛冶炉6基、炭塚9基、土師器破片、羽口、鉄滓、鉄製品	岩手埋文第249集(1996)
18	沢田I	平成6～8	山田町山田3-8	集落跡(住居跡、土坑、鍛冶炉)土師器破片、須恵器破片、羽口、鉄滓、鍛冶炉片、鉄製品	岩手埋文第229集 平成6年度調査略報(1995) 岩手埋文第246集 平成7年度調査略報(1996)

第3表 周辺の遺跡(3)製鉄関連遺跡

遺跡No	遺跡名	調査年度	所在地	遺跡の概要・遺物等	報告書名
112	両台II	平成3	山田町鎌笠第14地割内	鉄滓	岩手埋文第186集(1993)
75	上村	平成4	山田町鎌笠第9地割内	奈良時代と推定される鍛冶場2か所、製鉄炉8基、木炭塚1基、竪穴伏遺構1基、土坑9基、土師器、鉄製品、砂鉄、鍛造刺片	岩手埋文第202集(1994)
53	大畑I	平成5	山田町飯岡第7地割内	板型滓、羽口	岩手埋文第218集(1995)
19	沢田II	平成8	山田町山田第3地割	奈良時代の工房跡(製鉄炉、大鍛冶炉、小鍛冶炉)、排滓場など、土師器、鉄滓、鍛造刺片、鉄製品	現地説明会資料
17	房の沢IV	平成8	山田町山田第14地割	奈良時代後半の須恵器、土師器、鉄滓、蔗手刀など	現地説明会資料

第4表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
1	内野	集落跡・段丘跡	縄文土器・土師器・羽口・鉄滓
2	関口Ⅰ	集落跡	縄文土器・土師器
3	関口Ⅱ	散布地	縄文土器
4	上野畑	散布地	縄文土器(中・後期)
5	上野台Ⅰ	散布地	縄文土器
6	上野台Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器・須恵器・磨製石斧
7	上野台Ⅲ	散布地	縄文土器
8	山田館	城館跡	跡・礎
9	関谷Ⅰ	散布地	縄文土器
10	関谷Ⅱ	散布地	縄文土器
11	関谷Ⅲ	散布地	縄文土器
12	関谷Ⅳ	散布地	縄文土器
13	関谷Ⅴ	散布地	縄文土器
14	屏の沢Ⅰ	散布地	縄文土器
15	屏の沢Ⅱ	散布地	縄文土器
16	屏の沢Ⅲ	散布地	縄文土器
17	屏の沢Ⅳ	散布地	縄文土器
18	沢田Ⅰ	集落跡	縄文土器・土師器
19	沢田Ⅱ	散布地	縄文土器
20	沢田Ⅲ	散布地	縄文土器
21	沢田Ⅳ	城館跡	縄文土器
22	岡木Ⅰ	散布地	縄文土器
23	岡木Ⅱ	散布地	縄文土器
24	岡木Ⅲ	散布地	
25	岡木Ⅳ	集落跡・一里塚	縄文土器・一里塚
26	岡木Ⅴ	散布地	縄文土器
27	柳沢Ⅰ	散布地	縄文土器
28	柳沢Ⅱ	散布地	縄文土器
29	柳沢Ⅲ	散布地	縄文土器
30	柳沢Ⅳ	散布地	縄文土器
31	持田Ⅰ	散布地	縄文土器
32	持田Ⅱ	散布地	縄文土器
33	川内Ⅰ	散布地	縄文土器
34	川内Ⅱ	散布地	縄文土器
35	川内Ⅲ	散布地	縄文土器
36	新開地	散布地	縄文土器・石鏃
37	新開地Ⅰ	散布地	縄文土器

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
38	新開地Ⅱ	散布地	縄文土器
39	大沢館	城館跡	礎
40	紅山A	散布地	縄文土器(前・後期)・石鏃・石鏃・石斧
41	紅山B	集落跡	縄文土器
42	浜川目沢Ⅰ	沢田	縄文土器(前・後期)
43	浜川目沢Ⅱ	集落跡	縄文土器
44	浜川目沢Ⅲ	集落跡	縄文土器
45	多門	製鉄跡	鉄滓・縄文土器
46	八幡館	城館跡	
47	長崎Ⅰ	散布地	縄文土器
48	長崎Ⅱ	散布地	縄文土器
49	長崎Ⅲ	城館跡	
50	長崎Ⅳ	城館跡	
51	小沢Ⅰ	散布地	縄文土器
52	小沢Ⅱ	散布地	縄文土器
53	大畑Ⅰ	散布地	縄文土器
54	大畑Ⅱ	散布地	
55	飯岡Ⅰ	城館跡	
56	飯岡Ⅱ	城館跡	
57	飯岡Ⅲ	散布地	
58	飯岡Ⅳ	散布地	
59	長野Ⅰ	散布地	
60	長野Ⅱ	散布地	
61	赤松Ⅰ	散布地	
62	赤松Ⅱ	散布地	
63	細浦Ⅰ	散布地	縄文土器・弥生土器・鉄滓
64	細浦Ⅱ	散布地	縄文土器
65	細浦Ⅲ	散布地	縄文土器
66	細浦Ⅳ	散布地	縄文土器
67	細浦Ⅴ	散布地	縄文土器
68	細浦Ⅵ	散布地	縄文土器
69	後山Ⅰ	散布地	縄文土器・土師器・石斧・フレーク
70	後山Ⅱ	散布地	縄文土器
71	後山Ⅲ	集落跡	縄文土器・弥生土器・土師器・鉄滓
72	後浜Ⅰ	散布地	縄文土器
73	後浜Ⅱ	散布地	縄文土器
74	上	集落跡	縄文土器・弥生土器

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
75	上村	散布地	縄文土器
76	礼堂	散布地	縄文土器
77	竜泉寺一星塚	一星塚	
78	田茂沢	集落跡	縄文土器・土師器・灰釉
79	日当Ⅰ	集落跡	縄文土器・弥生土器・鉄滓
80	日当Ⅱ	散布地	縄文土器
81	白石Ⅰ	集落跡	縄文土器
82	白石Ⅱ	散布地	縄文土器
83	白石Ⅲ	散布地	縄文土器
84	日除	散布地	縄文土器
85	廻立	集落跡	縄文土器・鉄滓
86	張神	集落跡	縄文土器(前期初期)・土師器
87	織笠館	城館跡	郭・堀
88	轟	集落跡	縄文土器(中期)・土師器
89	萩野平Ⅰ	集落跡	縄文土器・弥生土器
90	萩野平Ⅱ	集落跡	縄文土器
91	萩野平Ⅲ	集落跡	縄文土器(後期)
92	坊主山Ⅰ	集落跡	縄文土器
93	坊主山Ⅱ	城館跡	郭・堀
94	越田	城館跡	縄文土器・土師器
95	草木	散布地	縄文土器
96	棋井沢Ⅰ	散布地	縄文土器
97	棋井沢Ⅱ	散布地	縄文土器
98	棋井沢Ⅲ	散布地	縄文土器・土師器
99	山波	散布地	縄文土器(早期末)
100	新田Ⅰ	集落跡	縄文土器・土師器・中世陶器・鉄滓

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物
101	新田Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器
102	天工平	集落跡	縄文土器・弥生土器・鉄滓
103	猿喰沢	散布地	縄文土器
104	大石平	散布地	縄文土器(後期)・石斧
105	豊田沢	散布地	縄文土器
106	長林	散布地	縄文土器
107	船越館	城館跡	縄文土器
108	船越Ⅰ	散布地	縄文土器
109	船越Ⅱ	散布地	縄文土器
110	船越(西)館	散布地	縄文土器
111	舞台Ⅰ	集落跡	縄文土器
112	舞台Ⅱ	散布地	縄文土器(中・後期)
113	舞台Ⅲ	散布地	縄文土器
114	舞台Ⅳ	散布地	縄文土器
115	舞台Ⅴ	散布地	縄文土器
116	山ノ内	散布地	縄文土器
117	山ノ内Ⅰ	城館跡	
118	山ノ内Ⅱ	散布地	縄文土器
119	山ノ内Ⅲ	散布地	縄文土器
120	新道具塚	貝塚	縄文土器・鉄滓
121	船越御所	城館跡	郭・堀
122	若ヶ沢	集落跡	縄文土器
123	早川	集落跡	縄文土器
124	田の浜館	城館跡	郭
125	大割貝塚	貝塚・集落跡	縄文土器
126	小田の御所	城館跡	郭

4. 基本土層 (写真図版2)

本遺跡の調査区は地形的に尾根部分と尾根斜面下方の緩斜面、飛び地の緩斜面に分けられ、北東の尾根は土取りのために削平されている。尾根斜面下方の緩斜面は水田として利用されて削平していた時期があり、削平と盛り土がなされている。また、この部分には沢跡と思われる黒色土の盛り土堆積も見られる。また、飛び地でも同様に削平と盛り土がなされ、風化花崗岩の斜面堆積土が見られるなど、遺跡の土層は一様ではない。さらに、飛び地は他の調査区と距離があり、遺跡基本層序の全体をひとつの層序で調査することは困難だったため、飛び地とその他の部分とは基本層序を区分別している。(高橋佐知子)

- I a 層 黒褐色土 (10Y R3/2) シルト 表土層で草根が多数混入する。層厚10～20cm。
- I b 層 黒褐色土 (10Y R2/3) シルト 草根が多数混入する。層厚0～40cm。
- II 層 暗褐色土 (10Y R3/3) シルト 尾根の頂部付近では薄い。層厚5～30cm。
- III a 層 黄褐色土 (10Y R5/6) 粘土質 旧水田の床土。調査区中央部付近にのみ存在する。層厚0～15cm。
- III b 層 砂層 VII B 1 a ポイント付近から西側に見られる。水の流れた部分に堆積したと考えられる。層厚0～15cm。
- IV 層 黒色土 (10Y R2/1) シルト 調査区中央部の斜面下方に沢状に堆積する。遺物を含む。層厚0～120cm。平安時代の遺構検出面。
- V 層 暗褐色土 (10Y R3/3) シルト 主に尾根斜面下方の緩斜面に堆積する。遺構検出面。層厚0～40cm。
- VI 層 褐色土 (7.5Y R4/3) シルト 主に斜面に堆積する。遺構検出面。層厚0～50cm。
- VII 層 黒褐色土 (10Y R2/3) シルト 主に斜面下方の緩斜面に堆積する。上面が遺構検出面。層厚0～70cm。
- VIII a 層 褐色土 (10Y R4/4) シルト 斜面に堆積する。層厚0～30cm。
- VIII b 層 黒褐色土 (10Y R2/3) シルト 褐色土ブロックをしみ状に含む。斜面に堆積する。層厚0～35cm。
- VIII c 層 褐色土 (10Y R4/4) シルト 斜面に堆積する。層厚0～15cm。
- IX 層 褐色土 (10Y R4/6) 10層への漸移層 粘性、締まりあり 層厚5～25cm。尾根部では褐色土 (10Y R3/4) となり、遺構検出面である。層厚0～50cm。
- X 層 黄褐色土 (10Y R5/8) シルト 礫が多数混入する。主に尾根部に堆積する。
- XI 層 明黄褐色土 (10Y R6/8) 粘性、締まりあり 花崗岩礫を多量に含む。層厚は確認していない。

飛び地 (I区、II区) 基本土層

- T 0 層 盛り土 簡易宿泊施設を建設する際に造成した盛り土。谷頭を埋めている。層厚0～2.3m
- T I a 層 暗赤褐色土 (5Y R3/2) 表土 層厚40～78cm
- T I b 層 黒色土 (5Y R1.7/1) 1mm大の炭を多量に含む 層厚0～40cm
- T II 層 黒色土 (7.5Y R2/1) シルト 締まりあり 遺構検出面 層厚0～40cm
- T III 層 黒褐色土 (5Y R2/2) シルト質 締まりあり 風化花崗岩粒3% 層厚60～100cm
- T IV a 層 黒褐色土 (7.5Y R3/2) シルト質 締まりあり 風化花崗岩粒5% 層厚40～100cm
- T IV b 層 極暗褐色土 (7.5Y R2/3) シルト質 締まりあり 風化花崗岩粒3% 層厚0～30cm
- T V 層 黒褐色土 (7.5Y R2/2) シルト質 締まりあり 風化花崗岩粒5% 層厚40～70cm
- T VI 層 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 締まりなし 風化花崗岩粒3% 層厚20～60cm
- T VII 層 黄褐色土 (10Y R5/6) 締まりなし 厚層は確認していない。

III 調査方法と整理方法

1. 野外調査

(1)調査区の設定と遺構の呼称

本遺跡のグリッドの設定においては基準点測量を依頼し、調査区域内の任意の2点の公共座標値を求めた。この2点の成果値は以下のとおりである。

基準点1 X=-63,716.737 Y=98,077.310 H=71.932m

基準点2 X=-63,786.041 Y=98,098.075 H=58.829m

次にこの2点からX=-63,800.000、Y=98,100.000の点Aと、X=-63,760.000、Y=98,100.000の点Bを求め、このA・Bを結ぶ直線を基準線とした。基準線上をAから南に200m進み、さらに基準点に直交する線上を西に40m進んだ点を原点として調査区全体をカバーするように40m単位でメッシュを組み大グリッドとした。大グリッドは南側から北側にⅠ～Ⅷ、西側から東側にA～Dの名称を付した。さらに大グリッド内を4m単位で区画し、南側から北側に1～0、西側から東側にa～jの名称を付した。1調査区はこれらの組み合わせでIA1aやIIB3dと呼ぶことにした。

遺構名は調査区と遺構の種類を組み合わせ、III B 6 d 住居跡、IV C 5 b 土坑等と呼称した。遺構が2つの調査区にまたがっている場合は南西側の調査区名を使用した。必ずしも厳密ではない。1調査区内に同種の遺構がある場合はVII C 2 e-1 住居跡・VII C 2 e-2 住居跡等と枝番号を付けて呼び区別した。

報告では枝番号が抜けている場合があるが、調査時に付した番号を遺構でないことがわかり、抹消することがあったためである。整理時での混乱を避けるためにあえて番号をつけ直さず、そのまま載せた。また、製鉄炉群は調査時に付した名称は炉のとりえ方で誤りがあったため、報告ではアルファベットでつけ直している。

製鉄炉の
名称を
つけ直し

(2)掘堀り

本調査区域は、現況が山林と原野に分かれ、原野の一部は水田として利用されていた時期があるため地形に段差と傾斜が見られる。そこで調査区内の数か所に幅約1.5mの試掘トレンチを設定して試掘を行ったところ、炉跡と遺構の埋土と思われる暗褐色土が検出され、土器等の遺物が出土した。そこで遺構検出面までの深さや層序を確認した後、重機及び人力によって表土除去を行い、その後人力や遺構、遺物の検出されない箇所では重機による掘り下げを行った。

(3)精査と実測

遺構の精査は、住居跡は4分法、土坑は2分法を原則としたが、斜面で斜面下方が流失している住居や、検出段階で平面形が不明だったもの、人為的な削平を受けている遺構についてはこの限りではない。遺構の実測は簡易遠方測量で行った。平面図は、調査区区画線を基準とした1m間隔の水糸を遺構全面に張り、それを測量基線として実測した。土層断面図は水平水糸を張って、それを実測基線とした。

斜面下方が
流失

実測図の縮尺は平面図、断面図とも20分の1を原則としたが、細部や炉、焼土遺構、カマドの実測は、10分の1で行った。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(4)写真撮影

野外での写真撮影は、35mm判2台（モノクロ、カラーリバーサル）と6×7判（モノクロ）1台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。（神 敏明）

2. 室内整理

(1)遺物の処理

遺物は水洗、ラベルの記入、接合復元、土器拓影図作成、実測、トレース、計測、写真撮影、遺物図版作成の順に行った。

石器の計測値については最大長・最大幅・最大厚を測定し、欠損している石器の数値はカッコ内に記した。

遺物のうち鉄滓については、水を高速で吹きつけるハイウォッシャーで洗浄後、重量を計測し、磁着するものと、しないものとに分類した。炉内及び炉群の土坑内から出土した鉄滓のうち磁着するものについては、以下の方法で、磁着度分析、及びメタルチェッカーでメタル反応を測定し、第11、13表に示した。なお、第13表は報告の遺構名のほかに検索の際のために調査段階での遺構名も付している。

磁着度分析

標準磁石（TK-4、フェライト磁石、東北金属（株）製 30×17×5.2ミリ）を用い、35cmの高さから釣り糸で釣り下げた状態で使用する。資料を徐々に接近させることにより標準磁石が動き始める距離（6mmを1単位とする1～8の段階）を評価台紙上で読み取り、数値化する。磁石に最も近い距離が1、遠い距離が8である。

メタル反応測定

金属鉄の量を測定するもの。メタルチェッカー（金属探知機、MR-50、基準設定者 穴澤義功）により資料各面の1cm以内にかざし、左右方向に動かす。略号○はレベルH（最高感度で、ごく小さな金属鉄を残留する。）、略号●はレベルM（標準感度で、ごく一般の金属鉄を残留する）、略号◎はレベルL（やや大きな金属鉄を残留する）を示す。これらの略号が付された遺物は鉄塊系遺物として分類される。

羽口の装着角度の推定は次の図のように先端の熱変色範囲をもとに測定した。観察表中に20～35°と記載しているのは変色範囲の垂直線に対する角度が左右でまちまちなためである。

炉壁も鉄滓と同様に洗浄し、抽出して胎土の観察を行ったが、整理期間の都合上数値化する作業は行っていない。

(2)遺物図版

図版は遺構から出土したものは遺構別に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。縮尺は土器が4分の1・3分の1、土器拓影図3分の1、土製品2分の1、剥片石器2分の1、礫石器2分の1・4分の1、石製品3分の1、羽口4分の1を原則としたが、適宜縮尺を変えて掲載した。図中には縮尺比をあらわすスケールを用いた。土師器、須恵器器面調整については次の図のような呼称と表現方法を用いた。また、土器の黒色処理、羽口の溶着滓の範囲は次の図のようなスクリーンーンを用いた。

(3)遺構断面の処理

図面は第1原図の点検、修正、合成、トレース、遺構図版の作成の順に整理した。

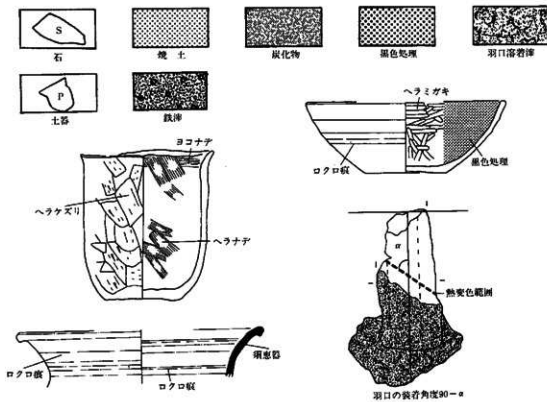
(4)遺構図版

図版の縮尺は、住居跡、土坑50分の1、その他40分の1を原則としたが、遺構の大きさにより適宜縮尺を変えて掲載した。縮尺を変更した場合は、各図版に縮尺を明記した。図中の焼土、炭化物の散布範囲には次の図のようなスクリーントーンを使用した。図中の石、土器は次の図のように表現した。

(5)写真図版

野外調査時に撮影した写真と遺物の写真で、写真図版を作成した。

写真図版の個々の遺物番号は、遺物図版の番号と一致している。縮尺は、各写真とも不定縮尺である。(高橋佐知子)



IV 検出された遺構と遺物

山ノ内Ⅲ遺跡の発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡21棟、竪穴状遺構2基、土坑11基、柱穴状土坑6基、炉跡2基、集石1基、焼土遺構37基、鹿糞土2か所、古代の竪穴住居跡3棟、土坑2基、製鉄炉8基、炭窯17基、炭置き場1か所、羽口捨て場1か所、焼土遺構4基である。

以下大きく時代別に報告する形をとっているが、縄文時代の遺構には早期末～前期初頭か、時期不明の中期か判然としない遺構も多い。特に焼土遺構はそのことが言えるのであらかじめ述べておく。の遺構

1. 縄文時代

(1)住居跡

VIB 8 j 住居跡出土遺物 (第6図、写真図版3)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。この地点は旧地権者が盛り土をするための土採り場となっていたため、人為的な削平を受けているところである。本住居跡の北側にはVIB 0 j 住居跡が、東側にはVIC 7 a 住居跡が存在している。検出は試掘トレンチによって石囲炉を検出したことによる。検出面はIX層上面である。

平面形は人為的な削平と住居跡の南東側にあたる斜面下方の流失のため不明な点が多いが、残存部分から円形を呈すると推定される。

規模は開口部径が残存部分で4.63mを測る。壁はIX層中にあり、床面から急角度で外傾して立ち上がる。壁高は残存する西壁が5.3cm、南壁が10.9cm、北壁が34.5cmである。

埋土は表土を含め5層に細分され、黒褐色土と暗褐色土が主体で、下位に一部黄褐色土と褐色土が見られる。床面はIX層中に形成され、やや斜面下方に傾斜するものの、ほぼ平坦で堅くしまっている。東壁際の床面からは67×63cm程の焼土の散布が確認された。柱穴は壁際から4基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は37～52cm、深さは11～42cmを測る。柱痕の径は不詳である。

炉は床面中央部と思われる地点から石囲炉が検出された。平面形は楕円形を呈し、規模が77×楕円形の58cm程で、7～26cmの花崗岩を使用している。東側の石を一部欠いているが石の抜き取り痕は石囲炉確認できなかった。焼土はあまり発達しておらず、明赤褐色の焼土が層厚4cm程で存在する。

(神 敏明)

出土遺物 (第57図、写真図版53)

床面炉の近辺から1が出土している。2は埋設土器である。そのほかは埋土から出土した遺物である。

本遺構は形態や床面の出土遺物から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VIB 0 j 住居跡 (第9図、写真図版4)

本住居跡は調査区東側の尾根状に位置し、VIB 8 j 住居跡と同様に人為的な削平を受けている。本住居跡の南側にはVIB 8 j 住居跡が、東側にはVIC 0 a-1 住居跡が存在する。検出は人力による表土除去後のIX層上面における褐色土の円形の広がりによる。

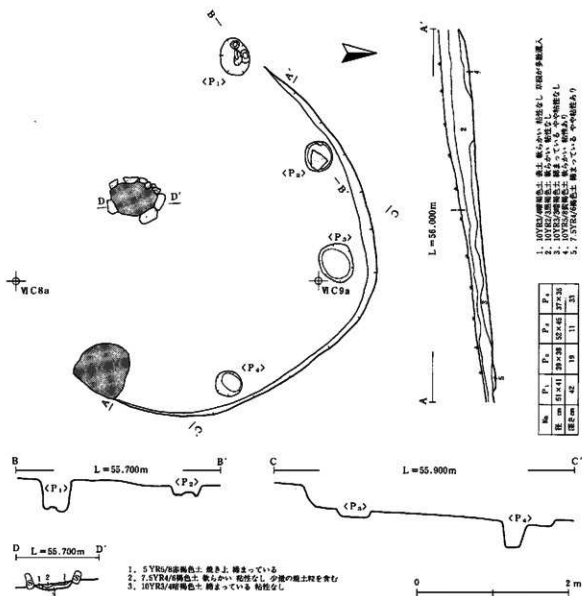
平面形は削平と斜面下方の流失によって不明な点が多いが、残存部分から円形を呈すると思われる。

規模は開口径が残存部で2.38mを測り、検出された住居跡の中では最も小さい。壁はIX層中にあり、床面からほぼ直に立ち上がる。壁高は残存する北壁が25cm、西壁が24.4cmである。

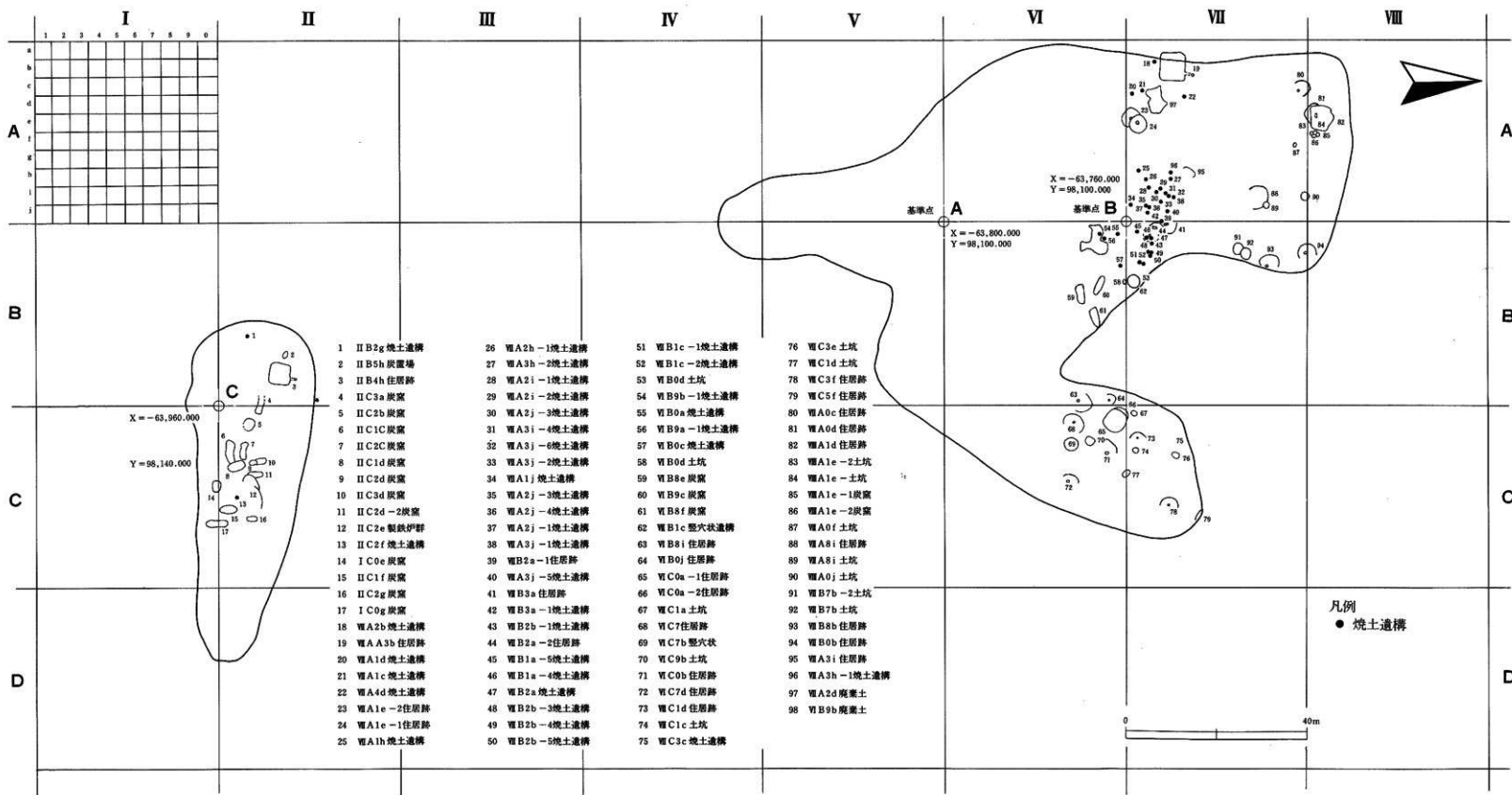
埋土は3層に細分され、上位は褐色のシルト質土、中位から下位は微小な炭化材が混入する暗褐色土が主体である。床面はIX層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。北西壁際の床面からはほぼ完形に近い土器が直立状態で出土したほか、北西壁に沿って土器が散乱していた。また床面中央から北東に寄った地点で炭化材の散布が確認され、埋土にも炭化材が含まれることから、焼矢住居跡と推定される。柱穴は検出されなかった。

焼矢住居
石囲炉

炉は床面中央部と思われる地点から石囲炉が検出された。北側と東側の石を欠いているが、

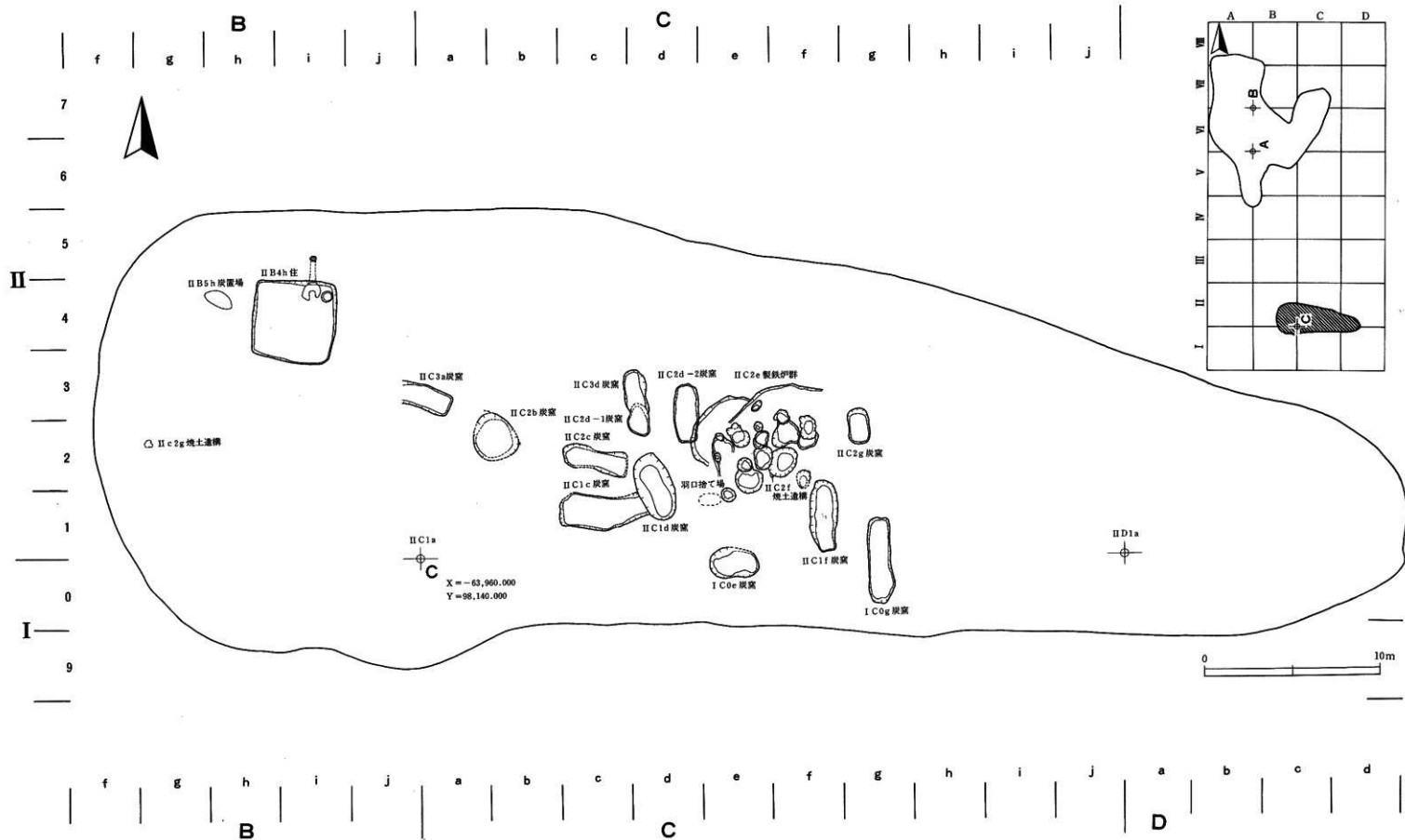


第6図 VIB 8 j 住居跡

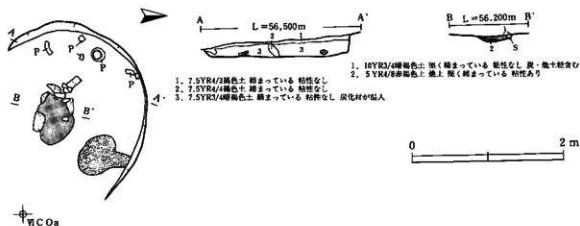


- | | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1 II B2g 燒土遺構 | 27 Ⅴ A2h-1 燒土遺構 | 51 Ⅴ B1c-1 燒土遺構 | 76 Ⅴ C3e 土坑 |
| 2 II B5h 灰置場 | 28 Ⅴ A3h-2 燒土遺構 | 52 Ⅴ B1c-2 燒土遺構 | 77 Ⅴ C1d 土坑 |
| 3 II B4h 住居跡 | 29 Ⅴ A2i-1 燒土遺構 | 53 Ⅴ B0d 土坑 | 78 Ⅴ C3f 住居跡 |
| 4 II C3a 灰窟 | 30 Ⅴ A2j-2 燒土遺構 | 54 Ⅴ B9b-1 燒土遺構 | 79 Ⅴ C5f 住居跡 |
| 5 II C2b 灰窟 | 31 Ⅴ A2j-3 燒土遺構 | 55 Ⅴ B0a 燒土遺構 | 80 Ⅴ A0c 住居跡 |
| 6 II C1c 灰窟 | 32 Ⅴ A3i-4 燒土遺構 | 56 Ⅴ B9a-1 燒土遺構 | 81 Ⅴ A0d 住居跡 |
| 7 II C2c 灰窟 | 33 Ⅴ A3j-1 燒土遺構 | 57 Ⅴ B0c 燒土遺構 | 82 Ⅴ A1d 住居跡 |
| 8 II C1d 灰窟 | 34 Ⅴ A3j-2 燒土遺構 | 58 Ⅴ B0d 土坑 | 83 Ⅴ A1e-1 土坑 |
| 9 II C2d 灰窟 | 35 Ⅴ A2j-3 燒土遺構 | 59 Ⅴ B8a 灰窟 | 84 Ⅴ A1e-1 土坑 |
| 10 II C3d 灰窟 | 36 Ⅴ A2j-4 灰窟 | 60 Ⅴ B9c 灰窟 | 85 Ⅴ A1e-1 灰窟 |
| 11 II C2d-2 灰窟 | 37 Ⅴ A2j-1 燒土遺構 | 61 Ⅴ B8f 灰窟 | 86 Ⅴ A1e-2 灰窟 |
| 12 II C2e 製鉄炉跡 | 38 Ⅴ A3j-1 燒土遺構 | 62 Ⅴ B1c 整穴状遺構 | 87 Ⅴ A0f 土坑 |
| 13 II C2f 燒土遺構 | 39 Ⅴ B2a-1 住居跡 | 63 Ⅴ B8i 住居跡 | 88 Ⅴ A8i 住居跡 |
| 14 I C0e 灰窟 | 40 Ⅴ A3j-5 燒土遺構 | 64 Ⅴ B0j 住居跡 | 89 Ⅴ A8i 土坑 |
| 15 II C1f 灰窟 | 41 Ⅴ B3a 住居跡 | 65 Ⅴ C0a-1 住居跡 | 90 Ⅴ A0j 土坑 |
| 16 II C2g 灰窟 | 42 Ⅴ B3a-1 燒土遺構 | 66 Ⅴ C0a-2 住居跡 | 91 Ⅴ B7b-1 土坑 |
| 17 I C0g 灰窟 | 43 Ⅴ B2b-1 燒土遺構 | 67 Ⅴ C1a 土坑 | 92 Ⅴ B7b 土坑 |
| 18 Ⅴ A2b 燒土遺構 | 44 Ⅴ B2a-2 住居跡 | 68 Ⅴ C7 住居跡 | 93 Ⅴ B8b 住居跡 |
| 19 Ⅴ A A3b 住居跡 | 45 Ⅴ B1a-4 燒土遺構 | 69 Ⅴ C7b 整穴状 | 94 Ⅴ B0b 住居跡 |
| 20 Ⅴ A1d 燒土遺構 | 46 Ⅴ B1a-4 燒土遺構 | 70 Ⅴ C9b 土坑 | 95 Ⅴ A3i 住居跡 |
| 21 Ⅴ A1c 燒土遺構 | 47 Ⅴ B2a 燒土遺構 | 71 Ⅴ C0b 住居跡 | 96 Ⅴ A3h-1 燒土遺構 |
| 22 Ⅴ A4d 燒土遺構 | 48 Ⅴ B2b-3 燒土遺構 | 72 Ⅴ C7d 住居跡 | 97 Ⅴ A2d 廢棄土 |
| 23 Ⅴ A1e-2 住居跡 | 49 Ⅴ B2b-4 燒土遺構 | 73 Ⅴ C1d 住居跡 | 98 Ⅴ B9b 廢棄土 |
| 24 Ⅴ A1e-1 住居跡 | 50 Ⅴ B2b-5 燒土遺構 | 74 Ⅴ C1c 土坑 | |
| 25 Ⅴ A1h 燒土遺構 | | 75 Ⅴ C3c 燒土遺構 | |

第7図 遺構配置図



第8図 遺構全体図(2)飛び地I、II区



第9図 VIB 0 j 住居跡

焼土の広がりから炉の平面形は楕円形と考えられる。石の抜き取り痕は確認されなかった。規模は68×51cmである。燃焼部は若干掘り込まれ、赤褐色の焼土が厚さ6cm程発達しており、その上部に炭化材と焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。(神 敏明)

出土遺物 (第57、58図、写真図版53)

13、14、19は住居の炉から出土した土器である。そのほかは埋土から出土した土器で、縄文時代中期後葉から末葉の土器である。

本遺構は形態や出土遺物から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VIC 7 a 住居跡 (第10図、写真図版5)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡の北側にはVIC 0 a-1 住居跡が、西側にはVIB 8 j 住居跡が、東側にはVIC 7 b 竪穴状遺構が存在する。検出は人力による表土除去後のIX層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は、人為的な削平と住居跡の南東側にあたる斜面下方の流失により不明な点が多いが、残存部分から楕円形と推定される。

規模は開口部径が4.82mを測る。壁はIX層中にあり、床面から急角度で外傾して立ち上がる。壁高は残存する西壁が33.5cm、南壁が10.5cm、北壁が12.3cmである。

埋土は9層に細分されるが、シルト質の暗褐色土が主体で、所々に黄褐色土・褐色土・ぶい褐色土が小ブロックで混入する。床面はIX層中に形成され、わずかに斜面下方に傾斜するものの、ほぼ平坦でしまっている。床面中央部から北側に5~30cmほどの礫が散在する。また、南東部の床面に187×54cmの不整形な焼土粒の散布が認められた。柱穴は壁際から2基、壁かやや離れて8基検出された。円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は27~49cm、深さは9~53cmを測る。柱痕の径は不詳である。

炉は床面中央部と思われる地点から石囲炉が検出された。平面形は長方形を呈し、規模は54×石囲炉52cmで、20cm前後の花崗岩を使用している。焼土は発達しておらず、燃焼部に少量の焼土粒が見られる程度である。西側の石を欠いているが、石の抜き取り痕は確認できなかった。

(神 敏明)

出土遺物 (第58図、写真図版53)

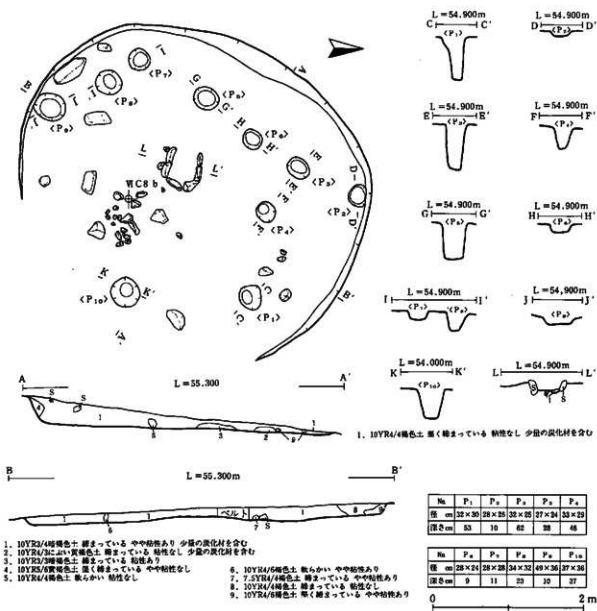
埋土から縄文時代中期中葉の土器、磨石が出土した。

本遺構は縄文時代中期中葉から末葉住居跡と考えられる。(高橋 佐知子)

VIC 7 d 住居跡 (第11図、写真図版6)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡の西側にはVIC 7 d 竪穴状遺構が存在する。検出は入力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の半円状の広がりを確認したことによる。

平面形は、人為的な削平と住居跡の東側にあたる斜面下方の流失により不明な点が多いが、残存部分及び柱穴配置から円形と思われる。規模は4m前後と推定され、壁高は残存する西壁



第10図 VIC 7 a 住居跡

が13cmである。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。

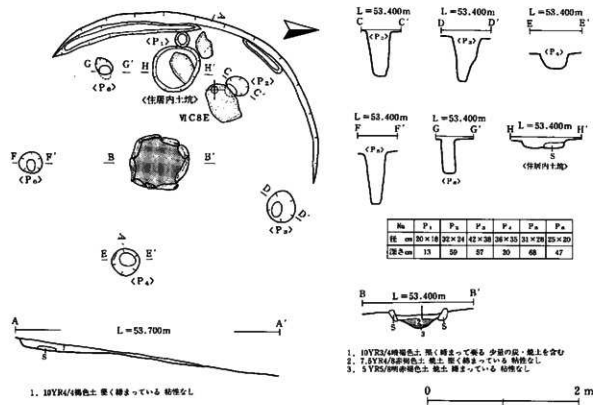
埋土は褐色のシルト質土の単層で、堅くしまっている。床面はVI層中に形成され、斜面下方に若干傾斜するもののほぼ平坦で堅くしまっている。床面の中央から西に寄った地点には55×39cmと35×21cmの偏平な礫が置かれていた。西壁際の床面からは幅20cm、深さ10cm程の周溝が検出された。また、床面西側からは平面形が不整楕円形を呈する土坑が1基検出されている。断面形はピーカー状で、規模は開口部径が67×60cm、深さは10cmである。底部北側には40×28cmの花崗岩の礫が存在した。柱穴は壁からやや離れた地点から6基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は20~42cm、深さは10~68cmを測る。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央部と思われる地点から石囲炉が検出されている。平面形は方形で、規模は78×72cmで、14~35cmの花崗岩の礫を使用している。燃焼部は若干掘り窪められ、赤褐色及び明赤褐色の焼土が厚さ12cm程に発達しており、焼土の上には微小な炭化材と焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。(神 敏明)

出土遺物 (第58図、写真図版53)

埋土から縄文時代中期中葉の土器が出土した。

床面から出土した土器がないため、断定はできないが形態や出土遺物から縄文時代中期中葉から末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)



第11図 VIC 7 d 住居跡

重複 VIC 0 a-1 住居跡 (第12図、写真図版7)

あるいは 本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡はVIC 0 a-2 住居跡と重複あるいは建て替え関係にあり、西側にはVIB 0 j 住居跡が、南側にはVIC 7 a 住居跡が、東側にはVIC 0 b 住居跡が存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の楕円形の広がりを確認したことによる。

平面形は楕円形を呈し、規模は開口部径が5.44×4.29mを測る。壁はVI層中にあり、壁高は東壁が12.1cm、西壁が44.0cm、南壁が29.2cm、北壁が32.8cmである。

埋土は10層に細分される。埋土上位はシルト質の暗褐色土及び黒褐色土が主体で、埋土中位から下位にかけては暗褐色土と褐色土が堆積している。また、西壁際の一部に粘土質の黄褐色土が見られる。床面は西壁沿いが10cm程高くなり、段差をもっている。床面の大部分は重複するVIC 0 a-2 住居跡の埋土である褐色土上に形成されているが、1段高くなる部分の床面はVI層中に形成され、堅くしまっている。この部分からは微少な炭化材と焼土粒が湿る暗褐色土の広がりが検出されている。周囲に石が5個配されており、火を使用した痕跡が見られるが、詳細は不明である。炉を含む床面は平坦でしまっている。柱穴は1段高くなる西壁際から2基、低い面から4基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は23~39cm、深さは10~38cmを測る。柱底の径は不詳である。

石囲炉 炉は床面中央部付近から石囲炉が検出された。炉の平面形は長方形を呈すると思われるが、北側と西側の石を欠いているため詳細は不明である。規模は85×60cm程度と推定され、20~53cmの花崗岩の礫が使用されている。焼土の発達は良く、炉内の東に寄った地点に明赤褐色の焼土が厚さ10cm程形成されている。また、東側の石の外側でも赤褐色の焼土が検出されている。焼土の発達は良く、厚さは5cm程である。(神 敏明)

出土遺物 (第58、59図、写真図版53、54図)

37は床面の炉の付近から出土した土器である。30~31は埋土炉の付近からの出土である。33、51は埋土下位から出土した。そのほかに埋土から縄文時代中期中葉、末葉の土器が出土している。石器類は62の石皿が柱穴の埋土から出土したほか、石錐、石匙、磨製石斧、不定形石器、磨石が埋土から出土した。

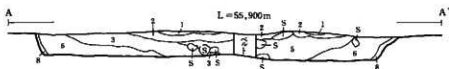
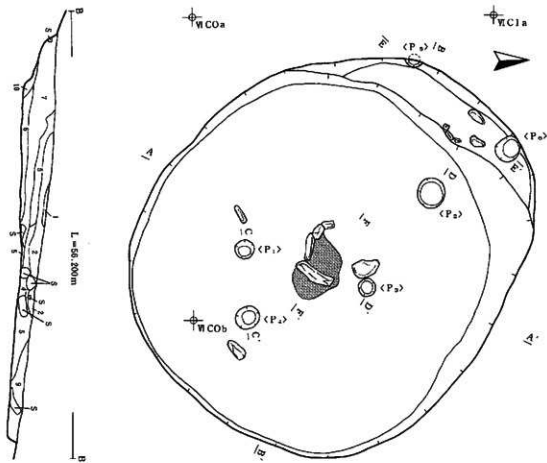
本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VIC 0 a-2 住居跡 (第13、14図、写真図版8)

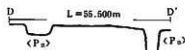
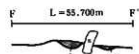
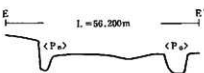
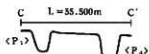
重複 本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡はVIC 0 a-1 住居跡と重複関係**あるいは** にあり、西側にはVIB 0 j 住居跡が、南側にはVIC 7 a 住居跡が、東側にはVIC 0 b 住居跡が**建て替え** 存在する。検出はVIC 0 a-1 住居跡の炉断面精査中に本住居跡の炉が発見されたことによる。

平面形は円形を呈し、規模は開口部径が5.14×5.13mを測る。壁はVI層中にあり、一部がVIC 0 a-1 住居跡の壁と重複する。壁高はVIC 0 a 住居跡の検出面からの高さで、東壁が8cm、西壁が65.8cm、南壁が12.1cm、北壁が14.9cmである。

埋土はVIC 0 a 住居跡の床面の土で、シルト質の堅くしまった褐色土の単層である。床面は**二重**のVI層中に形成され、平坦で堅くしまっている。床面からは周溝・柱穴・炉・焼土が検出された。**周溝** 周溝は東壁の一部を除いて壁沿いに掘られている。西側の一部では周溝が二重になる部分もあ



1. 10YR2/4暗褐色土 非常に厚く積まっている 粘性あり 障土上
2. 10YR2/3黒褐色土 厚く積まっている 粘性なし
3. 10YR4/6暗褐色土 積まっている やや粘性あり 少量の炭化材を含む
4. 7.5YR2/4暗褐色土 積まっている 少量の炭化材を含む
5. 10YR2/4暗褐色土 積まっている やや粘性あり 少量の炭化材を含む
6. 10YR4/4暗褐色土 積まっている やや粘性あり
7. 10YR2/3暗褐色土 積まっている やや粘性あり
8. 10YR4/6暗褐色土 積まっている 粘性あり
9. 10YR4/6暗褐色土 厚く積まっている やや粘性あり
10. 10YR2/4暗褐色土 厚く積まっている 粘性あり

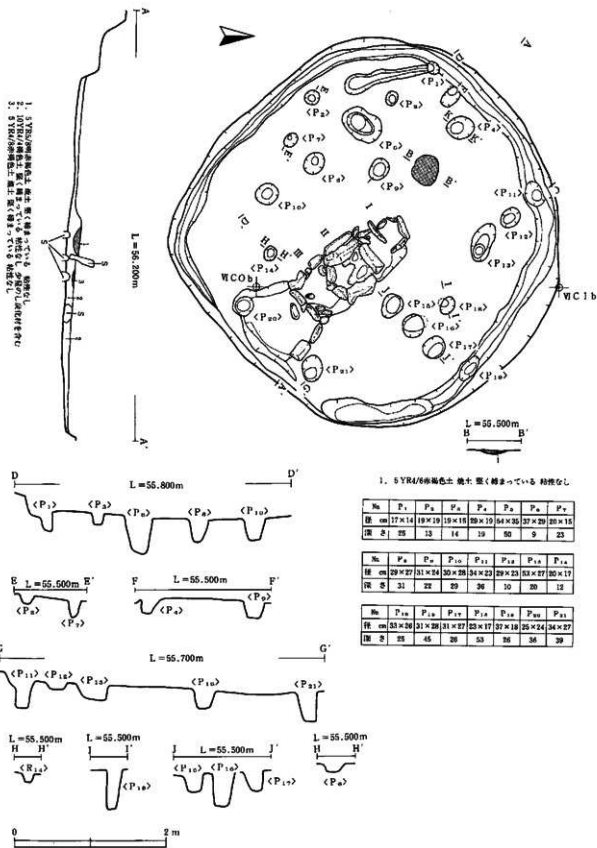


1. 5YR5/8暗赤褐色土 障土 厚く積まっている 粘性なし
2. 5YR4/6暗褐色土 障土 積まっている 粘性なし

	№	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
幅 cm	25 × 25	38 × 37	34 × 25	33 × 29	23 × 16	35 × 30	
深さ cm	37	10	38	37	18	25	



第12図 VIC 0 a-1 住居跡



第13図 VIC 0 a - 2 住居部(1)

り、作り替えもあったと推定される。規模は幅が12~35cm、深さは20cm前後である。柱穴は21基検出されているが、この中にはVIC 0 a 住居跡の柱穴も含まれると思われる。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は17~54cm、深さは9~53cmである。柱痕の径は確認できなかった。

炉は南東壁際から床面中央部付近までの部分で石組複式炉が検出されている。炉の規模は石組部分だけで1.75m、前庭部を加えると2.58mと非常に大きい。幅は最大85cmである。石組部分はI~IIIに分割されるが、Iはさらに二つに分けられていた可能性がある。石の組み方を見ると、IとIIIの部分はIIの部分に付け加えたように見える。前庭部は住居跡の壁に向かってやや広がり、壁の手前で閉じている。掘込みはそれほど深くなく、浅い窪み状になっていて壁も緩やかである。炉内からは焼土がほとんど検出されず、埋土に焼土粒が混入する程度である。

石組複式炉

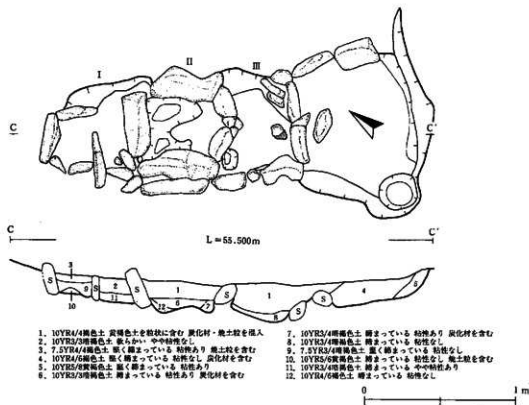
焼土は床面中央部から北西に寄った地点で検出された。平面形は楕円形で、規模は39×31cmを測る。焼土の厚さは最大4cm程で比較的良く発達しており、堅く焼き締まっている。本住居跡に伴うもので、地床炉の可能性もある。(神 敏明)

地床炉か

出土遺物 (第60図、写真図版54)

埋土から土器片が出土している。縄文時代中期後葉から末葉の土器である。石器は埋土から石皿が出土した。

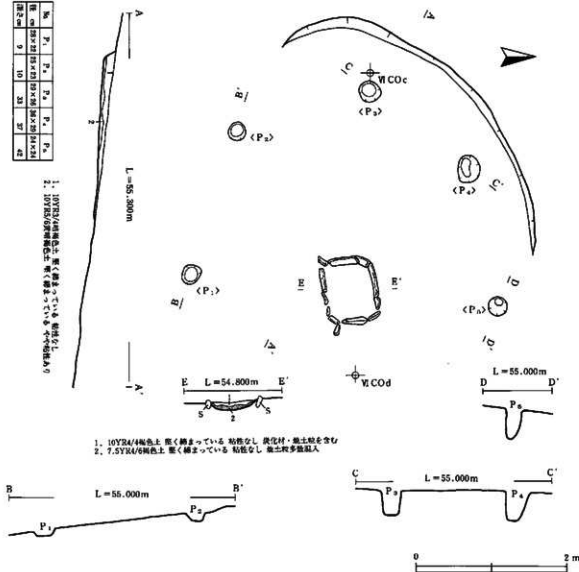
床面から出土した遺物がないため、断定はできないが本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)



第14図 VIC 0 a-2 住居跡(2)

層位	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
層厚(m)	9	10	23	27	34	42

1. 10YR2/4褐色土 堅く締まっている 粘粒なし 炭化材・黒土粒を含む
 2. 7.5YR4/6褐色土 堅く締まっている 粘粒なし 黒土粒多量混入



第15図 VIC 0 b住居跡

VIC 0 b住居跡 (第15図、写真図版9)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。西側にはVIC 0 a住居跡が、南側にはVIC 9 b土坑が、北側にはVIC 1 b住居跡及びVIC 1 c土坑が存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において炉跡を確認したことによる。なお、本住居跡は人為的な削平を受けており、表土直下がすぐ住居跡の床面となっている。そのため壁の残存状態も不良である。

平面形は残存する壁及び柱穴の配置から円形あるいは楕円形と考えられる。規模は径が5m前後と推定され、壁高は残存する西壁が21cmである。壁はVI層中にあり、外傾して立ち上がる。埴土は2層に分けられ、上位はシルト質の暗褐色土、下位は粘土質の黄褐色土で、堅くしまっている。床面はVI層中に形成され、やや斜面下方の東側に傾斜するものの平坦でしまっている。東側の床面は人為的な削平と斜面下方の流失によって失われている。

柱穴は壁からやや離れて5基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、

径は24~36cm、深さは9~42cmを測る。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央部からやや東に寄るとされる地点から石囲炉が検出されている。炉の平面形は石囲炉は長方形を呈し、南西角と南東角の礫が外側を向いて斜めに配されている。規模は91×72cmで、12~40cmの花崗岩の礫が使用されている。炉内の焼土は発達しておらず、赤褐色の焼土粒を含む褐色土が見られる程度である。(神 敏明)

出土遺物 (第60図、写真図版54)

69、70は炉から出土した縄文時代中期後葉の土器である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 1 e-1 住居跡 (第16、17図、写真図版10)

本住居跡は調査区西側の谷に位置している。VII A 1 e-2 住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。西側にはVII A 1 c 焼土遺構が存在する。人力での掘り下げ後、V層中位から下位で、濡った黒褐色土の広がりをとらえたが、この付近は土石流などがあつたらしく、礫が多いため住居跡として検出できなかった。そこで、ベルトを残して掘り下げたところVII A 1 e-2 住居跡の西壁の立ち上がりをとらえた。当初は、ベルトの観察によっても重複関係がつかめなかったが、古い住居跡の炉と見られる焼土を新しい住居跡の柱穴が切っていることから、新旧二つの住居として報告するものである。明確な壁の立ち上がりをとらえられなかったことなどから、本住居跡とVII A 1 e-2 住居跡は、長楕円を呈するひとつの住居である可能性もある。

本住居跡の平面形はゆがんだ円形を呈し、開口部径が推定で4.0m、壁高は北壁が最大で36cmを図る。

埋土は2層に別れ、暗褐色土主体で炭を含んでいる。また、埋土の一部には床面から30cm程度の上には5cmの厚さの黄褐色土が、38×35cmくらいの範囲で検出されている。住居廃絶後、土石流にみまわれたと考えられ、花崗岩の礫混じりの土で覆われている。

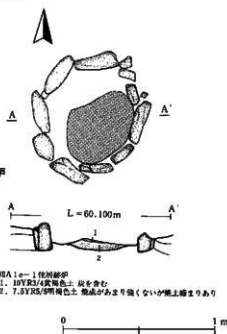
床面は11層上面に形成されているため、花崗岩の礫が露出しており、多少の凹凸があるもの固く締まっている。また、床面上には炭の薄い分布が見られる。

柱穴は9基検出されている。いずれも円形あるいは楕円形を呈し、径は48~94cm、深さは14~56cmを図る。柱痕は確認できなかった。

炉は床面のほぼ中央に石囲炉が検出されている。石囲炉の規模は86cm×76cmで、ほぼ円形を呈する。厚さ6~8cmの花崗岩の板状の礫を円形に立て並べている。礫は垂直かやや外側に開くように据えられている。焼土の形成は薄く、使用面が火を受けて硬化している程度である。

周溝は検出されなかった。

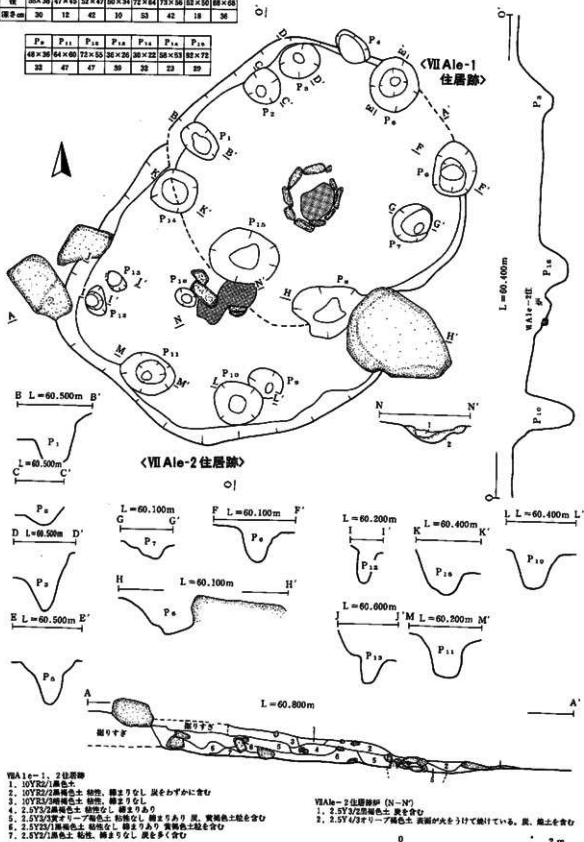
出土遺物 (第60、61図、写真図版54)



第16図 VII A 1 e-1 住居跡(1)

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径	55×38	47×45	52×47	50×34	72×64	73×36	52×50	88×68
深さ	30	12	42	10	53	42	18	36

P ₉	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇
48×36	64×60	72×55	30×26	30×22	58×53	82×72	
23	47	47	30	22	23	29	



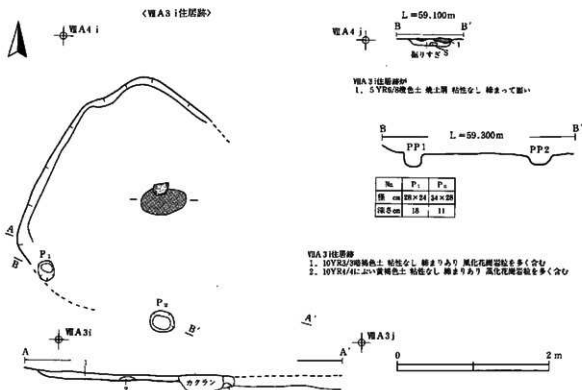
ⅦA1e-1、2住居跡

1. 10Y22/黒色土
2. 10Y22/2層褐色土 粘性、締まりなし、炭をわずかに含む
3. 10Y23/3層褐色土 粘性、締まりなし
4. 2.5Y3/2層褐色土 粘性なし、締まりあり
5. 2.5Y3/3質アーマー層褐色土 粘性なし、締まりあり、炭、黄褐色土粒を含む
6. 2.5Y2/1層褐色土 粘性なし、締まりあり、黄褐色土粒を含む
7. 2.5Y2/1層褐色土 粘性、締まりなし、炭を多く含む

ⅦA1e-2住居跡跡(N-N')

1. 2.5Y3/2層褐色土 炭を含む
2. 2.5Y4/3質アーマー層褐色土 炭面が火をうけて焼けている、炭、黒土を含む

第17図 ⅦA1e-1住居跡(2)、-2住居跡



第18図 VII A 3 i 住居跡

また、炉の付近には移地性と思われる焼土が堆積している。

出土遺物 (第61図、写真図版55)

79は埋土から、80、81は床直上から出土した。

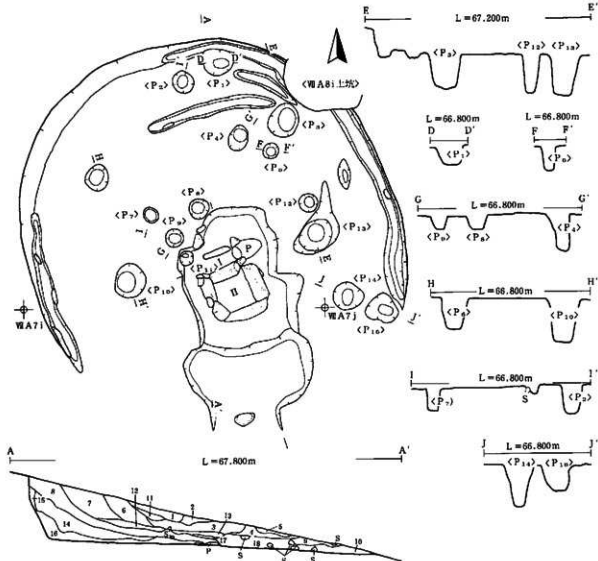
本遺構は不明な点が多く、確定できないが出土遺物から縄文時代前期前葉の住居跡の可能性
がある。(高橋佐知子)

VII A 8 i 住居跡 (第19図、写真図版13)

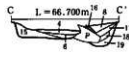
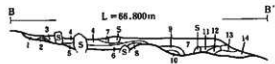
本住居跡は調査区北西の尾根の頂部付近に位置している。住居跡の北東側の一部はVII A 8 i
重複関係
土坑と重複関係にあり、本住居跡を土坑が切る形になっているため構築時期は住居跡の方が古い。
検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、VI層上面において微小な炭化材を含む褐色土と黄褐色土の広がりを確認したことによる。

平面形は、斜面下方にあたる東側が流失しているため不明な点が多いが、残存する壁や周溝から楕円形を呈すると推定される。開口部の残存する部分の最大径は5.03cmで、長径は6 m前後と考えられる。壁はVI層がVII層にかけて形成され、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は最大で84cmである。なお、壁については調査の不振際から土層観察用のベルトを除き削平してしまっただけのため残存状態は不良である。

埋土は18層に細分されるが、シルト質の褐色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土が主体で、微小な炭化材が含まれる。床面はVII層中に形成され、細かな凹凸があるものの、ほぼ平坦で堅くしまっている。



1. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
2. 10YR2/4褐色土 黒く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
3. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
4. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
5. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
6. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
7. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
8. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
9. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
10. 10YR2/4褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
11. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
12. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
13. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし 炭化材を含む
14. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
15. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
16. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
17. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
18. 10YR2/4褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む



1. 10YR2/4褐色土 締まっている 粘性なし
2. 10YR2/6黄褐色土 灰らかい 中や粘性あり
3. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 中や粘性あり 炭化材を含む
4. 10YR2/6黄褐色土 灰らかい 中や粘性あり 炭化材を含む
5. 10YR2/2黒褐色土 締まっている 粘性なし
6. 10YR2/4褐色土 締まっている 中や粘性あり
7. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし
8. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 中や粘性あり 炭化材を含む
9. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし
10. 10YR2/6黄褐色土 灰らかい 中や粘性あり

11. 10YR2/6黄褐色土 締まっている 粘性なし
12. 10YR7/明灰褐色土 締まっている 粘性なし
13. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし
14. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし
15. 10YR2/6黄褐色土 灰らかい 粘性なし
16. 5YR2/8赤褐色土 灰らかい 粘性なし
17. 10YR2/6黄褐色土 黒く締まっている 粘性なし
18. 10YR2/6黄褐色土 灰らかい 中や粘性あり
19. 10YR7/明灰褐色土 締まっている 中や粘性あり



層	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
幅	42 × 36	31 × 27	44 × 46	34 × 35	21 × 20	
深さ	24	40	47	49	31	

層	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
幅	35 × 32	22 × 18	27 × 27	24 × 24	47 × 42	
深さ	42	29	15	17	58	

層	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇
幅	19 × 18	25 × 24	47 × 42	41 × 36	40 × 35
深さ	38	51	54	54	32

第19図 VII A 8 i 住居跡

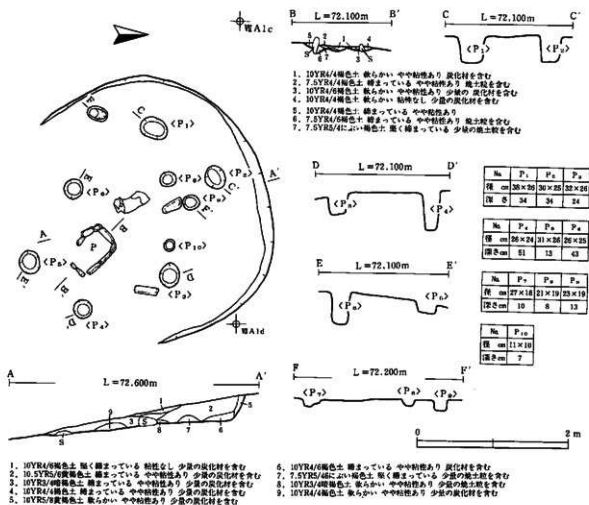
床面からは周溝、柱穴、炉が検出されている。周溝は流矢部分と北西側を除き壁際から検出されている。北側の一部では三重になる部分もあり、作り替えもあったと推定される。規模は作り替え幅が10~30cm、深さは10cm前後である。柱穴は壁際から2基、壁からやや離れて13基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は19×47cm、深さは17~58cmである。P13には柱の抜き取り痕らしき溝が確認された。柱痕の径は確認できなかった。

複式炉 炉は床面中央部付近から南側の部分で複式炉が検出されている。炉は全体が掘り窪められており、石組みの部分だけの大きさは1.0×0.8mで、前庭部及び掘込み部分まで含めると3m程になる。石組み部分はI・IIの部分に分けられ、Iの部分はIIの部分に付け加えたように見える。Iの部分の東側には土器が斜めに埋設されていた。炉を構成する礎はすべて花崗岩で、大きさは11~67cmである。前庭部は浅い窪み状になっていて、壁も緩やかである。炉内からはほとんど焼土が検出されず、埋設された土器の周囲に少量見られるだけである。(神 敏明)

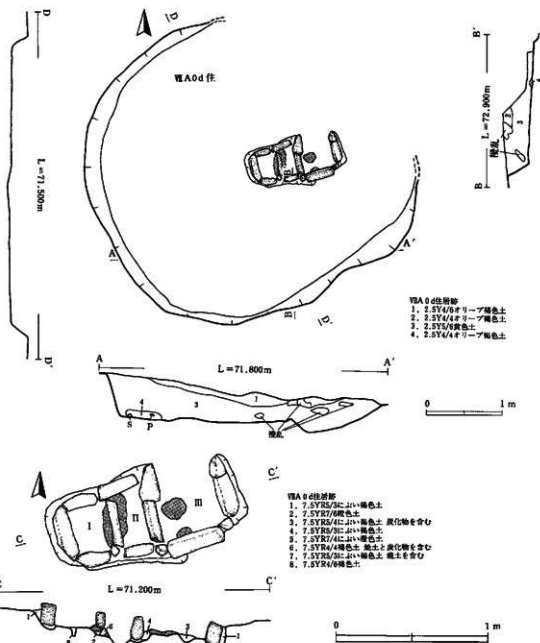
出土遺物 (第61、62図、写真図版55)

83は炉に斜めに埋設された土器である。82は床面から出土した。埋土から磨石が1個と石皿が3個出土している。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)



第20図 VIIA 0 c 住居跡



第21図 VIIA 0 d住居跡

VIA 0 c住居跡 (第20図、写真図版14)

本住居跡は調査区北西の尾根の頂部付近に位置している。本住居跡の東側には平安時代のVIIA 1 d住居跡が存在する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において暗褐色土の半円状の広がりを確認したことによる。

平面形は、斜面下方にあたる南東側が流出しているため不明な点が多いが、残存する壁や柱穴の配置から楕円形を呈すると推定される。開口部の残存する部分の最大径は3.49mで、長径は4m前後と考えられる。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が6

cm、西壁が21.5cm、北壁が32.7cmである。

埋土は9層に細分されるが、暗褐色土と黄褐色土が主体で、褐色土がブロック状に混入する。
焼失住居 埋土全体に微少な炭化材を含み、床面から炭化材から出土していることから本住居跡は焼失住居と考えられる。炭化材の樹種はほとんどがクリで、ナラが少量見られる。

床面はVI層中に形成され、斜面下方にやや傾斜するもののほぼ平坦で堅くしまっている。床面中央部付近からは土器がまとまって出土している。

柱穴は壁から中央に寄った地点から10基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は11～38cm、深さは7～51cmである。柱穴の径は確認できなかった。

炉は床面中央部から石囲炉が検出された。炉の平面形は長方形であるが南側の石を一部欠いている。石の抜き取り痕は確認できなかった。規模は66×46cmで、10～25cm程の花崗岩の礫が使用されている。炉内の焼土は発達しておらず、微少な炭化材と焼土粒を含む褐色土が堆積しているのみである。(神 敏明)

出土遺物 (第62図、写真図版55)

88～91は埋土から出土した縄文時代中期末葉かと考えられる土器片である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 0 d 住居跡 (第21図、写真図版15)

重複関係 本住居跡は調査区北西側の尾根の頂部に位置している。VII A 1 d 住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。検出はVII A 1 d 住居跡の鍛冶炉を断ち割ったところ、複式炉を構成する礫を検出し、IX層上面において濁った褐色土の広がりをとらえたことによる。

平面形は、北壁から東壁をVII A 1 d 住居に切られているため、全容は不明であるが、残存部からややゆがんだ円形を呈していることが推測される。規模は、開口部径が4.0m×4.16mで、壁高は西壁で56cm、南壁で32cmである。壁はIX層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。

埋土は2層に大別され、濁った黄褐色土が主体である。床面はIX層中に形成され、平坦であるが、東よりはやや凹凸がある。全般に固く締まっている。

柱穴は確認できなかった。

石組複式炉 炉は床面中央部よりわずかに東寄りから石組みの複式炉が検出された。炉の規模は1.34m、最大幅は0.86mである。炉はI～IIIに分割される。IIIの部分の北側の石を欠く。炉の使用面はIの部分からやや傾斜してIIIの部分に至っている。焼土の堆積は薄く、IとIIを仕切る石の周辺とIIIの部分に薄く見られるのみであるが、焼土の部分以外でも火を受けて固く締まっている。炉を構成する石は花崗岩の板状の礫で、表面は火を受けてやや赤化している。

出土遺物 (第63図、写真図版55)

埋土から縄文時代中期後葉の土器片が出土した。94は床面から出土した磨石である。

遺構の形態から、本住居跡は縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。(高橋佐知子)

VII B 2 a-1 住居跡 (第22図、写真図版16)

本住居跡は調査区中央の谷に位置する。VII B 3 a 住居跡、VII B 3 a-1 焼土遺構と重複関係にあり、VII B 3 a 住居跡より古く、VII B 3 a-1 焼土遺構より新しい。さらに、本住居跡とVII B 2 a-2 住居跡は重複関係にあると推定される。水田造成時に本住居の東半とVII B 2 a-2 重複関係住居跡の壁が削平されているため、断面によって新旧を明らかにすることはできないが、床面の標高差により、本住居の方が新しいと考えられる。

検出は石組みの複式炉が、水田造成時にカッティングされて表出しており、北壁の立ち上がり確認されたことによる。検出面はV層の上面より20cmほど下がる。遺構の残存は水田の造成により50%程度である。

平面形はほぼ円形を呈すると考えられる。規模は残存部で開口部の径が3.68m、壁高が北壁で28cm、南壁で18cmである。壁は外傾しながらゆるやかに立ち上がる。

掘土は4層に分かれ、焼土粒、炭化物粒、風化花崗岩粒を含む黒褐色土及び暗オリーブ褐色土が主体である。

床面はV層中に形成され、平坦であるが西半分しか残存していない。残存部の南半分が固く締まっているわりには北側は締まりがない。周溝はない。柱穴と考えられる小穴は炉の東側に1期検出された。楕円形を呈し、深さは30cmである。東半分が水田に切られているため、真に本住居跡に伴うものか明らかでないが、位置やVII B 2 a-2 住居跡の炉を囲む柱穴を切っているため、ここでは本住居のものとして報告する。楕円形を呈し、深さは33cmを測る。柱痕は確認できなかった。

炉は床面のほぼ中央に石組みの複式炉が検出されている。水田で削平されているため全体の規模は明らかではないが、残存部の長さが1.02m、幅が最大で1.08mである。石組みはIとIIの部分に分かれ、4.5~8cmの厚さの石を上方がやや開くように設置している。一部は石組みを2段に構築する。Iはほぼ住居の中心部にあると思われるが削平を受けている。焼土が cm程 斜面上方に残存している。IIは住居の西方向に開く。本遺跡で検出された複式炉は本住居を除き斜面の下方に開いているが、本住居の炉のみは上方に開いている。焼土は3cm程地覆している。炉から西壁に至る部分は、床面が固く締まっている。掘り込みや竈みなどの施設は検出できなかった。部分的に固く締まる床

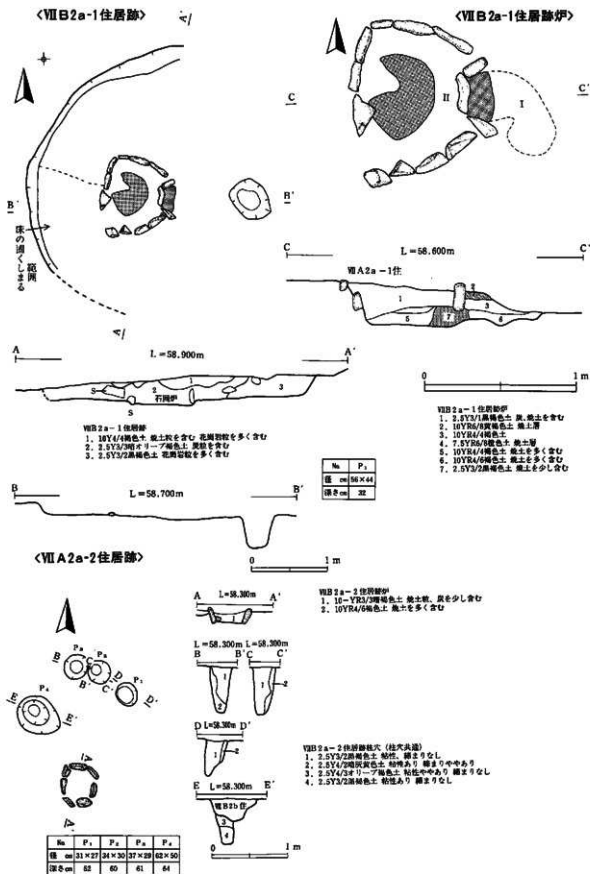
出土遺物 (第63図、写真図版55)

95は炉の直上から得られた縄文時代中期中葉の土器片である。96も同様に炉の直上から得られた土器で、縄文時代前期の土器片である。いずれも流れ込みと考えられる。

出土遺物の数が少量であるため確定できないが、本遺構は形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 a-2 住居跡 (第22図、写真図版17)

本住居跡は調査区中央の谷に至る緩斜面に位置する。西側にVII B 2 a-1 住居跡が存在し、本住居の石囲炉が、VII B 2 a 焼土遺構を切っている。検出はIII層水田床土を除去したところ、V層中で石囲炉が表出したことによる。壁は水田の造成で削平されている。従って全体の規模等は不明であるが、炉の周辺から柱穴が検出されたことにより、住居跡として報告すること



第22図 VII B 2 a-1住居跡、VII B 2 a-2住居跡

した。床はV層中に形成され、平坦でやや締まっているが、床面の締めりぐあい、遺構の規模を推定することはできなかった。

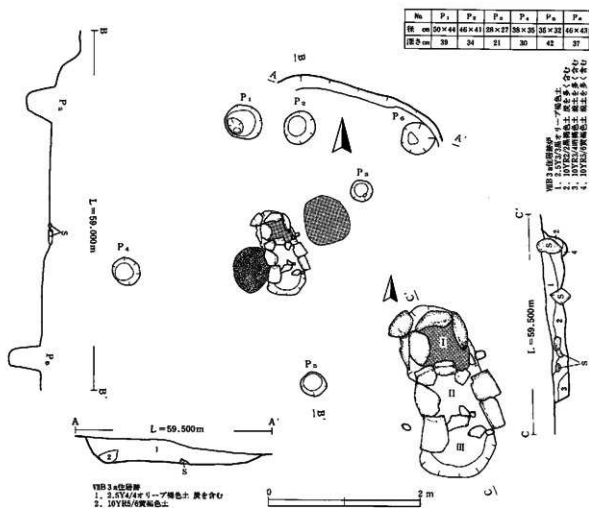
炉の規模は58cm×52cmで、平坦な石を上方がやや外へ開くような角度で設置している。石はすべて花崗岩で、厚さ10cm程度、長さ20cm程度である。焼土はほとんど形成されておらず、炉の埋土に焼土粒が含まれる程度である。

炉の北側から柱穴が4基検出された。平面形は円形もしくは楕円形で、深さは50～64cmである。P1はVII B 2 a-1住居跡の柱穴に切られている。柱痕はP2～P4の3基から検出され、その直径は24～30cmである。

出土遺物は埋土、壁が削平されているため得られなかったが、遺構の形態から縄文時代中期中葉から末葉にかけての住居跡と推定される。

VII B 3 a 住居跡 (第23図、写真図版18)

本住居跡は調査区北側の尾根から中央の谷に至る緩斜面に位置している。VII B 2 a 住居跡、VII B 3 a-1 焼土と上下に重なっており、本住居跡の方が新しい。検出はV層上面で炭を含む 重複関係



第23図 VII B 3 a 住居跡

暗オリブ褐色土の広がりを確認したことによる。斜面から流れ込んだ風化花崗岩粒が多く堆積しており、明瞭に壁をとらえることができなかったため、掘り下げたところ石組みの複式炉を検出した。したがって、壁は一部分しか確認できなかった。

平面形は円形を基調としていると思われる。規模は不明であるが、北側に残存する壁と炉、柱穴の位置から3m以上と推定される。壁高は30cmである。

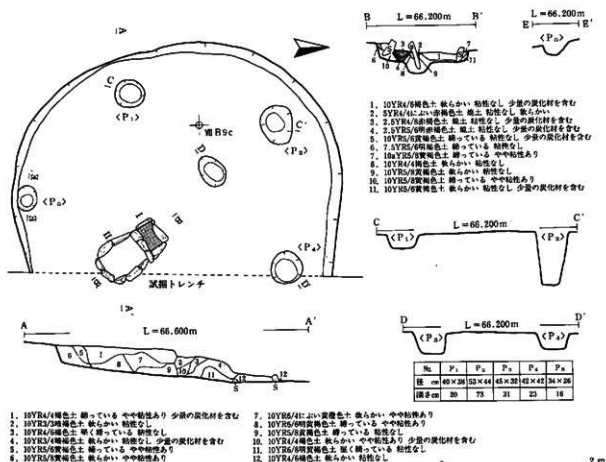
埋土は2層を確認している。炭を含む暗オリブ褐色土が主体で上層には焼土を含む。床面はV層中に形成され、平坦で締まっている。床面からは柱穴が6基検出された。いずれも円形で、径が30~50cm、深さが28~43cmを測る。柱痕は確認できなかった。

石組複式炉

炉は石組みの複式炉である。規模は石組み部分が98cm、石組みを欠いた部分を含めると118cmで、最大幅は58cmである。炉はI~IIIに分割される。IIIの部分は石組みを欠いており、前庭部とみてよいのではないかと考えられる。焼土の堆積はIの部分にのみみられるが、たいへん薄く、炉の底面が赤く焼けている程度である。石組みの掘り方も赤く焼けている。石自体はそれほど焼けていないことから石の組み替えがあったことが考えられる。掘り込みはIで15cm、IIIで10cmである。

床面の焼土

この石組炉の東側にブロック状の焼土の集中が検出された。厚さは10cm程で、本住居跡に伴うものと考えられる。また、炉の周辺には床面から焼土が検出されている。



第24図 VII B 8 b 住居跡

さらに炉の西側に、炉に接して厚さ2cmほどの炭の集中が検出されている。炉からかき出した炭のかき出した炭か
たものと考えられる。

出土遺物 (第63図、写真図版55)

平面で遺構の検出ができなかったため、遺構内出土として取り上げた土器は小片のみで、図化に至らなかった。98は床面炉の付近から出土した磨石、99は炉の脇の床面に堆積した炭の広がりの中から出土した磨石である。

遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 8 b 住居跡 (第24図、写真図版19)

本住居跡は調査区北西の尾根上に位置している。住居跡の北側にはVII B 0 b 住居跡が、南側にはVII B 7 b 土坑が存在する。検出は人力によって試掘トレンチを掘り下げ中に炉を構成する礫を発見したことによる。

住居跡の東側は試掘トレンチによって失われ、それに続く部分は調査区域外に延びることから、平面形の詳細は不明な点が多いが、残存部分から円形を呈すると推定される。開口部の残存部分の最大径は5.03mである。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は西壁が39cm、南壁が21cm、北壁が40cmである。

埋土は12層に細分され、上位は褐色土と暗褐色土が主体で、下位は黄褐色土が主体となる。埋土状況が自然堆積としては不自然なことから、人為的な埋め戻しと推定される。床面はVII層中に形成され、斜面下方にやや傾斜するものほぼ平坦でしまっている。

柱穴は壁際から1基、壁から離れて4基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は34~53cm、深さは16~73cmを測る。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央からやや南に寄った地点から複式炉が検出された。炉の平面形は楕円形で、規模は98×60cmで、17~28cm程の花崗岩の礫が使用されている。石組みはI・IIの部分に分けられ、Iの部分はIIの部分に付け加えられたように見える。炉内の焼土はIの部分からのみ検出されており、IIの部分は前庭部的なものと推定される。焼土は厚さ15cm程で、比較的良く発達している。(神 敏明)

出土遺物 (第63図、写真図版55)

101~104は埋土から出土した縄文時代中期末葉の土器片である。

遺物が少ないため確定はできないが、本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 0 b 住居跡 (第25図、写真図版20)

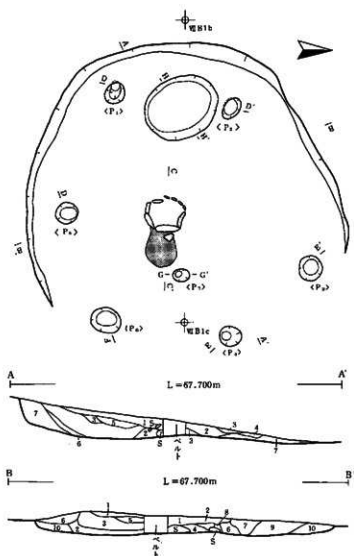
本住居跡は調査区北西の尾根上に位置している。本住居跡の南側にはVII B 8 b 住居跡が存在する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、VI層上面において黒褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は斜面下方が流失しているため不明な点が多いが、壁の残存部分と柱穴の配置から斜面下方の流失
円形と推定される。

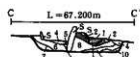
規模は開口部の残存部分の最大径が4.15mで、長径は4.5m前後と思われる。壁はVI層中にあ

り、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が46cm、南壁が15cm、北壁が20cmである。なお、北側の壁は重機による表土剥ぎの際の抜根によって若干擾乱を受けている。

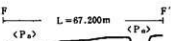
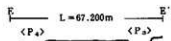
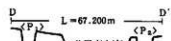
埋土は10層に細分され、上位はシルト質の黒褐色土、中位から下位にかけては暗褐色土が主体である。なお、一部に抜根による擾乱の黄褐色土が見られる。床面はVI層に形成され、ほぼ住居内土坑平坦でしまっている。床面からは土坑、柱穴、炉が検出されている。土坑は平面形が楕円形で、断面形はビーカー状を呈する。規模は径が100×70cm、深さは28cmである。埋土は黒褐色土と暗褐色土が主体で、壁際に壁の崩落土である褐色土が見られる。柱穴は床面中央部付近から1基と壁からやや離れて6基検出されている。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は23~40



1. 10YR2/3黒褐色土 ぬらかい 中や粘りあり
2. 10YR3/4暗褐色土 ぬらかい 中や粘りあり
3. 10YR4/3ぬい黄褐色土 ぬらかい 粘りなし
4. 10YR2/3暗褐色土 ぬらっている 中や粘りあり 炭化材を少量含む
5. 7.5YR3/3暗褐色土 ぬらかい 粘りなし 炭化材・腐土を少量含む
6. 10YR4/4褐色土 ぬらっている 粘りなし
7. 10YR5/6黄褐色土 ぬらっている 粘りなし
8. 10YR2/2黒褐色土 ぬらかい 粘りなし
9. 10YR2/6ぬい黄褐色土 ぬらっている 粘りなし
10. 10YR4/6褐色土 ぬらっている 中や粘りあり



1. 2.5YR5/7明赤褐色土 ぬらぬらしている
2. 2.5YR3/6明赤褐色土 ぬらぬらしている
3. 7.5YR7明褐色土 ぬらぬらしている 粘りなし
4. 10YR4/4褐色土 ぬらぬらしている 粘りなし 炭化材を少量含む
5. 10YR6/6明黄褐色土 ぬらぬらしている 粘りなし
6. 10YR6/6明黄褐色土 ぬらぬらしている 粘りなし
7. 10Y2褐色土 ぬらぬらしている 粘りなし 炭化材を少量含む
8. 10YR2/6明黄褐色土 ぬらぬらしている 中や粘りなし
9. 10YR5/6黄褐色土 ぬらぬらしている 粘りなし
10. 10YR6/6明黄褐色土 ぬらぬらしている 粘りなし

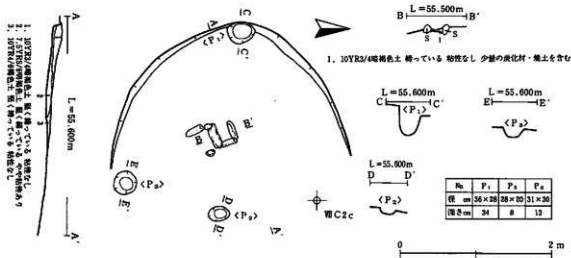


1. 10YR2/3黒褐色土 ぬらかい 粘りなし
2. 10YR4/4褐色土 ぬらぬらしている 中や粘りあり
3. 10YR2/3暗褐色土 ぬらぬらしている 粘りあり
4. 10YR4/4褐色土 ぬらかい 粘りあり

No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	29×25	28×16	23×31	30×27	40×33	30×29	23×16
深さ cm	47	40	30	30	34	27	14



第25図 VII B 0 b 住居跡



第26図 VIC 1 b 住居跡

cm、深さは14~47cmである。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面中央部付近で石囲炉が検出されている。平面形は円形で規模は55×47cmで、8~34cmの花崗岩の礫が使用されている。石組みの内部からは焼土はほとんど検出されず、東側の石石囲炉組みの外部に焼土が広がっていた。東側の礫は炉を構成する礫のうち最大のものである。焼土は厚さ9cm程で良く発達している。(神 敏明)

出土遺物 (第63図、写真図版56)

105、106、108、109は埋土から出土した後期初頭の土器片であるが流れ込みの可能性がある。本遺構は遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と考えられる。(高橋佐子)

VIC 1 b 住居跡 (第26図、写真図版21)

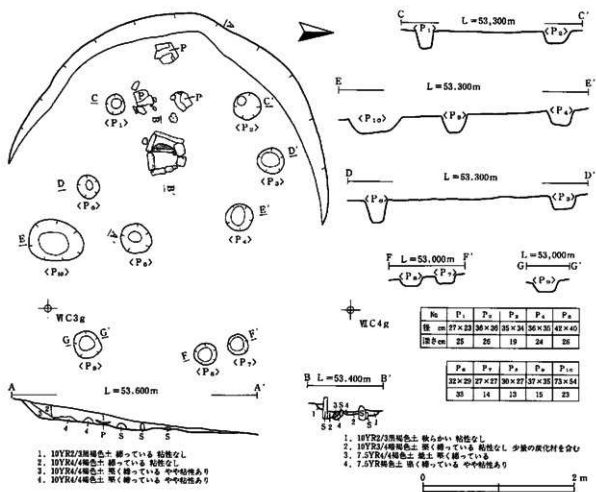
本住居跡は調査区東側の尾根上に位置している。本住居跡の南西側にはVIC 0 a-1 住居跡、VIC 0 a-2 住居跡が、南側にはVIC 0 b 住居跡が、東側にはVIC 1 c 土坑が隣接して存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の半円状の広がりを確認したことによる。

平面形は人為的な削平と住居跡の東側にあたる斜面下方の流失により不明な点が多いが、残斜面下方存する部分から円形あるいは楕円形を呈すると考えられる。の 流 失

規模は残存する開口部の最大径が3.07mである。壁は上部が削平されている。残存する壁はVI層中であり、西壁は急角度で外傾して立ち上がり、北壁と南壁は緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は西壁が24.2cm、南壁が10.6cm、北壁が3.8cmである。

埋土は3層に細分され、西側の上位は暗褐色土、斜面下方にあたる東側は褐色土、下位は粘土質の明褐色土が主体である。床面はVI層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。床面からは柱穴と炉が検出されている。柱穴は壁際から2基、中央部に寄った地点から1基検出され、円形及び楕円形の掘り方を有する。規模は径が28~36cm、深さは8~34cmである。柱痕の径は確認できなかった。

炉は床面ほぼ中央付近から石囲炉が検出されている。平面形は方形を呈すると思われるが、石 囲 炉



第27図 VII C 3 f 住居跡

西側の壁を欠くため詳細は不明である。また、炉外南側に南北方向に長い壁が存在するが、抜き取られた壁か前庭部を構成する壁かは確認できなかった。炉の規模は34×34cmで、20～35cmの花崗岩の壁が使用されている。炉内の焼土はあまり発達しておらず、少量の炭化材と焼土粒を含む暗褐色土が存在するのみである。(神 敏明)

出土遺物 (第63図、写真図版56)

112は埋土から出土した縄文時代中期末葉の土器片である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉の住居跡の可能性がある。

(高橋佐知子)

VII C 3 f 住居跡 (第27図、写真図版22)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置し、北側にはVII C 5 f 住居跡が隣接する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において黒褐色土の半円状の斜面下方

の流失 平面形は人為的削平と住居跡の東側にあたる斜面下方の流失により不明な点が多いが、残存

する壁と柱穴の配置から円形あるいは楕円形と推定される。

規模は残存する開口部の最大径が4.26mである。壁は上部が削平されており、壁高は西壁が23cm、南壁が7cm、北壁が14cmである。壁はVI層中にあり、床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

埋土は4層に細分されるが、シルト質の黒褐色土が主体で、壁際と下位に粘土質の褐色土が見られる。床面はVI層中に形成され、斜面下方にやや傾斜し若干の凹凸が見られるものの、堅くしまっている。床面の西壁に寄った地点には土器が散乱していた。床面からは炉と柱穴が検出されている。

柱穴は壁からやや離れて10基存在する。掘り方の平面形は円形あるいは楕円形で、規模は径が27~73cm、深さは13~33cmである。柱痕の径は確認できなかった。P₁~P₆の柱穴は炉を取り巻くように円形に配置されているが、P₇~P₁₀はその東側に配置されており、住居跡が拡張された可能性がある。

炉は床面中央部と思われる地点からやや西に寄った地点で複式炉を検出している。平面形は
複式炉
ややいびつな方形で、規模は58×52cmを測り、7~40cmの花崗岩の礫が使用されている。炉は中央部が礫によって東西方向に二分される形の複式炉で、焼土は西側の部分で確認されている。焼土の厚さは7cm程で、中央寄り検出されている。東側の部分では少量の炭化材を含む暗褐色土が堆積しており、焼土は確認されなかった。(神 敏明)

出土遺物 (第64図、写真図版56)

床面直上から縄文時代中期後葉かあるいは末葉の土器が出土している。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期末葉から後葉にかけての住居跡と考えられる。(高橋佐子)

VII C 5 f 住居跡 (第28図、写真図版23)

本住居跡は調査区東側の尾根上に位置し、南側にはVII C 3 f 住居跡が存在する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において暗褐色土の広がりを確認したことによる。本住居跡は遺構の大半が調査区域外に続いているため詳細は不明な点が多い。

調査区外
に伸びる

平面形は検出された南壁と西壁の一部から円形あるいは楕円形と推定される。規模は検出部分から5m前後と考えられる。壁はVI層中に形成され、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は西壁が35cm、南壁が16cmである。

埋土は暗褐色土が主体で、西壁際に褐色土が見られる。床面はVI層に形成され、やや斜面下方に傾斜するもののほぼ平坦でしまっている。床面からは柱穴が2基検出されている。柱穴は円形及び楕円形の掘り方を有し、規模は径が43cm、深さは24~27cmである。柱痕の径は確認できなかった。(神 敏明)

出土遺物 (第64図、写真図版56)

埋土から縄文時代中期後葉かあるいは中葉の土器片が出土している。

本住居跡は出土遺物が少なく、遺構の形態も不明な点が多いことから構築時期の特定は難しいが、占地及び検出面から他の住居跡同様縄文時代中期の遺構と推定される。(高橋佐子)

(2) 壘穴状遺構

VIC 7 b 壘穴状遺構 (第29回、写真図版24)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置している。西側にはVIC 7 a 住居跡が、北側にはVIC 9 b 土坑が、東側にはVIC 7 d 住居跡が存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

斜面下方 本遺構は人為的な削平と斜面下方の流失により残存状態は不良で、遺構の詳細も不明な点が多い。平面形は残存部分から円形と推定され、規模は開口部径が3.01×2.76mである。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が9cm、西壁が41cm、南壁が14cm、北壁が32cmである。

埋土は10層に細分されるが、上位はシルト質の暗褐色土、中位から下位にかけてはシルト質の褐色土と明褐色土が堆積している。床面はVII層上面に形成され、基盤層の礫が見られるもののほぼ平坦でしまっている。(神 敏明)

出土遺物 (第64回、写真図版56)

埋土から縄文時代中期中葉の土器片と石皿が出土した。

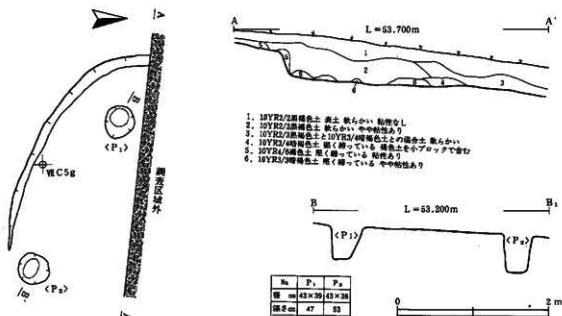
出土遺物が少ないので時期の確定は困難であるが、縄文時代中期の遺構と考えられる。

(高橋佐知子)

VII B 1 c 壘穴状遺構 (第29回、写真図版25)

本遺構は調査区北側の尾根から中央の谷に至る斜面上に位置する。南側にはVII B 0 d 土坑が存在する。検出は人力によって斜面堆積のVI層を掘り下げたところ、オリーブ褐色土の楕円形の広がりをとらえたことによる。

内湾した壁 平面形は楕円形を呈し、長径2.8m、短径2.7mを測る。壁及び床はVI層中に形成され底面が



第28回 VIC 5 f 住居跡

らやや内湾してゆるやかに立ち上がる。壁高は40cmである。

埋土は5層に別れ、オリーブ褐色土が主体である。4層に多くの炭を含む。底部の西南より炭の多い層から焼土が検出されたが現地製ではなく、投げ込まれたものと考えられる。

出土遺物 (第64~66図、写真図版56、57)

本遺構から出土した土器は前期前葉に属し、繊維を含んでいる。121~126は底面から出土した土器である。127~136は埋土から出土した。石器は137、143が底面から、その他は埋土から出土している。埋土には非常に多くの土器を含み、量は大コンテナにして半分ほどである。

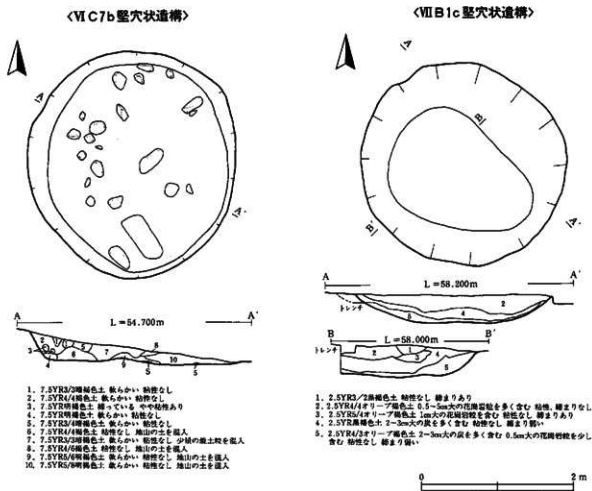
本遺構は出土した土器から縄文時代前期前葉の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

(3)土坑

VIB 0 d 土坑 (第30図、写真図版28)

本遺構は調査区北側から中央の谷に至る緩斜面に位置する。南約4mの地点にはVIB 9 c 炭窯が、西約2mにはVII B 1 c-3 焼土遺構が存在する。検出はV層を掘り下げたところ、黒褐色土の広がりをとらえたことによる。

平面形は楕円形で、規模は長径1.99m、短径1.37mを測る。壁はV層中に形成され、外傾斜



第29図 堅穴状遺構

副 穴 して立ち上がる。底もV層で、平坦である。底部北壁際に副穴を有するが、深さは底面から約12cmである。

埋土は2層に細分され、細かい炭粒を含んでいる。

底部と壁際から15cm～人頭大の花崗岩の礫が検出されている。

出土遺物

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないため、時期の確定はできないが、検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VIC 9 b 土坑 (第30図、写真図版26)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置し、南側にはVIC 7 b 堅穴状遺構が、北側にはVIC 0 b 住居跡が存在する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は不整な円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が2.09×1.83mで、底部径は1.50×1.37m、深さは45cmである。壁はVI層からVIIにかけて形成され、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVII層中にあり、平坦ではあるが15～50cm程の礫が散在する。

埋土は4層に細分され、上位は黄褐色土混じりの褐色土で攪乱土と思われる。中位は少量の微小な炭化材が含まれる暗褐色土で、下位には堅くしまった粘土質の褐色土が堆積している。

(神 敏明)

出土遺物 (第66図、写真図版57)

埋土から縄文時代中期後葉と考えられる土器片が出土している。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期後葉の土坑と推定される。(高橋佐知子)

VIA 8 i 土坑 (第30図、写真図版26)

本遺構は調査区北西の尾根の斜面上に位置し、VIA 8 i 住居跡と重複関係にあり、本土坑が住居跡を載る形になっていることから、構築時期は本土坑の方が新しい。検出はVIA 8 i 住居跡精査中において黄褐色土の円形の広がりを確認したことによる。なお、本遺構の上部は調査の不手際から若干削平されている。

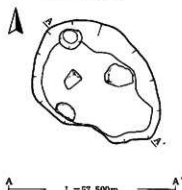
フラスコ状 平面形は不整な円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径が1.28×1.21m、底部径は1.67×1.41m、深さは1.37mである。壁はVII層中に形成され、底部から1m程のところまでは内湾し、その後ほぼ直に立ち上がる。底部はVII層にあり、やや凹凸がみられ、堅くしまっている。

埋土は15層に細分され、上位はシルト質の黄褐色土、中位はシルト質の黄褐色土、下位はシルト質の明褐色土と粘土質の黄褐色土が主体である。埋土の状況からは埋め戻しの可能性が認められる。(神 敏明)

出土遺物はない。

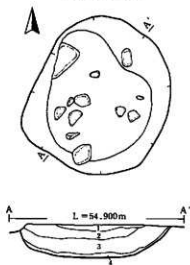
本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

〈VI B0d 土坑〉



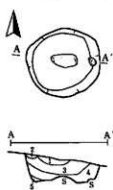
1. 10YR3/2黒褐色土 ぬかい状、褐色土粒を含む
2. 10YR4/4褐色土 ぬかい状、黄色土粒を含む

〈VI C9b 土坑〉



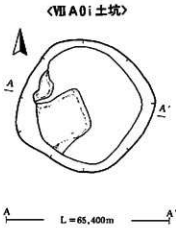
1. 7.5YR4/4褐色土 堅く締っている 黄褐色土をブロック状に含む
2. 10YR2/4暗褐色土 堅く締っている やや粘性あり
3. 10YR3/4暗褐色土 ぬかく締っている 少量の炭化材を含む
4. 7.5YR4/6褐色土 非常に堅く締っている やや粘性あり

〈VII A0f 土坑〉



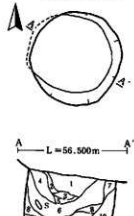
1. 10YR2/3暗褐色土 締っている 粘性なし
2. 10YR5/6黄褐色土 堅く締っている 粘性なし
3. 10YR4/4褐色土 締っている 粘性なし
4. 10YR4/6褐色土 堅く締っている やや粘性あり
5. 10YR6/6黄褐色土 締っている やや粘性あり 砂粒を含む

〈VII A8i 土坑〉



1. 10YR2/3暗褐色土 締っている 粘性なし
2. 10YR2/4暗褐色土 締っている 粘性なし
3. 10YR4/4褐色土 ぬかい状、粘性なし
4. 10YR2/3暗褐色土 ぬかい状、粘性なし
5. 10YR4/3に多い黄褐色土 締っている 粘性なし
6. 10YR4/6褐色土 締っている 粘性なし 砂粒を含む
7. 10YR5/6黄褐色土 堅く締っている やや粘性あり
8. 10YR2/3暗褐色土 堅く締っている やや粘性あり
9. 10YR5/6黄褐色土 堅く締っている やや粘性あり
10. 10YR4/4褐色土 締っている やや粘性あり
11. 10YR6/6黄褐色土 堅く締っている やや粘性あり

〈VII C1a 土坑〉



1. 10YR2/3暗褐色土 締っている やや粘性あり
2. 10YR2/4暗褐色土 締っている やや粘性あり
3. 10YR4/4褐色土 堅く締っている やや粘性あり
4. 10YR2/3暗褐色土 締っている 粘性あり
5. 10YR2/4暗褐色土 ぬかい状、やや粘性あり
6. 10YR2/3暗褐色土 ぬかい状、やや粘性あり 少量の炭化材が混入する
7. 10YR4/6褐色土 10YR2/3暗褐色土の混合土 堅く締っている
8. 10YR4/6褐色土 ぬかい状、やや粘性あり
9. 10YR4/3に多い黄褐色土 ぬかい状、粘性あり
10. 7.5YR5/6黄褐色土 締っている 粘性あり

1. 10YR5/4に多い黄褐色土 締っている 粘性なし
2. 10YR5/6黄褐色土 締っている やや粘性あり
3. 10YR6/6黄褐色土 ぬかい状、やや粘性あり
4. 10YR7/6黄褐色土 ぬかい状、やや粘性あり
5. 10YR6/6黄褐色土 ぬかい状、やや粘性あり
6. 10YR4/6褐色土 締っている 粘性あり
7. 10YR5/6黄褐色土 締っている やや粘性あり
8. 10YR5/6黄褐色土 締っている やや粘性あり 砂粒を含む
9. 10YR4/6褐色土 締まっている やや粘性あり 砂粒を含む
10. 7.5YR5/6黄褐色土 締っている 粘性あり
11. 7.5YR6/6褐色土 締っている やや粘性あり
12. 10YR6/6黄褐色土 締っている やや粘性あり
13. 10YR7/6黄褐色土 ぬかい状、やや粘性あり
14. 10YR5/6黄褐色土 ぬかい状、やや粘性あり
15. 10YR5/6黄褐色土 ぬかい状、粘性あり



第30図 土坑(1)

VII A 0 f 土坑 (第30図、写真図版26)

本遺構は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、北西側にはVII A 1 e-1・2 土坑、VII A 1 e-1・2 炭層、VII A 1 d 住居跡が占地している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、VI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

ビーカー状 平面形は円形で、断面形は浅いビーカー状を呈する。規模は開口部径が98×89cm、底部径は81×72cm、深さが34cmである。壁はVI層からVII層にかけて形成され、ほぼ直に立ち上がる。底部はVII層中に形成され、堅くしまっている。底部中央にVII層に混入する礫が見られる。

埋土は5層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、中位から下位にかけてはシルト質の褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII A 0 i 土坑 (第30図、写真図版26)

本土坑は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、南側の斜面中腹にはVII A 8 i 住居跡・VII A 8 i 土坑が占地している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は円形で、断面形は浅鉢状を呈する。規模は開口部径が1.87×1.76m、底部径は1.56×1.40m、深さが55cmである。壁はVI層からVII層にかけて形成され、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVII層中にあり、堅くしまっている。西側にはVII層に混入する礫が見られる。

埋土は11層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、中位はシルト質の褐色土と黒褐色土、下位は明黄褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII B 7 b-1 土坑 (第31図、写真図版27)

本土坑は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、北側にはVII B 8 b 住居跡が占地している。

重複関係 また、本土坑はVII B 7 b-2 土坑と重複関係にある。新旧関係は本土坑がVII B 7 b-2 土坑を載っており、本土坑の方が新しい。検出は尾根の斜面に設定した試掘トレンチの底部であるVI層上面において暗褐色土の広がりを確認したことによる。

ビーカー状 平面形は不整な断面形、断面形はビーカー状を呈するが、底部北側に円形の副穴を有する。
副 穴 副穴の断面形もビーカー状である。規模は開口部径が2.86×2.51m、底部径が2.49×2.37m、深さは58cmである。副穴の規模は開口部径が108×94cm、底部径が109×90cm、土坑底部からの深さが34cmで、検出面からの深さは11cmである。壁はVI層中にあり、東西の壁は急角度で外傾して立ち上がり、南北の壁はほぼ直に立ち上がる。副穴の壁はVI層からVII層にかけて形成され、北壁側がやや内湾して立ち上がるほかは、ほぼ直に立ち上がる。底部はVI層中にあり、南側にやや傾斜している。底部には凹凸が見られずしまっている。副穴の底部はVII層中にあり、ほぼ

平坦で堅くしまっている。

埋土は副穴も含め16層に細分される。上位は炭化材を少量含むシルト質の黒褐色土と暗褐色土、中位はシルト質の褐色土と暗褐色土、下位は堅くしまった褐色土が主体である。副穴の埋土は黄褐色土と明褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII B 7 b - 2 土坑 (第31図、写真図版27)

本土坑は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、VII B 7 b - 1 土坑とは重複関係にある。検出はVII B 7 b - 1 土坑と同様に試掘トレンチ底部のVI層上面において暗褐色土の広がりを検出したことによる。

形状・規模は重複関係により不明な点が多いが、平面形は不整な楕円形、断面形は浅い皿状を呈すると推定される。規模は開口部径が2.81×1.92m、底部は2.51×1.68m、深さは27cmである。壁はVI層中にあり、西壁は緩やかに外傾して立ち上がり、他の壁は急角度で外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成され、しまっている。両側で段を持ち8cm程高くなる。

埋土は13層に細分され、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・黄褐色土が混在し、人為的に埋め戻した可能性が高い。(神 敏明)

出土遺物 (第66図、写真図版57)

埋土から磨石 (156) が出土している。

本遺構は出土土器がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII C 1 a 土坑 (第30図、写真図版27)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置し、南側にはVIC 0 a - 1 住居跡が、東側にはVII C 1 b 住居跡が占地している。検出は人力による表土除去後のVI層上面において黒褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が1.23×1.20m、底部径は1.13×1.01m、深さが72cmである。壁はVI層中にあり、ほぼ直に立ち上がる。底部はVI層中に形成され、平坦でしまっている。

埋土は10層に細分され、上位から中位にかけてはシルト質の黒褐色土と暗褐色土が主体で、下位は粘性のある黄褐色土と黄褐色土が主体である。(神 敏明)

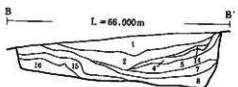
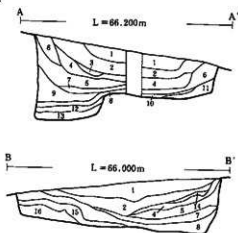
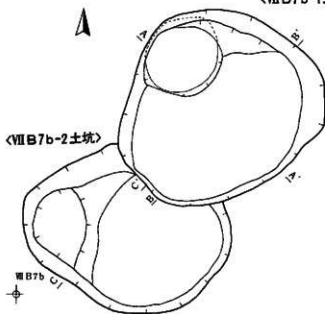
出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

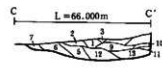
VII C 1 b 土坑 (第31図、写真図版27)

本土坑は調査区東側の尾根上に位置している。西側にはVII C 1 b 住居跡、南側にはVIC 0 b

〈VII B7b-1土坑〉

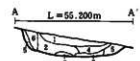
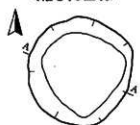


Ⅶ B7b



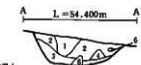
1. 10YR2/3黒褐色土 締まっている 粘性なし
2. 10YR2/3黒褐色土 締まっている やや粘性あり 炭化材を含む
3. 10YR2/3黒褐色土 軟らかい やや粘性あり 炭化材を含む
4. 10YR2/4暗褐色土 締まっている やや粘性あり 炭化材を含む
5. 10YR4/3こい黄褐色土 締まっている やや粘性あり
6. 10YR4/4暗褐色土 軟らかい やや粘性あり
7. 10YR5/6黄褐色土 締まっている やや粘性あり
8. 10YR3/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし 炭化材を含む
9. 10YR2/3暗褐色土 軟らかい やや粘性あり
10. 10YR4/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり 炭化材を含む
11. 10YR4/4暗褐色土 やわらかい 粘性あり
12. 10YR4/4暗褐色土 軟らかい 粘性なし
13. 10YR5/6黄褐色土 軟らかい やや粘性あり 炭化材を含む

〈VII C1c土坑〉



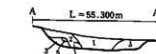
1. 10YR3/4暗褐色土 締まっている 粘性なし
2. 10YR4/3こい黄褐色土 締まっている 黄褐色土が小ブロックで混入
3. 7.5YR5/6暗褐色土 軟く締まっている 粘性あり
4. 7.5YR4/4暗褐色土 軟く締まっている やや粘性あり
5. 7.5YR4/4暗褐色土 軟く締まっている やや粘性あり
6. 10YR4/4暗褐色土 軟く締まっている やや粘性あり

〈VII C1d土坑〉



1. 10YR2/3黒褐色土 非常に強く締まっている 粘性なし
2. 10YR2/3暗褐色土 締まっている 粘性なし
3. 10YR4/4暗褐色土 軟く締まっている やや粘性あり
4. 10YR3/4暗褐色土 締まっている やや粘性あり
5. 10YR3/4暗褐色土 軟く締まっている 褐色土をブロック状に含む
6. 7.5YR4/4暗褐色土 軟く締まっている 粘性あり

〈VII C3c土坑〉



1. 10YR3/4暗褐色土 締まっている 粘性なし
2. 10YR4/4暗褐色土 軟く締まっている 粘性なし
3. 10YR4/4暗褐色土 締まっている 粘性なし
4. 10YR4/3こい黄褐色土 軟く締まっている やや粘性あり
5. 10YR2/3暗褐色土 軟らかい 粘性なし



第31図 土坑(2)

住居跡、東側にはVII C 1 d 土坑、北側にはVII C 3 c 土坑が占地している。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が1.44×1.39m、底部径は1.11×1.07m、深さが25cmである。壁はVI層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成され、平坦でしまっている。

埋土は6層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、下位は粘土質の黄褐色土と褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物 (第66図、写真図版57)

埋土から縄文時代中期の土器片が出土している。

本遺構は出土遺物が少ないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII C 1 d 土坑 (第31図、写真図版28)

本土坑は調査区東側の尾根上に位置し、西側にはVII C 位置 c 土坑が占地している。検出は人力による表土除去後のVI層上面において暗褐色土の楕円形の広がりを確認したことによる。

平面形は不整な楕円形、楕円形は浅鉢状を呈する。規模は開口部径が1.77×1.23m、底部径は1.41×0.74m、深さは37cmを測る。壁はVI層中にあり、西壁はやや急角度で外傾して立ち上がり、他の壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成され、ほぼ平坦で堅くしまっている。

埋土は6層に細分され、上位から中位にかけてはシルト質の黒褐色土と暗褐色土、下位は粘土質の褐色土が主体である。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

VII C 3 c 土坑 (第31図、写真図版28)

本土坑は調査区東側の尾根上に位置し、南側にはVII C 1 c 土坑が占地している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において暗褐色土の楕円形の広がりを確認したことによる。

平面形は楕円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が1.83×1.40m、底部径が1.43×1.05m、深さは18cmである。壁はVI層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。

埋土は5層に細分され、中央部にはシルト質の暗褐色土、壁に沿った部分にはシルト質の褐色土が存在する。(神 敏明)

出土遺物はない。

本遺構は出土遺物がないことから時期の特定はできないが、この付近の他の遺構と同様縄文時代中期に属すると推定される。(高橋佐知子)

(4)柱穴状土坑

焼土遺構と VII A 2 i 柱穴状土坑群 (第37図)

重 複 調査区中央の谷筋から6基検出された。(P1～P6)これらのうちP3はVII A 2 j-3 焼土遺構と重複している。また、VII A 2 j-2 焼土遺構とも近接しているが、これら焼土遺構との関係は確認できなかった。住居跡の可能性もあると考えて調査したが、壁は確認していない。個々の土坑の規模は以下のとおりである。

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
規模(cm)	43×30	40×36	42×36	46×42	27×27	26×25
深さ(cm)	36	32	17	24	30	22

出土物はない。これらの柱穴状土坑は検出された層位から縄文時代に属すると考えられる。

(高橋佐知子)

(5)炉跡

VIC 7 e 炉跡 (第32図、写真図版29)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置している。北西側にはVIC 7 d 住居跡が隣接する。検出は人力による表土除去後のVI層上面において炉石と思われる礫を確認したことによる。検出された炉は、焼土の北西側と南西側が花崗岩の礫によって囲まれており、北東および南東側の礫を欠くが石囲炉と推定される。平面形は焼土の広がりから長方形を呈すると考えられる。規模は82×45cmで、20～48cmの礫を使用している。

炉内の焼土は赤褐色土及び明赤褐色土で、厚さ4～7cmほどに発達しており、焼きしまっている。焼土の上部には少量の微細な炭化材と焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。

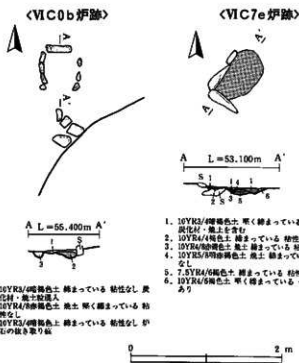
壁 の 本遺構は住居跡に伴う炉跡と推定されるが、占地場所は人為的な削平を受けており、また、斜面部に位置するため住居跡の一部が流失した可能性もある。そのため住居跡の壁や柱穴は検出されなかった。

本遺構からは遺物が出土しておらず、時期を特定することはできないが、炉の形態や花崗岩の礫を使用していることなどから、付近に存在する縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と同時期の遺構と推定される。(神 敏明)

VIC 0 b 炉跡 (第32図、写真図版29)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置し、西側にはVIC 0 a-1 住居跡が、北側にはVIC 1 b 住居跡が、南東側にはVIC 0 b 住居跡が占地している。検出は人力による表土除去後のVI層上面において炉を構成する礫を検出したことによる。炉の形態は、南側を除いて礫で囲まれており、石囲炉と推定される。炉の南側には17～22cmの礫が散在している。炉の断面に炉石の抜き取り痕が見られることから、散在する礫は炉から抜き取られたものの可能性が高い。規模は60×56cmで、8～32cmの花崗岩の礫が使用されている。

炉内の焼土は主に北側に発達しており、赤褐色に堅く焼きしまっている。焼土の厚さは最大



第32図 炉跡

1. 10YR3/4暗褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材・焼土散入
2. 10YR4/3暗褐色土 焼土 締まっている 粘性なし
3. 10YR3/4暗褐色土 締まっている 粘性なし 灰の抜き取り板

1. 10YR2/4暗褐色土 締まっている 少量の炭化材・焼土を含む
2. 10YR4/4褐色土 締まっている 粘性なし
3. 10YR4/3暗褐色土 焼土 締まっている 粘性なし
4. 10YR3/3暗褐色土 焼土 締まっている 粘性なし
5. 7.5YR4/6褐色土 締まっている 粘性なし
6. 10YR4/5褐色土 締まっている やや粘性あり

8 cmである。

本遺構は住居跡に伴う炉跡と推定されるが、占地場所は人為的な削平を受けており、また、斜面部に位置するため住居跡の一部が流失した可能性もある。そのため住居跡の壁や柱穴は検出されなかった。また、本遺構はVIC 0 b住居跡の壁から50cmしか覆れておらず、VIC 0 b炉跡に伴う住居跡はVIC 0 b住居跡と重複関係？

重複関係？

高いが、その場合の新旧関係は削平を受けているため不明である。

壁の
流出か？

重複関係？

本遺構からは遺物が出土

しておらず、時期を特定することはできないが、炉の形態から付近に存在する縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と同時期の遺構と推定される。(神 敏明)

(8) 集石

VII B 1 d 集石 (第33図、写真図版37)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。2 m北にVII B 2 a - 2住居跡の炉が存在する。検出は暗褐色土層中に角礫の集中が認められたことによる。

50cm四方ぐらいの範囲に5～15cm角の花崗岩角礫が集中している。礫は27個で、土器片も5個含まれるが小片のため、時期は不明である。掘り込みは認められない。2個の礫は火を受けて焼けた形跡があるが、そのほかは明瞭ではない。礫の総重量は23.52kgである。

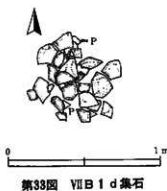
出土遺物

前述のとおり土器片が含まれるが、小片のため図化には至らなかった。出土層位等から縄文時代中期の遺物と推測される。(高橋佐知子)

(7) 焼土遺構

VII B 9 a - 1 焼土遺構 (第34図、写真図版30)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出はV層を除去後VII層上面で、焼土を確認したことによる。平面形は楕円形で、規模は54×50cmである。焼土の厚さは最大で10cmである。焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲から縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。



第33図 VII B 1 d 集石

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構で、中期以前に造られたと考えられる。(高橋佐知子)

VII B 9 b-1 焼土遺構 (第34図、写真図版30)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出はV層を除去後VII層上層である。焼土を確認したことによる。平面形式は楕円形で、規模は62×54cmである。焼土の厚さは最大で、12cmある。焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲からは縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構で、中期以前に造られたと考えられる。(高橋佐知子)

VII B 0 a-1 焼土遺構 (第34図、写真図版30)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出面はVII層中である。平面形は不整形で、規模は48×35cmである。焼土の厚さは最大で10cmである。焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲からは縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

縄文時代前期前葉の土器片が出土している。

本遺構は検出された層位と出土遺物から縄文時代前期の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 0 c 焼土遺構 (第34図、写真図版31)

本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、規模は70×60cmである。焼土の厚さは最大で22cmで、非常によく発達している。焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲からは縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

本遺構は検出された層位から縄文時代前期の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 1 c 焼土遺構 (第34図、写真図版31)

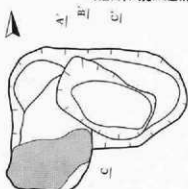
本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は不整形で、64×53cmである。焼土の厚さは最大で、8cmである。焼土の周辺からは縄文時代の土器が出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 1 h 焼土遺構 (第34図、写真図版30)

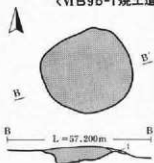
本遺構は調査区中央の傾斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は不整形で焼土は土坑と62×36cmの範囲に広がっている。本焼土は不整形の土坑と重複しているが、伴うかどうかは明確？らでない。焼土の厚さは最大で10cmである。土坑の規模は長径1.1m、短径0.6mで、土坑の

〈VIIA1h 焼土遺構〉



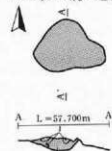
1. 5YR2/1黒褐色土 焼成を中止している。しまりなし
2. 5YR2/6明赤褐色土 焼土 壁を築く。下段は層移的に黒褐色土に変化

〈VI B9b-1 焼土遺構〉



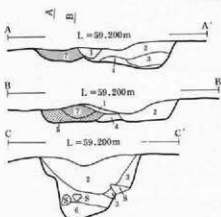
L = 57,200m

〈VI B0a-1 焼土遺構〉



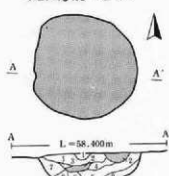
L = 57,700m

1. 5YR6/5明赤褐色土 焼土 壁あり有り
2. 7.5YR4/3黄褐色土 焼土 壁あり有り
3. 7.5YR2/1黒褐色土 シェル



1. 2.5Y3/2黒褐色土 焼土粒をわずかに含む
2. 2.5Y4/2暗灰褐色土
3. オリーブ褐色土 黄褐色土粒を含む
4. オリーブ褐色土
5. 2.5Y4/6オリーブ褐色土 焼土を多く含む。壁あり有り有り
6. 2.5Y3/2黒褐色土 壁あり有り

〈VIIA1j 焼土遺構〉

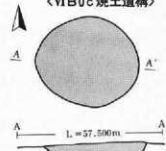


L = 58,400m

1. 7.5YR4/4褐色土 焼土をすこし含む
2. 7.5YR2/6暗褐色土 壁を築く
3. 5YR2/1黒褐色土 壁ありなし
4. 7.5YR4/4褐色土 焼土を少し含む
5. 7.5YR2/1黒褐色土 壁ありなし
6. 7.5YR4/4褐色土 焼土を少し含む
7. 5YR2/1黒褐色土 壁ありなし
8. 7.5YR2/1黒褐色土 壁ありなし
9. 7.5YR2/1黒褐色土 壁ありなし

0 1m

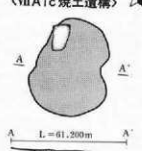
〈VI B0c 焼土遺構〉



L = 57,500m

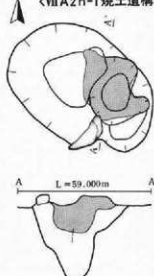
1. 5YR6/3暗褐色土

〈VIIA1c 焼土遺構〉



L = 61,200m

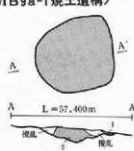
〈VIIA2h-1 焼土遺構〉



L = 59,000m

1. 10YR3/3暗褐色土 焼土 灰粒 黄褐色土粒を含む

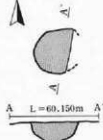
〈VI B9a-1 焼土遺構〉



L = 57,400m

1. 7.5YR3/3暗褐色土 焼土 壁あり有り
2. 5YR3/6明赤褐色土 焼土 壁あり有り

下段は層移的に変化



L = 60,150m

〈VIIA2i-1 焼土遺構〉

第34図 焼土遺構(縄文時代)(1)

深さは42cmである。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

土坑埋土から縄文時代早期末から前期初頭に属する土器片が出土した。(158)

本遺構は検出された層位や遺物、遺構の形態から縄文時代早期末から前期前葉に属する。(高橋佐知子)

VII A 1 j 焼土遺構 (第34図、写真図版31)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形はゆがんだ円形を呈し、焼土は68×70cmの範囲に広がっている。焼土の厚さは、最大で8cm厚であるが、堆積はブロック状であり、捨てられたものと考えられる。周辺からは縄文土器片が出土しているが、遺構との関係は明らかではない。

ブロック状の焼土

出土遺物 (第67図、写真図版57)

縄文時代前期及び中期の土器片、石鏃がブロック状の焼土及びその周辺の焼土を含む層から出土した。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 h-1 焼土遺構 (第34図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形はアメーバー状を呈する。柱穴状の土坑と重複関係にあり、本焼土の方が新しい。

柱穴状土坑と重複

出土遺物 (第67図、写真図版57)

焼土内から繊維を少量含む縄文時代前期の土器片が出土した。(159)

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 i-1 焼土遺構 (第34図、写真図版31)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は円形を呈するが、精査の際の不手際で、東側を失った。規模は32×25(現存値)cmで、焼土の厚さは最大16cmである。周辺には柱穴などの施設は見られなかった。また、周囲からは縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかでない。

周囲に柱穴状土坑

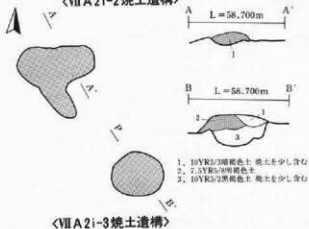
本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 2 i-2 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。約20cm南東にVII A 2 i-3 焼土遺構が存在する。検出面はVII層である。平面形は不整形なアメーバー状で、規模は28×22cmである。焼土の厚さは4cmである。本遺構の南側や東側の周辺には柱穴状の小穴が存在するが、本遺構とのかかわりは確認できなかった。また、床と考えられる面も検出できず、本遺構を炉とするには焼土の形成が不十分であると思われる。従って本遺構に関しては、住居跡としてではなく、焼土として報告することとした。

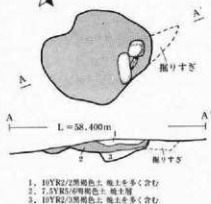
周囲からは縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかでない。

〈VII A2i-2 焼土遺構〉

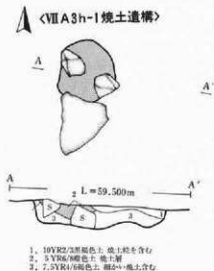


〈VII A2i-3 焼土遺構〉

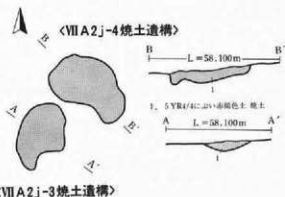
〈VII A2j-1 焼土遺構〉



〈VII A3h-1 焼土遺構〉

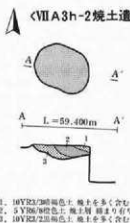


〈VII A2j-4 焼土遺構〉

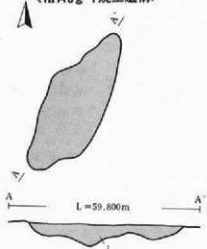


〈VII A2j-3 焼土遺構〉

〈VII A3h-2 焼土遺構〉



〈VII A3g-1 焼土遺構〉



本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VIIA 2 i - 3 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。約20cm北西にVIIA 2 i - 2 焼土遺構が存在する。検出面はVII層である。平面形は円形で、規模は20×18cmである。焼土の厚さは4cmである。本遺構の直下には柱穴状の小穴が存在するが、本遺構の方が新しい。周辺に存在する小穴も直接的な関連はないと考えられる。

周辺からは縄文時代の土器片が出土しているが本遺構との関連は明らかでない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VIIA 2 j - 1 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、76×63cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、レンズ状に堆積している。

周辺からは住居の壁や柱穴は検出されなかった。また、周辺からは縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は、検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VIIA 2 j - 3 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。北側に隣接してVIIA 2 j - 4 焼土遺構が存在する。検出面はV層である。平面形は不整形で48×36cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大7cmで、レンズ状に堆積している。

周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は、検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VIIA 2 j - 4 焼土遺構 (第35図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。南側に隣接してVIIA 2 j - 3 焼土遺構が存在する。検出面はV層である。平面形は不整形で、55×38cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大12cmである。

周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかでない。

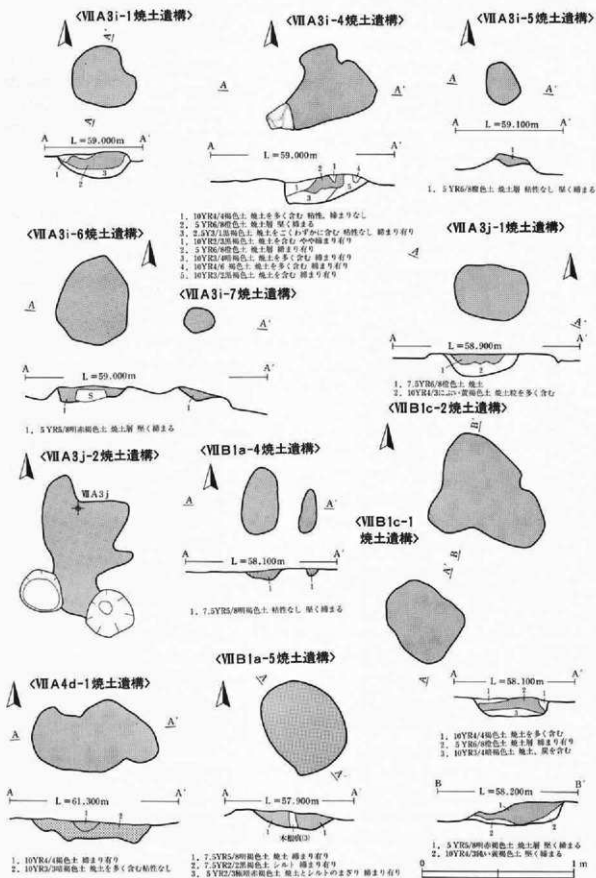
本遺構は、検出された層位から縄文時代の遺構で、VIIA 2 j - 3 焼土遺構と同時期に形成されたものと考えられる。(高橋佐知子)

VIIA 3 g - 1 焼土遺構 (第35図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、107×42cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で16cmである。

周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかでない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)



第36図 焼土遺構(縄文時代)(3)

VII A 3 h - 1 焼土遺構 (第35図、写真図版32)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、41×40 cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で10cmである。本遺構には花崗岩の角礫が伴う。手のひら大の礫が2個と人頭大の礫が1個である。周囲から石の抜き取り痕は検出されていない。本遺構が石厩などの炉であるとの確認はできなかったため、ここでは焼土遺構として報告する。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

縄文時代前期前葉の土器片と石匙が出土した。

本遺構は出土した遺物から縄文時代早期末から前期前葉の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 h - 2 焼土遺構 (第35図、写真図版33)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は楕円形で、38×29 cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で9 cmである。

周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 1 焼土遺構 (第36図、写真図版33)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層下位である。隣にVII A 3 i 住居跡が存在する。平面形は不整形で、45×40cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大12 cmで、レンズ状に堆積している。遺構内以外からも周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

出土遺物 (第67図、写真図版57)

遺構内から縄文時代前期前葉の土器片と石匙が出土した。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 4 焼土遺構 (第36図、写真図版33)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、58×49 cmの範囲に焼土が形成されている。本遺構の南西端には花崗岩の角礫が1個伴っているが、そのほかの周囲に石の抜き取り痕などは検出されなかった。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 5 焼土遺構 (第36図、写真図版33)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面は暗褐色土層である。平面形は楕円形で、28×22cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8 cmで、レンズ状に堆積し固く締まっている。周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 6 焼土遺構 (第36図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。約40cm東にVII A 3 i - 7 焼土遺構が存在する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、60×50cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大12cmで、皿状に堆積している。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。

出土遺物 (第67図、写真図版58)

遺構内から縄文時代前期前葉の土器片が出土した。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 i - 7 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。約40cm西にVII A 3 i - 6 焼土遺構が存在する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、21×16cmの範囲に焼土が形成されている。本遺構は規模が小さく、また、VII A 3 i - 6 焼土遺構に隣接していることから、元々一体の遺構であった可能性もある。底面の標高もほぼ同様である。焼土の厚さは最大7cmである。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 3 j - 1 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層上面である。平面形は東西に長い長円形で、50×36cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、レンズ状に堆積している。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。

出土遺物 (第67図、写真図版58)

焼土中から縄文時代前期前葉の土器片が出土している。

本遺構の出土遺物は縄文時代前期の土器片であるが、検出された層位から縄文時代中期の遺構である可能性が高い。(高橋佐知子)

VII A 3 j - 2 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。本遺構を2基の柱穴状の小穴が切っている。平面形は不整形で、96×60cmの範囲にアメーバー状に焼土が形成されている。焼土の厚さや断面は調査の際の不手際で不明である。

周囲から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構に伴うものかどうか不明である。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII A 4 d - 1 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。平面形は不整形で、85×48cmの範囲に焼土が広がっているが、半裁したところ真に純粋な焼土はごく一部であることがわ

移地性？ かった。したがって、この焼土は移地性かもしれない。焼土をごく多く含んだ暗褐色土は最大13cmの厚さに堆積している。

本焼土は検出された層位から縄文時代のもと考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 a - 4 焼土遺構 (第36図、写真図版34)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層である。本遺構の焼土は二つに分かれる。平面形は大小の楕円形で、西の大きい方が44×24cm、東の小さい方が29×11cmである。本遺構は位置や規模などからももとはひとつの焼土であった可能性が大きいのでここではひとつの遺構として報告する。焼土の厚さは最大9cmである。

周囲からは縄文時代の土器片が出土するが、本遺構との関わりは明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 a - 5 焼土遺構 (第36図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はVII層上面である。平面形は楕円形で、63×50cmの範囲に焼土が形成されている。断面はレンズ状の堆積で、焼土は固く締まり、厚さは最大12cmである。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 c - 1 焼土遺構 (第36図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。南側にVII B 1 c - 2 焼土遺構が存在する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、53×46cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大12cmで、断面は皿を伏せたような形に堆積している。本遺構とVII B 1 c - 2 焼土遺構は検出面が同一で、近接していることからほぼ同時期に形成されものと考えられる。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 c - 2 焼土遺構 (第36図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は不整形で、88×70cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大16cmで、よく発達しており、断面はレンズ状を呈している。前述したように、本遺構とVII B 1 c - 1 焼土遺構はほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 1 c - 3 焼土遺構 (第37図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。遺構の東の一部が、水田造成時の削平によって失われている。平面形は楕円形を呈していたものと考えられる。規模は50×35(残存値)cmで、焼土の厚さは最大22cmである。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

出土遺物 (第67図、写真図版58)

焼土上面から縄文時代前期前葉の土器片が出土している。(179)

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 a 焼土遺構 (第37図、写真図版35)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層下位で、焼土の最下層はVI層上面である。南西の一部をVII B 2 a - 2 住居跡の石壁が切られている。また、検出面はVII B 2 a - 2 住居跡より下がる。平面形は楕円形で、62×54cmの範囲に焼土が堆積している。焼土の厚さは最大21cmでよく発達しており、断面形は浅いすり鉢状である。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 b - 1 焼土遺構 (第37図、写真図版36)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は楕円形で、73×47cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大14cmで、断面形はやや凹凸があるが、レンズ状である。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

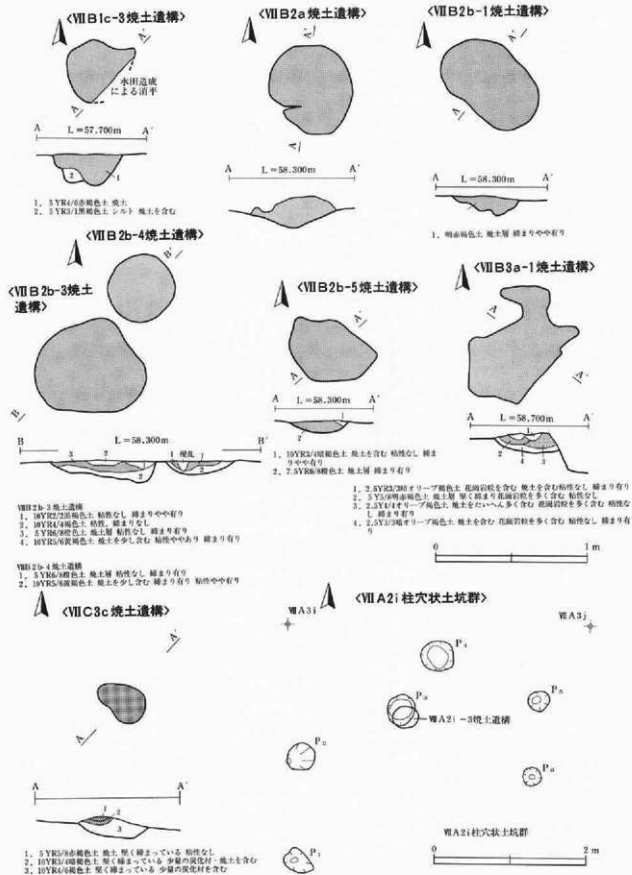
本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 b - 3 焼土遺構 (第37図、写真図版36)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。北側に隣接してVII B 2 b - 4 焼土遺構が同一検出面で存在する。検出面はV層中である。平面形はゆがんだ楕円形で、75×64cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、断面形はレンズ状である。VII B 2 b - 4 焼土遺構は本遺構と焼土の形成や検出面が似通っていることから、ほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)



第37図 焼土遺構(縄文時代)(4)、柱穴状土坑群

VII B 2 b-4 焼土遺構 (第37図、写真図版36)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。南側に隣接してVII B 2 b-3 焼土遺構が同一検出面で存在する。検出面はV層中である。平面形は円形で、46×46cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、断面形はレンズ状である。VII B 2 b-3 焼土遺構は前述のとおり、ほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 2 b-5 焼土遺構 (第37図)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はV層中である。平面形は不整形で、60×42cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、断面はレンズ状である。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は検出された層位から縄文時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 3 a-1 焼土遺構 (第37図、写真図版36)

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。本遺構の南東をVII B 2 a-1 住居跡が切っており、本遺構の上層にはVII B 3 a 住居跡が存在する。検出面はV層中である。平面形はアメーバー状の不整形で85×53(残存値)cmの範囲に焼土が形成されている。焼土は最大12cmで、レンズ状に堆積している。焼土内には風化花崗岩粒が多く含まれており、固く締まっている。

風化花崗
岩粒

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。周辺から縄文時代の土器片が出土しているが、本遺構との関連は明らかではない。

本遺構は他の遺構の切り合い関係などから、縄文時代中期の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

VII C 3 c 焼土遺構 (第37図、写真図版37)

本遺構は調査区東側の尾根上に位置し、北東側にはVII C 3 c 土坑が、南側にはVII C 1 c 土坑が占地している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、IX層上面において焼土を確認したことによる。平面形は不整形で、堅くしまった明赤褐色土の焼土が31×20cmの規模で広がっている。焼土の厚さは4cmほどである。焼土中及び焼土の周囲には少量の微小な炭化材が存在する。

焼土の周辺からは住居跡の存在を示す壁や柱穴は検出されなかった。周囲からは縄文時代中期の土器が少量出土しているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。(神敏明)

(8) 廃棄土

VII A 2 d 廃棄土 (付図、第38図、写真図版37)

本廃棄土は調査区中央より西側に存在する。VII A 2 c グリットの東半分からVII A 2 d の北半分、VII A 3 d グリットの南の一部にまたがる不整形の範囲において、VII層上に20cm大の黄褐色

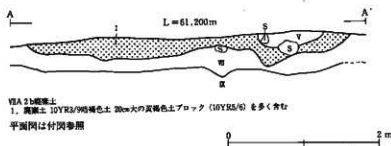
土のブロックを多く含むにごった暗褐色土層が堆積している。最大厚は32cmである。断面を観察すると明確な立ち上がりは認められず、住居など何らかの施設をつくった際の廃棄土が堆積した可能性がある。この暗褐色土層からは縄文土器が出土しており、前期の土器のほか中期後葉以後の土器も含まれる。

本廃棄土は縄文時代中期後葉以後に廃棄されたものと考えられる。

VIB 9 b 廃棄土 (付図)

本廃棄土は調査区中央の谷筋に位置する。VIB 9 b ポイントを中心に、VII層上に黄褐色土ブロックを多く含む濁った暗褐色土層が不整形に堆積している。調査の不手際のため断面で確認しなかったが、VII A 2 d 廃棄土より薄く、スコップで半分ぐらい掘り下げるとVII層に変わった。

VII A 2 d と 本廃棄土はVII A 2 d 廃棄土とよく似ており、出土層位も同じであることから縄文時代中期後葉以後に廃棄されたものと考えられる。(高橋 佐知子)



第38図 VII A 2 d 廃棄土

2. 古代

(1) 竪穴住居跡

II B 4 h 住居跡 (第39、40図、写真図版38、39)

本住居跡は、南側にやや離れてある調査区（以下飛び地という）の谷頭付近に存在する。西側には約1mほど離れてII B 5 h 炭置き場が、東側には約4mの地点にII C 3 a 炭窯が存在する。

検出は重機により盛り土を除去した後、T II層上面で炭を含む黒褐色土の広がりを確認したことによる。

平面形は南東の隅がややふくらむ隅丸方形を呈する。規模は東西方向の一边が4.8m、南北方向の一边が4.74mである。壁はT II層中にあり、床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁が最大で、52cm、東壁が20cmである。長軸はほぼ東西方向である。

埋土は12層に細分される。焼土や微細な炭化物を含む黒褐色土が主体で、壁際は風化花崗岩粒を含む壁の崩壊土である。

南東の隅とカマド前の床面から炭化材が検出された。カマド前の炭化材は直径6~10cmの丸材と思われ、残存状況は良好である。南東隅から出土した炭化材は断面を観察すると丸材を半分にしたものようで、残存状況は良好である。南東隅の炭化材の直下からは鉄滓が出土している。

貼り床は明瞭ではないが、断面を観察すると黒色土をブロック状に、粉状の炭をまばらに含む褐色土が貼られているようである。上面はほぼ平坦で固く締まっている。柱穴は検出されなかった。また、外柱と思われるような柱穴も見つかっていない。

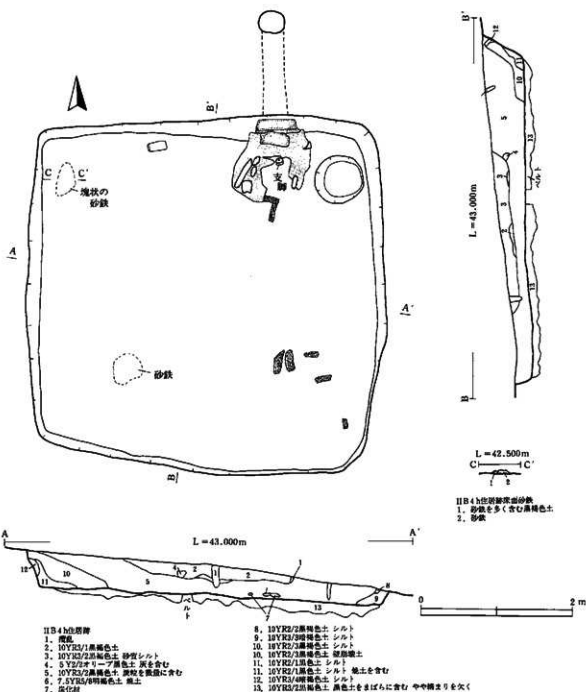
住居内土坑は北東隅から検出された。円形を呈し開口部の径は62cm、深さ34cmである。埋土は5層に細分され、上層は鉄滓を含む黒色土、下層は炭化物を含む黒褐色土が主体である。

カマドは北壁中央からやや東によった地点に構築されている。カマドの長軸方向はほぼ北向である。残存状態は良好である。花崗岩などの角礫を4~6cmほどの浅い掘り込みで埋めて袖石とし、さらに板状の角礫を斜めに押しつけるように立てかけ、それらの上に天井石を渡している。次に粘土で袖や天井を固めている。燃焼部はかまど構築土と同様の褐色粘土を底面全体に5~6cmの厚さに敷きつめている。焼土は4~5cmの厚さに堆積し、がりがりに固い。固い焼土の上にはソフトな焼土が堆積している。支脚は鑪の羽口を固い焼土の上と同じレベルに直立させているが、埋置したような置き方ではなかった。この支脚の位置はカマドと煙道の中軸線よりやや右によっている。また、ソフトな焼土の上から羽口の破片が出土したが、これも支脚として使用された可能性がある。

煙道は割り置き式である。煙道につながる部分は壁の一部が15~20cmほど張り出しているが、当初からこのように掘ったものか、上部が削平された結果こうなったものか判断としない。煙道の横断面は楕円形である。煙出しに向かって非常にゆるやかに上がり、煙出し部に至っていったん下がった後急な角度で立ち上がる。煙り出しの平面は楕円形で、径は42cmである。

出土遺物 (第68図、写真図版58)

床面の北西よりから塊状の砂鉄が、南壁中央よりから砂鉄が薄く層状に出土した。同じく床面から磁石(182)、土師器の甕(180、181)、羽口片(185など)、鉄滓が出土している。また、磁石



第39図 II B 4 h 住居跡(1)

埋土から須恵器壺小片、鉄滓、羽口片が得られている。床面から出土した木炭2本はクリと同定されている。

羽口 180、181は土師器カメで、底部から急に立ち上がり短い口縁部に至って外反する。ろくろは使用していない。本遺構からは坏は出土していない。183はカマドの袖材として出土した破片と輪積み痕の住居内土坑の前の床面から出土した破片を接合した土器である。外面に輪積み痕が明瞭に残る残る土器筒形の土器で、底は欠けている。熱を受け、器面は荒れる。184はカマドの支脚として用いられていた羽口である。182は砥石で、擦痕が明瞭に残る。

本遺構は出土した土師器、須恵器から平安時代の住居跡と考えられる。(高橋佐知子)

不明瞭な床 床面はV～VII層、IX層に形成されている。南側約3分の2は締まりがなく、床面と認識する
間い部分 のが困難であった。一方、北側の約3分の1は固く締まっており、この部分が他よりもやや高
入口状の い。東壁付近は2m×0.8mの範囲が台形状に床が高くなっており、カマドの天井石と同じよう
施設 な花崗岩の板状の礫(70×18cm)が出土した。高まりの両わきの壁際には柱穴が1基ずつ検出
された。楕円形の柱穴で、深さは40cmである。また、高まりの南端にはカマドの袖土と同様の
粘土が置いてあった。この施設は住居の入口の可能性もある。

壁はIV～VII層、IX層に形成され、やや外傾して立ち上がる。北壁の西寄りとカマドの西脇に
径15～18cm、深さ10～15cmの北に向かって穿たれた横穴が1基ずつ計2基検出された。南壁に
対応するような穴はない。

浅い柱穴 柱穴は前述の東壁壁際の2基の他に4基検出された。平面形は円形で、径は34～44cm、深さ
は18～23cmである。上屋を支える柱としてはたいへん浅く、位置もランダムであるように思わ
れる。外柱の可能性も考えたが、壁の外側からは検出されなかった。

周溝は東壁と南壁にめぐる。12～18cm幅の浅い溝である。

住居内土坑 住居内土坑は北東隅から検出された。平面は不整形な方形で、壁に添うように作られている。
断面は逆台形状を呈する。規模は1.42×1.38m、深さ58cmである。埋土は3層に細分され、上
層は花崗岩の角礫を含む黒褐色土、中層から下層は黄褐色土を含む黒褐色土が主体である。2
層からは板状の炭化材が出土している。

残存状況 カマドは北壁中央からやや東によった地点に構築されている。カマドの長軸方向はN-12°-
の良好な Eである。残存状況は良好で、袖土、天井石とも残っている。花崗岩の角礫を立てて袖土とし、
カマド それよりやや小型の礫をすき間を埋めるように設置して芯としている。天井石は壁際の袖の上
に乗る。褐色の粘土が天井石の上や袖の壁寄りに残存しており、粘土を貼りつけたものと考え
られる。

燃焼部には焼土が63×48cmの範囲に楕円形に形成されている。最大厚は12cmである。支脚と
認められるものは出土しなかった。煙道はゆるやかに上がり、煙出しに至って約45°の角度で立
ち上がる。煙出しの立ち上がりは70cmを測る。この部分の埋土には花崗岩の角礫が多く混入し
ており、煙り出しの地上の部分に使われた可能性もある。煙道内の埋土には焼土や粘土粒が多
く含まれている。

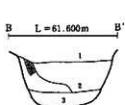
出土遺物 (第68、69図、写真図版58、59)

カマド焼土内から土師器甕の破片(193)が、カマドの埋土から土師器杯の破片(186、187、
189)、須恵器甕の破片(435)が出土した。また、住居内土坑の埋土から土師器高台付杯(188)、
ヘラ書きの 土師器甕破片(196)、須恵器甕、口縁部破片(201)が出土した。埋土からはヘラ書きのあるろ
小壺型 くる整形の土師器小型壺(440)のほか、土師器杯、甕の破片、須恵器甕の破片、羽口、鉄滓が
出土している。杯は底部が残るものはすべて回転糸切りである。187は糸切り後、調整を施して
いるが他は無調整である。189、192は内面黒色処理が施されていたと思われるが、おそらく火
を受けて、とんだのであろう。196はろくる整形の甕である。須恵器の破片はすべて甕である。

羽口 203は羽口で、指頭痕が明瞭に残る。溶着滓などの付着物は認められない。羽口として使用して
ク り
リ いないかもしれない。埋土から出土した木炭1本はクリと同定された。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から平安時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径	35×35	36×36	45×38	47×42	34×27	35×30
深さ	20	23	23	17	35	23

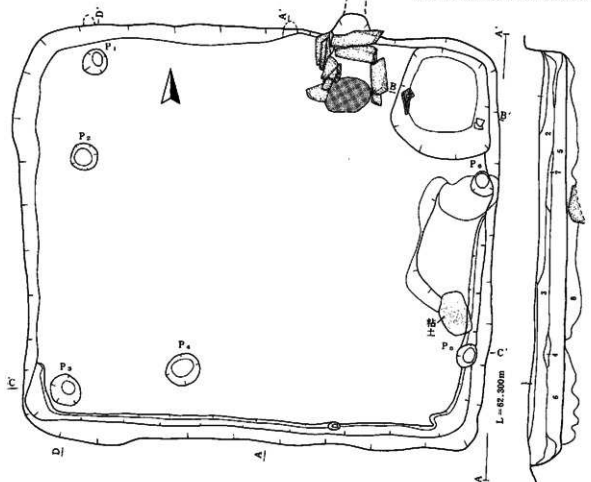


VIA 3 b住居跡

1. 7.5YR3/1黒褐色土 0.1-0.5cm大の白色粒を含む 焼土。炭を少量含む
2. 10YR2/1黒色土 0.1-0.7mm大の白色粒を少量含む
3. 2.5Y2/2黒褐色土 0.1-0.3mm大の白色粒。焼土粒をごくわずかに含む
4. 10YR2/2黒褐色 焼土粒を多く含む
5. 7.5YR1: 1/1黒色土 0.1-1.0mmの白色粒を多く含む
6. 10YR1: 7/1黒色土 0.1-0.7mmの白色粒を含む 焼土粒を多く含む
7. 10YR2/2黒色土 細かい焼土粒。0.5cm大の白色粒を少し含む
8. 10YR2/2黒褐色土 腐り跡が特徴なし。網入りややあり

VIA 3 b住居内土坑

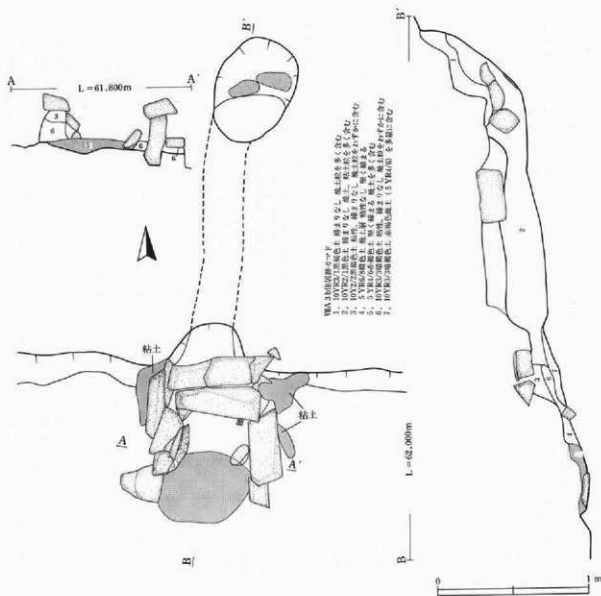
1. 2.5Y2/1黒褐色土 5cm大の炭を少し含む
2. 2.5Y2/2黒褐色土 焼土粒を含む
3. 10YR2/2黒褐色土 カマドの後の崩壊土とおもわれる焼土をブロック状に含む



C L = 62.100m

D L = 62.300m

第41回 VIIA 3 b住居跡(1)



第42図 VIIA 3 b 住居跡(2)、カマド

VIIA 1 d 住居跡 (第43、44図、写真図版41~43)

重複関係

本住居跡は調査区北西の尾根の頂部付近に位置している。北西側には縄文時代中期のVIIA 0 c 住居跡が、東側にはVIIA 1 e-1・2 土坑及びVIIA 1 e-1・2 炭竃が存在する。VIIA 1 e-1 炭竃とはカマドの煙出し部分が重複関係にあり、炭竃が煙出し部を載っているため構築時期は本住居跡の方が古い。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところVI層上面において黒褐色土の広がりを確認したことによる。

平面形は不整な隅丸長方形を呈する。規模は東西方向の辺が5.34m、南北方向の辺が4.77mである。壁はVI層中にあり、床面から急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が17.4cm、西壁が55.8cm、南壁が34.2cm、北壁が34.1cmである。

理土は29層に細分され、上位は炭化材を含むシルト質の黒色土が主体である。南壁から住居

跡中央部付近までの中位から下位にかけての埋土は、黒褐色土中に鉄滓が多量に含まれる。西壁際から中央部にかけては褐色土、黄褐色土、明褐色土等が見られる。下位は鉄滓・炭化材を含む褐色土が主体である。鉄滓を含む層は本住居の鍛冶炉から出た鉄滓が廃棄されたものであ
鉄 滓
る。床面はVI層中に形成され、ほぼ平坦で堅くしまっている。床面からは柱穴2基、住居内土坑7基、鍛冶炉1基が検出された。柱穴は床面中央から北西に寄った地点で検出され、楕円形の掘り方を有する。規模はP₁の開口部径が29×22cm、深さが19cmで、P₂の開口部径が28×21cm、7基の深さが18cmである。柱穴の径は確認できなかった。

住居内土坑

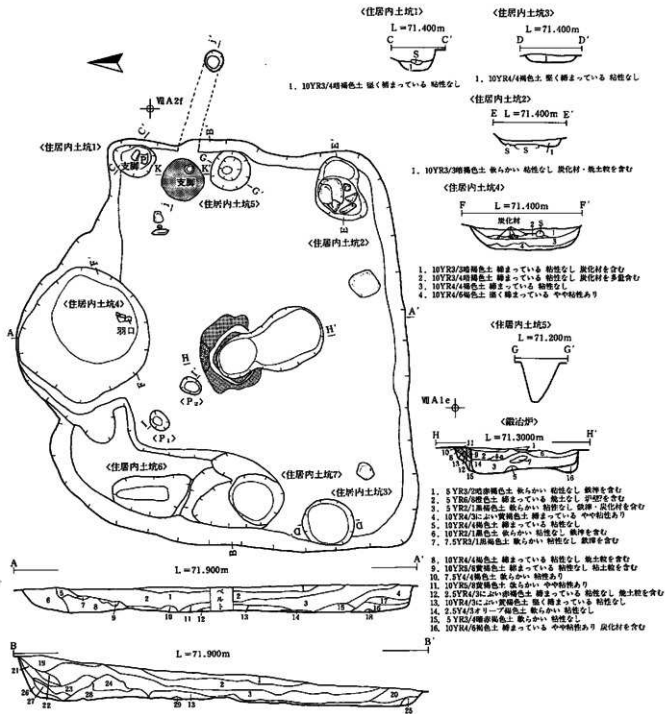
住居内土坑1は北東隅で検出され、平面形は不整な楕円形、断面形は皿状を呈する。規模は56×40cm、深さは12cmである。埋土は暗褐色のシルト質土で、埋土下位から支脚と土師器の破片が出土している。住居内土坑2は南西隅から検出され、平面形は不整形で、断面形は皿状を呈する。規模は84×59cm、深さは10cmを測る。埋土は暗褐色のシルト質土で、炭化材と焼土粒を少量含む。底部には10～41cmの大きさの礫が見られる。住居内土坑3は南西の壁際から検出され、平面形は円形、断面形は皿状を呈する。規模は61×69cm、深さは10cmである。埋土は褐色のシルト質土で堅くしまっている。住居内土坑4は北壁中央部付近で住居跡と重複するような形で検出されたが、住居跡の埋土観察用ベルトからは重複関係が見られず、住居跡に伴う土坑と考えられる。検出面は本住居跡の床面である。平面形は円形で、断面形は皿状を呈する。規模は本住居跡から検出された住居内土坑の中では最も大きく、開口部径が1.78×1.74m、深さは25cmを測る。埋土は4層に細分され、上位は炭化材を含む暗褐色土、下位は褐色のシルト質土が主体である。底部からは羽口が出土している。住居内土坑5は東壁際のカマド脇で検出され、平面形は円形、断面形はV字状を呈する。規模は開口部径が54×52cm、深さは52cmを測る。埋土はシルト質の暗褐色土が主体である。住居内土坑6は西壁際にあり、平面形が不整な楕円形、断面形が皿状を呈する。規模は開口部径が98×50cm、深さは18cmである。住居内土坑7は西壁際にあり、平面形は不整な円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径が70×66cm、深さが12cmを測る。埋土は住居内土坑6・7とも褐色のシルト質土である。

鍛冶炉は床面はほぼ中央付近で検出されている。平面形は円形の部分と楕円形の部分が合体し
鍛 冶 炉
た形をしており、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が1.48×0.74mで、深さは32cmである。埋土は黒褐色土が主体で、鉄滓が・羽口・炉壁が大量に含まれる。北側の円形部分の周囲には焼土粒と炭化材を含む褐色土と粘土質の黄褐色土が広がっている。

東壁中央からやや北に寄った地点に構築されている。カマドの長軸方向はE-20°-Sである。カマドの上部と左右の袖部は住居廃棄の際に破壊された可能性があり、残存状態は不良である。燃焼部の西側には袖部の芯材に使用されたと思われる礫が存在する。燃焼部には赤褐色の堅くしまった焼土が径55cmの規模で円形に存在し、断面は層厚20cmの浅い皿状になっている。燃焼部の東側の煙道部に近い地点から土製の支脚が出土している。煙道は朝り貫き式で煙出し部に支脚向かって若干下っている。煙道の長さは1.2mである。煙出し部はVII A e-1炭窯と重複関係にあり、煙出し部の上部が壊れているため規模形状等の詳細は不明であるが、残存部分からは平面形が円形と推定され、規模は径が25cm程と思われる。(神 敏明)

出土遺物 (第70図、写真図版59～61)

207はカマドから出土した支脚である。208もカマドの支脚と考えられる。内外面ともに輪積



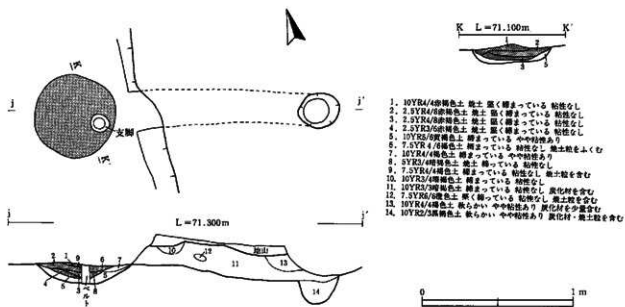
1. 10YR2/1黒色土 散らかい 粘性なし 炭化材を含む
2. 10YR1.5/1黒色土 散らかい 粘性なし 炭化材を含む
3. 10YR2/3暗褐色土 粘らかい 粘性なし 炭化材を含む
4. 10YR3/3暗褐色土 粘まっている 粘性なし 炭化材を含む
5. 10YR3/3暗褐色土 散らかい やや粘性あり 炭化材を含む
6. 10YR4/4褐色土 粘く 粘まっている やや粘性あり 炭化材を含む
7. 10YR2/3暗褐色土 粘まっている やや粘性あり
8. 10YR3/3暗褐色土 粘まっている 炭層を多く含む 炭化材を含む
9. 10YR2/3暗褐色土 粘まっている 粘性なし
10. 10YR2/3暗褐色土 散らかい 粘性なし 炭層を含む
11. 10YR3/3暗褐色土 散らかい やや粘性あり 炭層を多く含む
12. 10YR3/3暗褐色土 粘まっている やや粘性ありなし 炭層を含む
13. 10YR4/4褐色土 粘まっている やや粘性あり 炭層・炭化材を含む
14. 10YR4/4褐色土 散らかい やや粘性あり
15. 10YR6/6暗褐色土 粘く 粘まっている 粘性あり

16. 10YR2/4黄褐色土 粘まっている やや粘性あり 炭化材を含む
17. 10YR3/3暗褐色土 散らかい やや粘性なし
18. 10YR5/8黄褐色土 粘く 粘まっている 粘性なし
19. 10YR5/3に多い黄褐色土 散らかい 粘性なし 炭化材を含む
20. 10YR3/3暗褐色土 粘まっている 粘性なし 炭化材を含む
21. 10YR5/6黄褐色土 散らかい 粘性なし
22. 10YR5/4に多い黄褐色土 散らかい 粘性なし
23. 10YR3/3暗褐色土 粘まっている 粘性なし
24. 10YR4/4褐色土 粘まっている 粘性なし 炭化材を含む
25. 10YR5/6黄褐色土 粘まっている やや粘性あり
26. 7.5YR5/6暗褐色土 粘まっている やや粘性あり
27. 10YR4/4褐色土 粘まっている やや粘性あり
28. 7.5YR4/6暗褐色土 粘く 粘まっている やや粘性あり 炭化材を多量含む
29. 7.5YR4/4褐色土 粘まっている やや粘性あり 炭化材を含む

No.	P ₁	P ₂
箱	28×22	28×21
罫	19	18



第43図 ⅣA1d住居跡(1)



第44図 VIIA 1 d住居跡(2)、カマド

み痕が明瞭に残り、火熱を受けて色が変化している。住居内の土坑埋土から出土した。213、214は鍛冶炉前底部の上面から出土したろくろ整形の壁である。住居内土坑から出土した217はろくろを使用していない壁で、外面に輪積み痕が明瞭である。坏(205、206)は内面に黒色処理が施され、回転糸切り無調整である。

210~212、215、218は羽口片である。215は内面まで熱で溶解した破片。210~212は外面のナデが明瞭に残る。装着角度はわかるもので、28~32である。

本遺構から出土した鉄滓は碗形滓及び船状の形状のものがある。230、231は鉄滓の上面が楕円形、湾曲する碗形滓の様に密で、下面が船状を呈している。操業の過程によるものか。(高橋佐知子) 船状滓
 本遺構は出土遺物及び遺構の形状から平安時代の住居兼工房跡と推定される。(神敏明) 工房

(2)土坑

VIIA 1 e-1 土坑 (第45図、写真図版43)

本遺構は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、西側にはVIIA 1 d住居跡が存在する。VIIA 重複関係 1 e-2 土坑及びVIIA 1 e-1・2 炭窯とは重複関係にあり、新旧関係は本土坑が重複するすべての遺構を載っており、構築時期が新しい。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、VI層上面において黒褐色土の広がりを確認したことによる。

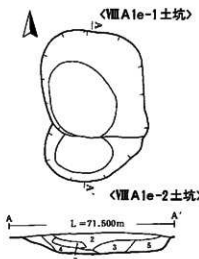
開口部の平面形は隅丸方形で、底部の平面形は不整な楕円形を呈するが、南壁側は重複関係により明確ではない。断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が1.44×1.33m、底部径が1.02×0.85m、深さは28cmである。壁はVI層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はVI層中に形成されほぼ平坦でしまっている。

埋土は4層に細分され、炭化材を含む黒褐色のシルト質土が主体である。(神敏明)

出土遺物 (第66図、写真図版57)

埋土から縄文時代中期の土器片が出土しているが流れ込みと考えられる。

本遺構は重複関係から平安時代に属すると考えられる。(高橋佐知子)



1. ⅧYR3/2暗褐色土 ぬらかい 粘性なし 炭化材を含む
2. ⅧYR3/1黒褐色土 ぬらかい 粘性なし 炭化材を含む
3. ⅧYR2/2中褐色土 ぬらかい 粘性なし 炭化材を含む
4. ⅧYR2/3暗褐色土 ぬらかい 粘性なし 炭化材を含む
5. ⅧYR2/4暗褐色土 締っている やや粘性あり 炭化材を含む



第45図 土坑（古代）

ⅧA1e-2 土坑（第45図、写真図版43）

本遺構は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、西側にはⅧA1d住居跡が存在する。ⅧA1e-1土坑及びⅧA1e-2炭窯とは重複関係にある。新旧関係はⅧA1e-1土坑により北側を截られており、ⅧA1e-1土坑より古く、ⅧA1e-2炭窯の西側を截るため炭窯より新しい。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところⅧ層上面においてⅧA1e-1土坑と共に黒褐色土の広がりによって確認したものである。

平面形は重複関係にあるため不明な点が多いが、残存部分からは楕円形と推定され、断面形は浅い皿状と考えられる。規模は開口部の残存最大径が1.27m、底部残存最大径が0.75m、深さは18cmである。壁はⅧ層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はⅧ層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。

埋土は少量の微小な炭化材を含む暗褐色土の単層である。

（神 敏明）

出土遺物はない。

本遺構は重複関係から平安時代に属すると考えられる。

（高橋佐知子）

(3)製鉄炉群

ⅡC2e製鉄炉群（第46～51、71図、写真図版44～47、60、62～64）

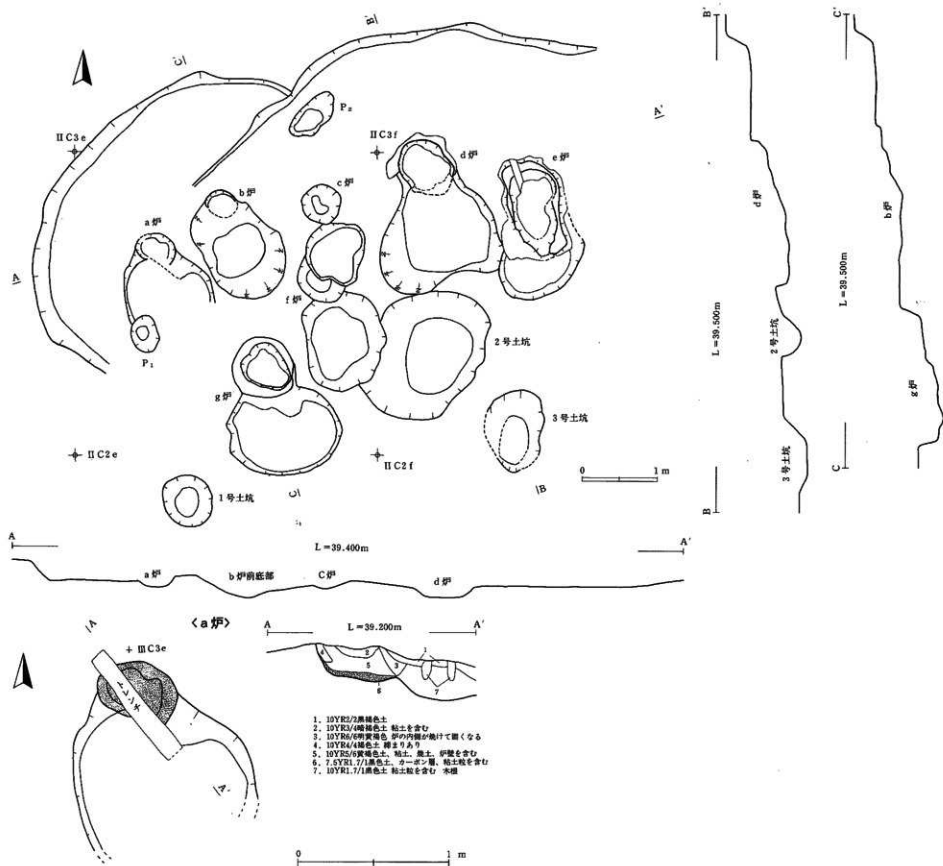
本遺構群は飛び地の緩斜面に立地している。炉群の周辺には、北側を除いて炭窯が多数存在する。

検出はⅡⅡ層上面でおびただしい焼土、鉄滓、炉壁片の大きな広がりを確認したことによる。

平坦面の造成 これらの焼土等を少しずつ除去したところ、斜面の上方を整穴状に掘り込んで平坦面を作り、複数の炉を配置していることがわかった。平坦面は調査が進むにつれて、西側にももう1基存在することを確認したが、当初は1基だけだと認識していたので、新旧関係とどの炉が西側の平坦面に属するかを確認することができなかった。

新旧関係が不明 また、炉は崩れたあるいは崩された炉壁が炉の周辺に集中して広がっていたこともあり、鉄滓や炉壁を取り除く段階で、どこまで取り除けば検出面、あるいは使用面が出るのか非常に迷いながらの調査であった。したがって、使用面の検出が当初はきちんとできなかったため、土層観察用のベルトを残さなかった箇所では炉同士の新旧関係も不明な箇所がある。加えて、この段階の途中で本遺構の調査者が交代したため、前任者の認識とのずれなどが生じ、遺構の把握に手間取った。

さらに、調査段階では本遺跡の炉がどのような形態であるのか識別できなかったため、すべての土坑状の掘り込みや重複する使用面あるいは調査当時使用面と思われたカーボン層ごとに遺構名の炉の番号をつけて調査した。本報告ではそれらを整理し、遺構名をつけ直している。**つけ替え** 製鉄炉群は7基の炉と、土坑3基、ごく浅い小型の小穴が2基で構成される。いずれの平坦



第46图 II C 2 e 製鉄炉群(1)、a 炉

面とも斜面上方のTII層を掘り込んでおり、斜面下方の壁は確認できない。おそらく住居のような堅穴ではなく、作業のための平坦面を造成するのが目的と考えられる。東側の平坦面には壁際に小穴P1、P2が存在するが、P1が深さ5.5cm、P2は7.5cmとごく浅いので上層構造を支えるような柱穴とは考えにくい。壁高は最も深いところで、34cmを測る。一部西側平坦面と接する部分で壁がとぎれている。西側の平坦面には小穴は存在しない。壁高は最も深いところで31cmを測る。この平坦面の西側に重複してIIC2d-2炭窯が存在するが、新旧関係は確認できなかった。

a 炉 (第46図、写真図版44、64)

最も西側に位置する。東側の平坦面の壁際から西側の平坦面にかけて構築されている。西側の平坦面に属している可能性がある。

本遺構は楕円形の炉の部分とそれより斜面下方の前庭部とで構成されている。平面は炉の部分がやや突出した不整形で、斜面下方の前庭部の壁は検出されなかった。規模は炉が53×37cm、深さ約25cm、前庭部は東西方向の径が120cm、深さ26cmである。炉は破壊されており、壁の立ち上がりは残存しない。炉の内部には最下層にカーボン層があり、それより上の層には粘土、焼土、炉壁が大量に含まれている。底部には焼け面は検出されなかったが、前庭部との境にある3層の炉側は焼けて固く締まっている。3層は動いた層で、炉壁が崩落したものと考えられる。前庭部には粘土粒を含む黒色土が堆積していた。

鉄滓が0.8kg出土した。前庭部から出土した木炭はナラと特定されている。

ナラ

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

b 炉 (第47図、写真図版44、62)

本遺構は東側の掘り込みの西寄りの壁際に位置する。西側にはa炉、東側にはc炉、f炉が存在する。本遺構は楕円形の土坑の北東隅に炉が構築されている。前庭部と炉の区画は明瞭でないが、炉の最下層のカーボン層が壁際に一部明瞭に残存しており、推定径は少なくとも40cm程度と思われる。炉を含めた土坑の規模は151×105cmで、深さは25cmを測る。炉壁の立ち上がり及び前庭部との境は残存していない。

炉の部分は最下層にカーボン層があり、その上に厚さ2～4cmの黄褐色土が存在する。この層は上面が焼けている。埋土は炭化物、鉄滓を多く含む。

前庭部は最下層に鉄滓を多量に含み、炉に近い部分には炉から流れ出した鉄滓が溜っていた。流れ出した鉄滓は全部で8.7kg出土した。前庭部埋土中層には炉壁を多く含む。羽口片も出土している。また、本遺構の南脇から砂鉄が90g出土した。

鉄滓
砂鉄の
出土

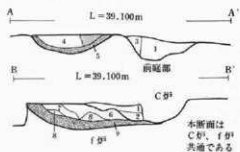
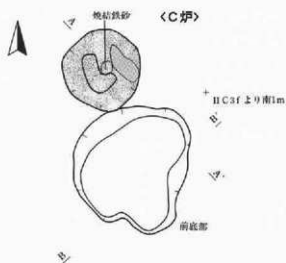
本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

c 炉 (第47図、写真図版45、63、64)

本遺構はb号炉の東側に位置する。f号炉と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。円形の炉と楕円形の前庭部で構成されており、平面形は8の字形を呈している。

8の字形

炉は径が55×53cm、深さ15cmを測る。前庭部は85×85cm、深さ15cmである。

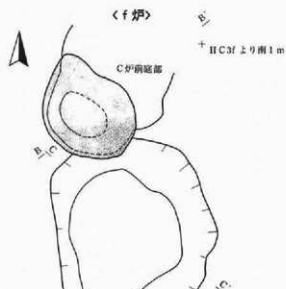


c^{3f}

1. 10YR2/4暗褐色土 焼土が混を含む 粘りなし 粘りなし
2. 10YR2/4暗褐色土 焼土を多く含む
3. 10YR2/1黒色土 カーボンを含む
4. 5YR2/2暗褐色土 焼土 粘土を多く含む
5. 7.5YR2/1黒色土 カーボン層 灰色の砂鉄を含む 粘性 粘りなし

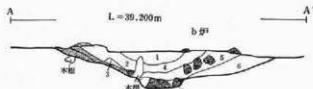
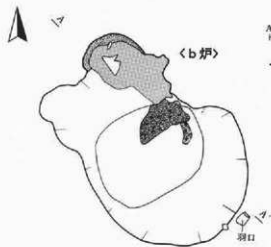
f^{3f}

6. 10YR2/6暗褐色土 焼土 粘土を非常に多く含む
7. 10YR2/6暗褐色土 中粒 粘土 焼土を多く含む
8. 10YR2/6暗褐色土 カーボンを多く含む
9. 7.5YR2/1黒色土 カーボン層 焼土 粘土を含む



f^{3f}

1. 10YR2/4暗褐色土 鉄屑を含む
2. 10YR2/1灰白色土 燧石層 粘りなし 堅くしめる
3. 7.5YR1.7/1黒色土 カーボン 堅くしめる
4. 7.5YR2/6暗褐色土 粘土層 粘り強い
5. 7.5YR2/6暗褐色土 粘土層 堅くしめる
6. 7.5YR2/4暗褐色土 粘りなし
7. 10YR2/6暗褐色土 粘土層 粘りあり
8. 7.5YR1.7/1黒色土 粘土を多く含む
9. 10YR2/1黒色土 粘土を多く含む
10. 10YR2/1黒色土 粘土結 鉄屑を含む
11. 10YR1.7/1黒色土 細かい粘土 灰を含む 粘りややあり



b^{3f}

1. 10YR4/4暗褐色土 焼土を含む
2. 10YR2/6暗褐色土 カーボン 鉄屑を含む
3. 7.5YR2/8 明褐色土 燧石層
4. 10YR2/2暗褐色土 中粒片を含む
5. 7.5YR2/3暗褐色土 中粒片を含む
6. 7.5YR2/1黒色土 灰土 粘土をわずかに含む



第47図 II C 2 e 製鉄炉群(2) b炉、c炉、f炉

炉壁の立ち上がりは残存しない。最下層にはカーボンの層があり、その上の壁は焼けて一部が焼土化している。炉の中央には焼結砂鉄が見られる。埋土には、焼土、炉壁、鉄滓が含まれる。焼結砂鉄

前庭部からは鉄滓が出土している。また、より炉に近い部分からはカーボンも多く検出された。鉄滓は前庭部より1.5kg出土した。

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

d炉（第48図、写真図版45）

本遺構は東側の掘り込みの中央よりやや東寄りに位置する。東にはe炉、西にはc炉が存在する。e炉と本遺構の前庭部は一部重複しているが、新旧関係は明らかにできなかった。楕円形を呈する炉と、不整な前庭部で構成されており、平面形はいびつな8の字形である。8の字形

炉壁の立ち上がりは残存していない。規模は88×75cm、深さ32cmである。炉の底面には2層のカーボン層が認められることから、本遺構は2度にわたって使用された可能性がある。上位のカーボン層の上には上面に火熱を受け、薄く焼土化した黄褐色土及び黒褐色土があり、最終の操業時の使用面と考えられる。下位のカーボン層の上にはふい黄褐色土がのっている。2度の使用

前庭部の規模は160×115cm、深さ47cmで、炉の底面よりも深く掘り込まれている。埋土からは鉄滓が多く検出された。埋土上層の炉に近い部分からは崩れたような黄褐色の粘土が検出された。また、崩れた炉壁状の焼土もこの付近に広がっている。

出土遺物（第71図、写真図版60、62～64）

出土した鉄滓は56.0kgである。本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

e炉（第48図、写真図版45）

本遺構は東側の掘り込みの最も東寄りに位置している。西にd炉が存在し前庭部の一部が重複関係にあるが、新旧を明らかにできなかった。重複関係は不明

本遺構は長円形の炉と、楕円形の前庭部とで構成されており、平面形は南北に長い不整形である。

炉の規模は140×80cm、深さ22cmで、壁の立ち上がりがわずかに残存している。それぞれ北壁4cm、東壁8cm、西壁7cmである。炉の底部にはカーボン層があり、北壁と南よりの壁の一部ではその上に固く締まった焼土層がのっている。炉の中央では焼土層は形成されない。炉内からは崩壊した炉壁が多く出土した。また、炉の周辺からも炉壁が出土している。

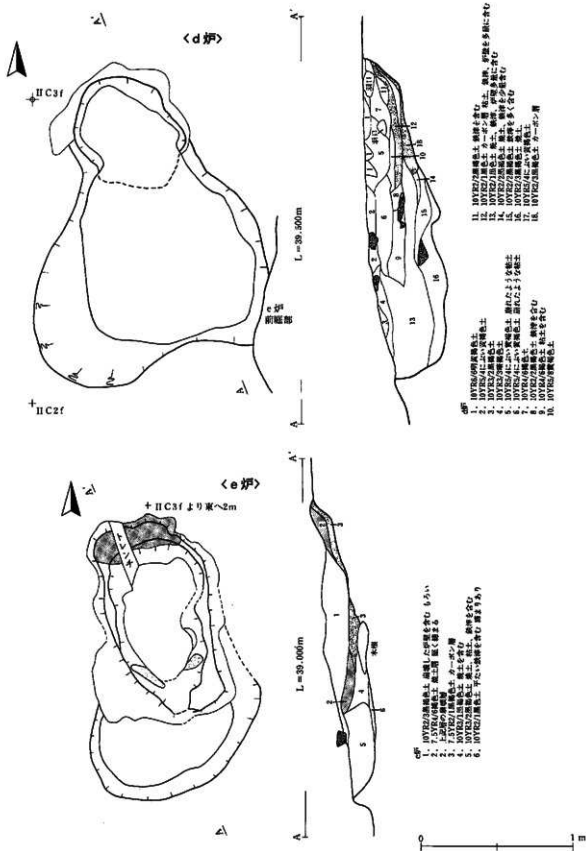
前庭部の規模は122×75cm、深さ23cmである。底部は炉の底面よりなだらかに低くなっている。

埋土上層には崩壊した炉壁を多く含み、その下に崩れた焼土層、焼土、粘土、鉄滓を多く含む黒褐色土が堆積している。底部には平たい、炉から流出した鉄滓が溜っている。流出した鉄滓

出土遺物（第71図、写真図版60、62）

出土した鉄滓は33.1kgである。前庭部から出土した木炭のうち1点はカツラと同定された。埋土から羽口も出土している。

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。



第48図 II C 2 ● 製鉄炉群 (3) d 炉、e 炉

f 炉 (第47図、写真図版46、62、63)

本遺構は4号炉の前庭部に切れ、本遺構の前庭部が2号土坑を切っている。西側にはg炉、東側にはe炉が存在する。

楕円形の炉と、前庭部で構成されており、平面形は8の字形を呈している。

8の字形

炉はc炉の前庭部によって約半分を破壊されているため、全容は明らかではないが、規模は75×57cm、深さ16cmを測る。前庭部は130×128cm、深さ45cmである。

炉壁の立ち上がりは残存しない。再下層には焼土や粘土を含むカーボンの層があるが、その上に焼土層は検出されなかった。炉内の埋土には焼土、粘土、炉壁が非常に多く含まれている。

前庭部の埋土は下層が粘土や焼土、鉄滓を含む黒色土が主体であるが、中層には黄褐色の粘土が堆積している。また、上層は焼土や炉壁と考えられる締まった焼土層、カーボン層、還元層が見られる。おそらく、上記の黄褐色粘土層は炉壁の補強や羽口を差し込む時の固定に使用された粘土と考えられる。また、炉壁は壊されて、前庭部に入ったものであろう。

粘土の堆積

鉄滓は炉内から1.5kg、前庭部から3.7kg出土した。

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

g 炉 (第49図、写真図版46)

本遺構は検出された製鉄炉の中で、最も南側に位置する。北東側にはf炉が、南西側には1号土坑が存在する。

本遺構は円形の炉と斜面下方の長円形の前庭部で構成されており、平面形は8の字形を呈する。

8の字形

炉の規模は83×83cm、深さ20cmである。底部は少し凹凸があるが、壁は外傾して立ち上がる。

炉壁の立ち上がりは残存していないが、前庭部との境の部分は残っている。厚さは16～30cmで炉内部に面した部分は還元され、青味がかっている。境の壁の下部は、上下2層に別れた焼土層があり、この部分が掻き出し口と考えられる。熱い鉄滓や炭を掻き出した際に、焼土化したのではないだろうか。炉の底面と壁にはカーボン層があり、その上に焼土層、還元層の順に堆積している。還元層と焼土層は固く締まっている。埋土には粘土、焼土、カーボン、及び鉄滓が多く含まれる。また、埋土の最下層からは砂鉄が多く検出された。

還元部分

砂鉄の出土

前庭部は152×104cm、深さ44cmで、炉よりも深く掘り込まれる。底部はやや凹凸があり、壁も、段を持って立ち上がる。炉に近い底部には最下層に焼土を含んだ黒色土が堆積し、その上に還元された砂鉄の層、焼土の層が堆積する。

出土遺物 (第71図、写真図版60、62、63)

埋土底部や中層からは鉄滓が多く出土している。また、前庭部から羽口片も出土した。鉄滓は56.5kg出土した。

本遺構は形態や出土した鉄滓から製鉄炉と考えられる。

1号土坑 (第49図、写真図版46)

本遺構は工房の南西に位置する。北東には11号炉が存在する。平面形は楕円形で、規模は82×72cm、深さ17cmである。調査時には、本遺跡の製鉄炉の形態がつかめていなかったため、底面

にカーボン層があること、埋土に焼土、羽口片を含んでいることから、炉として調査したが、カーボン層に締まりがないこと、火熱を受けたような形跡が明確でないこと、炉に必ず伴うらしい前庭部がないことから土坑として報告する。

底は内湾しており、壁もやや内湾気味にゆるやかに立ち上がる。埋土は2層に別れ、上層は焼土、羽口片を含んだ締まりのない褐色土である。下層は炭片を含むカーボン層で、締まりはない。用途は不明であるが、検出された位置から、炉に対する送風装置を設置するための穴である可能性はないと考える。

2号土坑（第49図、写真図版46）

本遺構は工房の南寄りに位置する。西側を13号土坑の前庭部に切られている。北に5号炉、南東に3号土坑が存在する。平面形は楕円形で、規模は192×150cm、深さ30cmである。本遺構には粘土や焼土、鉄滓が含まれることと土坑内の南東よりに炉壁と思われる焼土層、粘土層、還元層が見られたことから、当初は二つの炉の切り合いとして調査した。しかし、炉底と思われる面がなく、炉壁がまわらないこと、当初前庭部と考えた3号土坑内に炉壁や鉄滓、焼土が一切含まれていないことなどから、大型の土坑であり、前述の炉壁は原位置から動いていて、本遺構内に投入されたものと考えた方が適当と思われる。

底は凹凸があり、壁はやや内湾して立ち上がる。埋土は11層に細分される。土坑の斜面下方より投入された炉壁がある。また、斜面上方には崩れた粘土や焼土を含む黒褐色土が堆積している。

出土遺物（第71図、写真図版60、62～64）

出土した鉄滓は21.4kgである。埋土から羽口が出土している。

本遺構の用途は不明であるが、結果として、炉壁や粘土、鉄滓が廃棄されたと考えられる。

3号土坑（第49図）

本遺構は工房の最も南東に位置する。北西には2号土坑が存在する。平面形は楕円形で、規模は108×80（推定値）cm、深さ24cmである。底面はやや内湾し、壁は内湾気味にゆるやかに立ち上がる。

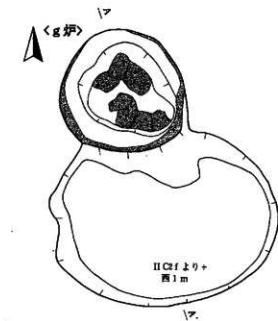
埋土は炭を含んだ黒色土で、単層である。焼土や炉壁、鉄滓を全く含まない点が、他の土坑と異なる。

焼土や砂鉄を含まない

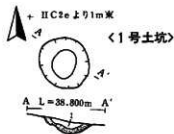
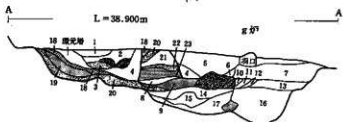
出土遺物

鉄滓（第50図、写真図版62～64）

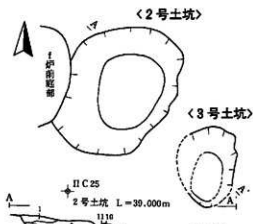
本製鉄炉群の平坦面の埋土から出土した鉄滓は187.6kgで、個々の炉や土坑の埋土から出土した鉄滓183.2kgを加えると370.8kgに及ぶ。第49図は製鉄炉群の位置する区域に50cmのメッシュを組み、出土状況を表した図である。炉や土坑の埋土に含まれていた鉄滓は除いて示した。遺構にかかっている部分は遺構検出面より上で出土した鉄滓の量である。なお、このような鉄滓の取り上げを行ったのは平成6年8月2日以降調査終了時までであるので、それ以前に出土した鉄滓については不明であることをお断りしておく。上段Aは鉄滓の総量を示す。最も多くの



- 編
- 7.5YR2/2黒褐色土
 - 10YR4/4褐色土 焼土、粘土を多く含む
 - 7.5YR1.7/1黒色土 カーボン層
 - 炉底の土、鉄屑を多く含む
 - 7.5YR4/4褐色土 焼土、粘土、硝石、鉄屑を多く含む
 - 7.5YR2/2黒褐色土 炭を多く含む
 - 7.5YR2/1黒色土 鉄屑、粘土を少し含む 粘性ややみり 硝まりなし
 - 7.5YR4/4褐色土 鉄屑を含む
 - 5.YR3/6暗赤褐色土 焼けた粘土層 粘性なし 硝まりあり 下層還元
 - 10YR1.7/1黒色土 粘土を含む
 - 7.5YR3/3暗褐色土 粘土層
 - 7.5YR3/2黒褐色土 粘土の層れた層
 - 7.5YR1.7/1黒色土 粘土層を含む 硝まりなし
 - 10YR2/1黒色土 還元された砂を含む
 - 10YR1.7/1褐色土 焼土を含む
 - 7.5YR3/1黒褐色土 焼土、粘土、鉄屑を多く含む
 - 7.5YR2/1黒色土 炭を多く含む
 - 10YR5/6黄褐色土 硝石層 硝まりあり
 - 10YR5/6黄褐色土 粘土が粘く焼けている 表面が還元され青味がかる
 - 7.5YR2/2黒褐色土
 - 7.5YR2/2黒褐色土 カーボン層
 - 7.5YR5/8暗褐色土 焼土層 硝まりなし



- 1号土坑
- 7.5YR4/6褐色土 焼土、硝石層を含む
 - 7.5YR1.7/1黒色土 カーボン層



- 2号土坑
- 10YR2/1黒色土
 - 10YR4/2によい黄褐色土 焼土、カーボンを含む
 - 10YR2/2黒褐色土 焼土を含む
 - 10YR4/3によい黄褐色土 鉄屑を含む
 - 10YR2/2黒褐色土 白色の還元土を含む
 - 10YR5/6黄褐色土 層れた粘土
 - 10YR2/4暗褐色土 層れた炉底を含む
 - 10YR2/1黒色土
 - 10YR4/3によい黄褐色土 焼土、カーボンを含む
 - 10YR2/2黒褐色土 焼土を含む
 - 10YR4/3によい黄褐色土 鉄屑を含む

- 3号土坑
- 7.5YR1.7/1黒色土 炭を含む



第49図 II C 2 ● 製鉄炉群(4) 炉、1～3号土坑

鉄滓はg炉付近に集中しているが、このことはg炉がもっとも斜面の下位にあることとも関係しているように思われる。下段イはそのうち磁着する鉄滓のみを示している。全体的な傾向はアと変わらないが、d炉と2号土坑との境付近にも多いのが注目される。

また、ア、イともにe炉の東1m付近に他とやや離れて鉄滓の出土が見られる。

鉄滓の種類は鍛冶滓と考えられるもの、製錬滓（炉内滓、流出滓）がある。写真図版62～64は焼結砂鉄、鉄滓、鉄塊系遺物のいくつかを掲載したものである。257、258は棒状の流出孔滓である。流出滓はほとんどが磁着度が弱く灰色を呈しており、メタル反応はない。鍛冶滓と考えられるものは褐色、または橙色を呈する。磁着度は高くメタル反応もある。底面に白色粒が付着する。本遺構では、鍛造剥片が見られないことから、製鉄と大鍛冶的な作業を行った可能性はある。本遺構出土の鉄滓で磁着するものは第11、13表に磁着度及びメタル反応を示した。

メタル反応

鉄塊系遺物（第11、13表）

遺構内で得られた鉄滓の中からメタル反応を示したものを鉄塊系遺物とした。245～247はその中から掲載したものである。褐色～暗赤褐色、褐灰色を呈する。磁着度は高い。

砂鉄（第51図）

本遺構の炉内及び周辺から砂鉄が出土している。第50図のグラフは各炉、及び地点ごとの砂鉄の出土量を示している。スクリーントーンの部分は焼結した砂鉄で、そのほかは生砂鉄である。これらの砂鉄は調査中に砂鉄が肉眼で認められた時点で、土ごと取り上げ、バケツに水とともに入れて汚れた上澄みを捨てる作業を何回か繰り返して、水が濁らなくなってから乾燥させて、磁着し、回収した。

a炉を除くすべての炉から砂鉄が出土している。特にd炉、e炉、g炉が突出して、1,000gを超えており、焼結した砂鉄も300g前後と共通している。また、e炉の東1m付近から2,445gもの砂鉄が出土していることが注目される。この地点からは鉄滓も他の集中部分からやや離れて出土しており、炉に砂鉄を投入したり、取り出した鉄滓を置いた作業場所と考えられる。

（高橋佐知子）

(4)炭窯

IC0●炭窯（第52図、写真図版48）

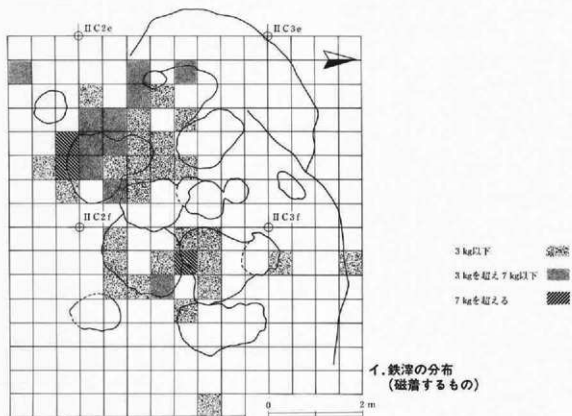
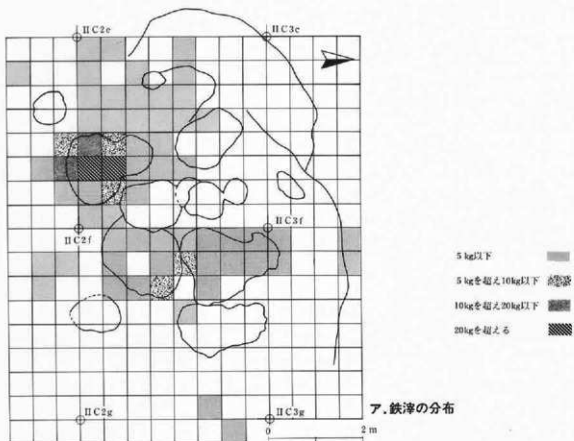
本遺構はIC区の沢沿いの緩斜面に位置する。4m北には2C2●製鉄工房が、6m東にはIC0●炭窯が存在する。検出はTII層下面において、遺構の東壁の炭を多く含んだ黒色土の広がりを確認したことによるが、掘り込み面はII層上面にある。平面では遺構の範囲が明確ではなく、ベルトを残して掘り下げて、壁の立ち上がりを確認した。平面形は楕円形である。規模は開口部が 2.76×1.96 m、深さが50cmである。長軸方向はほぼ東西方向である。

壁はTII中に形成され、わずかに外傾して急に立ちあがる。東壁は斜面下方にあり、14cm程度しか残っていない。底部はTII層中にあり、平坦で水平である。底部の中心からやや西寄りに

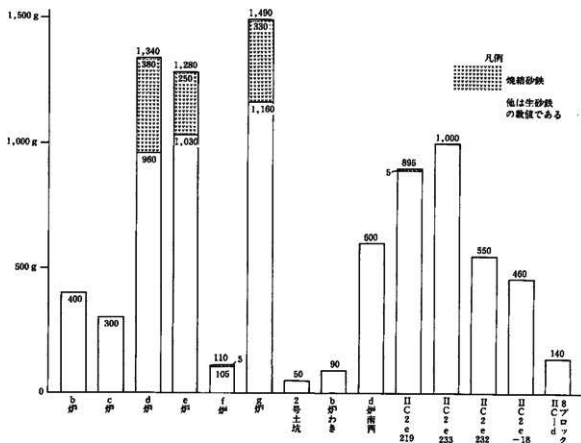
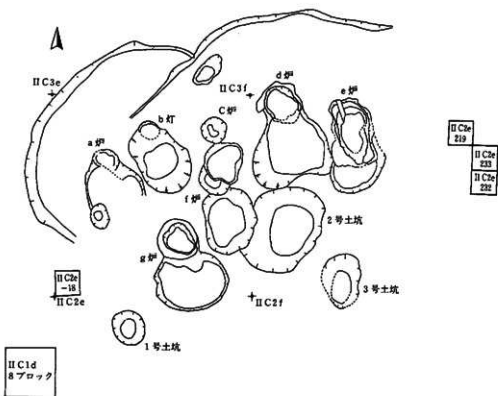
焼土層

は焼土が堆積し、最大の厚さは22cmを測る。焼土の下は炭片の層である。

埋土は3層に細分され、多量の炭化物和焼土を少量含む黒色土が主体である。



第50図 II C 2 e 製鉄伊勢鉄滓出土状況



第51図 II C 2 ●製鉄炉群砂鉄出土状況

出土遺物 (第10、12表)

西南の底部から炭化材、斜面上方の西壁付近の埋土から多くの鉄滓、羽口破片、炉壁破片が出土した。これらの鉄滓、羽口はII C 2 e 製鉄工房で産出したり、使用されたりしたものと考えられる。炉壁は同工房のいずれかの炉のものであろう。羽口片はいずれも小片で図化には至らなかった。鉄滓の総量は16.51kgである。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた1点はクリと同定されている。

以上のことから、本遺構はII C 2 e 製鉄炉群と関連の深い炭窯である。(高橋佐知子)

IC0g 炭窯 (第53図、写真図版48)

本遺構はI C 区の沢沿いの緩斜面に位置する。本遺構の2m西にはII C 1 f 炭窯が存在する。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、II層中で、炭を多く含む黒色土の長円形の広がりをとらえたことによる。当初は2基の切り合いと考えたが、断面観察によって1基であることがわかった。

平面形はゆがんだ長円形で、断面は浅い皿状を呈する。規模は開口部で4.84×1.46m、深さが26cmである。長軸方向はN-20°-Wである。

壁はT II層中にあり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。底部はT II層中に形成され、斜面下方にわずかに傾斜するものの平坦である。底面に焼土は形成されない。

埋土は炭化物が多量に混入する黒色土で単層である。炭化物は最大のもので径5cmで、多量に混入する部分と少量の部分があるが、分層することはできない。

出土遺物

埋土から鉄滓、羽口破片、炉壁が出土している。鉄滓は流出滓である。羽口はいずれも小片で図化、計測に至らなかった。これらのことから本遺構は斜面上方に存在する2 C 2 e 製鉄炉群に関連する遺構と考えられる。(高橋佐知子)

II C 1 c 炭窯 (第52図、写真図版48)

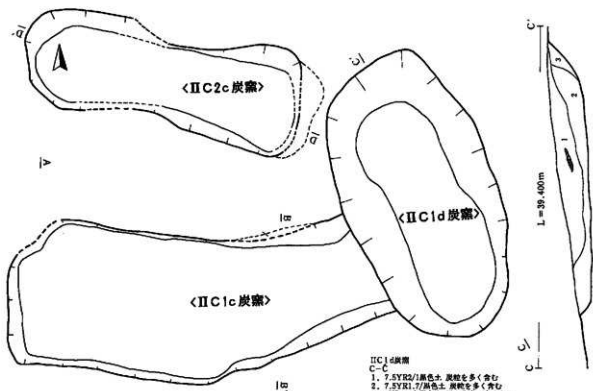
本遺構はII C 区の沢沿いの緩斜面に位置する。遺構の東側はII C 1 d 炭窯に切られている。約1.5m北にはII C 2 c 炭窯が存在する。検出はT II層中で、炭や焼土粒の広がりをとらえたがT II層上面から水が湧く場所ということもあって、平面形を確認できず、ペルトを残して底面の炭の層を造って壁の立ち上がりを確認した。その際、1基であると想定したため、東西方向のペルトを残さなかった。掘り上がった時の平面形はややくの字形に屈曲しており、2基の炭窯であった可能性がある。

平面形は前述のとおり、くの字形に屈曲した隅丸の長方形である。規模は開口部で、4.91(残存部)×1.93m、深さは西壁で約41cmである。本遺構の長軸は屈曲しているが、東西に伸びている。壁はT II層中にあり、直に立ち上がる。北壁は、立ち上がりははっきりしない。底部は北壁が平坦でやや南東に傾斜する。底面の一部には焼土が堆積している。不明跡

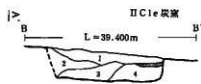
埋土は4層に細分される。最下層は炭を多く含む黒色土である。

出土遺物 (第10、12表)

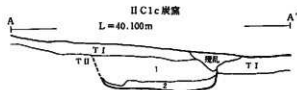
埋土から、羽口破片、炉壁破片、鉄滓が出土した。羽口片はいずれも小片で図化には至らな



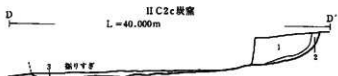
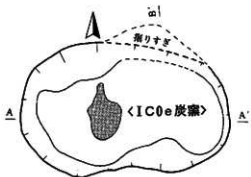
- II C1d 炭窯
C-C'
1. 7.SYR2/1 黒色土 炭を多く含む
 2. 7.SYR1.7/1 黒色土 炭を多く含む
 3. 5YR1.7/1 黒色土 炭を非常に多く含む
 4. 7.SYR1.7/1 黒色土 炭を含む



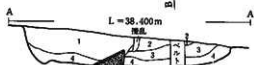
- B-B'
1. 7.SYR1.7/1 黒色土 炭を多量に含む
 2. 7.SYR1.7/1 黒色土 炭を多量に含む
 3. 7.SYR2/1 黒色土 炭を多量に含む 粘土を含む
 4. 7.SYR2/1 黒色土 炭を含む



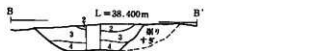
- II C1c 炭窯
A-A'
1. 10YR2/1 黒色土 炭を微量含む
 2. 10YR1.7/1 黒色土 炭を多く含む 炭層は粘土



- II C2c 炭窯
D-D'
1. 10YR1.7/1 黒色土 炭をおよそ半分に含む
 2. 5YR1.7/1 黒色土 炭を含む
 3. 7.SYR1.7/1 黒色土 炭を多量に含む



- I C0c 炭窯
1. 10YR1.7/1 黒色土 炭を含む 粘土層を含む
 2. 10YR1.7/1 黒色土 炭を多く含む
 3. 10YR1.7/1 黒色土 炭を含む 粘土層を含む
 4. 10YR1.7/1 黒色土 炭を非常に多く含む



第52図 炭窯(1)

かった。鉄滓の総量は5.93kgである。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた1点はク
クリと同定されている。

本遺構は遺構の形態及び出土遺物からII C 2 e 製鉄炉群と関連の深い炭窯と考えられる。(高
橋佐知子)

II C 1 d 炭窯 (第52図、写真図版48)

本遺構はII C 区の沢沿いの緩斜面に位置する。遺構の西側はII C 1 c 炭窯を切っている。
40cm西側にII C 2 c 炭窯が存在する。

検出はT II 層中で、炭を多量に含む黒色土の広がりを確認したことによる。

平面形は楕円形で、規模は開口部で3.88×2.10m、深さは最も残りの良い北壁で41cmである。
長軸方向はN-23°-Wである。壁はT II 層中にあり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。底部は
平坦で、やや南側に傾斜するものの平坦である。底部には焼土も形成される。

埋土は炭化物を含む黒色土が主体で3層に細分される。底面直上には炭化物が極めて多量に
含まれる。

出土遺物 (第12表)

埋土から、鉄滓、羽口片、炭化材が検出された。羽口片はいずれも小片で図化には至らなかつ
た。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた1点はクリと同定された。これらのこと
から本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給した炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

II C 1 f 炭窯 (第53図、写真図版49)

本遺構は調査区南を東西に流れる沢に至る緩斜面に位置する。北西にはII C 2 e 製鉄工房が、
南東にはI C 0 g 炭窯が存在する。

検出はII層上面よりやや下位で、炭化物を含んだ黒褐色の広がりを確認したことによる。

平面形は長楕円で、南側がやや角ばっている。規模は開口部で4.05×1.62m、深さは北壁が
最大で40cm、南壁が最も浅い8cmである。長軸方向はN-2°-Wである。底部は船底状を呈す
る。

埋土は3層に細分される。底部直上の主に南半には炭を非常に多く含む黒色土が堆積し、埋
土中層から上層の主に北半には炉壁、焼土、鉄滓、炭などが詰まった状態で検出された。これ
らの埋土の検出状況からある程度窯が埋まって窪地状になった時点で、製錬作業の際の不要に
なった炉壁や鉄滓を投げ入れたものと考えられる。

出土遺物 (第71図、写真図版60、第10表)

埋土から上述のような状態で鉄滓、炉壁、鉄滓、羽口が出土した。鉄滓の総量は61.84kgに及
ぶ。219は羽口で、先端部が溶けているが、ほぼ完形である。

これらのことから本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給するための炭窯と考えられる。(高橋
佐知子)

II C 2 b 炭窯 (第53、写真図版49)

本遺構は飛び地の南を流れる沢に至る緩斜面に位置する。遺構の北西2mにはII C 3 a 炭窯

が、東4mにはIIC2c炭窯が存在する。検出はTII層中であるが、平面では遺構の範囲が確認できなかったので、ベルトを残して掘り上げ、壁の立ち上がりを探した。その結果、炭を少量含んだ層の下の底面と思われる面を追っていくと、ゆるやかな立ち上がりとなった。従って、平面形は明瞭ではないが、楕円形を呈すると考えられる。規模は開口部で、2.85×2.45m、深さは25cmを測る。

壁はTII層中にあり、外傾して立ち上がる。底部は平坦である。

不明瞭な埋土は炭を含む締まりのない黒褐色土が主体である。埋土の上層は炭化材が多く混入するが、底部下層はまばらに混入する程度である。上層の炭化物集中層の直下には焼土が少量混入する層があり、この面が底部となる可能性もあるが、明確には判断できなかった。

本遺跡で検出されている炭窯は埋土の最下層に炭を多く含むのが通常であること、本遺構は平面形が他の炭窯よりかなり円形に近いことなどからも、不明な点が多い炭窯であるが、出土層位等からIIC2e製鉄炉群に関連する炭窯と考えられる。

出土遺物 (第12表)

埋土に炭化物が多く混入するほかは流れ込みと見られる縄文土器や磨石が出土したのみである。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた2点はいずれもクリと同定された。(高橋佐知子)

IIC2c炭窯 (第52図、写真図版49)

本遺構は飛び地の南側を流れる沢に至る緩斜面に位置する。東側に隣接して、IIC1d炭窯、炭を含まない埋土層、上層は炭をほとんど含まない黒色土が堆積していたので、炭窯の存在に気づかないまま掘り下げ、最下の炭の集中層で炭窯を確認した。

平面形は東側が角ばる長円形で、規模は開口部で3.99×1.43m、深さが西壁で35cmである。壁はTII層中にあり、内湾して立ち上がる。底部は平坦で、西壁付近からは焼土が少量検出された。長軸方向はN-78°-Wである。

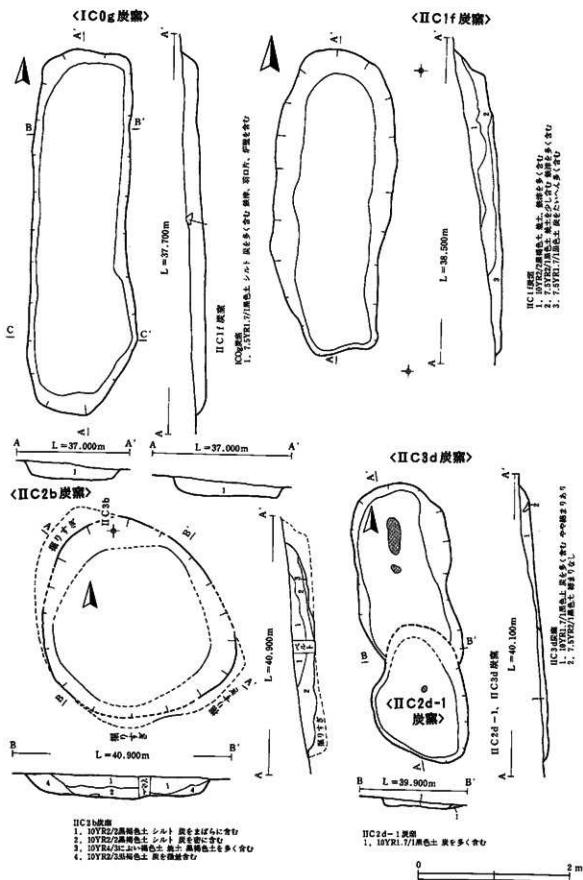
埋土は3層に細分され、炭をほとんど含まない黒色土が主体である。最下層は薄く、炭を多く含む層である。

埋土の西よりから土のう袋にして2袋ほどの大量の鉄屑(25.9kg)が出土した。また、炉壁破片も出土したが、小片で図化に至らなかった。本遺構は、層位及び出土遺物からIIC2e製鉄炉群に関連する遺構と考えられる。(高橋佐知子)

IIC2d-1炭窯 (第53図、写真図版50)

重複関係 本遺構は飛び地の南を流れる沢に至る緩斜面に位置する。IIC3d炭窯と重複関係にあり、こちらの方が断しい。TII層中に存在を知ったが、埋土上層は炭をほとんど含んでいなかったため平面形を確認できず、TIII層まで下げた段階で、炭を多く含む黒色土の広がりから、明確なプランをつかむことができた。

小判形 平面形はゆがんだ小判形で、断面は浅い皿状を呈する。規模は開口部で、1.40×1.26m、深さは11cmである。長軸方向はN-5°-Wである。



第53図 炭窯(2)

壁はTⅢ層中にあり、内湾して立ち上がる。底部は南にやや傾斜するものの平坦で、一部に焼土が形成されている。埋土は上層を削ったため、最下層のみ残存しているが、炭を多く含む黒色土である。

埋土に炭化物が含まれるほかは、出土遺物はない。

本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給するための炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

II C 2 d-2 炭窯 (第54図、写真図版49)

重復関係不明瞭な壁
本遺構は飛び地の南を流れる沢に至る緩斜面に位置する。遺構の南東隅は、II C 2 e 製鉄工房の西の掘り込みと重複している。本遺構の方が古いと考えられるが、断面で観察できなかったため、確かではない。検出はTⅡ層であるが、北半は明確であったものの、南半は不明瞭であったため、TⅢ層まで下げて検出した。

平面形は隅丸でやや胴が張る長方形である。断面は南北方向で浅い皿型、東西方向で逆台形状を呈する。規模は開口部で3.56×1.43m、深さ14cmである。長軸方向は北を向いている。

壁はTⅢ層～TⅡ層中にあり、壁は外傾して立ち上がる。底部はTⅢ層中に形成され、平坦である。

埋土は2層に細分され、炭を多く含む黒色土が主体である。特に北壁よりに炭を多く含んでいる。

出土遺物

埋土から羽口片、鉄滓が出土した。

これらのことから、本遺構はII C 2 e 製鉄炉群に炭を供給するための炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

II C 2 g 炭窯 (第54図、写真図版50)

本遺構は飛び地の緩斜面に位置する。約2.5m西にはII C 2 e 製鉄工房が存在する。検出面はTⅡ層である。

平面形はやや角ばった長円形を呈する。検出の際遺構上面を削平したため、明らかではないが、断面は逆台形を呈していたと考えられる。規模は開口部で、2.03×1.2m、深さ36cmである。長軸方向はN-4°-Wである。

壁はTⅡ層中にあり、底部から外傾して立ち上がる。底部はTⅡ層中に形成され、ほぼ平坦である。底面には焼土が形成される。

埋土は4層に細分され、斜面下方側は炭を多く含む黒色土、斜面上方の北側は炭をごく少量含む黒色土である。

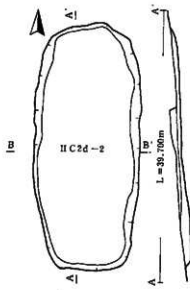
出土遺物 (第10、12表)

クリ
埋土から羽口と鉄滓が、底面から羽口が出土している。出土した炭化材のうちサンプルとして取り上げた3点はいずれもクリと同定された。

本遺構は出土遺物、検出面からII C 2 e 製鉄炉群と関連の深い遺構と考えられる。

(高橋佐知子)

〈HC2d-2炭窯〉

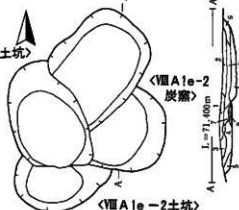


〈ⅧA1e-1土坑〉



HC2d-2新築
1. 10YR2/1黒色土 シルト 炭化物0%
2. 7.5YR2/1黒色土 シルト 炭化物多量含む

〈ⅧA1e-1炭窯〉



〈ⅧA1e-2炭窯〉

〈ⅧA1e-2土坑〉

- 10YR3/3暗褐色土 締まっている 粘性なし
- 10YR2/4暗褐色土 締まっている 粘性なし
- 10YR2/4暗褐色土 締まっている 粘性なし
- 10YR2/4暗褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材・炭土殻を含む
- 10YR2/4暗褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材を含む
- 10YR2/3暗褐色土 炭が多い 粘性なし 炭化材を含む
- 10YR2/4暗褐色土 締まっている 粘性なし 炭化材・炭土殻を含む
- 10YR2/3暗褐色土 炭が多い 粘性なし
- 10YR2/3暗褐色土 炭が多い 粘性なし
- 5YR2/6暗褐色土 炭土 締まっている 粘性なし
- 10YR2/1褐色土 炭が多い 粘性なし 炭化材を含む

〈HC2g炭窯〉

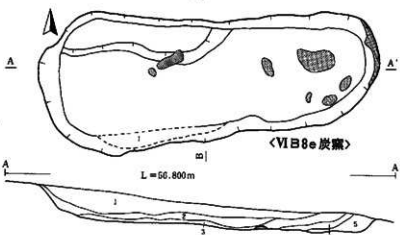


L=39,000m

L=38,900m

- HC2g炭窯
- 10YR2/1黒色土 シルト 炭化物0%
 - 10YR2/1黒色土 砂質シルト
 - 10YR2/1黒色土 シルト 炭化物15%
 - 10YR2/2暗褐色土 シルト

〈ⅧB8e炭窯〉

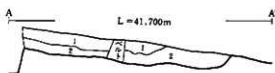


L=56,500m

ⅧB8e炭窯

- 2.5YR2/1黒褐色土 炭屑も炭殻を少し含む
- 2.5YR2/2暗褐色土 1-2cm大の炭を含む
- 10YR2/1黒色土 2-3cm大の炭を多く含む
- 10YR2/2暗褐色土 1-2cm大の炭を多く含む
- 2.5YR2/1黒色土 炭を含む

〈HC3a炭窯〉



L=41,700m

HC3a炭窯

- 10YR2/2暗褐色土 締まりなし
- 7.5YR2/1黒色土 炭を多く含む
- 10YR3/3に濃い黄褐色土 締まりなし

第54図 炭窯(3)

II C 3 a 炭窯 (第54図、写真図版50)

本遺構は飛び地の南側を流れる沢に至る緩斜面に位置する。2 m南東にはII C 2 b 炭窯、4 m北西にはII B 4 h 住居跡が存在する。本遺構は西側がコンクリートの擁壁によって破壊されている。検出面はT II層上面であるが、平面ではプランを確認できず、東西、南北方向にトレンチを入れて、炭化材の分布と立ち上がりで、遺構を検出した。

平面形は隅丸の長方形で、断面は逆台形状を呈する。規模は開口部で3.0(残存地)×1.36 m、深さ58 cmである。長軸方向はN-70°-Wである。

壁はT II層中にあり、外傾して立ち上がる。底部はT II層中に形成されゆるやかに東に傾斜している。底面に焼土は形成されない。

埋土は2層に大別され、上層は炭をほとんど含まない黒色土で、下層は炭を多く含む黒色土である。

出土遺物 (第12表)

イ タ ヤ 埋土に炭化物が含まれるほかは出土遺物はない。サンプルとして取り上げた1点はイタヤと同定された。

これらのことから本遺構は製鉄に関連する炭窯で、II C 2 e 製鉄伊群に炭を供給していたと考えられる。(高橋佐知子)

II C 3 d 炭窯 (第53図、写真図版50)

本遺構は飛び地の南を流れる沢に至る緩斜面に位置する。遺構の南側をII C 2 d-1 炭窯に切られている。

T II層で、遺構の存在を知ったが、明確に検出できず、T III層までおとして炭を多く含む黒色土の広がりからプランをつかむことができた。

平面形は長円形で、断面は浅い皿状を呈する。規模は開口部で2.5(残存値)×1.30 m、深さ10 cmである。長軸方向はN-11°-Wである。壁はT III層中にあり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。底部はT III層中に形成され、平坦である。

焼 土 層 埋土下層は炭を多く含む黒色土である。遺構の北壁よりで、底部直上の薄い炭の上に焼土の層が形成されていた。

出土遺物

埋土から羽口破片が出土したが、小片で図化には至らなかった。

これらのことから、本遺構はII C 2 e 製鉄伊群に炭を供給するための炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

VIB 8 e 炭窯 (第54図、写真図版51)

本遺構は調査区北側の尾根から中央を流れる沢に至る斜面に位置する。検出はIV層で、炭を含んだ黒色土の広がりをとらえたことによる。

平面形は長円形で、断面形は浅い逆台形状を呈する。北西部に段を有する。規模は開口部で4.53×1.44 m、深さが30 cmである。長軸方向はN-84°-Eである。

固い焼け面 壁はIV~V層中にあり、外傾して立ち上がる。東壁は固く焼けており、焼土が形成される。

底部はV層に形成され、斜面下方にわずかに傾斜するものの平坦である。底部の一部には焼土が形成される。

埋土は炭を多く含む黒色土が主体で、5層に細分される。底面の第3層～4層には炭が多量に含まれる。

出土遺物 (第12表)

東壁付近の埋土からは鉄滓がまとまって出土した。その他は羽口片が出土しているが、小片である。炭化材のうちサンプルとして取り上げた1点はナラと同定された。また、埋土から縄文土器の小片が出土したが流れ込みと考えられる。

これらのことから本遺構は製鉄に関連する炭窯と考えられる。(高橋佐知子)

VII B 8 f 炭窯 (第55図、写真図版51)

本遺構は調査区北側の尾根から中央を流れる沢に至る斜面に位置する。検出はIV層で、炭を多く含んだ黒色土の広がりをとらえたことによる。

平面形は西側が角ばる長円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部で4.40×1.61m、深さは西壁が最大で14cmである。長軸方向はN-75°-Eである。

壁はIV～V層中にあり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。底部はV層に形成され、平坦で、火をうけて一部に焼土が形成される。

埋土は6層に細分され、炭を多く含む黒褐色土が主体である。底部直上には炭を極めて多く含む黒色土が堆積しており、その上に一部焼土が堆積する。

出土遺物 (第12表)

埋土より、鉄滓、羽口片、炭化材、炉壁片が出土したが、小片である。炭化材のうちサンプルとして取り上げた3点はクリと同定された。これらのことから、本遺構は製鉄に関連する炭窯で、周辺の変構から推定しておそらく平安時代に属すると考えられる。(高橋佐知子)

VII B 9 c 炭窯 (第55図、写真図版51)

本遺構は調査区北側の中央部付近に位置している。占拠場所は尾根の斜面が終わり、平坦になる部分で、以前は水田として利用されていたところである。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、IV層中において炭化材を多量に含む黒褐色土の広がりを確認したことによる。平面形は長楕円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径が4.50×1.35m、底部径が4.19×1.10m、深さは16cmである。

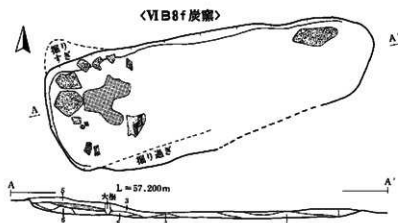
壁はIV層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。東壁は斜面下方にあり、流失している。底部はIV層中に形成され、斜面下方に傾斜するもののほぼ平坦でしまっている。

埋土は多量に炭化材を含む黒褐色土の単層である。(神 敏明)

出土遺物

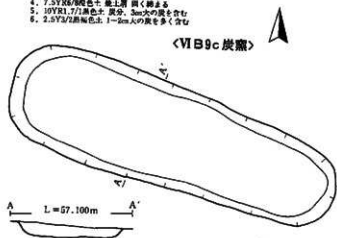
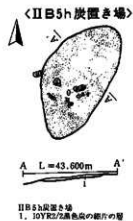
本遺構は出土遺物から製鉄に関連する炭窯で、周辺の変構から推定しておそらく平安時代に属すると考えられる。(高橋佐知子)

VIII A 1 0 - 1 炭窯 (第54図、写真図版51)



VB8f断面

1. 10YR3/2黒褐色土 焼土、炭灰を含む
2. 2.5YR3/2黒褐色土 1~2m大の炭を多く含む
3. 10YR2/2黒褐色土 焼土、炭灰を含む
4. 7.5YR6/8褐色土 焼土屑 弱く締まる
5. 10YR1.7/1黒色土 炭分、3m大の炭を含む
6. 2.5Y2/2黒褐色土 1~2m大の炭を多く含む



VB9c断面

1. 10YR2/2黒褐色土 弱く締っている、粘質な土、多量の炭が混入する



第55図 炭窯(4)、VB5h炭置き場、II C1e羽口捨て場1、2

本遺構は調査区北西の尾根の頂部付近に位置し、ⅦA1e-2炭窯・ⅦA1e-1土坑及びⅦA1d住居跡の煙出し部と重複関係にある。新旧関係は本遺構がⅦA1e-2炭窯を載り、重複関係ⅦA1e-1土坑に載られているためⅦA1e-2炭窯より新しく、ⅦA1e-1土坑より古い。また、ⅦA1d住居跡の煙出し部が本遺構の底部から検出されていることから構築時期は本遺構の方が新しい。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところ、Ⅵ層上面において暗褐色土の広がりや焼土を検出したことによる。

平面形の詳細は重複関係にあるため不明であるが、残存部分からは楕円形を呈すると推定さ 楕 円 形
れる。規模は開口部の残存最大径で1.38×1.15m、底部残存最大径が1.18×0.85m、深さは18cmである。壁はⅥ層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はⅥ層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。

埋土は5層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、中位はシルト質の黒褐色土、下方は炭化材を含む黒色土が主体である。(神 敏明)

本遺構は切り合い関係からⅦA1d住居跡より新しいが、形態がⅦA1e-2炭窯と類似していることから、平安時代の炭窯である可能性が高い。(高橋佐知子)

ⅦA1e-2炭窯 (第54図、写真図版51)

本遺構は調査区北西の頂部付近に位置し、ⅦA1e-1・2土坑、ⅦA1e-1炭窯と重複関係にある。新旧関係は本遺構が重複関係にあるすべての遺構に載られており、構築時期が最も古い。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところⅥ層上面において暗褐色土の広がりを確認したことによる。検出面からは重複関係にあるため平面形を確定する 重 複 関 係
には至らなかったため埋土断面より平面形を確定した。

平面形は残存部分から楕円形を呈すると推定される。断面形は浅い皿状である。規模は開口部の残存最大径が1.14×1.0m、底部の残存最大径が1.0×0.68m、深さは15cmである。壁はⅥ層中にあり、緩やかに外傾して立ち上がる。底部はⅥ層中に形成され、平坦でしまっている。

埋土は5層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土と褐色土、下方は炭化材を含む暗褐色土と褐色土が主体である。また、底部上面に赤褐色の焼土が見られる。(神 敏明)

本遺構は切り合い関係からⅦA1d住居より古い、平安時代の遺構と考えられる。

(高橋佐知子)

(5)炭置き場

ⅡB5h炭置き場 (第55図、写真図版47)

本遺構は飛び地北西部の緩斜面に位置する。約1.5m東にはⅡB4h住居跡が存在する。検出はⅡ層上で、炭の小片の集中をとらえたことによる。

平面形は楕円形で、規模は1.66×0.9mである。掘り込みなどは特になく、炭の堆積は最大厚で3cm程である。火を受けた形跡はない。このように特に炭窯とは考えられず、炭の小片が集 炭の小片の
中していることから、炭を置いた場所と考えられる。 集 中

出土遺物

炭の集中から鉄滓が出土している。総量は3.7kgである。

以上のことから本遺構は製鉄に関連しており住居との関連も想定されることから平安時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)

(6)羽口捨て場

II C 1 e 羽口捨て場 1、2 (第55図、写真図版47)

II C 2 e 製鉄炉群の南側に位置する。T II 層上に羽口が集中して捨てられている。掘り込みは持たない。西側の羽口の集中ブロックを1、東側の集中ブロックを2とした。

羽口の集中

羽口は工房内からも出土しているが、これほどの集中は他に例をみない。図化した羽口は3本であるが、このほかにも破片が多く出土した。II C 2 e 製鉄炉群で使用されたこれらの羽口はもっぱら掘り込みの外に投げ捨てられたものと考えられる。

また、炉壁の破片や鉄滓、10個ほどの花崗岩の角礫(5~10cm大)も見られた。角礫は酸化して赤化しているものがあるが、火を受けた結果かどうかは不明である。

出土遺物 (第71図、写真図版60、第10表)

223、224、227が出土した羽口である。この他に羽口の小片、鉄滓が出土した。図化しなかった羽口のうち計測可能なものは計測値を載せた。(第10表)(高橋佐知子)

(7)焼土遺構

II B 2 g 焼土遺構 (第56図、写真図版52)

本遺構は飛び地の緩斜面に位置する。検出面はT II 層である。平面形はアメーバー状の不整形で、45×43cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大8cmで、断面形はレンズ状である。

周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。本遺構は検出された面から、古代に属する。平安時代の可能性が高いが、付近で奈良時代の土器も出土していることから断定はできない。

II C 2 f 焼土遺構 (第56図、写真図版52)

本遺構は飛び地の緩斜面に位置する。本遺構はII C 2 e 製鉄炉群内の2号土坑に切られている。検出面はT II 層下面で、2号土坑の検出面よりやや下がった標高である。したがって、本遺構の方が古い。平面形は長円形で、62×30cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大6cmで、断面形はレンズ状である。遺構内に花崗岩の角礫が存在する。

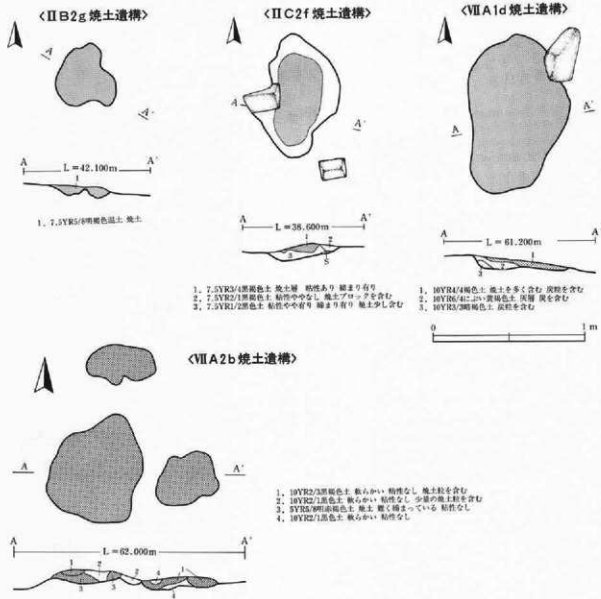
周囲から柱穴や住居の壁などの施設は検出されなかった。本遺構は検出された面から、古代に属すると考えられ、平安時代の遺構の可能性がある。

VII A 1 d 焼土遺構 (第56図、写真図版52)

灰の層

本遺構は調査区中央の緩斜面に位置する。検出面はIV層である。平面形は不整形で、106×7cmの範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で4cmである。焼土の下には炭を含む灰の層が堆積している。

周囲からは柱穴などは検出されなかった。本遺構は検出された面から、平安時代の遺構と考



第56図 焼土遺構 (古代)

えられる。(高橋佐知子)

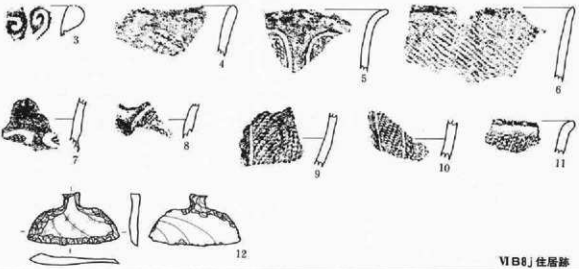
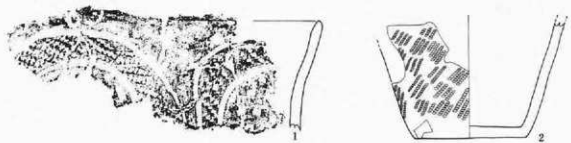
VII A 2 b 焼土遺構 (第56図、写真図版52)

本遺構は調査区西側の平坦地に位置している。検出は重機による表土除去後、人力による掘り下げを行ったところIV層上面において焼土を確認したことによる。平面形は不整形で、焼土の発達している部分によって3つに分かれる。規模は3つのうち最大のものが72×58cm、次に大きいものが42×31cm、最小のものが43×25cmで、すべてが半径60cmの円内に収まる。

3つの焼土のうち最大のものが最も発達しており、暗赤褐色の焼土が5cmほどの厚さで広がっている。他の2つは黒褐色土に焼土粒が多量に含まれる。(神 敏明)

焼土の周辺からは捨てられたと思われる焼土ブロックも検出されており、本遺構がVII A 3 b 住居跡と関わりのあるものと思われる。

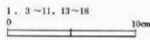
本遺構は検出された層位から平安時代の遺構と考えられる。(高橋佐知子)



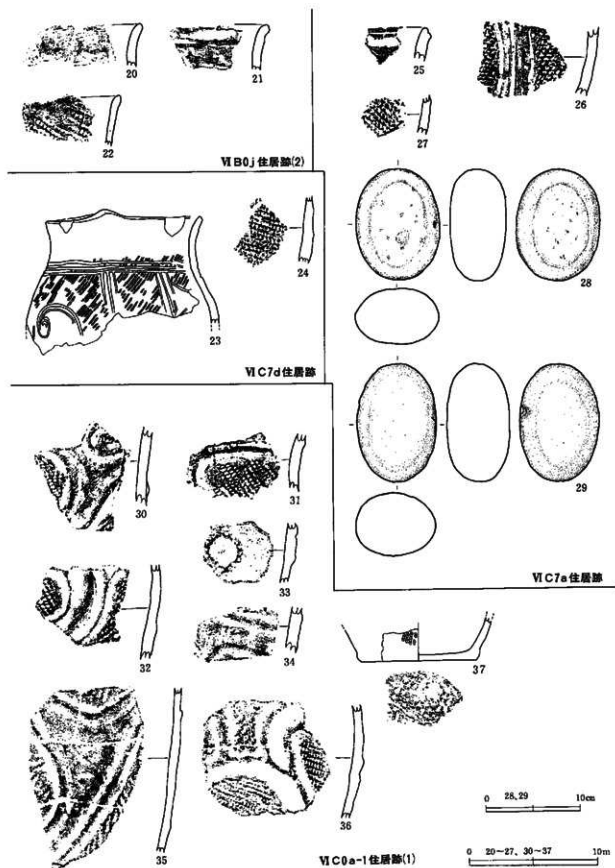
VIB8j 住居跡



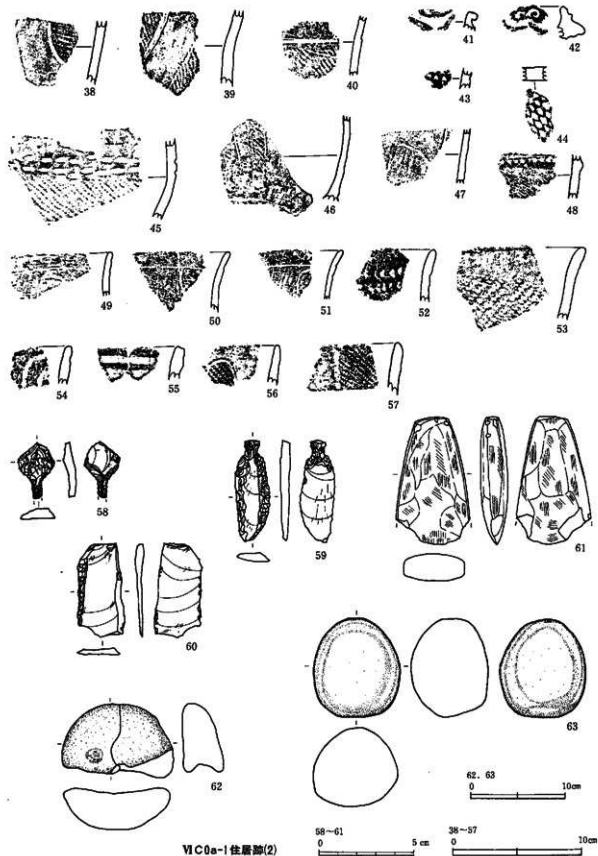
VIB0j 住居跡(1)



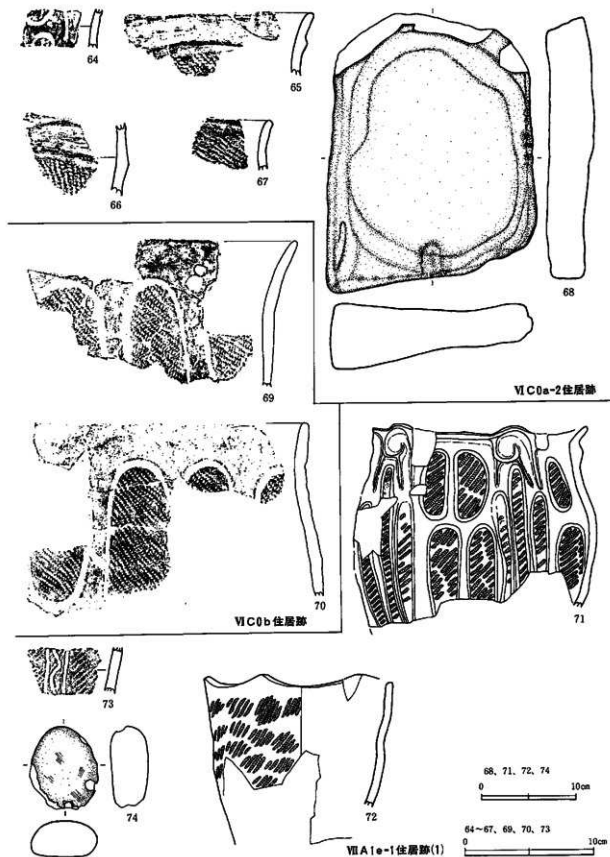
第57図 遺構内出土遺物 1 VIB8j 住居跡、VIB0j 住居跡(1)



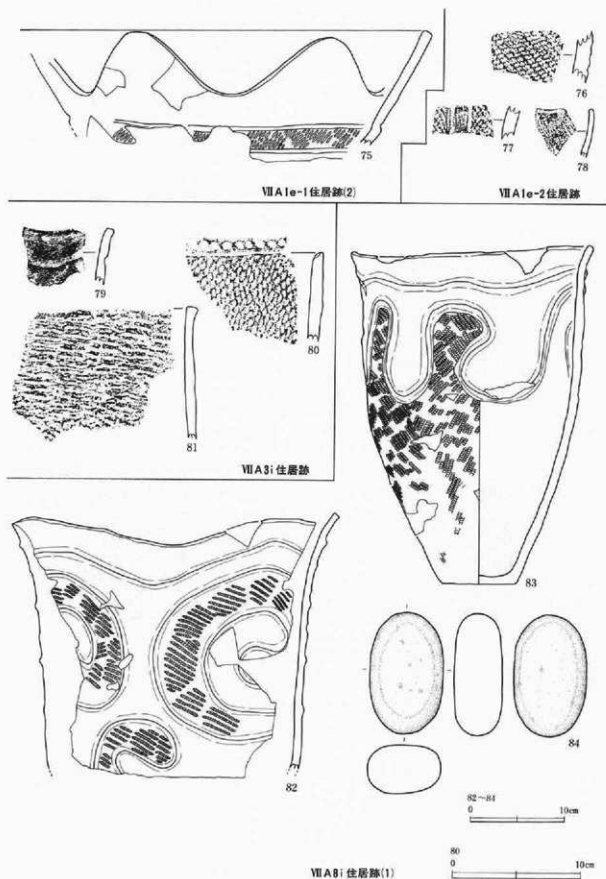
第58回 遺構内出土遺物 2 VIB0j 住居跡(2)、VIC7d 住居跡、VIC7a 住居跡、VIC0a-1 住居跡(1)



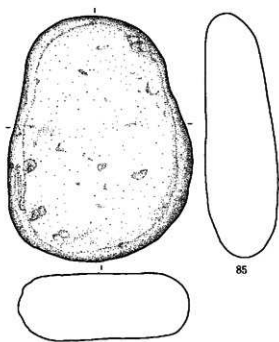
VIC0a-1住居跡(2)
 第59圖 遺構内出土遺物 3 VIC0a-1住居跡(2)



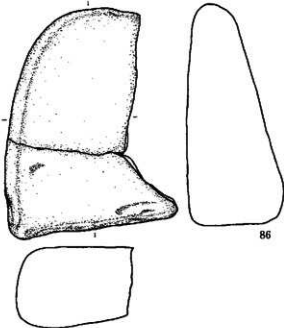
第60回 遺構内出土遺物4 VIC0e-2住居跡、VIC0b住居跡、VIIA1e-1住居跡(1)



第61圖 遺構内出土遺物 5 VIIA 1e-1 住居跡(2)、VIIA 1e-2 住居跡、VIA 3i 住居跡、
VIA 8i 住居跡(1)



85



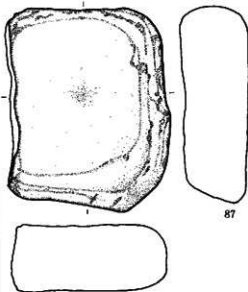
86



88

89

90



87



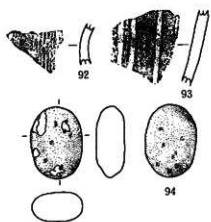
91

VII A 8 i 住居跡(2)

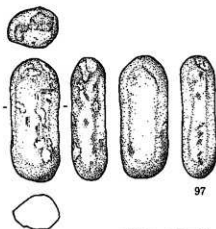
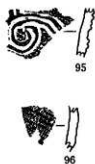


VIA 0 c 住居跡

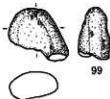
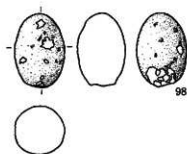
第62圖 遺構内出土遺物 6 VII A 8 i 住居跡(2)、VII A 0 c 住居跡



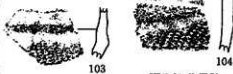
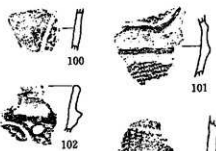
VII A 0 d 住居跡



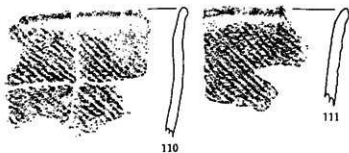
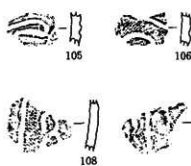
VII B 2 a-1 住居跡



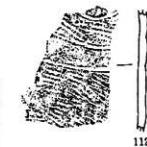
VII B 3 a 住居跡



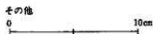
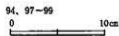
VII B 8 b 住居跡



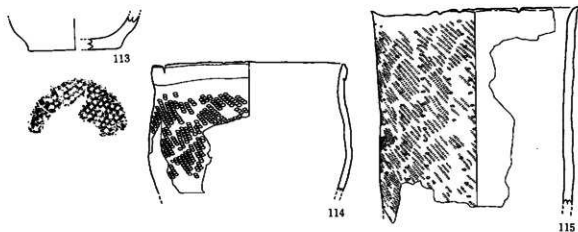
VII B 0 b 住居跡



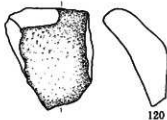
VII C 1 b 住居跡



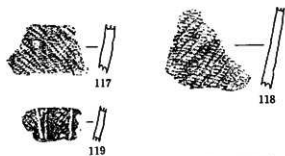
第63図 遺構内出土遺物 7 VII A 0 d 住居跡、VII B 2 a-1 住居跡、VII B 3 a 住居跡、VII B 8 b 住居跡、VII B 0 b 住居跡、VII C 1 b 住居跡



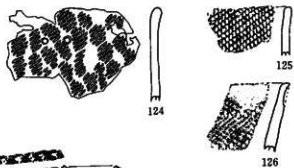
VIC 3f 住居跡



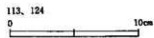
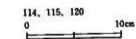
VIC 7b 罌穴状遺構



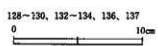
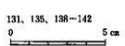
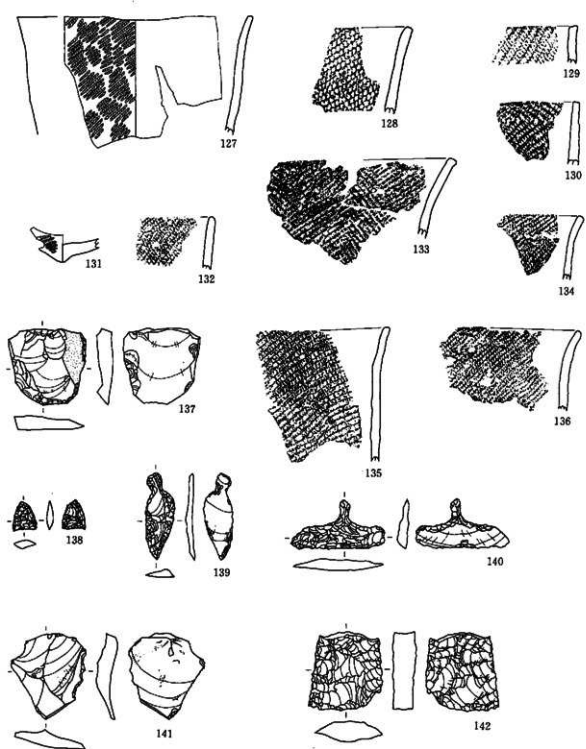
VIC 5f 住居跡



VIB 1c 罌穴状遺構(1)

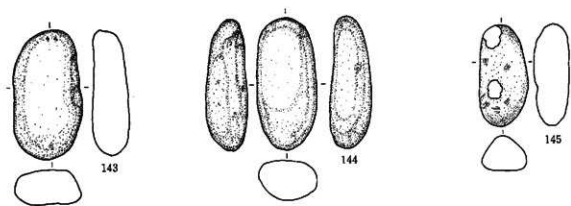


第64回 遺構内出土遺物 8 VIC 3 f 住居跡、VIC 5 f 住居跡、VIC 7 b 罌穴状遺構、
VIB 1 c 罌穴状遺構(1)

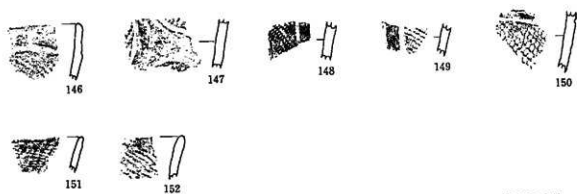


VII B 1 c 罽欠状遺構(2)

第65圖 遺構内出土遺物 9 VII B 1 c 罽欠状遺構(2)



VII B 1 c 壺穴状遺構(3)



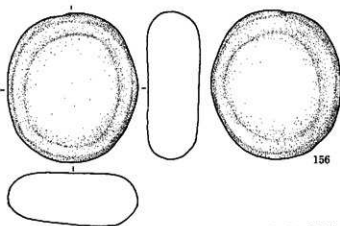
VIC 9 b 土坑



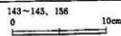
VII C 1 c 土坑



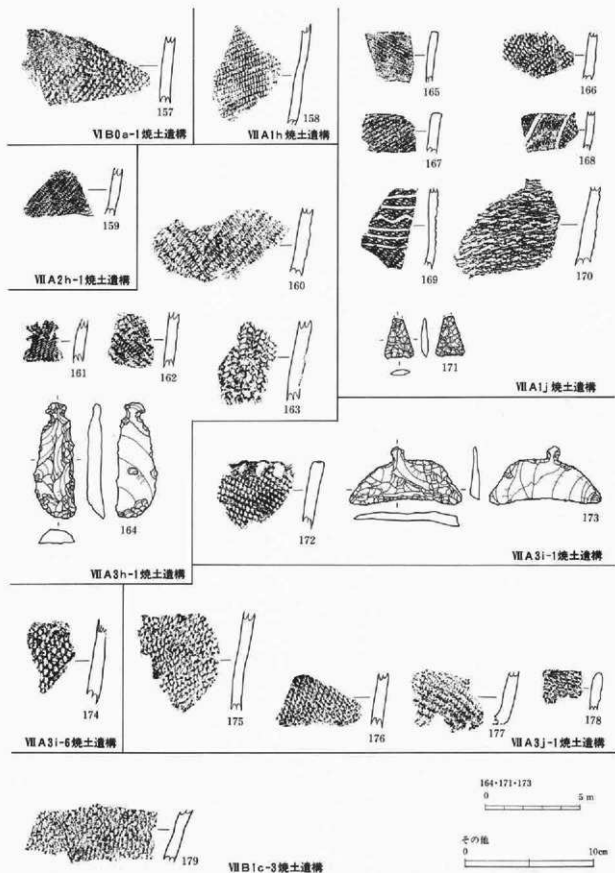
VIII A 1 e-1 土坑



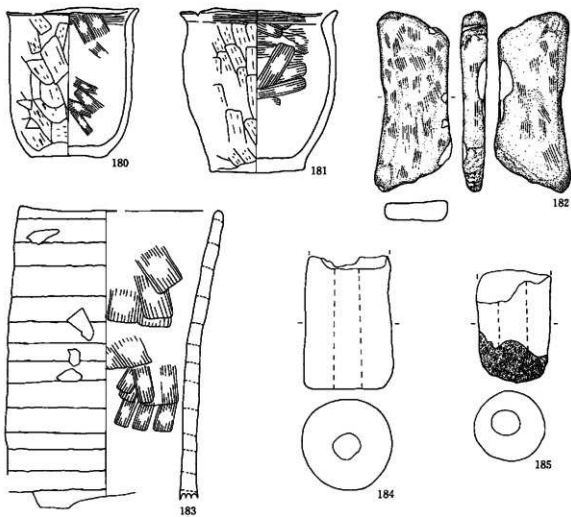
VII B 7 b-2 土坑



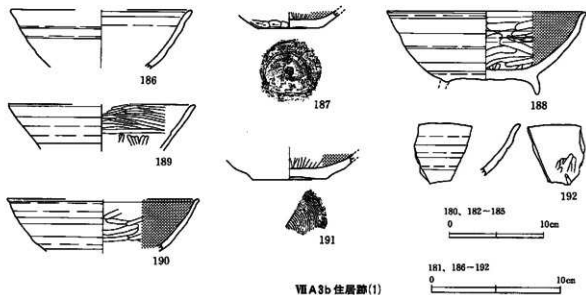
第66図 遺構内出土遺物 10 VII B 1 c 壺穴状遺構(3)、VIC 9 b 土坑、VII C 1 c 土坑、VIII A 1 e-1 土坑、VII B 2 b-2 土坑



第67回 遺構内出土遺物11 焼土遺構

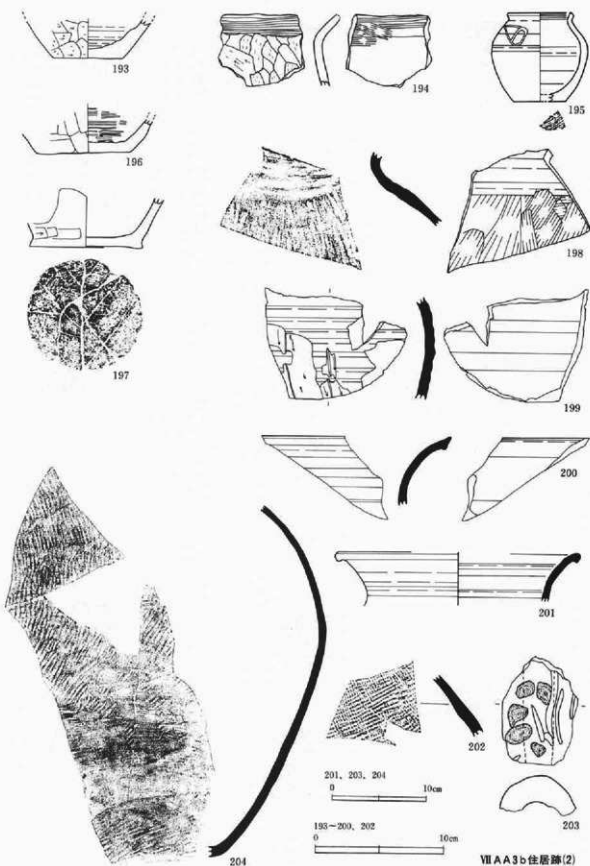


II B 4 h 住居跡

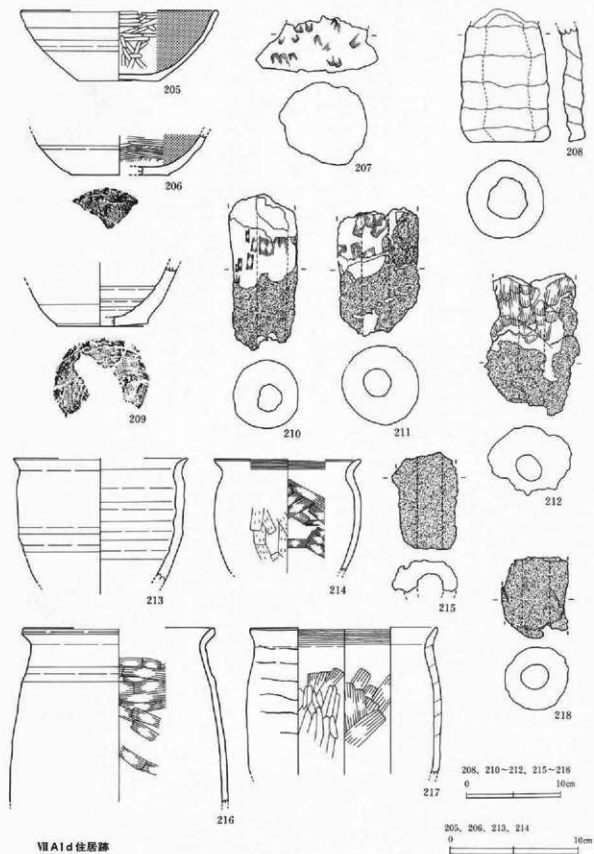


VII A 3 b 住居跡(1)

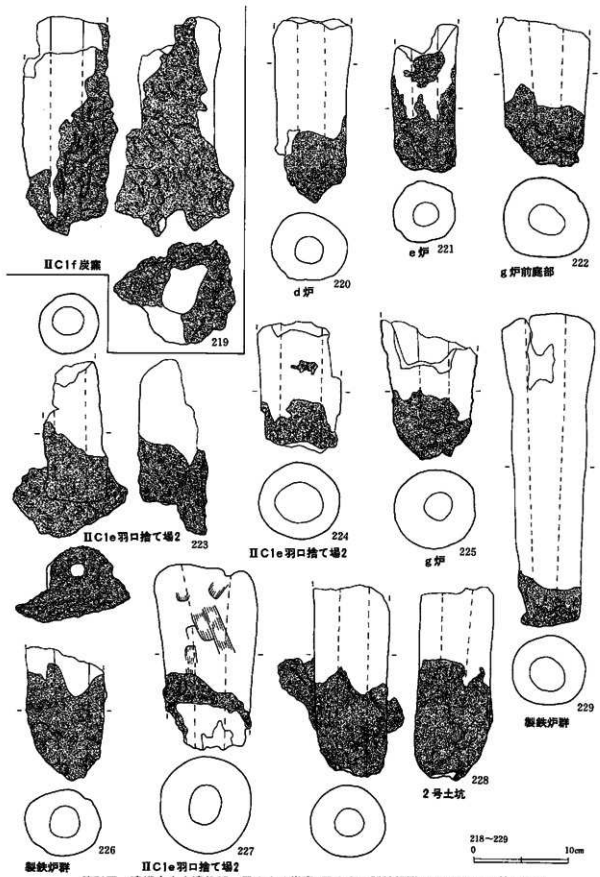
第68図 遺構内出土遺物12 II B 4 h 住居跡、VII A 3 b 住居跡(1)



第69図 遺構内出土遺物13 VII A 3 b 住居跡(2)



第70圖 遺構内出土遺物14 VIIA1d住居跡



第71回 遺構内出土遺物15 II C1 f 炭窯、II C2 ●製鉄炉群、II C1 d 羽口捨て場 2

第5表 遺構内出土遺物観察表(1) 土器(縄文時代)

図号	出土地点	層位等	形状	文様・胎土等	分類
1	VIB 8 j 住居跡	灰層	深鉢	L.R 沈線による区画 刺突	IV 4 a
2	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	R.L 縦 刺突	IV 5
3	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	渦巻状突起	IV
4	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦 浅い沈線 破状口縁	IV 3 b
5	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	L.R 斜め 浅い沈線による口縁部外反	IV 3 b
6	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	L.R L.O 段多縁	IV 5
7	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	R.L 沈線	IV 3
8	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	破状口縁	IV 3 a
9	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	R.L.R 縦 斜め 沈線	IV 3
10	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	R.L 縦 縦方向の沈線による区画	IV 3
11	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	R.L.R 縦 口縁部外反	IV 5
13	VIB 0 j 住居跡	灰層 伊	深鉢	L.R 縦 刺突等1と同一個体	IV 5
14	VIB 0 j 住居跡	灰層 伊	深鉢	L.R 縦 90と同一個体 刺突	IV 5
15	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	沈線	IV 4 a c
16	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	無文帯に刺突	IV 4
17	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	L.R 沈線による区画内を充塞	IV 3
18	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	頸部に隆帯 口縁部無文帯 沈線による区画内をL.Rで充塞	IV 4 a
19	VIB 0 j 住居跡	伊	深鉢	刺突 L.R 縦 口縁部で少しずぼまる	IV 5
20	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	口縁部無文帯	IV 4 a
21	VIB 0 j 住居跡	埋土	深鉢	口縁部無文帯	IV 4 a
22	VIB 8 j 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦 口縁部やや外反	IV 5
23	VIC 7 d 住居跡	埋土	深鉢	3本帯位の沈線 R.L 縦 2本帯位の破状口縁	IV 2 b
24	VIC 7 d 住居跡	埋土	深鉢	R.L 縦線	IV
25	VIC 7 a 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦に新直三角形の隆帯	IV 4
26	VIC 7 a 住居跡	埋土	深鉢	R.L.R と沈線	IV 3 a 4
27	VIC 7 a 住居跡	埋土	深鉢	R.L.R と沈線	IV
30	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 伊野付近	深鉢	新直三角形の隆帯による区画内をL.Rで充塞	IV 4 b
31	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 伊野付近	深鉢	新直三角形の隆帯による区画内 L.Rで充塞	IV 4 b
32	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 伊野付近	深鉢	新直三角形の隆帯による区画内 L.Rで充塞	IV 4 b
33	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 下位	深鉢	隆帯による円文に円形刺突	IV 4 b
34	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 伊野付近	深鉢	新直三角形の隆帯による区画	IV 4 b
35	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	新直三角形の隆帯	IV 4 b
36	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	新直三角形の隆帯と無文帯で区画 L.Rで充塞	IV 4 b
37	VIC 0 a -1 住居跡	伊野付近	深鉢	刺突	IV
38	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 沈線による区画内を充塞	IV 3 a 4
39	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦 沈線	IV 3 a
40	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 南北ベルト	深鉢	L.R O 段多縁 浅い沈線	IV 4
41	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢		IV 3 a
42	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	渦巻状突起	IV
43	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	刺突	IV
44	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	刺突	IV
45	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦 無文帯との境に刺突	IV 4
46	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦 沈線	IV 3
47	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 下位	深鉢	R.L 浅い沈線による区画内を充塞	IV 4 a
48	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦から 新直三角形の隆帯上に刺突	IV 4 b
49	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 南北ベルト	深鉢	R.L 縦 口縁部に横状沈線 浅い沈線による区画	IV 4 a
50	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 南北ベルト	深鉢	R.L 縦 口縁部に横状沈線 浅い沈線による区画	IV 4 a
51	VIC 0 a -1 住居跡	埋土 下位	深鉢	R.L 縦 沈線	IV 4 a
52	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	逆説刺突	IV 4
53	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	R.L 縦 口縁部やや外反	IV 5
54	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	沈線	IV 3
55	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	新直三角形の隆帯	IV 4 a
56	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 沈線による区画内を充塞	IV 3
57	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦 沈線	IV 4 a
58	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	浅い沈線	IV 4 a
59	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦 新直三角形の隆帯	IV 4 b
60	VIC 0 a -1 住居跡	埋土	深鉢	L.R 縦 新直三角形の隆帯	IV 4 b

図号	出土地点	階位等	種類	文 種 - 始 土 等	分類
67	VIC 0 2 住居跡	礎土	築跡	L.R. 瓦 口縁部短文や中角瓦	IV 5
69	VIC 0 b 住居跡	平礎	築跡	L.R. 瓦 枕縁による区画内光瓦	IV 3 b
70	VIC 0 c 住居跡	平礎	築跡	L.R. 瓦 枕縁による区画	IV 3 b
71	WA 1 0 - 1 住居跡	礎土	築跡	R.L. 瓦 施文後枕縁で区画等による異変文が口縁の上に突出5単位か	IV 3 a
72	WA 1 0 - 1 住居跡	礎土	築跡	R.L.R. 瓦 枕状口縁 朝顔	IV 5
73	WA 1 0 - 1 住居跡	穴溝	築跡	R.L. 瓦 枕縁文	IV 2
75	WA 1 0 - 1 住居跡	礎土上層	築跡	枕状口縁より単位L.R. 瓦 口縁部短き	V
76	WA 1 0 - 2 住居跡	穴溝	築跡	L.R.L. 瓦	IV
77	WA 1 0 - 2 住居跡	穴溝	築跡	L.R. 瓦 枕縁	IV 3 か 4
78	WA 1 0 - 2 住居跡	穴溝	築跡	L.R. 瓦 内溝	IV
79	WA 3 1 住居跡	礎土	築跡	口縁部短文等 枕縁による区画 枕状口縁	IV 4 a
80	WA 3 1 住居跡	穴溝	築跡	組網B L. 回り 瓦筋 口唇部内面に爪形状部突 縁線	II 2 a
81	WA 3 1 住居跡	穴溝	築跡	口縁部短文等に瓦より状態本文 体部R.L.R. 縁部短 縁線	II 18 a
82	WA 8 1 住居跡	穴溝	築跡	新築三角形の礎等による区画ないをL.R. で充填	IV 4 b
83	WA 8 1 住居跡	平礎部短	築跡	新築三角形の礎等とそれに伴う枕縁で区画 R.L. で充填	IV 4 b
88	WA 9 0 c 住居跡	礎土	築跡	L.R. 瓦 枕状口縁と並ぶによる異変文	IV 4 a
89	WA 9 0 c 住居跡	礎土	築跡	口縁部短文等	IV
90	WA 9 0 c 住居跡	礎土	築跡	口縁部短文等	IV
91	WA 9 0 c 住居跡	礎土 一組	築跡	L.R. 瓦 朝顔	IV 5
92	WA 9 0 c 住居跡	礎土	築跡	短本文	IV
93	WA 9 0 c 住居跡	礎土	築跡	枕縁による区画	IV 3
95	WB 2 0 - 1 住居跡	礎土	築跡	L.R. 瓦 枕状口縁	IV 2
96	WB 2 0 - 1 住居跡	礎土	築跡	L.R. 瓦 0段多条 縁線	II 9
100	WB 8 b 住居跡	礎土	築跡		IV
101	WB 8 b 住居跡	礎土	築跡	L.R. 瓦 新築三角形の礎等	IV 4 b
102	WB 8 b 住居跡	礎土	築跡	礎土上に朝顔	IV 4
103	WB 8 b 住居跡	礎土	築跡	R.L. 新築三角形の礎等	IV 4 b
104	WB 8 b 住居跡	礎土	築跡	R.L. 瓦 新築三角形の礎等	IV 4 b
105	WB 9 0 b 住居跡	礎土	築跡		V
106	WB 9 0 b 住居跡	礎土	築跡		V
107	WB 9 0 b 住居跡	礎土	築跡	L. 瓦筋か? 瓦製	IV 5 a
108	WB 9 0 b 住居跡	礎土	築跡		V
109	WB 9 0 b 住居跡	礎土	築跡		V
110	WB 9 0 b 住居跡	礎土	築跡	L. 瓦筋か? 瓦製	IV 5 a
111	WB 9 0 b 住居跡	礎土	築跡	L. 瓦筋か? 瓦製	IV 5 a
112	VEC 1 b 住居跡	礎土	築跡	枕状口縁による区画 始部L. 施文	IV 4 a
113	VEC 3 f 住居跡	穴溝	築跡	意匠に朝顔成	IV a
114	VEC 3 f 住居跡	穴溝	築跡	L.R. 瓦 口縁部短文	IV
115	VEC 3 f 住居跡	穴溝	築跡	体部下手に最大瓦L. 瓦筋成	IV
116	VIC 7 b 壱穴状遺構	礎土	築跡	チャリバー型 陶管状文 造幣R.L. 瓦	IV 2 c
117	VEC 5 f 住居跡	礎土	築跡	L.R. 瓦	IV
118	VEC 5 f 住居跡	礎土	築跡	L.R. 瓦	IV
119	VEC 5 f 住居跡	礎土	築跡	L.R. 瓦 東方内の枕縁による区画	IV
121	WB 1 c 壱穴状遺構	穴溝	築跡	組網B 復形 L. 回り 口唇部保持部? 口唇 縁線部短	II 2
122	WB 1 c 壱穴状遺構	穴溝	築跡	L.R. 瓦 口唇部保持部短 縁線部	II 9
123	WB 1 c 壱穴状遺構	穴溝	築跡	組網B L. 回り復形 縁線部 縁線部	II 2
124	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	組網B 単形 L. 回り 縁線部 縁線部	II 2
125	WB 1 c 壱穴状遺構	穴溝	築跡	組網B L. 回り復形 縁線部 低い山形口縁か?	II 2
126	WB 1 c 壱穴状遺構	穴溝	築跡	結末のある羽状 L.R. R.L. の縁部短か? 金釘部 縁線部	II 12
127	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	組網B 復形 L. 回り 縁線部	II 2
128	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	組網B 単形 L. 回り 縁線部	II 2
129	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	L.R. 瓦 0段多条 縁線部	II 9
130	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	結末のある羽状 (R.L. + L.R.) 縁部短 縁線部 0段多条か?	II 12
131	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	組網B 高形 L. 回り 尖形 縁線部	II 2
132	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	L.R. 瓦 縁線部	II 9
133	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	結末のない羽状 L.R. 瓦 + R.L. 瓦 縁線部	II 11
134	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	L.R. 瓦 縁線部	II 9
135	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	羽状復形 L.R. 瓦 縁線部	II 8
136	WB 1 c 壱穴状遺構	礎土	築跡	L.R. 瓦 縁線部	II 9

順号	出土地点	階位等	器種	文様・胎土等	分類
146	VIC 9 b 土坑	埴土	甌鉢	L R 段 口縁部紙文帯	IV 4 a
147	VIC 9 b 土坑	埴土	甌鉢	R L R 段縁	IV 3 a
148	VIC 9 b 土坑	埴土	甌鉢	L R 段 段縁	IV 3
149	VIC 9 b 土坑	埴土	甌鉢	R L 0 段多糸 段縁	IV 3
150	VIC 9 b 土坑	埴土	甌鉢	R L R 段 段縁	IV 3
151	VIC 9 b 土坑	埴土	甌鉢	R L 段	IV 5
152	VIC 9 b 土坑	埴土	甌鉢	無段 L	IV 5
153	VIC 1 c 土坑	埴土	甌鉢	L R 段 段縁	IV c
154	VIA 1 e-1 土坑	埴土	甌鉢	L R	IV
155	VIA 1 e-1 土坑	埴土	甌鉢	L R	IV
157	VIB 0 a-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	総周 B 段部か L 段部 段縁	II 2
158	VIA 1 h 埴土遺跡	埴土	甌鉢	L R 段部 0 段多糸 段縁少	II 9
159	VIA 2 b-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	L R 0 段多糸段部部か? (段いた跡の結束)の段縁 段縁少	II 9
160	VIA 2 h-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	結束のない段縁部か? L R (0 段多糸) R L (0 段多糸) 段部部 段縁	II 11
161	VIA 2 h-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	段の重 R L L 0 段多糸 段縁多	II 4
162	VIA 2 h-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	結束のない段縁 R L 重+段部部 0 段多糸 段縁	II 11
163	VIA 2 h-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	段縁? 段部部 段縁	II 3 a
165	VIA 1 j 埴土遺跡	埴土	甌鉢	表裏に黒文 金帯等含む	1 2 a
166	VIA 1 j 埴土遺跡	埴土	甌鉢	L R 段 段縁	II 9
167	VIA 1 j 埴土遺跡	埴土	甌鉢	L R 0 段多糸 段部部 段縁	II 9
168	VIA 1 j 埴土遺跡	埴土	甌鉢	段縁による区画 L R 段	IV 3
169	VIA 1 j 埴土遺跡	埴土	甌鉢	R L 段 段縁	IV 2
170	VIA 1 j 埴土遺跡	埴土	甌鉢	不定形糸 体部まで広がる 段縁	II 14
172	VIA 3 i-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	R L R 段 口唇部内面片部の区画 段縁	II 10
174	VIA 3 i-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	総周 B 段部 L 段部 段縁	II 2
175	VIA 3 i-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	総周 A 段部 L 段部 段縁多	II 2
176	VIA 3 j-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	L R 段 0 段多糸 段縁多	II 9
177	VIA 3 j-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	R L 段部部 段縁多	II 9
178	VIA 3 j-1 埴土遺跡	埴土	甌鉢	口唇部 総周 L 段部	II 10 b
179	VIB 1 C-3 埴土遺跡	埴土	甌鉢	総周 B L 段部 段部 段縁	II 2

第 8 表 遺構内出土遺物観察表(2) 石器、石製品

順号	出土地点	階位	器種	寸法	重量	材質	用途・産地年代	特徴	分類		
22	VIB 8 j 住居跡	埴土	石距	2.7	4.8	0.5	5.7	縄紋前期前期段部	北上山地 古生界	B1a	
28	VIC 7 a 住居跡	不明	磨石	11.8	8.9	5.9	925	花崗閃緑岩	山部・重茂 中世界		
29	VIC 7 a 住居跡	不明	磨石	12.5	8.4	6.7	1126	閃緑岩	山部・重茂 中世界		
56	VIC 0 a-1 住居跡	埴土	石錘	2.9	1.9	0.6	2.3	粘板岩	北上山地 古生界		
60	VIC 0 a-1 住居跡	埴土	不定形石錘	5	2.5	0.4	6.3	粘板岩質粘板岩	北上山地 古生界	A1b-f	
61	VIC 0 a-1 住居跡	埴土	石斧	6.7	3.7	1.4	57.7	文楽石質粘板岩	北上山地 古生界		
62	VIC 0 a-1 住居跡	柱穴埋土	石錘	7.4	10.8	5.3	280	輝石火山岩質粘板岩	神子火山 新旧期		
63	VIC 0 a-1 住居跡	埴土	磨石	14.5	9.2	8.4	1110	花崗閃緑岩	山部・重茂 中世界		
68	VIC 0 a-2 住居跡	埴土	石錘	28.6	22	6.9	5150	凝灰質砂岩	三輪海岸 古生界		
74	VIA 8 i 住居跡	埴土	磨石	18.7	7.2	3.9	3322	花崗閃緑岩	山部 中世界	欠縁	
84	VIA 8 i 住居跡	埴土	磨石	12.9	7.9	5.1	459	花崗閃緑岩	山部・重茂 中世界		
85	VIA 8 i 住居跡	埴土	石距	26.1	19.5	7.7	5126	花崗閃緑岩	山部・重茂 中世界		
86	VIA 8 i 住居跡	埴土	石距	5.2	2	9.8	5960	閃緑岩	山部・重茂 中世界		
87	VIA 8 i 住居跡	埴土	石距	21.6	16.9	6.7	5050	花崗閃緑岩	山部・重茂 中世界		
94	VIA 0 住居跡	灰層	磨石	7.6	5.5	3	185	花崗閃緑岩	北上山地 中世界		
97	VIB 2 a-1 住居跡	埴土	磨石・磨石	12.8	6.3	3.5	386	花崗閃緑岩	周辺 中世界	一部に磨石痕	
98	VIB 3 a 住居跡 伊付近	灰層	磨石	7.7	5.3	5.1	278	花崗閃緑岩	北上山地 中世界		
99	VIB 3 b 住居跡 伊付近	灰層	磨石	15.0	11.3	13.0	950	花崗閃緑岩	周辺 中世界	欠縁	
120	VIC 7 c 住居跡	埴土	石錘	10.7	8.9	4.4	510	凝灰質砂岩	三輪海岸 古生界		
127	VIB 1 c 住居跡	灰層	磨石	4	4.2	0.8	16.4	粘板岩	北上山地 中世界	表面磨石痕	
138	VIB 1 c 住居跡	埴土	石錘	1.6	1.3	0.5	0.5	凝灰質粘板岩	北上山地 古生界	先欠縁・凹縁	0Ab
139	VIB 1 c 住居跡	埴土	石錘	4.6	1.6	0.5	2.9	凝灰質粘板岩	北上山地 古生界		A1b7
140	VIB 1 c 住居跡	埴土	石錘	2.4	4.9	0.6	5.3	粘板岩	北上山地 古生界		B2a

141	VB 1 c 型穴状遺跡	礫土	不定形	4.5	3.9	1.1	10.8	龍沢百動板石	北上山地	古生界	1割壁を加工	
142	VB 1 c 型穴状遺跡	礫土	尖形礫か	14.2	4.4	1.3	23.7	チャート質板岩	北上山地	古生界	基部、先端欠損	
143	VB 1 c 型穴状遺跡	床面	礫石	13.5	7.2	4.2	630	花崗閃緑岩	周辺	中生界		
144	VB 1 c 型穴状遺跡	礫土	礫石	14	6.3	4.3	355	花崗閃緑岩	北上山地	古生界	隙間の敷設が最も顕著、ほぼ全面使用	
145	VB 1 c 型穴状遺跡	礫土	礫石	10.7	5.2	4.8	278	花崗閃緑岩	周辺	中生界		
156	VB 1 b-2土坑	不明	礫石	15.6	13.9	5.5	2030	花崗閃緑岩	山田・東屋	中生界		
164	VA 3 b-1向土遺跡	礫土	石彫	0.13	2.2	0.9	0.9	粘板岩	北上山地	古生界	先鋒欠損部間欠欠損い消滅	0A2
171	VA 1 土遺跡	礫土	石彫	2.2	1.6	0.4	(1)	粘板岩	北上山地	古生界	先鋒欠損部間欠欠損い消滅	0Aa
173	VA 1 土遺跡	VI層	石彫	3.1	5.9	0.5	8	粘板岩	北上山地	古生界	打点はつまみに加工	3C2
182	II B 4 b 住居跡	床面	礫石	19.8	8.3	1.8	440		北上山地	古生界		

第7表 遺構内出土土物観察表(3) 土師器

内観%	出土位置	鋪位	層位	外部調整		内部調整		造 量 (cm)			使用	備 考
				口縁部	体 部	口縁部	体 部	口径	底径	器高		
180	II B 4 b 住居跡	床面	要	ココナデ	ヘラズリ	ココナデ	ヘラナデ	15.1	8.2	15.3	無	胎土に砂粒を多く含む
181	II B 4 b 住居跡	床面	要	ココナデ	ヘラズリ	ココナデ	ナデ	11.8~12.6	7.4	13.2	無	基部木炭層の上からナデ、口縁部外面敷設板木。胎土に砂粒を多く含む
183	II B 4 b 住居跡	床面	要	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	21.8	-	(30, 8)	無	外面に輪飲み痕が明確に残る
186	VA 3 b 住居跡	カマド	坪	ココナデ	ココナデ	ココナデ	ココナデ	径14.0	-	-	有	
187	VA 3 b 住居跡	カマド	坪	-	-	-	高部ヘラズリ	-	5.2	-	有	胎土未切り、体部下層へ底縁縁沿を半周しヘラズリ再調整
188	VA 3 b 住居内土坑	礫土	高台付坪	ココナデ	ココナデ	ココナデ	ヘラズリ	15.6	高台径7.9	6.7	有	胎土未切り
189	VA 3 b 住居跡	カマド	坪	ココナデ	ココナデ	ヘラズリ	ヘラズリ	径14.7	-	-	有	胎土に砂粒を多く含む
190	VA 3 b 住居内土坑	礫土	坪	ココナデ	ココナデ	ココナデ	ヘラズリ	径15.4	-	-	有	
191	VA 3 b 住居跡	礫土	-	-	ココナデ	-	高部ヘラズリ	-	径6.0	-	有	胎土未切り後再調整
192	VA 3 b 住居跡	礫土	坪	ココナデ	ココナデ	ココナデ	ヘラズリ	-	-	-	有	内面着色処理
193	VA 3 b 住居跡	カマド	要	ヘラズリ	ヘラズリ	ココナデ	ココナデ	-	径5.4	-	有	
194	VA 3 b 住居跡	礫土	小覆	ココナデ	ヘラズリ	ココナデ	ヘラズリ	-	-	-	無	胎土に砂粒を多く含む
195	VA 3 b 住居跡	礫土	小覆	ココナデ	ココナデ	ココナデ	ココナデ	径4.9	4.1	径7.0	有	胎土未切り直前にヘラ留ス(7)内外面上半に付着
196	VA 3 b 住居内土坑	礫土	要	-	ヘラズリ	-	ハケ目	-	7.5	-	無	胎土に砂粒を多く含む
197	VA 3 b 住居跡	礫土	要	-	ヘラズリ	-	ナデ	-	8.0	-	無	胎土に砂粒を多く含む
205	VA 1 d 住居跡	礫土	坪	ココナデ	ココナデ	ヘラズリ	ヘラズリ	径15.8	径6.4	5.7	有	胎土未切り無調整
206	VA 1 d 住居跡	礫土	坪	-	ココナデ	-	ヘラズリ	-	7.9	-	有	胎土未切り無調整
209	VA 1 d 住居跡	礫土	要	-	ココナデ	-	ココナデ	-	7.2	-	有	胎土未切り
213	VA 1 d 住居跡	上層	要	ココナデ	ココナデ	ココナデ	ココナデ	径13.8	-	-	有	体部中に最大径
214	VA 1 d 住居跡	上層	要	ココナデ	ヘラズリ	ココナデ	ヘラズリ	径11.6	-	-	無	
216	VA 1 d 住居跡	礫土	要	ココナデ	ココナデ	ココナデ	ヘラズリ	径10.6	-	-	有	体部中に最大径
217	VA 1 d 住居内土坑	礫土	要	ココナデ	ヘラズリ	ココナデ	ヘラズリ	径10.0	-	-	無	外面に輪飲み痕が明確に残る

第8表 遺構内出土土物観察表(4) 須恵器

内観%	出土位置	鋪位	層位	外部調整		内部調整		造 量 (cm)			備 考	
				口縁部	体 部	口縁部	体 部	口径	底径	器高		
198	VA 3 b 住居跡	床面	要	ココナデ	ヘラズリ	ココナデ	ココナデ	-	-	-	有	口縁部一体部
199	VA 3 b 住居跡	礫土	要	-	ココナデ	-	ココナデ	-	-	-	有	体部破片
200	VA 3 b 住居跡	礫土	要	ココナデ	-	ココナデ	-	-	-	-	有	口縁部
201	VA 3 b 住居内土坑	礫土	要	ココナデ	-	ココナデ	-	径5.2	-	-	有	口縁部
202	VA 3 b 住居跡	礫土	-	-	ヘラズリ	-	-	-	-	-	有	体部
204	VA 3 b 住居跡	カマド	要	-	ココナデ	-	ココナデ	-	-	-	有	ナデ目目は体部上半と下層に残る

第9表 遺構内出土土物観察表(5) 土製品(羽口を除く)

内観%	出土位置	層位	層位	計 量 造 量 (cm)				調 整		備 考
				残存長	幅	最大内径	最小内径	外 面	内 面	
184	II B 4 b 住居跡	カマド内	支脚	14.2	9.6	2.9	2.2	ナデ、オサエ	磨技工具	
207	VA 1 d 住居跡	カマド内	支脚	6.0	13.0	-	-	ナデ	-	
208	VA 1 d 住居内土坑	礫土	支脚	14.2	9.6	5.3	4.0	ナデ、オサエ	ナデ、オサエ	内外面ともに輪飲み痕が明確に残る

第10表 遺構内出土土物観察表(6) 羽口

No	出 土 地 点	層位	残存部外径	残存長	最大内径	最小内径	外 面 調 整	内 面 調 整	残存位置	調整角度	備 考
185	II B 4 b 住居跡	床面	7.9	12.0	3.2×3.0	3.0	ナデ	磨技工具	先端部	20°	胎土、先端部磨り下り平造

203	ⅡA3b住居跡	埴土	(8,9)	11.4	—	—	竪穴基礎部	—	先地層	—	熱灰色土
210	ⅡA1d住居跡	不明	5,9~6,8	16.3	3.2×3.0	3.0	ナブ階段部	心射打貫8番	先地層	30~32	層5,1~3,2cm厚部、土層に木炭片付。
211	ⅡA1d住居跡	不明	8,0~6,5	13.5	3.1	2.5×2.6	ナブ	心射打貫8番	先地層	28~30	先地層の層、直下4.6。下層に自然砂付。層厚2.6~3.1cm
212	ⅡA1d住居跡	不明	8,2~6,8	21.0	—	2.7×2.4	ナブ	—	先地層	—	層解して先地層、土層に木炭片付。層厚薄
215	ⅡA1d住居跡	不明	5,9~6,1	10.2	—	2.7	—	—	先地層破片	—	層解して先地層上面に付着物
230	ⅡA1d住居跡	不明	—	4.2	—	—	—	—	先地層破片	—	先地層の層厚部分
219	ⅡC1f灰層	埴土	7,9~6,0	22.1	4,8×2,9 (狭長部)	2,8×2,7 (先地層)	ナブ 階段部	ナブ心射打貫8番	床厚部	57	層厚薄、一部砂付のみ込込、焼酎砂付、土層に木炭片付。層厚2.6~3.1cmに焼酎砂付
220	d砂	埴土	7,0~7,5	19.5	3.0	3.0	ナブ	棒状工具部1本	先地層	60	層厚薄、上面焼酎砂付、熱灰色
221	d砂	埴土	6,3~6,7	15.7	2.8	2.6	狭い溝部 (スチカ)板	心射打貫8番	先地層破片	62	層厚薄、白色砂付層厚1.8の先地層破片(下部が2層ある)焼酎砂付(下部が2層厚部付)
222	g砂階段部	埴土	7,9~6,9	15.5	3.7×2.9	—	ナブ 階段部3本付	棒状工具部	先地層破片	30~35	層厚薄、先地層解し、直下4.4、上面焼酎砂付、下面白色砂付層、熱灰色
223	ⅡC1e開口部で層2		6,5~6,9	18.1(14.0)	3.3×2.8	1.7×2.0	狭い溝部 (スチカ)板	心射打貫8番	先地層破片	30	ⅡC1e開口部付層、上面焼酎砂付、下面白色砂付層
224	ⅡC1e開口部で層2		8,1~6,8	12.8	3.8	3.8	ナブ	心射打貫8番	先地層破片	—	層厚薄、熱灰色
225	g砂階段部	埴土	7,9~6,6	15.6	3.2×3.2	3.0×2.8	ナブ	心射打貫8番	先地層破片	20	層厚薄、上~真面に焼酎砂付、下面に自然砂付層
226	焼酎砂付d砂北側	埴土	6,9~6,0	13.8	3.5×3.2	3.0	ナブ	心射打貫8番	先地層破片	40	層厚薄、上面焼酎砂付層、下面に自然砂付層
227	ⅡC1e開口部で層2		8,6~10,8	19.8	4.4(溝部)	3.1(先地層)	ナブ	心射打貫8番	床厚部	27	層厚薄、上面焼酎砂付層
228	2号土坑	埴土上層	7,3~7,6	20.4	3.2×2.9	3.1×2.6	ナブ	心射打貫8番	先地層破片	50	層厚薄、一部砂付のみ込込、上面焼酎砂付層
229	焼酎砂付	焼酎砂付	6,9~6,6	33.0	3.9(溝部)	3.3×3.2	ナブ	心射打貫8番	床厚部	—	層厚薄、一部ガラス化、熱灰色
229	h砂	埴土	7,0	5.4	2.9	—	—	—	先地層破片	—	焼酎砂付層、全体に黒灰色
229	c砂	埴土	—	8.8	2.1	—	ナブ	心射打貫8番	破片	—	層1.0部、層厚3.5cm
229	e砂	埴土	—	8.4	2.8	2.8	棒状工具部	先地層破片	—	—	焼酎砂付層
229	f砂	埴土	7,7~6,5	18.2	3.1	3.1	心射打貫8番	先地層破片	48	層厚薄、上面焼酎砂付、熱灰色	
229	g砂階段部	埴土	6,3	9.8	2.9	2.8	ナブ	心射打貫8番	破片	—	—
229	g砂階段部	埴土	7,7~6,2	11.8	3.8	2.5×2.9	ナブ	棒状工具部	先地層破片	40~55	層厚薄、一部ガラス化、熱灰色
229	焼酎砂付	焼酎砂付	—	8.0	3.0	2.8	ナブ	心射打貫8番	先地層破片	—	熱灰色
229	焼酎砂付	焼酎砂付	7,4~7.6	10.7	3.0	3.0	ナブ階段1本	心射打貫8番	先地層破片	—	内照熱灰色
229	ⅡC1e開口部で層1		6,1~7,5	16.0	3.0×2.8	3.2×3.0	竪穴基礎1本	先地層は辺	35~57	層厚薄、下面に焼酎砂付層、焼酎砂使用付	
229	ⅡC1e開口部で層1		7,1~8.4	11.9	4.1×3.6	1.8	—	—	先地層破片	22	土層と下層の層が輪縁に見える、上面3.3cm、下面1.0cm、層厚薄、上面焼酎砂付層、底面土層に黒色土
229	ⅡC1e開口部で層1		8,1	12.2	3.8	3.2×3.1	—	—	先地層破片	—	層厚薄、上面焼酎砂付層、土層に黒色土
229	ⅡC1e開口部で層2		8,6~8.2	10.5	4.2×3.8	3.4×3.2	階段部	心射打貫8番	破片	—	—
229	ⅡC1e開口部で層2		8,2~6.8	15.8	2.6	2.9	ナブ	心射打貫8番	先地層破片	80~88	熱灰色、熱灰色、中~硬質
229	ⅡC1e開口部で層2		8,6~8.1	18.0	2.9×2.5	3.1×2.9	ナブ	心射打貫8番	先地層	32~45	層厚薄、熱灰色
229	ⅡC1e開口部で層2		8,1~8.5	14.2	3.7	3.6	そいばように平らな面あり	—	先地層破片	—	層1.0土、ひび割れあり
229	ⅡC0e灰層	埴土	8,3~8.5	9.3	3.6	3.6	—	—	先地層破片	—	層厚薄、一部ガラス化、軟質
229	ⅡC1c灰層	埴土	6,7~7.7	10.9(8.0)	3.5×3.3	3.7×3.5	—	棒状工具部	先地層破片	38	下面に層厚薄、一部ガラス化、上面に焼酎砂付層、下面平層
229	ⅡC1c灰層	埴土	—	9.5	3.6	3.0	ナブ	棒状工具部	先地層破片	—	層厚薄、下面平層
229	ⅡC1f灰層	埴土	7,7	9.0	3.5	3.1	—	—	先地層破片	35	層厚薄、一部砂付のみ込込、焼酎砂付層
229	ⅡC1f灰層	埴土	7.8	7.5	3.8	2.8	棒状工具部(1本)階段1本	太い棒状工具部(1本)	破片	—	—
229	ⅡC2g灰層	埴土	7.5	11.6	2.7	2.4	ナブ	心射打貫8番	先地層破片	—	層厚薄、上面焼酎砂付層、熱灰色
229	ⅡC1f3ブロック		7.8	10.6	3.4	3.7×3.6	—	棒状工具部	先地層破片	—	土層と下層に焼酎砂付、断面は断面を損点とする層厚3.5cm
229	ⅡC1f6ブロック		7,1~8.5	12.3	3.7×3.6	3.2	ナブ	棒状工具部	先地層破片	42~45	層厚薄、上面焼酎砂付層、下面平層

第11表 遺構内出土遺物観察表(7) 鉄滓、砂鉄、鉄碎系遺物

新鉄鋼遺物一覽表

△は鉄系系遺物の酸化物

No.	出 土 地 点	層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量	磁石	メッシュ	色調	そ の 他
230	ⅤA 1 d 住居跡	不明	鉄滓(砂鉄)小塊	16.8	16.7	10.0	1.716g	3	—	黒	伊壁一部付着、上面(凸)が丸形下面(凹)が陥状、木炭かみこむ
231	ⅤA 1 d 住居跡	不明	鉄滓(砂鉄)小塊	17.6	16.7	10.5	1.641g	3	—	黒	伊壁一部付着、上面(凸)が丸形下面(凹)が陥状、木炭かみこむ
232	ⅤA 1 d 住居跡	不明	鉄 碎 滓	13.1	6.5	6.7	376g	4	—	黒	下面が陥一底陥状、角縁あり
233	ⅤA 1 d 住居跡	不明	鉄 碎 滓	11.2	8.4	6.0	397g	4~5	—	灰褐~黒	伊壁付着、角縁あり、上面凹凸
234	ⅤA 1 d 住居跡	不明	鉄滓(砂鉄)小塊	9.5	7.5	3.7	165g	4	—	暗赤黒	伊壁付着(にぶい赤黒)
236	g 砂	埋土	鉄滓(砂鉄)小塊	14.0	12.0	4.4	610g	8	○	灰	伊壁付着(あるいは伊壁)磁石付の可能性がある
237	2号土坑	埋土	鉄滓(砂鉄)小塊	12.9	8.4	8.8	930g	7	○	黒	伊壁、伊壁付着
238	g 砂	埋土	鉄滓(砂鉄)小塊	8.5	5.2	5.1	306g	7	○	黒	表面白色鉄付着
239	2号土坑	埋土	鉄滓(砂鉄)小塊	9.5	7.8	5.2	184g	6	○	にぶい黒	表面白色鉄付着
240	b 砂	埋土	伊壁跡か鉄滓(砂鉄)小塊	7.4	7.0	3.6	107g	6	●	褐色	表面白色鉄付着
241	e 伊壁跡部	埋土	鉄系系遺物	6.7	6.7	3.9	116g	7	△●	褐色	炭の細片付着
242	f 伊壁跡部	埋土	鉄滓(砂鉄)小塊	5.1	4.6	1.3	39g	7	○	黒	伊壁付着
243	d 砂	埋土	鉄滓(砂鉄)小塊	6.9	5.2	1.8	63g	7	○	暗黒	伊壁付着、磁石付の可能性がある
244	d 砂	埋土	鉄滓(砂鉄)小塊	5.9	5.5	1.8	70g	6	○	黒	伊壁付着の砂鉄、磁石付の可能性がある
245	g 砂	埋土	鉄系系遺物	3.8	2.6	1.8	19g	6	○	暗赤黒	磁石付
246	f 砂	埋土	鉄系系遺物	6.1	3.7	2.4	41g	7	○	黒	炭の細片、鉄滓(砂鉄)付着
247	g 砂	埋土	鉄系系遺物	7.0	3.9	4.6	66g	7	△○	黒	鉄滓(砂鉄)付着
248	f 伊壁跡部	埋土	鉄 出 滓	48.3	17.6	6.8	2,866g	2	—	灰	表面なめらかなでもち状、下面に白色鉄付着、破断面多孔質
249	d 砂	埋土									
250	2号土坑	埋土	伊 内 滓	13.1	10.1	6.4	389g	3	暗黒	白色鉄付着、位置部ガラス化	
251	g 砂	埋土	伊 内 滓	18.6	14.7	8.7	625g	4			表面白色鉄付着
252	g 砂	埋土	鉄 出 滓	16.1	9.5	2.6	421g	2~3		灰	表面白色鉄付着、破断面多孔質、表面陥状
253	f 伊壁跡部	埋土	鉄 出 滓	13.6	4.3	3.2	130g	2		灰	
254	c 伊壁跡部	埋土	鉄 出 滓	17.9	15.0	3.3	641g	3	—	灰	
255	f 伊壁跡部	埋土	伊 内 滓	7.4	5.3	4.2	66g	3			鉄滓(砂鉄)(少)少量付着、表面白色鉄付着
256	2号土坑	埋土	鉄 出 滓	10.6	7.3	3.6	366g	2~3	—	灰	
257	d 砂	埋土	鉄出孔滓	17.2	3.9	4.4	296g	3		灰	棒状、全葉に白色鉄付着、多孔質
258	a 砂	埋土	鉄出孔滓	25.5	4.4	5.0	683g	3	—	灰	棒状、表面陥状、先端部表面白色鉄付着
259	c 伊壁跡部	埋土	鉄 出 滓	5.4	4.5	1.5	79g	4	—	灰	表面白色鉄少量付着、上面凹凸
260	d 伊壁跡部	埋土	鉄滓(砂鉄)小塊	7.3	5.2	2.9	185g	3		黒	もち状
260	d 伊壁跡部	埋土	伊 内 滓	8.0	4.3	3.6	97g	7	—	暗黒	木炭かみ込み、縦入り付着、表面白色鉄付着

第12表 炭化材樹種同定結果

No.	遺 構	樹種	発 見 箇 所	No.	遺 構	樹種	発 見 箇 所
1	ⅤA 3 b 住	クリ		10	ⅡC 2 b 炭	クリ	
2	ⅡB 4 b 住	クリ	真%12	11	ⅤB 8 f 炭	クリ	
3	ⅡB 4 b 住	クリ	真%13	12	ⅤB 8 f 炭	クリ	
4	ⅡC 3 a 炭	イタヤ		13	ⅤB 8 f 炭	クリ	
5	ⅡC 2 g 炭	クリ	真%13~15	14	ⅤB 8 c 炭	ナラ	埋土%334
6	ⅡC 1 d 炭	クリ		15	ⅡC 2 e 炭鉄伊壁 a 伊壁跡部	ナラ	
7	ⅡC 1 c 炭	クリ		16	ⅡC 2 e 炭鉄伊壁 d 砂	ナラ	
8	ⅡC 8 e 炭	クリ		17	ⅡC 2 e 炭鉄伊壁 c 伊壁跡部	カブタ	
9	ⅡC 2 b 炭	クリ					

第13表 鉄滓、鉄塊系遺物計測表

No	遺構名	重量	磁着度	ノズル形	色調	旧遺構名No	No	遺構名	重量	磁着度	ノズル形	色調	旧遺構名No	
1	a炉	19.54	5	-		9号炉ア	1		24.47	6	-		ク	1
2		36.18	6	-			2	b炉	6.90	5	-		1号炉ケ	1
3	b炉	8.35	4	-		1号炉ア	1		20.12	7	-			2
4		6.70	5	-			2		31.72	7	-			3
5		22.50	4	-			3		28.13	5	-			4
6		7.25	4	-			4		65.51	7	-			5
7		8.05	5	-			5	c炉前底部	27.08	6	-		8号炉ア	1
8		4.96	4	-			6	d炉	8.94	6	-		5号炉ア	1
9		22.69	5	-			7		18.18	7	◎	暗褐		2
10		16.04	4	-			8		8.25	6	-			3
11		12.83	5	-			9		11.13	6	-			4
12		9.75	5	-			10		14.34	6	◎	褐		5
13		7.61	5	-			11		8.30	6	-			6
14		6.15	4	-			12		20.22	7	-			7
15		34.45	6	-			13		10.34	6	-			8
16		35.98	5	-			14		13.15	5	-			9
17		11.83	6	-			15		15.98	5	-			10
18		10.70	6	-		イ	1		14.01	5	-			11
19		6.35	5	-			2		8.28	6	-			12
20		13.00	5	-			3		29.19	6	-			13
21		14.40	5	-			4		62.82	7	◎	暗褐	イ	1
22		19.75	4	-			5		55.70	5	-			2
23		7.25	5	-			6		8.00	6	-		7号炉ア	1
24		17.83	5	-			7		11.15	5	-			2
25		11.58	5	-			8		16.74	6	-			3
26		35.30	7	○	暗褐		9		13.31	5	-			4
27		30.94	7	-			10		11.46	5	-			5
28		11.87	5	-			11	d炉	21.60	6	-		7号炉	6
29		23.62	6	-			12		32.02	6	-			7
30		39.51	5	-			13		20.00	6	-		イ	1
31		59.74	4	-			14		19.56	6	-			2
32		177.64	5	-			15		15.59	5	-			3
33		21.07	5	-		1号炉ウ	1		22.60	5	-			4
34		14.80	6	-			2		17.69	5	-			5
35		4.84	4	-			3		16.24	6	-			6
36		31.11	5	-			4		18.48	5	-			7
37		18.35	6	-		エ	1		19.56	6	-			8
38		12.10	6	-			2		22.33	7	-			9
39		8.19	5	-			3		27.74	6	-			10
40		6.11	5	-			4		51.29	4	-			11
41		4.50	3	-			5		23.05	7	-			12
42		7.45	5	-			6		49.91	6	-			13
43		8.57	5	-		オ	1		48.30	6	-			14
44		10.26	5	-			2		79.93	7	◎◎	橙		15
45		9.19	4	-			3		16.43	6	-			16
46		9.94	4	-			4		12.37	5	-			17
47		14.24	5	-			5		12.69	5	-			18
48		31.36	6	○	暗褐		6		13.40	5	-		ウ	1
49		31.65	5	-			7		15.93	6	-			2
50		107.75	5	L●	橙		8		15.50	6	-			3
51		5.70	5	-		カ	1		19.17	7	-			4
52		17.86	6	-			2		43.31	6	-			5
53		28.19	6	-			3		45.29	7	-			6
54		49.44	6	-			4		30.82	6	-			7
55		4.18	5	-			5		27.63	5	-			8
56						キ	1		279.27	7	-			9

No.	遺構名	重量	磁気度	メソソ記	色調	旧遺構名No.	No.	遺構名	重量	磁気度	メソソ記	色調	旧遺構名No.	
112	d 炉	8.02	5	—		7号炉エ	1		10.25	7	—		2	
113		11.23	5	—			2		15.14	6	—		3	
114		52.73	7	—			3		21.84	5	—		4	
115		10.87	5	—		カ	1		31.07	7	—		5	
116		9.46	7	—			2		24.31	7	—	エ	1	
117		9.67	5	—			3		44.56	6	—		2	
118		13.95	5	—			4							
119		11.27	6	—			5	e 炉	11.03	5	—		6号炉ア	1
120		18.87	6	—			6		56.23	7	○○	暗褐	2	
121		12.54	6	—			7		9.87	5	—		イ	1
122		19.72	5	—			8		19.87	5	—		ウ	1
123		11.39	5	—			9		8.32	5	—		エ	1
124		17.90	5	—			10		24.11	5	—		2	
125		14.91	5	—			11		13.69	5	—		オ	1
126		14.27	6	—			12		13.75	5	—		2	
127		16.54	6	—			13		6.55	5	—		カ	1
128		16.92	6	—			14		6.91	3	—		2	
129		27.80	5	—			15		9.43	5	—		3	
130		122.61	6	—			16		11.83	6	—		4	
131		12.87	5	—		キ	1		8.61	5	—		5	
132		142.81	6	—			2		9.04	3	—		6	
133		5.36	5	—		ク	1		12.17	5	—		7	
134		8.83	5	—		ケ	1		8.11	6	—		8	
135		9.66	5	—			2		45.27	6	○○○	暗褐	9	
136		19.09	6	—			3		35.22	5	—		1	
137		13.38	6	—			4		9.84	5	—		1	
138		16.38	6	—			5		20.67	5	—		1	
139		28.38	6	—			6		12.94	6	—		1	
140		20.24	5	—			7		34.94	7	—		2	
141		52.39	6	—			8							
142		16.43	5	—		ス	1	e 炉前庭部	17.89	6	—		16号炉ア	1
143		14.97	6	—			2		15.84	5	—		2	
144		26.37	7	—			3		12.83	6	—		3	
145		11.89	5	—			4		14.41	6	—		4	
146		12.63	5	—			5		21.39	5	—		5	
147		34.03	6	○	橙		6		13.45	6	—		6	
148		18.23	5	—			7		17.06	7	—		7	
149		27.49	6	—			8		16.65	6	—		8	
150		23.88	5	—			9		18.00	5	—		9	
151		17.11	6	—		ヌ・セ	1		28.69	6	—		10	
152		19.50	6	○	褐		2		19.06	5	—		11	
153		26.53	6	—			3		21.12	6	—		12	
154		23.18	5	○	褐灰		4		19.63	5	—		13	
155		16.62	5	—			5		24.01	5	—		14	
156		24.98	5	—			6		19.91	5	—		15	
157		47.15	6	—			7		12.05	5	—		16	
158		51.76	6	●	褐		8		25.76	5	—		17	
159		42.38	7	○	明褐		9		45.27	5	—		18	
160		42.19	6	—			10		39.44	7	—		19	
161		29.39	6	—			11		66.50	7	—		20	
162		54.81	6	—			12		115.03	7	○	褐	21	
163		105.46	8	○	褐		13		91.75	6	—		22	
164		36.08	5	—			14		239.22	6	—		23	
165		69.81	6	○	褐灰		15		12.27	7	—		イ	1
166		24.59	6	—		ソ	1		13.92	5	—		2	
167	d 炉前庭部	10.58	5	—		15号炉	1		223	14.69	5	—	3	
168		346.00	7	—			2		224	20.69	5	—	4	
169		15.79	7	—		ウ	1		225	16.55	5	—	5	
									226	20.03	6	—	6	

No	遺構名	重量	磁器度	ナメズ	色調	旧遺構名No	No	遺構名	重量	磁器度	ナメズ	色調	旧遺構名No
227	e 炉前底部	37.38	6	—		イ 7	284		11.19	5	—		2
228		45.27	6	—		8	285		32.82	7	—		3
229		14.81	5	—		ウ 1	286		43.38	6	—		4
230		17.97	5	—		2	287		32.71	7	—		5
231		16.34	6	—		3	288		16.56	7	○	暗褐	オ 1
232		17.66	5	—		4	289		8.86	5	—		1
233		11.89	4	—		5	290		11.61	4	—		2
234		16.61	6	—		6	291		11.78	5	—		3
235		26.99	7	—		7	292		15.30	6	—		4
236		12.56	5	—		8	293		18.42	6	◎	褐	5
237		18.61	5	—		9	294		21.06	6	—		6
238		19.99	6	—		10	295		28.99	7	○	褐色	7
239		29.97	5	—		11	296		22.11	6	—		8
240		29.76	5	—		12	297		70.51	6	●	褐	9
241		34.25	6	—		13	298		6.87	5	—		1
242		28.83	5	—		14	299		6.82	4	—		2
243		44.91	6	—		15	300		8.95	5	—		3
244		8.08	5	—		エ 1	301		14.05	5	—		4
245		16.40	6	—		2	302		78.23	7	—		5
246		19.32	5	—		3	303	f 炉前底部	8.22	5	—		1
247		24.26	5	—		4	304		15.41	5	—		2
248		98.35	6	—		5	305		16.10	5	—		1
249		16.34	5	—		オ 1	306		6.78	5	—		1
							307		7.59	5	—		2
250	f 炉	12.98	6	—		13号炉ア	308		12.94	6	—		3
251		18.01	6	—		2							
252		16.25	5	—		3	309	g 炉	15.40	6	—		
253		22.47	6	—		4	310		14.53	4	—		11号炉ア
254		15.24	6	—		5	311		18.55	6	◎	暗赤褐	2
255		14.63	6	—		6	312		22.62	6	○	暗褐	3
256		19.12	5	—		7	313		16.05	6	—		4
257		28.35	7	—		8	314		26.07	6	●	暗褐	5
258		45.84	6	—		9	315		14.20	4	—		6
259		78.57	6	—		10	316		14.72	5	—		7
260		73.86	7	—		11	317		17.60	6	—		8
261		52.29	6	◎	暗褐	イ 1	318		28.02	6	—		9
262		8.85	5	—		ウ 1	319		14.61	5	—		10
263		13.64	5	—		2	320		19.96	5	—		11
							321		22.39	6	—		12
264	f 炉前底部	32.92	7	—		2号炉ア	322		29.02	6	—		13
265		7.76	5	—		ウ 1	323		34.25	7	●	暗褐	14
266		9.81	5	—		2	324		38.30	7	—		15
267		11.33	5	—		3	325		25.97	6	—		16
268		9.32	5	—		4	326		33.13	6	○	褐	17
269		13.27	5	—		5	327		39.20	4	—		18
270		11.56	5	—		6	328		58.64	7	—		19
271		8.61	4	—		7	329		150.83	6	○	褐	20
272		11.24	5	—		8	330	g 炉	32.70	7	—		11号炉イ
273		22.16	6	—		9	331		61.89	6	—		2
274		22.51	5	—		10	332		205.81	7	○	橙	3
275	f 炉前底部	32.88	6	—		2号炉	333		157.51	7	—		4
276		20.12	5	—		11	334		640.00	7	—		5
277		22.90	6	○	橙	13	335		23.12	5	—		ウ 1
278		8.31	5	—		14	336		33.37	7	◎	暗褐	2
279		25.51	6	—		15	337		54.80	7	○	褐	3
280		16.29	4	—		16	338		34.53	7	—		4
281		40.91	7	○	褐	17	339		27.34	6	—		5
282		60.36	7	—		18	340		28.32	7	—		6
283		12.78	6	—		エ 1	341		31.51	6	—		7

No.	遺構名	重量	磁器度	形状	色調	旧遺構名No.	No.	遺構名	重量	磁器度	形状	色調	旧遺構名No.
342		35.43	6	—			400		34.15	7	—		8
343		69.73	7	—			401		31.87	5	—		9
344		43.29	5	—			402		24.10	7	—		10
345		57.63	6	—			403		26.80	7	—		11
346		70.16	7	—			404		38.17	7	—		12
347		82.32	7	—			405		24.03	7	—		13
348		87.12	6	—			406		22.72	6	—		14
349		65.65	7	○	褐		407		33.12	6	—		15
350		88.31	6	—			408		42.56	6	—		16
351		405.00	6	—		○17	409		28.72	6	—		17
352		15.80	7	—		エ 1	410		36.82	7	—		18
353		16.59	6	—		2	411		24.07	5	—		19
354		15.04	3	—		3	412		40.61	6	—		20
355		15.69	6	—		4	413		84.09	6	—		21
356		17.27	6	—		5	414		114.19	6	—		22
357		17.87	6	—		6	415		865.00	6	—		23
358		46.44	7	●	褐	7							24
359	Ⅹ伊	39.03	6	—		11号伊エ	416	2号土坑	50.83	6	—		10号伊ア
360		38.17	6	—		8	417		46.87	7	—		1
361		52.33	5	—		9	418		20.40	5	—		2
362		49.22	6	—		10	419		25.90	7	—		イ 1
363		67.71	6	—		11	420		40.01	6	—		ウ 1
364		115.25	7	—		12	421		61.46	6	—		2
365		197.30	7	—		エ 13	422		16.45	6	—		3
366		610.00	8	◎	灰	14	423		13.28	6	—		エ 1
367		249.89	6	—		オ 1	424		17.50	5	—		2
368		13.23	6	—		キ 1	425		22.30	6	○	橙	3
369		9.02	5	—		ク 1	426		22.42	6	—		4
370		12.49	5	—		2	427		28.24	6	—		5
						3	428		40.25	6	—		6
371	Ⅹ伊前庭部	17.97	6	—		14号伊ア	429		37.58	6	—		7
372		18.61	5	—		1	430		35.55	6	—		8
373		25.54	5	—		2	431		25.53	6	○	明褐	9
374		36.14	5	—		3	432		27.79	7	—		10
375		1185.00	6	○○	褐	4	433		42.48	7	—		11
376		60.81	6	—		イ 01	434		55.33	6	○	明褐	12
377		17.26	6	—		2	435	2号土坑	43.06	6	—		13
378		20.16	6	—		ウ 1	436		61.24	6	—		10号伊14
379		21.25	6	—		2	437		126.96	6	○○	明褐	15
380		88.34	6	—		3	438		100.94	5	—		16
381	Ⅹ伊前庭部	22.13	6	—		4	439		118.26	6	—		17
382		21.09	5	—		14号伊エ	440		184.15	6	○	にょい黄褐	18
383		15.99	5	—		1	441		168.25	6	—		19
384		19.79	4	—		2	442		400.00	5	—		20
385		19.33	4	—		3	443		930.00	7	○	褐	21
386		27.75	4	—		4	444		15.89	6	—		22
387		390.00	6	—		6	445		28.74	6	—		オ 1
388		13.93	5	—		07	446		22.74	4	—		2
389		13.30	4	—		1	447		23.64	5	—		3
390		17.34	3	—		2	448		46.74	6	●	明褐	4
391		23.45	5	—		3	449		55.14	6	◎	褐	5
392		31.56	6	—		4	450		75.03	6	—		6
393		27.63	6	—		コ 1	451		52.55	6	—		7
394		18.34	6	—		2	452		12.57	6	—		カ 1
395		14.83	5	—		3	453		62.70	6	—		1
396		15.39	6	—		4	454		18.15	5	◎	褐	2
397		15.92	5	—		コ 5	455		25.02	6	—		イ 1
398		35.04	6	—		6							2
399		19.73	6	—		7							

V 遺構外の出土遺物

平成5年度と6年度調査で出土した遺物は土器、石器類がコンテナ(41.5×31.5×29.0cm大)で約60箱、羽口、炉壁が約2箱、鉄滓が約1.5tである。遺構外の遺物も土器、石器などは圧倒的に縄文時代に属するものが多い。そのほか土師器、須恵器がある。土製品は縄文時代に属する3点が出土している。鉄滓は飛び地で1006.1kg、調査区中央の谷筋から16.5kgで、計1022.6kg出土した。銭は2点、鉄製品は小片も含めると4点の出土であるが、1点のみ掲載した。

1. 土器、土製品

土器の中では、縄文時代前期の土器が多数を占め、次いで縄文時代中期、土師器、須恵器、縄文時代早期、縄文時代後期、晩期の土器となっている。

(1) 縄文時代の土器

縄文時代中期の住居跡が多く検出されている調査区北側の尾根の上では、中期の土器が数多く出土し、谷筋では前期の土器が多かった。また、飛び地であるⅠ区、Ⅱ区では土器の出土量はごく少ない。

土器の分類は遺構内、遺構外を問わず同一とし次のように分類した。遺構外出土遺物は分類に沿って掲載した。

- 第Ⅰ群土器 細隆起線文、条痕文を有する縄文時代早期末の土器
- 第Ⅱ群土器 胎土に繊維を含む縄文時代早期末から前期前葉の土器
- 第Ⅲ群土器 胎土に繊維を含まない縄文時代前期の土器
- 第Ⅳ群土器 縄文時代中期の土器
- 第Ⅴ群土器 縄文時代後期の土器
- 第Ⅵ群土器 縄文時代晩期の土器
- 第Ⅶ群土器 土師器
- 第Ⅷ群土器 須恵器

第Ⅰ群土器 細隆起線文、条痕文を有する縄文時代早期後半の土器

縄文時代早期後半に位置づけられる土器群である。内外面につけられる文様で次のとおり細分した。本群の土器の器厚は薄く、4～7mm程度である。胎土に繊維は含まない。細かい砂粒を含むものと含まないものがある。砂粒をほとんど含まない土器は内外面共に鈍い黄褐色を呈する。焼成はⅡ群土器に比すれば一般に良い方であるが、胎土に砂粒を含まないものはやや軟質である。

Ⅰ群Ⅰ類 外面にミミズ腫れのような細い隆起線文で幾何学的な文様を施す土器である。

細い隆起
線文

本類はさらにa～cに分けられる。

Ⅰ群Ⅰ類a(第74図1～13) 外面に細隆起線文、内面に条痕文が顕著な土器

4～13は細隆起線文を施す前に施文された条痕文が顕著にあらわれている。1～3は口縁部であるが、外面の条痕文は4～13ほど顕著ではない。色調は1、7、12は内外面ともににぶい

黄褐色を呈する。6、11は内外面とも灰黄褐である。3、4は外面が褐灰、内面が黒褐色を呈する。5、10、2、9は外面がにぶい黄褐あるいは灰黄褐で、内面は黒褐色である。8、13は内外面とも黒褐色である。

これらの土器はおそらく口縁部付近か体部上半の破片が多いと考えられる。

I群1類b(第74図16~21)外面に細隆起線文が施され、内面に条痕文が施されるが、条痕文が顕著にあらわれないもの。

これらの土器の内面には条痕文が施されるが、凹凸があまりなくナデ程度にしか見えないものと、条痕文が認められないものがある。色調は裏面がやや黒褐色を帯びる土器16、19、20と、にぶい黄褐色を帯びる土器17、18、21がある。

I群1類c(第74図14、15)外面に細隆起線文が施され、口縁部上端に浅い刺突が施されるもの。いずれも口縁部破片で、非常に浅い刺突が規則的に並ぶ。

I群2類外面に条痕文を有する土器群である。内面の施文の状況によってさらに分けられる。

I群2類a(第74図22~30)内外面とも条痕文が顕著なもの。

24、27は薄手で、内外面とも褐灰である。23、26は胎土にガラス質で光沢のある混入物がある。22は口縁部上端に縦方向の微妙な細隆起線文状の凸部があるが、ごくわずかであったため、本群に含めた。25、29、30は外面がやや赤みを帯びた褐色で、内面は褐色あるいは黒褐色である。これらの土器と26はやや厚手で、他の緻密な印象の土器とは一線を画する。

I群2類b(第74図、31)外面の条痕文は顕著であるが、内面に施された条痕文は顕著にあらわれないもの。

31は内面の条痕は認められないものの、胎土、焼成、色調、器厚、外面条痕の状態などの点でI群2類aの25、29、30と共通する点の多い土器である。同一個体で異なる部位の破片かもしれない。外面は赤みを帯びた褐色、内面は黒褐~褐色である。

第II群土器 胎土に繊維を含む縄文時代早期末から前期前葉の土器

本群は胎土に繊維を含む土器を一括した。早期末から~前期前葉に位置づけられる土器群であるが、ほとんど破片の資料でもあり、この時代幅の中での時期を決定することは困難な土器も含まれている。そこで、施文の原体、口縁部文様体の有無などによって18類に分類したが、時期の異なる土器が同じ分類に含まれている可能性もあると思われる。

II群1類 表裏に縄文を有する土器(第75図、32)

ランダムな 本遺跡での出土は1点のみである。外面、内面共に単節斜縄文を横方向にややランダムに施文する。内面は口縁部のみ施文である。内面の文様帯より下の体部には指頭痕が明瞭である。指頭痕は原体の回転が施される。胎土には繊維を極めて多く含む。早期末に位置づけられる土器と考えられる。

組 縄 II群2類 組縄文が施される土器(第75図33~第76図66、68~第77図97)

組縄文(高橋至1992)が施される土器を一括した。単節の組縄A、B、複節のA、Bに大別されるが、A、Bどちらの組み方が判然としないものも多々ある。

33は乳頭状の底部である。34~47は単節の組縄Aと思われる土器片である。口唇部に刺突、指頭状押圧などを施すもの(34~39)、施文しないもの(40~43)、口唇部の外面に施文するも

の(45、46)がある。44は施文せず、口唇部を若干外側に折り返したような形状を呈する。40~43は焼成が良好で、口唇部が平坦に整えられている。45、46は口唇部がやや丸みを帯びる。

48~66は、節の縦方向の列がやや乱れる傾向のあるもので、単節の組縄Bと思われる。口唇部の施文は刺突、指頭状圧痕のほか、縄の回転もある。(48、56)口唇部に施文されないもの(62~64)の中には、上面がきわめて平坦に整えられているもの(63)がある。66は組縄縄文と単節斜縄文の2種の原体を用いて施文された土器である。

68~71は複節の組縄Aと考えられる土器片である。70は他の土器片と断面形が異なり、胴部に膨らみを持ち、やや外反して立ち上がる、本遺跡内では他に類を見ない土器片である。口唇部は棒状工具の斜め圧痕(68)、指頭状圧痕(69)が施される。

72~97は複節の組縄Bと考えられる土器片であるが、83、84は組縄Aの可能性もある。74、75は同一個体である。97は複節の組縄Bに単節斜縄文を組み合わせた土器片である。口唇部には棒状工具による斜め方向からの刺突、指頭状圧痕、縄の回転、棒状工具の側縁を口唇部に直角に押し当てた例(74、75)がある。

II群3類 組紐を回転して施文した土器(第77図98~101)

組紐

組紐の回転を施していると考えられる土器片である。いずれも繊維を含むが他に比してやや繊維の量が少ないようである。口唇部は2例のみであるが、口唇部に施文は認められない。

II群4類 縄の束を回転して施文した土器(第78図102~107)

撚りの異なる縄を束にして施文した土器かと思われる。いずれも単節の縄であるが、0段多
縄の束か?
条か2条のRとLを2本か4本使用している。原体の長さは2cm~3cmである。103はRのみ0段多条か。104~107は繊維が極めて多い。102の口唇部は平坦に整えられている。

II群5類 前々段反撚(非撚り戻し)の縄文原体を施文した土器(高橋重1992)(第78図108~116)

110~112、115は組縄の可能性もあるが、区別できなかった。前々段で同方向の縄を撚り戻さ
ずと同じ方向に撚り合わせ、直前段で逆方向に撚り合わせた原体である。108~114は最終の撚
前々段
りがL方向で、大勢がこの方向である。115~116は最終の撚りがR方向の土器片である。109は反
撚か
繊維が少量である。110、114、115は多量の繊維を含む。口唇部の施文は刺突、縄の回転である。

II群6類 前々段合撚の縄文原体を施文した土器(第78図117、118)

2点の出土であるが、いずれも繊維を多く含む。118は口唇部に指頭状圧痕が施される。

II群7類 直前段反撚の縄文原体を施文した土器(第78図119)

繊維を含み、口唇部には原体の回転が施される。

II群8類 前々段反撚(撚り戻し)の縄文原体を施文した土器(第78図120~124)

すべて繊維を多く含む。123は口唇部に原体の回転が施される。

II群9類 単節斜縄文を施文した土器(第76図67、第78図125~第79図147)

125~127、130~132は口唇部に施文を持つ、原体L Rを横方向に施文した土器の口唇部である。口唇部には縄の回転、刺突、指頭状の圧痕が施される。135も原体L Rを横方向に施文した土器片であるが、ごく太い原体を使用している。144は同様の体部破片である。141は口唇部に施文されないもの。145も原体L Rを横方向に回転した底部破片で、底面にも同様に施文している。繊維を多く含む。146、147はL Rを横方向に施文した尖底の底部破片。134は原体R Lを縦に施文した時の口唇部である。

137、142は原体R Lを横方向に施文した土器の口縁部で、137は口唇部に縄の回転が施される。128、129、143は0段多条の原体R Lを横方向に施文した口縁部土器片である。128は口唇部に棒状工具の側面圧痕を有する。129は口唇部に原体を回転施文している。

136、138～140は0段多条の原体L Rを横方向に施文した口縁部土器片で、繊維を多く含む。136は口唇部に斜め方向から刺突が施される。138～140は口唇部に施文されないもの。

II群10類 複節斜縄文を施文した土器 (第79図148～第80図163)

148～156、159は口唇部に施文した口縁部破片である。148～151はいずれも繊維を多く含む。152は口唇部外面に原体の末端を刺突している。154、159は0段多条の複節で、繊維が極めて多い。158、160は口唇部に施文されない口縁部破片。161、162は胴部破片である。163は尖底の底部で、原体はL R Lかと思われるが、前々段の燃りが不整である。

前々段の
燃りが不整

II群11類 結束のない羽状縄文を施文した土器 (第80図164～178)

164～171、173は単節の羽状縄文を施した土器である。165、167、169、170、173は一つの原体を回転方向を変えて施文している。164～168、171、174は0段多条と思われる。170は口縁部上端に爪形の刺突を有する。164、165は口唇部が極めて平坦に整えられている。

平坦な
口唇部

172、175～178は複節の羽状縄文である。

本類の土器は繊維を非常に多く含む。

II群12類 結束のある羽状縄文を施文した土器 (第80図179～第81図197)

繊維を多く含む土器が多いが、189は少量しか含まない。196は底部にも施文が施される。179、181、193、196、197は0段多条か。192は非常に繊細な原体が使用されている。195の原体は194と似ているが、施文の幅が狭く、結束部のみが目立つ。192、193、197は不規則に施文される。

繊細な原体

II群13類 ループ文が施文される土器 (第81図198～第82図216)

ア、口縁部破片。198～210、212～214が該当する。本グループはループ文が施される口縁部文様帯を持つと考えられるが、205、214はループ文が幅広く展開しており、体部にまで広がる可能性もある。口唇部に施文される土器はなく、202が口唇部外面に原体末端で刺突されるのみである。口唇部の形状は丸みを帯びて、やや外反するものが多い。ループ文と組み合わせられる地文は、複節の組縄文(組縄Bか)(198～200)、単節斜縄文(201～206、214)、複節斜縄文(207～210、212、213)である。本グループは繊維の含有量が多く、特に単節の原体R Lのループ文の土器(204、205、214)に非常に多い。ループは1段から7段までである。

ループ文
との組み
合わせ

イ、胴部破片。211、215、216である。215は口縁部文様帯にループ文が施され、地文には複節の斜縄文(原体L R L)が施文される。211は崩れたようなループ文である。216はループ文が胴部に広がる。

II群14類 絞縄り文又は絞縄り状の文様が口縁部に施文される土器 (第82図217～第83図237、241～243)

口縁部の形態は平縁と波状とがある。口唇部は丸味を帯び、直立気味あるいはやや内湾するもの(217～219)と平坦に整えられ、外反気味のもの(220、224～229)に大別される。230、231の口縁部形態は他とやや様相を異にする。口唇部の外側をそいだような形に整えられている。

本類の原体は、単軸絡条体が結束によるものか不明な土器片が多いが、土器に表われる文様によって一括した。226～229は小片のため地文の部分がいないが、おそらく口縁部にのみ絞縄り

文が施文されていると考えられる。217～221は地文が結束のない羽状縄文の土器片である。217、218、221は0段多条の原体で施文された羽状縄文。219は複節の羽状である。222～224は0段多条の単節斜縄文。225は複節。232は口縁部にランダムに施文される土器で、口唇部の形状なども他と様相を異にするが、便宜上ここに含めた。

233、237は口唇部外側に軸の圧痕が表出している。繊維を多く含み、口唇部は平坦に整形される。

II群15類 口縁部に縄の側面圧痕が施される土器 (第83図238、239)

いずれも組み合わせられる地文は複節の組縄か。

II群16類 口縁部に直前段合摺り(か?)の原体が施文される土器 (第83図240) 1点のみの出土である。組み合わせられる地文は0段多条である。

II群17類 綾織り文が胴部に広がる土器 (第83図262～265)

264の繊維の量はわずかである。

II群18類 単軸絡糸体を施文される土器 (第83図244～261)

綾織り文又は綾織り状の文様を除く単軸絡糸体が施文される土器である。

- 葦瓦状摺糸文が施されるグループ。(244～247)
- 口縁部文様体に施文されるグループ。(248～251)口縁部に細い摺り糸文が施文される、薄手の土器である。繊維が多く含まれる。
- 菱形のモチーフを施文されるグループ。(252、253)
- 網目状摺り糸文を施文されるグループ。(254～258、260)257を除く土器は、細かい網目状の摺り糸文がランダムに施文される。
- その他の摺り糸文(259、261)。横方向(259)、縦方向(261)の摺り糸文が胴部全体に施文される。259は繊維を多く含む。

第III群 胎土に繊維を含まない縄文時代前期の土器 (第84図266、267)

本群の土器は2点のみで、いずれも飛び地TII層からの出土である。胎土はたいへん似通っているが、266は大木3式か、267は大木4式かと思われる。267の原体は一つ一つの節が長方形 長方形の節を呈し、特徴的である。

第IV群 縄文時代中期の土器

縄文時代中期前葉から末葉までの土器群である。時期、施文方法の違いにより、4類に分類した。

IV群1類 縄文時代中期前葉に属する土器 (第84図268～272)

大木7式に相当する。268は口縁部に貼りつけた隆帯と口唇部との間に刻み目を施される土器である。269～271は綾織り文が縦に施される土器であるが、他の時期に相当する可能性も高い。272は沈線と交互刺突文が施される。

IV群2類 縄文時代中期中葉に属する土器 (第84図273～第86図333)

器形は深鉢で、キャリバー形、口縁部が外反する器形がある。時期や施文方法によって次のように細分した。大木8式に相当する土器である。

a. 粘土紐貼りつけによって横S字状文、渦巻文、刺状文、懸垂文が描かれるグループ。(273~287)
273~284は粘土紐を貼りつけた後、特に調整を行わない。285~287は貼りつけ後、ていねいに紐の両側をなでている。

b. 口唇部の隆沈線を除き、主に沈線で渦巻文、波形式が描かれるグループ。(288~293、296~300)
器形は口縁部が外反する土器が多い。主に3本組の沈線によってモチーフが描かれる。

c. 主に隆沈線によって、渦巻文、横S字状文、懸垂文、波形式が描かれるグループ。(301~328)

d. 橋状把手を有するグループ。(329~333)

口縁部に橋状の把手を有するもの、及びそれに類するものを集めた。331は把手はないが、形状がこれに類するのでここに報告する。中期中葉に属すると考えられるが、一部は末葉に属するものもあるかもしれない。

IV群3類 中期後葉に属する土器 (第85図294、295、第86図334~第88図371)

大木9式に相当する土器を一括した。

a. 口縁部にわらび手状文をもつグループ。(第85図294、295、第86図334~339、第87図342、343)口縁部に沈線、または隆帯によって、わらび手状文が施される土器である。わらび手状のモチーフ部分の口縁が、突出した波状口縁を呈することが多い。器形は口縁部がやや外反するものが多い。

b. 楕円形、及び逆U字状の区画をもつグループ。(第87図340、341、344~第88図371)

主に沈線で、楕円形と逆U字状文、あるいは逆U字状文のみで区画された土器群である。340、341、344、346、350は口縁部の楕円形の区画内に刺突を施される土器である。345は末葉まで下るかもしれない。本グループはキャリパー型あるいは口縁部で外反する器形を呈する。

IV群4類 中期末葉に属する土器 (第88図372~第89図399)

本類の土器の器形は波状か平線の口縁で、胴部下半に最大径をもち、口縁部にいって外反する例が多い。大木10式に相当する。文様帯の区画方法によって次の2種に細分した。

a. 沈線により区画するグループ。(第88図372~第89図388、398、399)

沈線により、C字状か、あるいはJ字状、L字状に区画しているグループである。378~388は沈線にこそって刺突が施される。

b. 隆帯により区画するグループ。(第89図389~397)

397は口縁部の突起に刺突が施される。

IV群5類 中期に属する粗製の土器 (第89図400~404、406第90図433)

中期に属すると思われる粗製の土器を一括した。ほとんどが中期中葉から末葉の土器片と考えられる。400は台付の深鉢の台部である。中期後葉か末葉に属すると思われる。

連続的な 第V群 縄文時代後期の土器 (第89図405、第91図434~444)

刻み目 後期に属する土器群である。434~436、444は後期初頭、そのほかは後期中葉の土器片である。439、440は縄文ではなく、刻み目を連続的に施した後、沈線によって区画する。前期、中期の土器に比して出土数は少ない。

第VI群縄文時代晩期の土器 (第91図444~449)

晩期に属する土器群である。前葉から中葉にかけての土器が少量出土している。

(2) 縄文時代の土製品 (第91図450~452)

円盤状土製品が3点出土している。451を除き繊維を含む。

(3) 古代の土器 (第92図453~462)

453と454は飛び地の同一地点から出土した土師器の甕と環である。453の甕は外面がハケ目調整され、内面はヘラナデとハケ目が施される。454は内外面共にミガキが顕著に施されている。外面は主に横方向に、内面は縦方向と横方向にみがかれる。底部からの立ち上がり部分はヘラ削りされ、口縁部で内湾して全体に丸みを感じられる壺形である。458は飛び地のTⅡ層から出土した底部破片で、内面が丸みをもつ器形である。以上の土師器は奈良時代末から平安時代初頭に属すると考えられる。

455、456はろくろを使用した環の破片である。457、459は甕の底部~胴部破片である。以上の土師器は平安時代に属すると考えられる。

460~462は須恵器で、甕の小片であろう。

2. 縄文時代の石器、石製品

今回の調査では、主に調査区中央の谷筋から多くの石器が出土した。北側の尾根からは、住居跡が多く検出されているにもかかわらず、石器は少ない。表土除去を重機で行っていることと、遺物を包含する層が尾根には堆積していないことに起因すると思われる。石鏃は無茎鏃が圧倒的に多く、石匙はいわゆる縦形、横形両方とも多く出土している。磨石類は横断面が三角形の礫の側縁を主に使用しているのが目立った。そのほか円礫を打ち欠いた礫器が数点出土している。

石鏃 (第93図1~第94図78)

基部形態から第14表のように分類した。1~12までは比較的基部のえぐりの深い凹基の無茎鏃(0Aa)、13~55は基部のえぐりの浅い凹基の無茎鏃(0Ab)、56~70は基部が直線的な無茎鏃(0B)、71は無茎鏃であるが、基部がやや尖る(0C)、72~76は有茎鏃か(1)、77、78は有茎無茎の分類が不可能なもの(2)である。

尖頭器 (第94図79~84)

6点出土している。82、84はほぼ完形。他は上半部が欠損している。

石匙・削搔器 (第94図85~第103図235、241)

石匙は欠損品も含めると多数出土しているが、紙面の都合上ほぼ完形のもののみ147点掲載した。いわゆる縦形と横形、加工と側縁の形態で第15表のように分類した。

縦型は85~169であるが、中でも86~95は長身で、細身であり、両面加工が施されるグループである。断面形は凸レンズ状を示し、他の縦形石匙に比し特徴的な形態を持つ。両面加工とい

第14表 石鏃の分類概念



第15表 石匙の分類概念



う点では110は同様であるが、両側縁の形態及び側面からの調整が一方に偏っているという点で、116、117は側縁の形態が異なる点で、上述のグループとは一線を画する。169は先端が折れているが、このグループに属するであろう。

103、119は主要剥離面の打点が下方にある点が特徴的である。

141は石匙に分類されない可能性もある。167はつまみの部分に調整が施されるのみで、他は調整のない粗製の石匙である。

横型は170～229である。調整は主に背面に施され、腹面はつまみの部分やその周辺の側縁にのみ施されることが多いが、189は両面とも同様に精密な調整を施している。229は主要剥離面の打点が刃部の方にある。

230、231は刃部やつまみが欠損した石匙である。

232～236、241は削掻器と思われるグループである。

石鏃 (第103図237～240)

4点出土した。

240は断面が扁平な部分もあるが、銚部の剥離が磨かれたように滑らかに摩耗していることから本類に含めた。

石匙 (第103図242～第104図245)

4点出土した。242は最大厚が基部よりにある。刃部は背面の剥離によってのみ作り出される。

243、245は最大厚が刃部よりあり、そこから急な角度で刃部が作り出される。刃部は腹面からも調整されている。244は腹面の調整が側縁の一部と刃部に限られ、腹面の主要剥離面を残している。

ピエス・エスキーユ (第104図246~248)

3点出土した。いずれも剥片を利用したものである。246の断面形は扁平であるが、247、248は三角形に近い形態を示す。

不定形石器 (第104図249~第105図276)

調整痕、あるいは使用痕のある石器である。削搔器として使用されたと考えられるものも多い。253、260は使用痕のある剥片で、特に260はタール状の付着物がある。276は尖頭器の基部の可能性もある。

タール状
付着物

縁辺のどこに調整が施されるかによって次のとおり分類した。

- 1類 側縁に調整のある剥片 (249~252、254~259)
- 2類 主要剥離面の打点と対面する縁辺に調整のある剥片 (261~263)
- 3類 主要剥離面の打点のある方向に調整のある剥片 (264)
- 4類 打点から見て側縁と端にわたって2縁辺に加工のある剥片 (265~273)
- 5類 上記に分類されない剥片 (253、260、274~276)

石核 (第105図277)

1点出土した。自然面の残る残核と考えられる。

磨製石斧 (第106図278~第108図295)

ほとんどが基部または刃部を欠損しており、完形は283のみである。石材は淡緑色や緑色の凝灰岩が多い。タール状の付着物が認められるものが3点ある (282、286、294)。279、283は斧身が平たいものである。側縁に稜のあるものがほとんどであるが、279、280は特に稜が明瞭である。294は斧身に稜がなく、基部と刃部に剥離が認められる。剥離で刃部を作り出しているのかもしれない。295は剥離によって斧身を形成した後磨いており、剥離の稜がつぶれている。未製品か。280は小型で細身である。

タール状
付着物

磨石類 (第108図296~第112図340)

自然石の一部に磨面、敲打痕などを有する石器である。

296~312は細長く、断面が三角形あるいは扁平な形状を示し、側面を使用しているグループで従来特殊磨石と呼ばれてきたものである。296、297、300、302は断面が扁平である。このグループの中には敲打痕を持つもの (296、297、298) がある。

313~340は円形や長円形の自然石に、磨面、敲打痕、凹面を持つものである。313、314は自然石の2面に凹面を持つ。316、317は球形に近い円礫で全体が磨面である。321~327はやや細長い形状である。340は石皿の可能性もある。

鈍角の礫器 (第112図341~345)

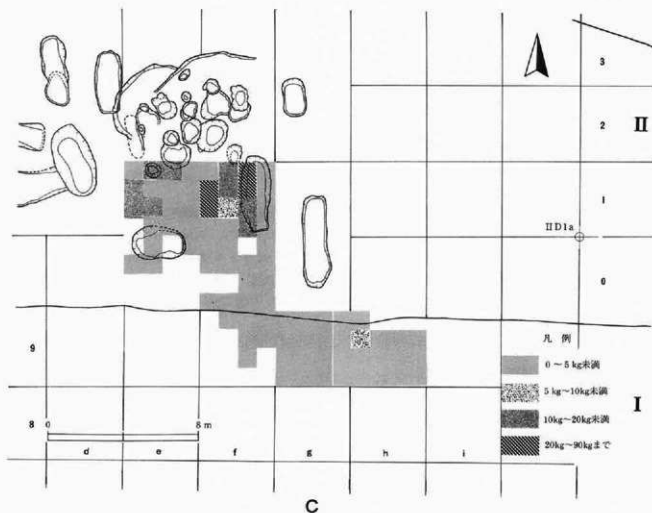
刀部? 長円形の自然石に粗い剥離を施している一群である。打ち欠いて作られる刃部(か)はそれほど鋭利ではなく105~140°である。両面から均等に打ち欠いているのではなく、主に一方方向から、角度を変えて剥離している。

石皿 (第112図346)

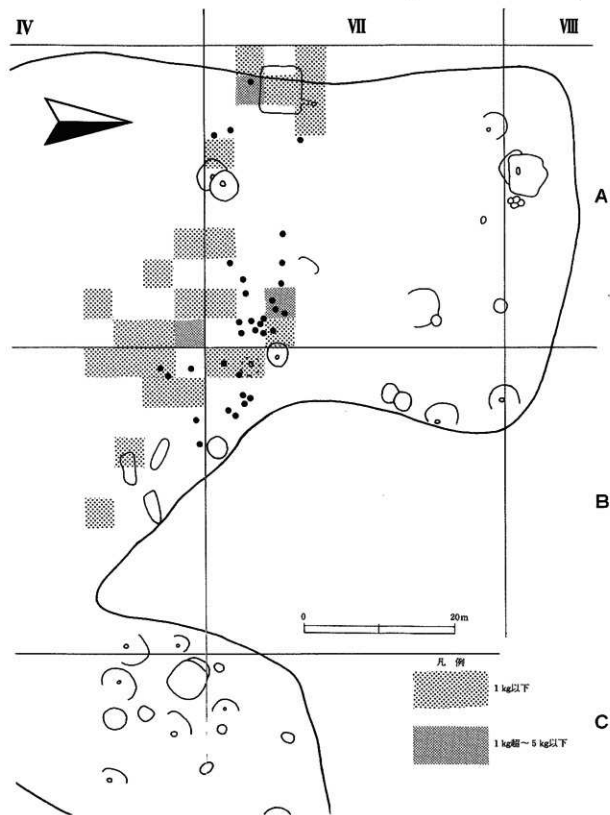
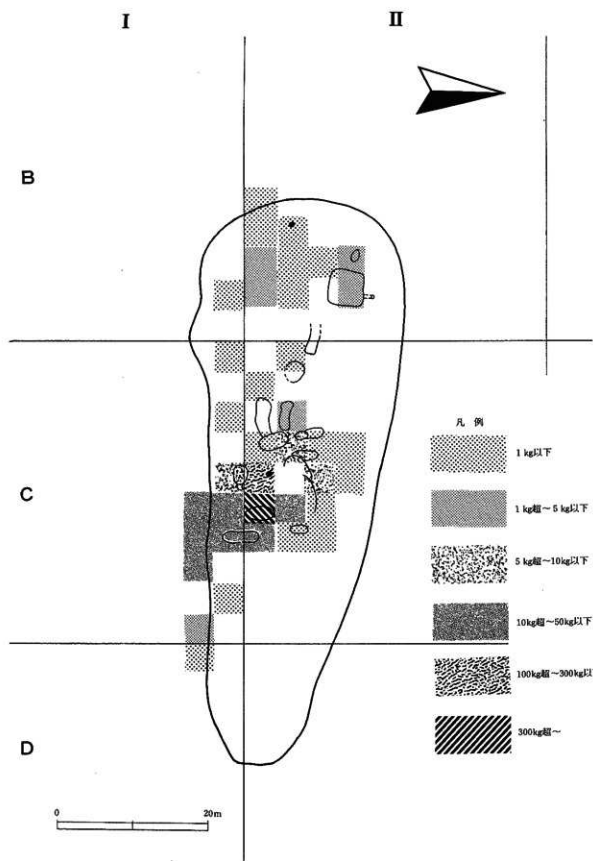
1点のみ出土した。主に縦方向の擦痕が認められる。

石製品 (第113図347~349)

石棒、砥石、不明の石製品がそれぞれ1点出土した。347は石棒か。断面形は長方形を呈し、無頭である。加工痕は不明瞭である。348は砥石と思われる。349は磨製の石製品で装飾品かあるいは下端が刃部だとすれば磨製石斧かもしれない。



第72図 遺構外鉄滓出土状況(1)飛び地



第78回 遺構外鉄滓出土状況(2)遺跡全体

3. 銭 (第113図350、351)

寛永通寶が2点出土している。いずれも一文銭の銅銭で、寛永通寶1期(1636~1659)の銭である。(兵庫埋1996)

4. 鉄製品 (写真図版93)

鉄製品は遺構外から4点出土しているが、小片がほとんどであるためここでは1点のみ掲載した。製品と思われるが、機種は不明である。

5. 鉄滓 (第72、73図)

第72図は、II C 2 e 製鉄炉群付近の遺構外の鉄滓の出土状況である。鉄滓は取り上げる際にグリット内を1㎡のブロックに分割して位置を記録した。製鉄炉群の南のII C 1 fグリットとII C 1 eグリットから多く出土していることがわかる。特にII C 1 fグリットは製鉄炉群から斜面下位にあたり鉄滓は廃棄されたかあるいは流れたかしたものであろう。I C 0 gグリットから北のグリットからの出土がないのは上の方法で記録しなかったため、グリット全体の出土量は第73図を参照されたい。

第73図は遺跡全体の遺構外の鉄滓の出土状況を示した。ただし、平成5年度調査の調査区北側及び東側の尾根の部分の記録はとっていないため図示されていない。

飛び地では前述したように製鉄炉群の斜面下位に分布しているほか、炭窯の周辺に少量と、II B 4 h 住居跡の周辺及び南側に分布している。

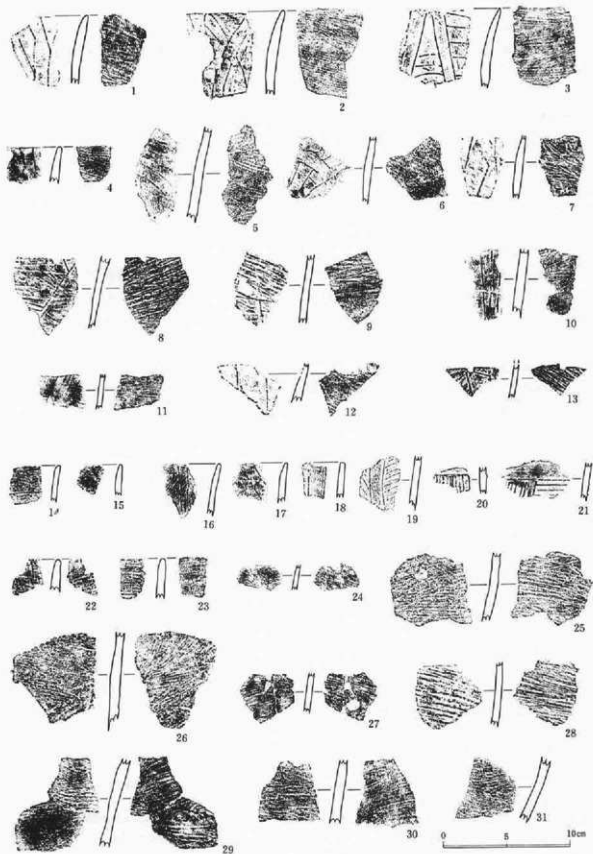
また、調査区中央の谷筋からは少量ずつではあるが、広い範囲に鉄滓が分布する。顕著な集積が見られないことからおそらく西方の谷頭方向か北側の尾根筋から流れてきたものであろう。また、調査区中央の分布とはやや離れた西端のVII A 3 b 住居跡付近からも鉄滓が出土している。

飛び地から出土した遺構外の鉄滓の総量は1,006.1kg、調査区中央の谷筋からの出土総量は16.1tの5kg、計1,022.6kgである。(高橋佐知子)

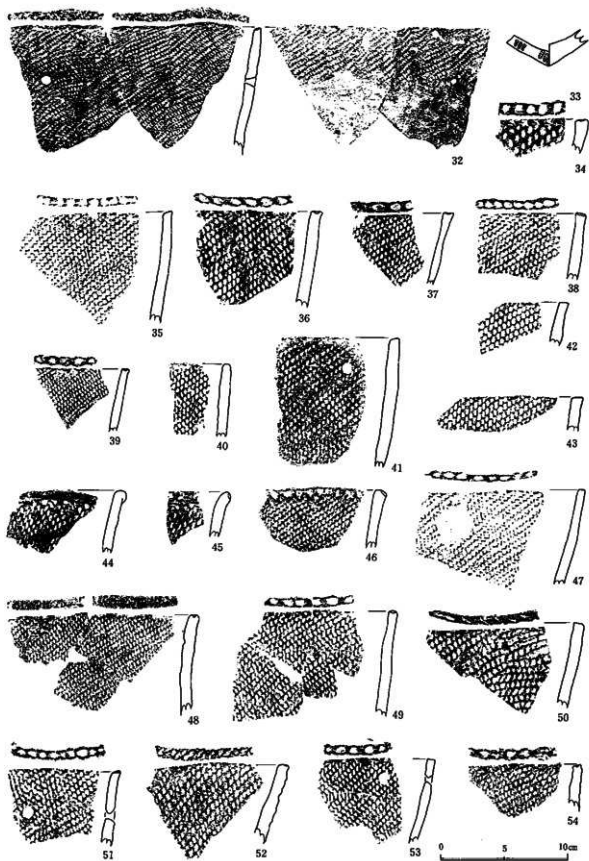
鉄 滓

引用参考文献

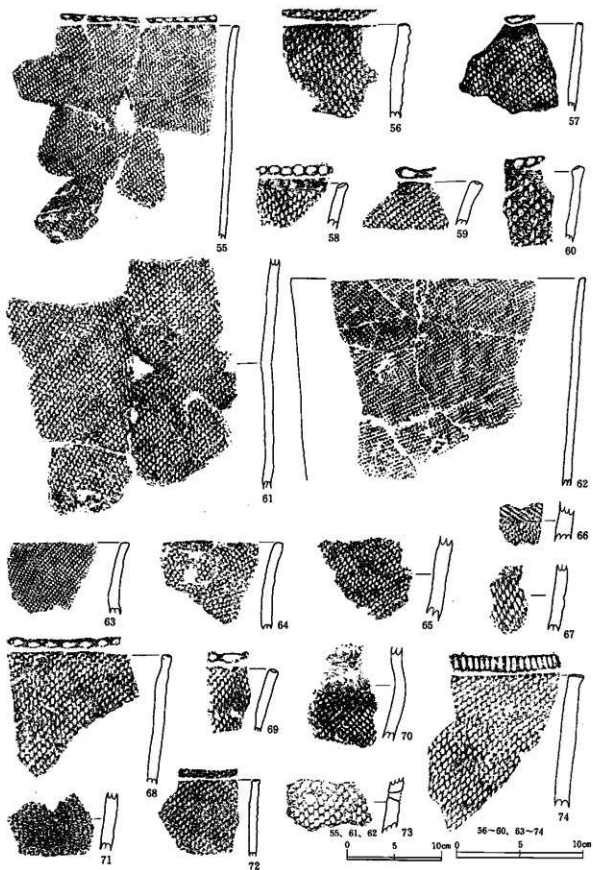
- 青森県教育委員会1980「長七谷地貝塚」(第57集)
1985「表雄遺跡発掘調査報告書」(第91集)
- 兵庫埋蔵調査会1996「日本出土鉄総覧」
- 磐手県埋蔵文化センター1983「上里遺跡発掘調査報告書」(第55集)
1992「藤原長根遺跡・藤原森発掘調査報告書」(第174集)
1995「藤上遺跡発掘調査報告書」(第213号)
- 青森県埋蔵文化センター1989「白土遺跡発掘調査報告書」
- 水沢市教育委員会1982「藤上遺跡」(第7集)
- 大迫町教育委員会1986「観音堂遺跡」(第11集)
- 滝沢村教育委員会1987「弘沢三遺跡」(第5集)
- 相原淳一 1989「奥北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』76-1
- 熊谷孝正 1983「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『磐手県立博物館研究報告』第1号
1989「岩手県の早期後半から前期初葉の土器群について」第4回縄文文化検討会シンポジウム発表資料
- 高橋正貴子 1992「東北地方縄文時代前期前期編年組縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 眞野義一 1967~1969「大木式土器理解のために(1)~(V)」『考古学ジャーナル』13、16、18、24、32



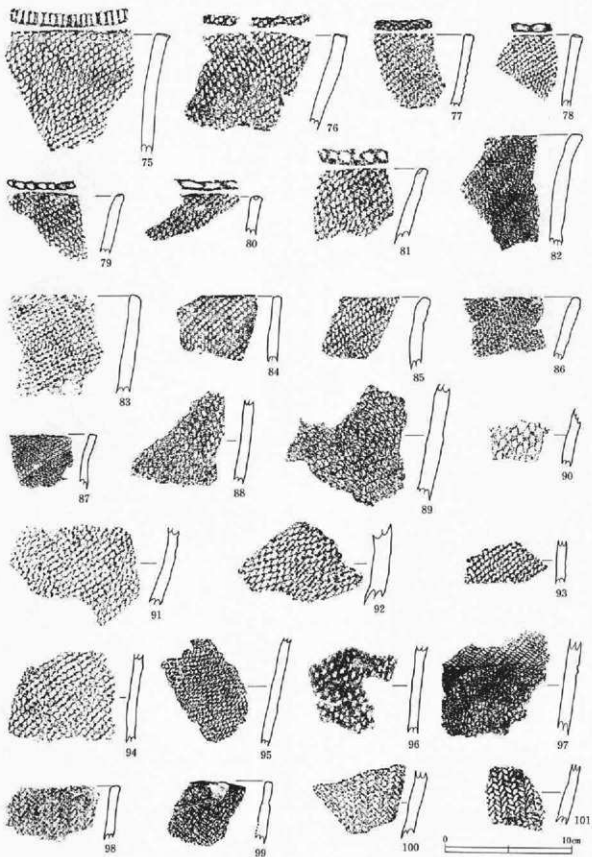
第74圖 遠禰外出土遺物 土器 1



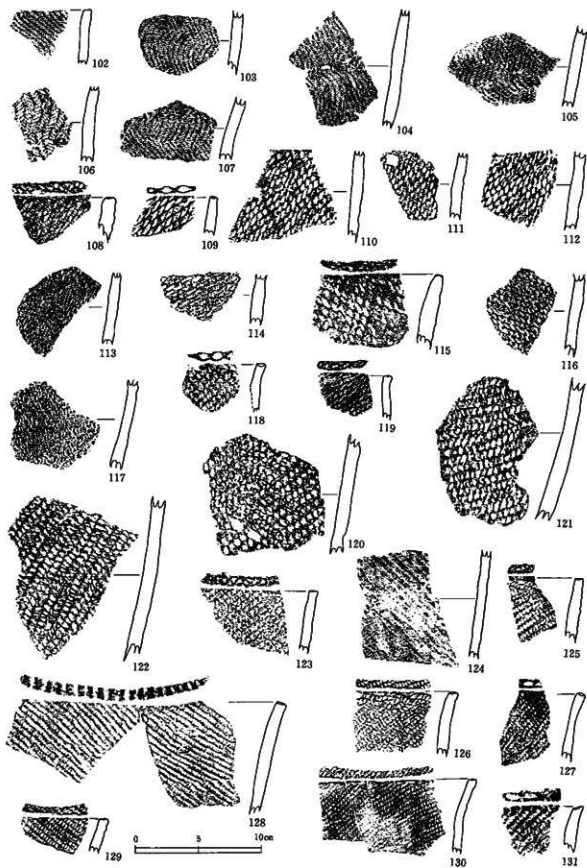
第75圖 遠東外出土遺物 土器 2



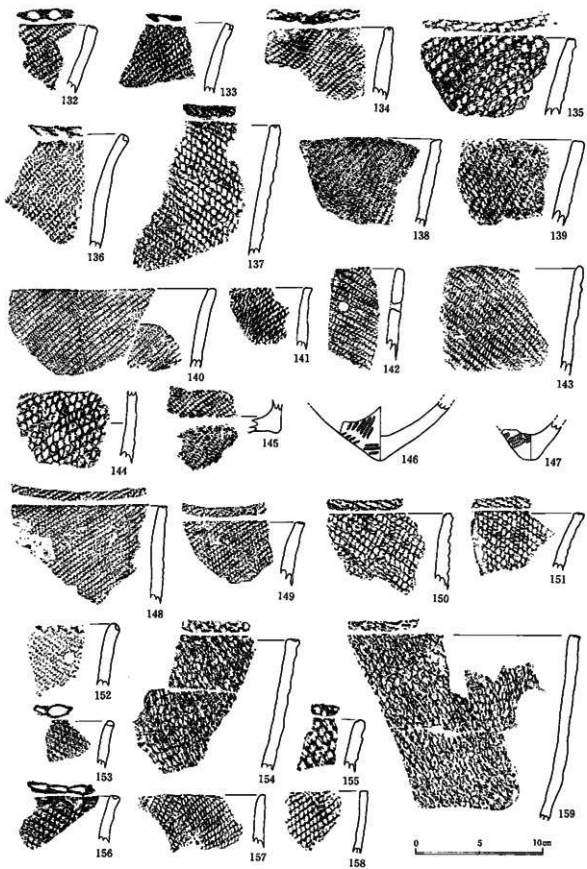
第76圖 遼朝外出土遺物 土器 3



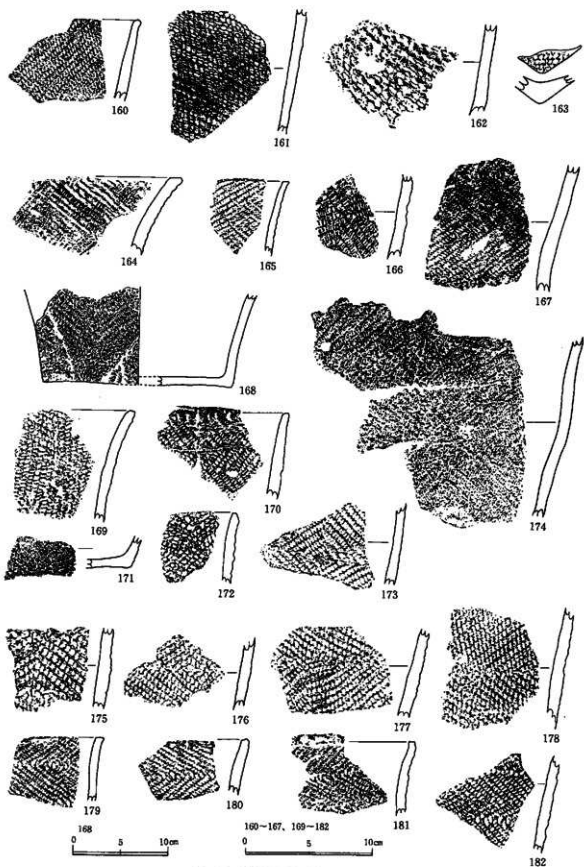
第77圖 遺構外出土遺物 土器 4



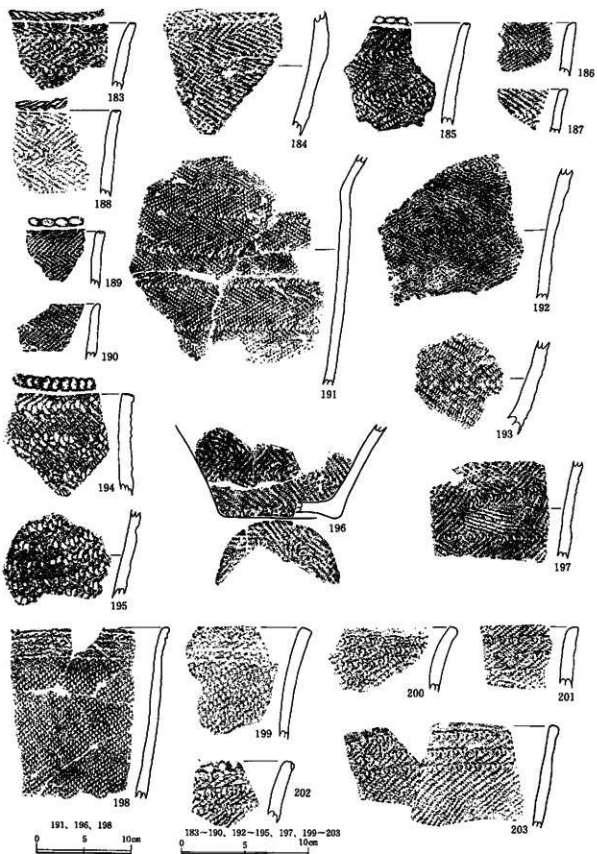
第78圖 遼東外出土遺物 土器 5



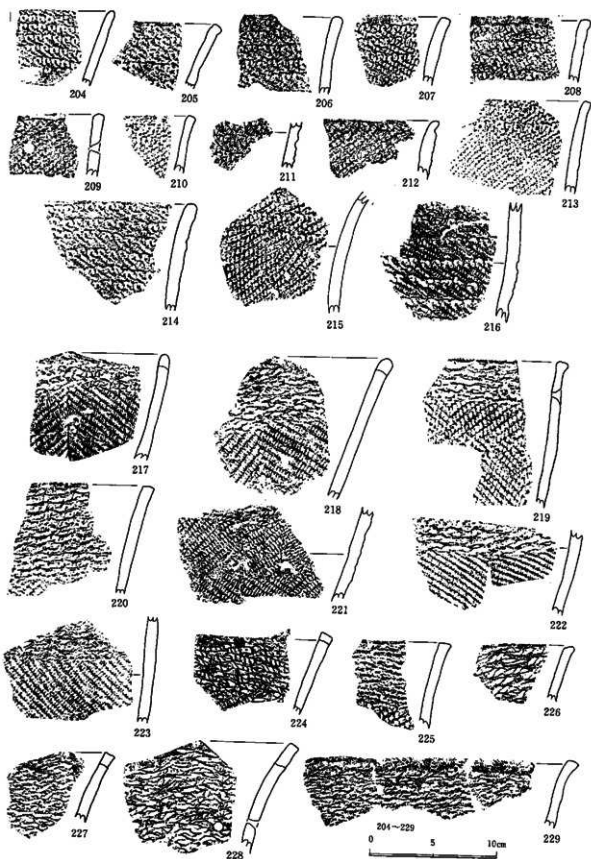
第79回 遺構外出土遺物 土器 6



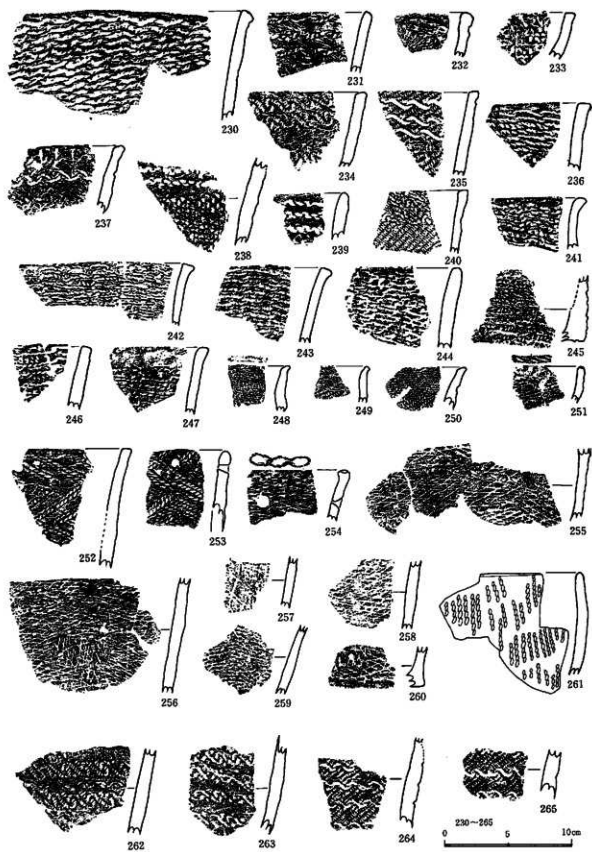
第80图 遼東外出土遺物 土器 7



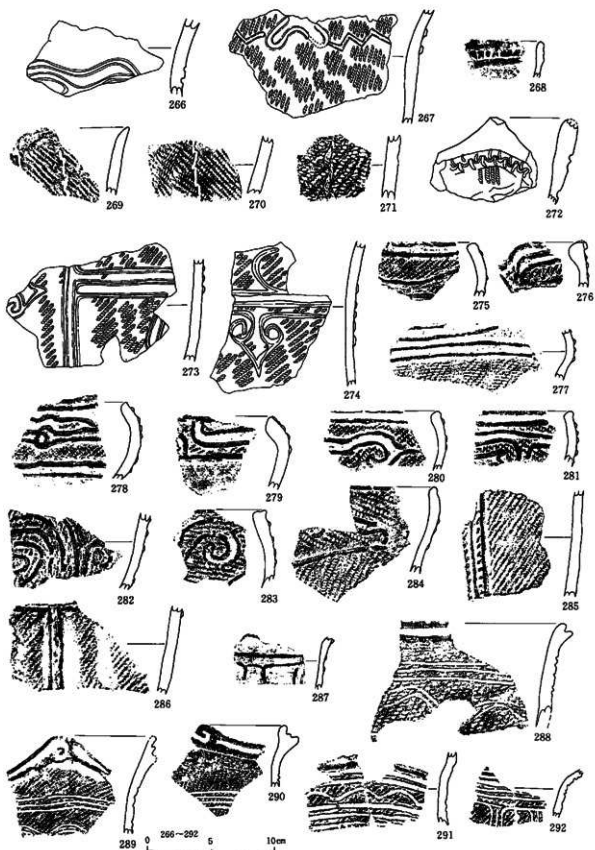
第81圖 遼東外出土遺物 土器 8



第82圖 遺構外出土遺物 土器 9



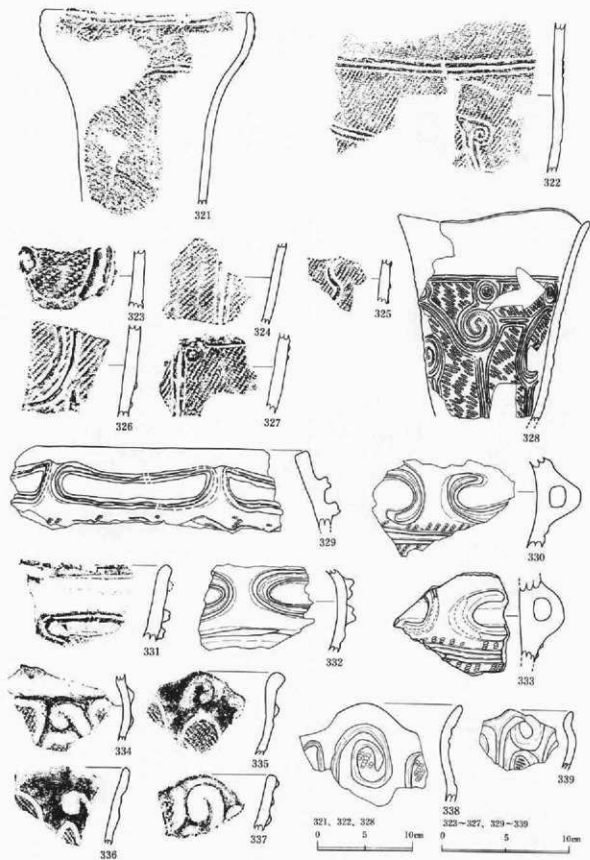
第83圖 遺構外出土遺物 土器10



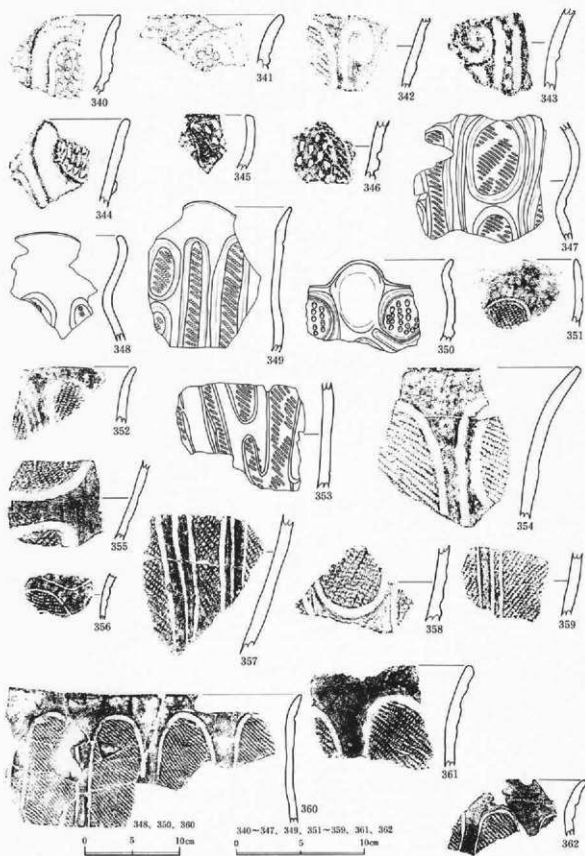
第84圖 遺構外出土遺物 土器11



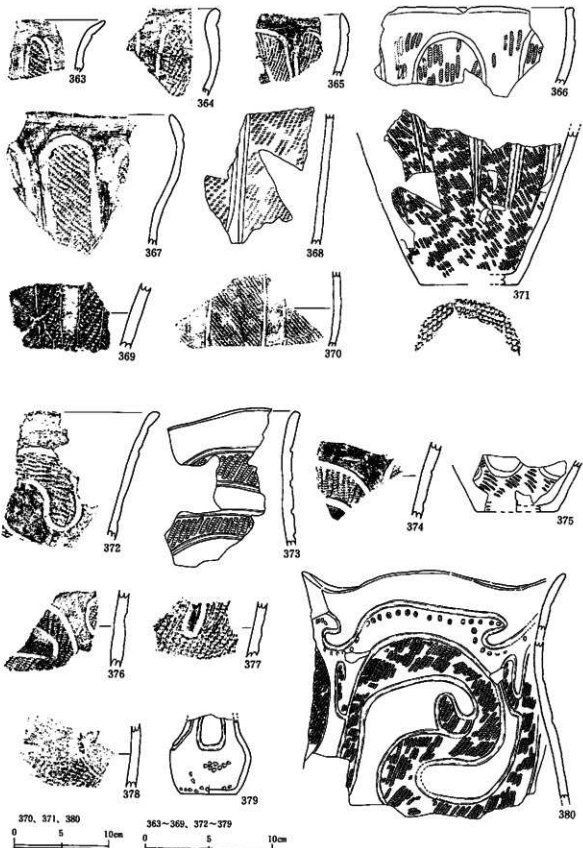
第85图 道桥外出土遗物 土器12



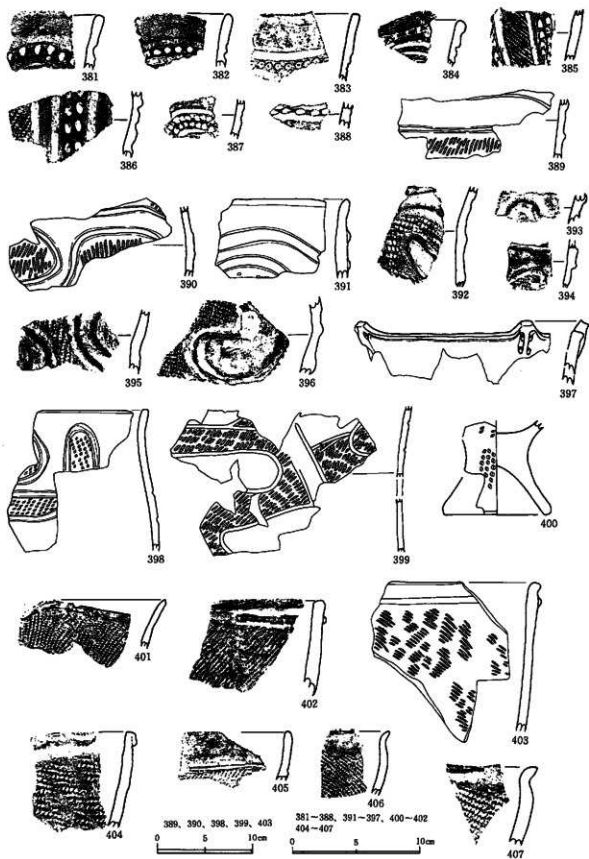
第86图 遺構外出土遺物 土器13



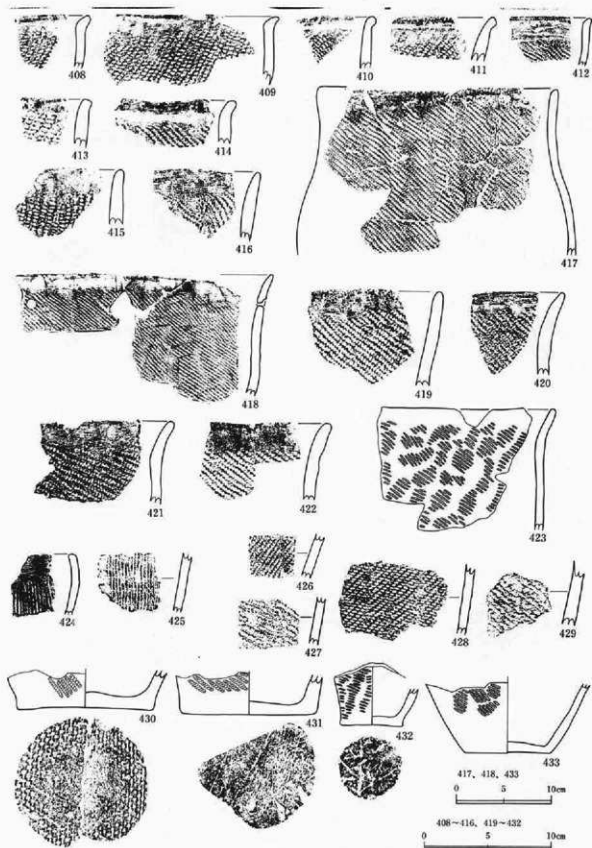
第87圖 遺構外出土遺物 土器14



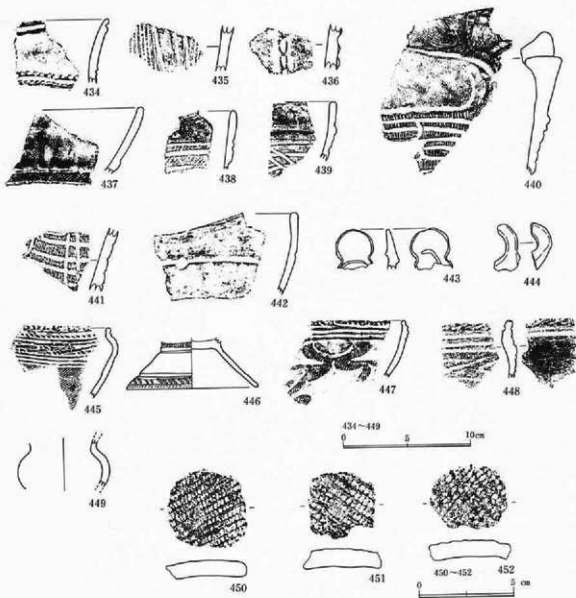
第88图 遼朝外出土遺物 土器15



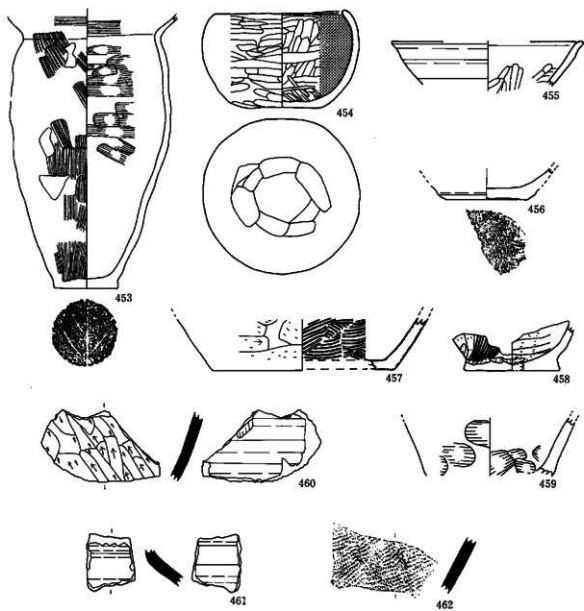
第89圖 遺構外出土遺物 土器16



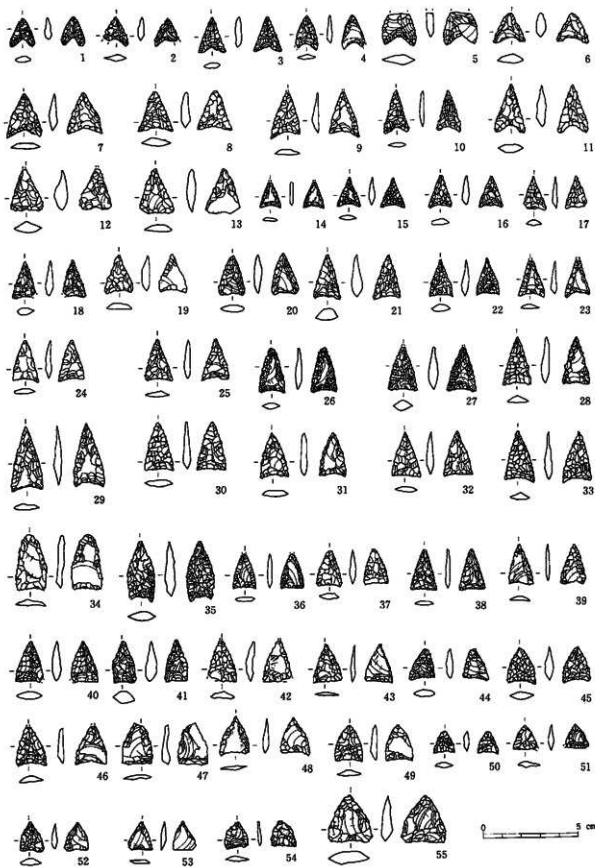
第90圖 遺構外出土遺物 土器17



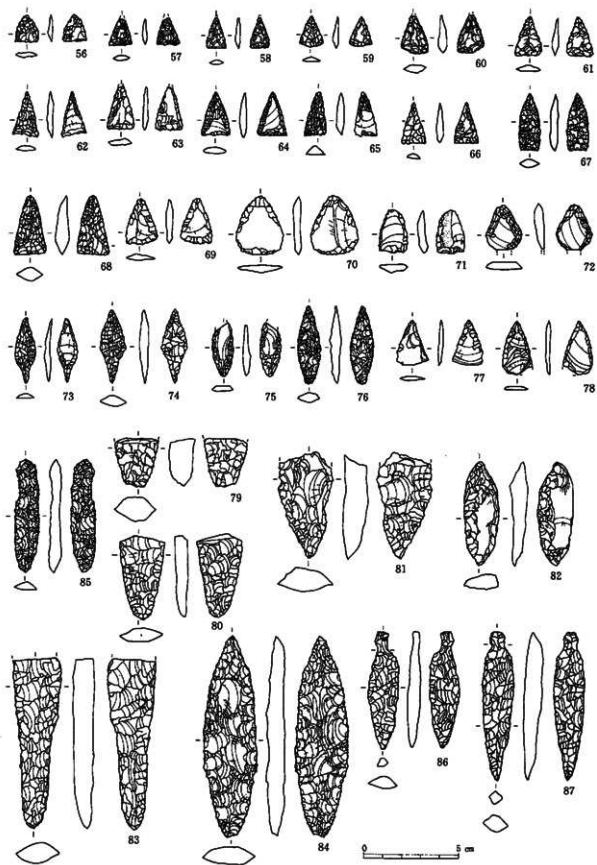
第91圖 遺構外出土遺物 土器18



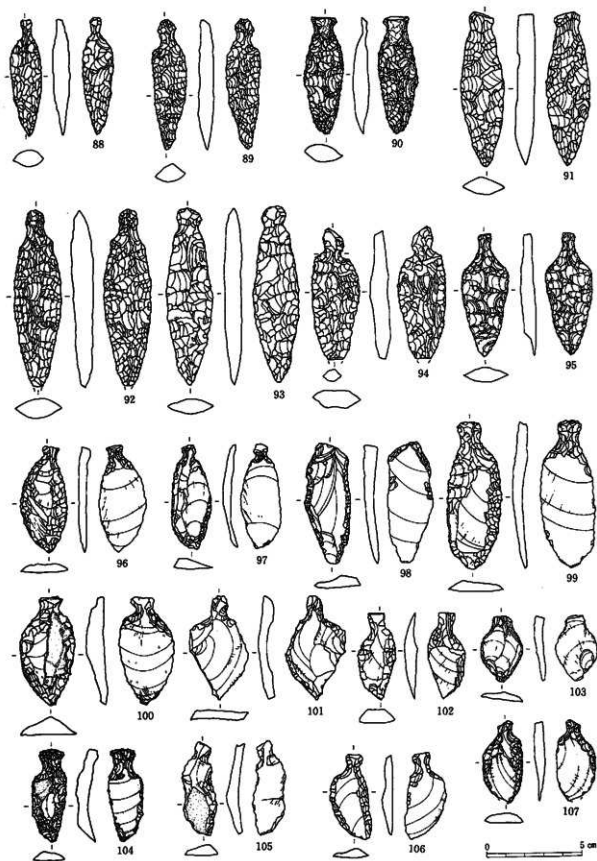
第92圖 透柄外出土遺物 土器19



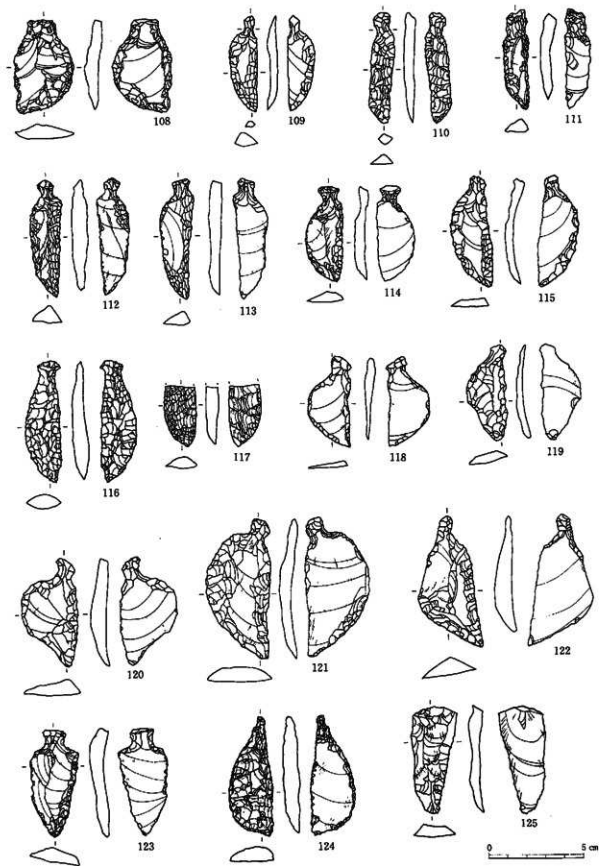
第99图 遼东外出土遗物 石器 1



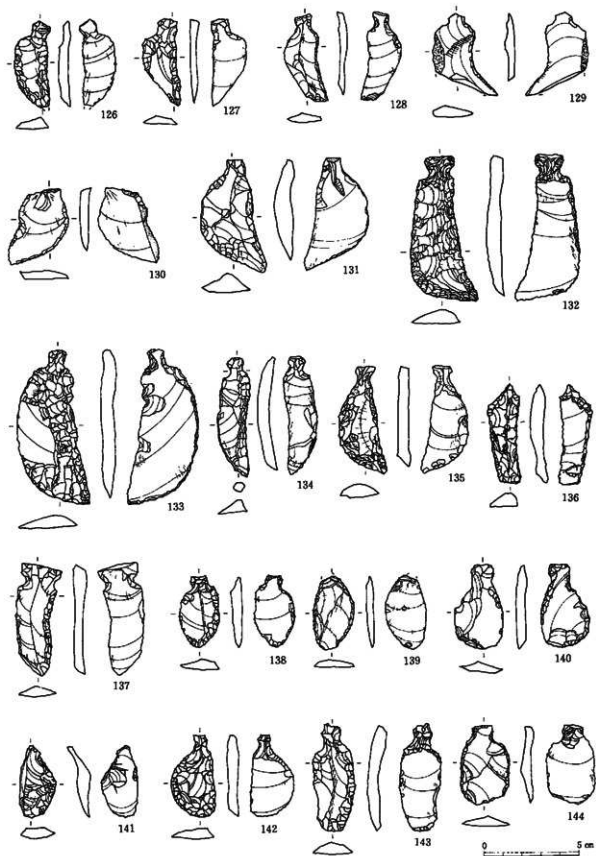
第94圖 遼寧外出土遺物 石器 2



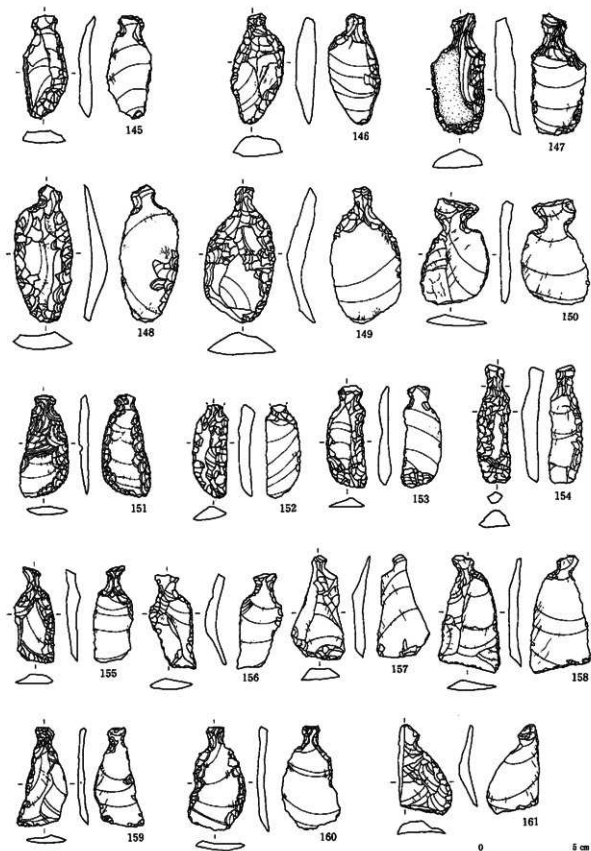
第95图 遼寧外出土遺物 石器 3



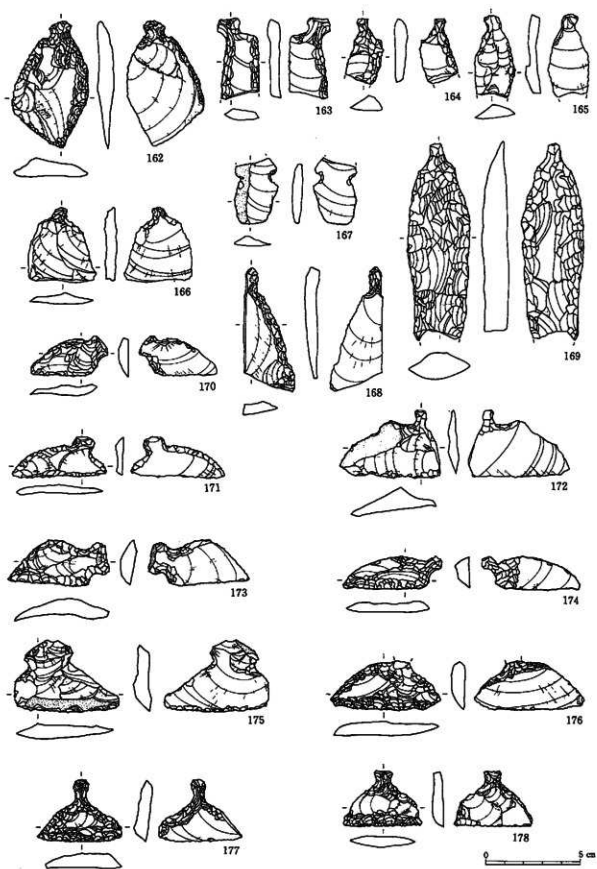
第96图 遼寧外出土遺物 石器 4



第97图 遼寧外出土遺物 石器 5



第98图 遺構外出土遺物 石器 6



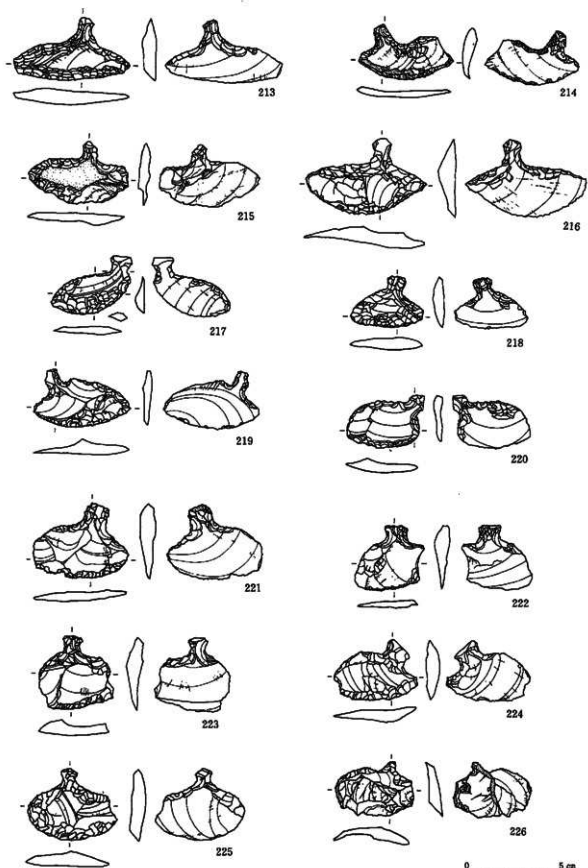
第99圖 遠東外出土遺物 石器 7



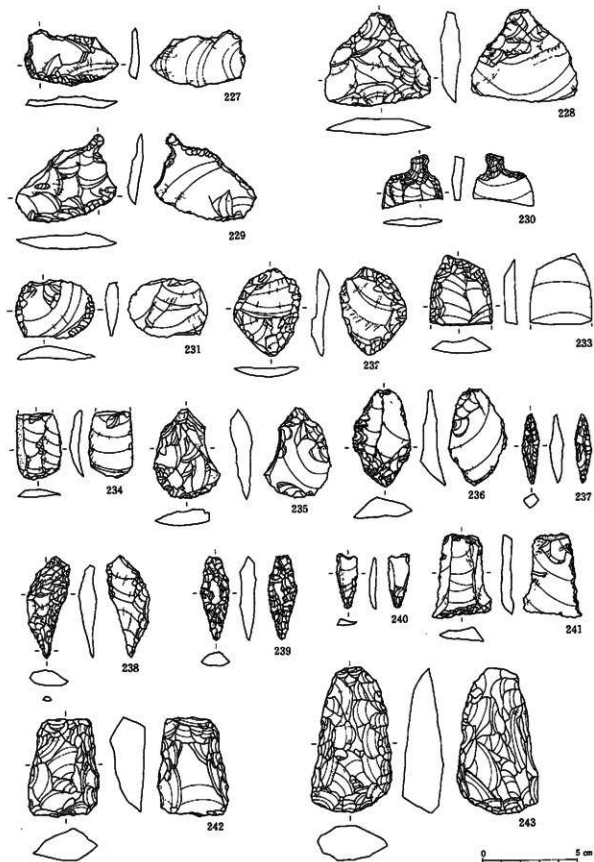
第100圖 遼東外出土遺物 石器 8



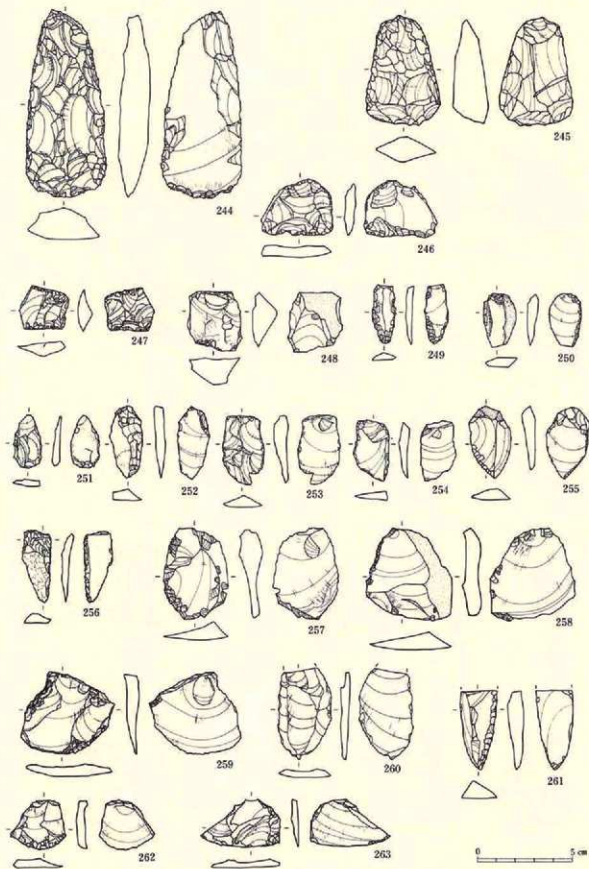
第101圖 遼東外出土遺物 石器 9



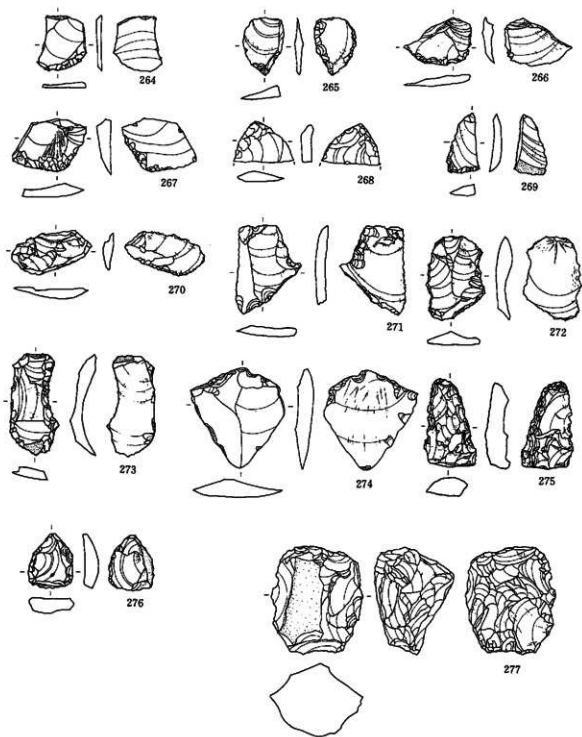
第102圖 遼東外出土遺物 石器10



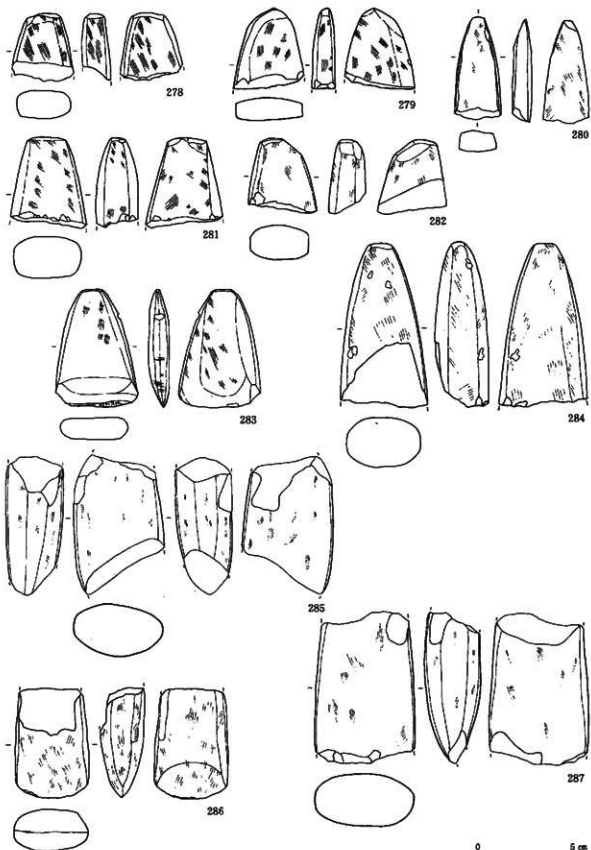
第103圖 遼寧外出土遺物 石器11



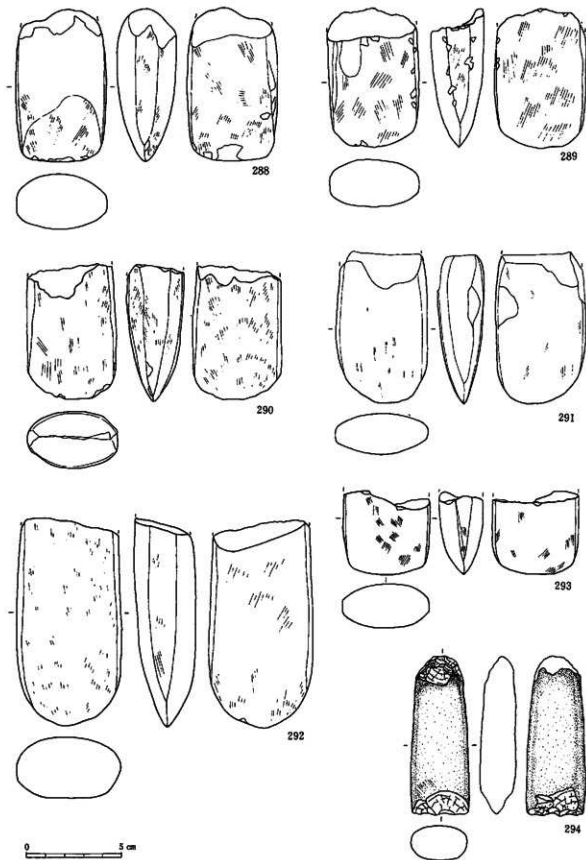
第104圖 遠標外出土遺物 石器12



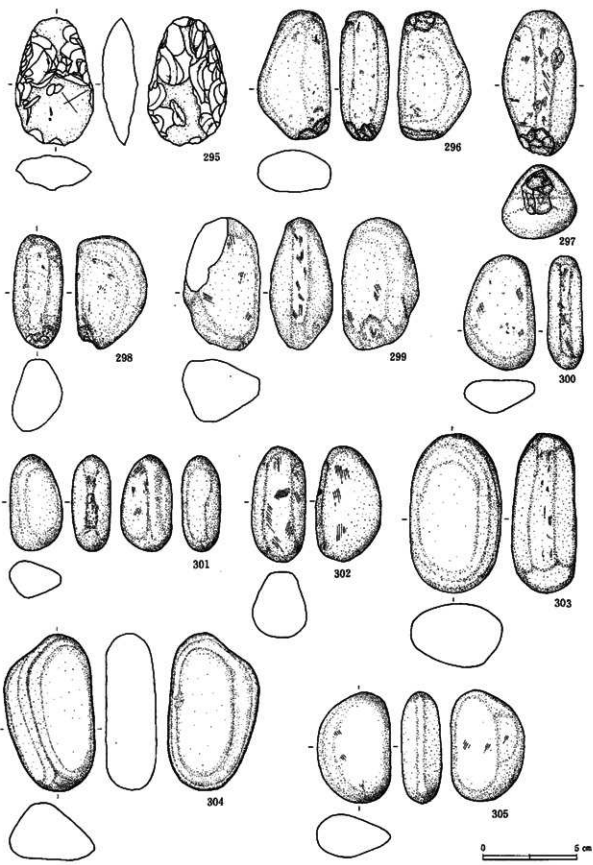
第105圖 遼南外出土遺物 石器13



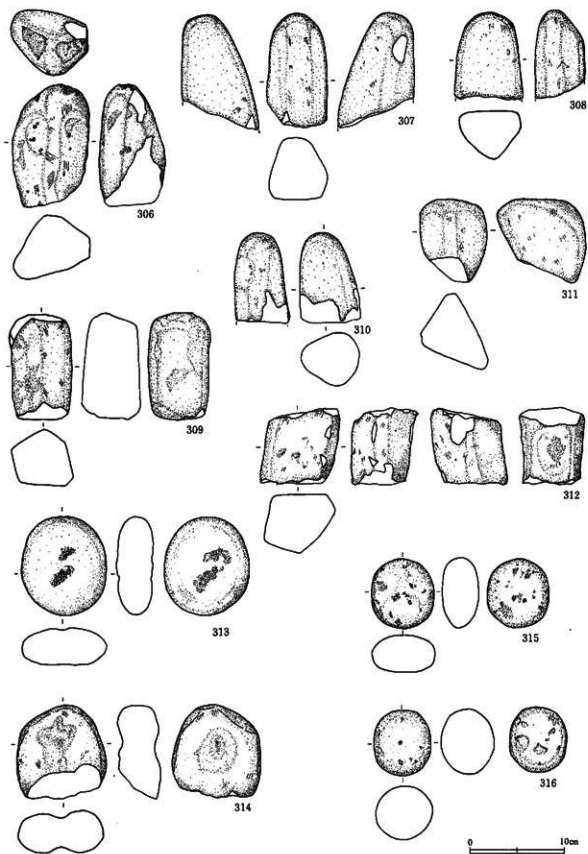
第106圖 遼東外出土遺物 石器14



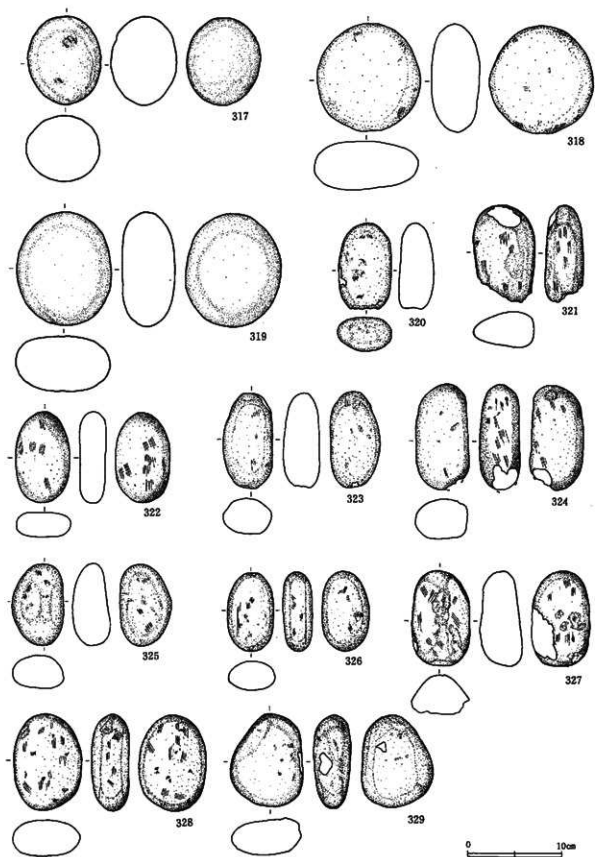
第107图 遼寧外出土遺物 石器15



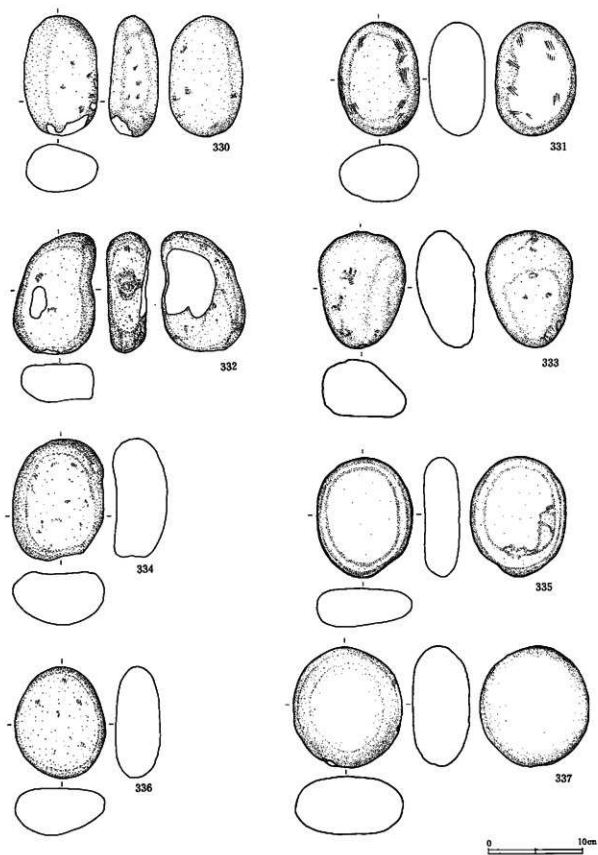
第108圖 遼寧外出土遺物 石器16



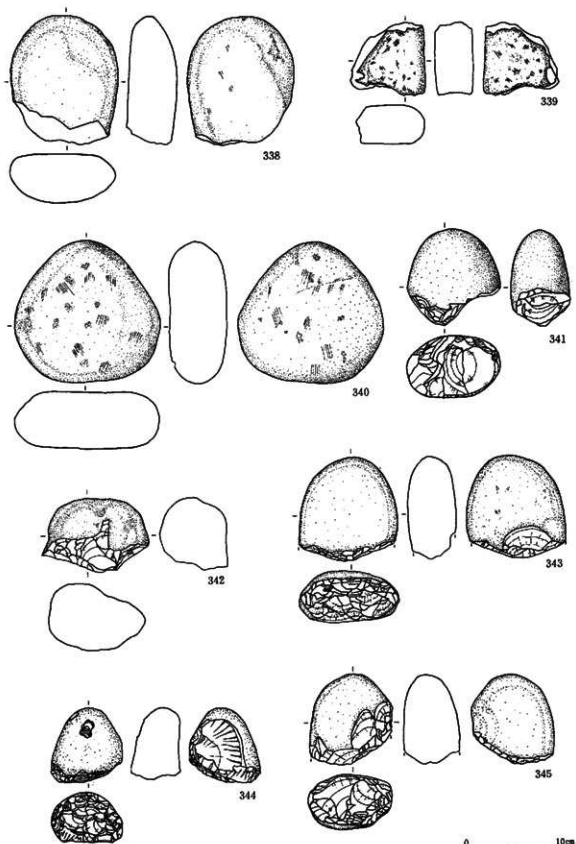
第109图 遼寧外出土遺物 石器17



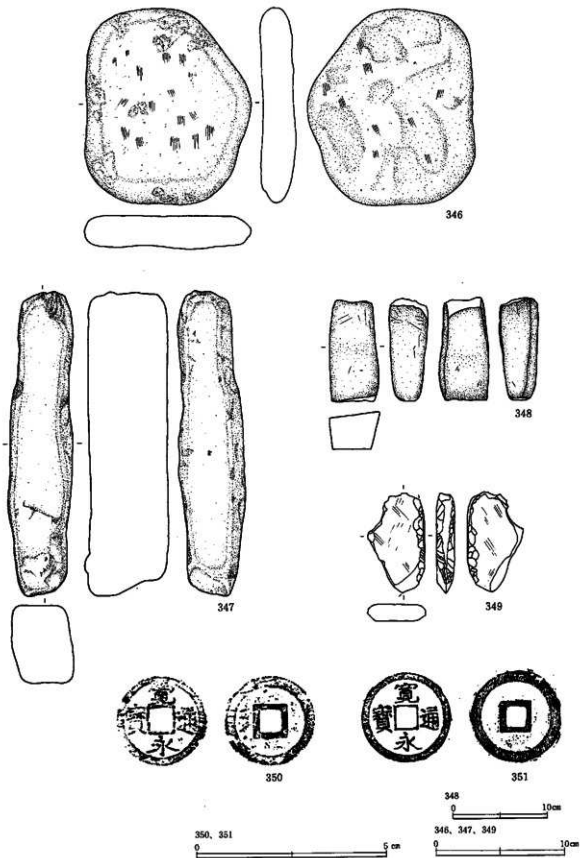
第110图 漳浦外出土遗物 石器18



第111圖 遺構外出土遺物 石器19



第112图 遼東外出土遺物 石器20



第113圖 遼東外出土遺物 石器21、石製品、錢

第16表 遺構外出土遺物観察表(1)土器(縄文土器)

編	出土地点	層位等	器型	文	模、胎	土	等	分類
1	WEA	I層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
2	WEA	I層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
3	WEA	I層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
4	WEA	V層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
5	WEA	V層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
6	WEA1g	V層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
7	WEA	IV層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
8	WEA3o	V	深鉢	細線起線文	内面糸文文	鑿孔		11A
9	WEA	I層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
10	WEA	V層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
11	WEA3h	V層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
12	WEA	IV層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11A
13	土器で場	I*	深鉢	細線起線文	内面糸文文	鑿孔		11A
14	WEA2g	V層	深鉢	細線起線文	内面糸文文			11C
15	不明	不明	深鉢	細線起線文	横切突			11C
16	WEBOb	IV層	深鉢	細線起線文	内面に糸文文が施されるが磨石に表れない			11b
17	WEA3h	V層	深鉢	細線起線文	内面に糸文文が施されるが磨石に表れない			11b
18	WEA3b	増土	深鉢	細線起線文	内面に糸文文が施されるが磨石に表れない			11b
19	WEB2C	V層	深鉢	細線起線文	内面に糸文文が施されるが磨石に表れない			11b
20	WEA、WEA	IV層	深鉢	細線起線文	内面に糸文文が施されるが磨石に表れない			11b
21	WEA1	V層	深鉢	細線起線文	内面に糸文文が施されるが磨石に表れない			11b
22	不明	不明	深鉢	内外面糸文文				12a
23	WEA91	V層	深鉢	内外面糸文文				12a
24	WE3d	V層	深鉢	内外面糸文文				12a
25	WEBO*	V層	深鉢	内外面糸文文				12a
26	WE1*	V層	深鉢	内外面糸文文				12a
27	WE3d	V層	深鉢	内外面糸文文				12a
28	WEA	IV層	深鉢	内外面糸文文				12a
29	WEBO*	V層	深鉢	内外面糸文文				12a
30	WEAO1	V層	深鉢	内外面糸文文				12a
31	WEA21	VI層	深鉢	内外面糸文文	内面に糸文文が施されるが磨石に表れない			12b
32	WEA8d	V層	深鉢	L.R.横切突、口唇にも起文	口唇部のみ裏にもL.R.横切突	縁線多		11
33	WEA4*	V層	深鉢	縁線Aか? 草部 L.回り 尖突	縁線			112
34	WEB5	IV層	深鉢	縁線Aか? 草部 L.回り 口唇部起線状正突	縁線			112
35	WEA	IV層	深鉢	口唇部起線状正突	縁線A 草部 L.回り			112
36	WEA4*	V層	深鉢	縁線A 草部 L.回り 口唇部起線状正突	縁線A 草部 L.回り 口唇部起線状正突	縁線多		112
37	WEA	IV層	深鉢	縁線A 草部 L.回り 口唇部起線状正突	縁線			112
38	WEA8*	V層	深鉢	縁線A 草部 L.回り 口唇部起線状正突	縁線A 草部 L.回り 口唇部起線状正突	縁線多		112
39	WEA61	V層	深鉢	縁線A 草部 L.回り 口唇部起線状正突	縁線多			112
40	WEB1C	V層	深鉢	縁線A L.回り 草部 金部有縁入	縁線			112
41	WEA4*	V層	深鉢	縁線A 草部 L.回り	縁線			112
42	WEA3*	IV層	深鉢	縁線A 草部 L.回り	縁線			112
43	WEA4*	V層	深鉢	縁線A 草部 L.回り	縁線			112
44	WEA*	V層	深鉢	縁線A 草部 L.回り	口唇部外側1/2程度起線文付	縁線多		112
45	WEA81	V層	深鉢	縁線Aか 草部 L.回り	口唇部外側約1/2 縁線 L.回り			112
46	WEA11	IV層	深鉢	縁線Aか 草部 L.回り 口唇部起線	縁線			112
47	WEA	IV層	深鉢	縁線 L.回り	口唇部起線			112
48	WEBOb	V層	深鉢	縁線 L.回り	口唇部起線			112
49	VI	V層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り 口唇部起線	縁線			112
50	WEBOd	V層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り 口唇部起線	縁線 A 草部 L.回り 口唇部起線			112
51	VI	IV層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り 口唇部起線	縁線			112
52	WEBOd	V層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り 口唇部起線	縁線			112
53	WEA	III層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り 口唇部起線	縁線 A 草部 L.回り 口唇部起線			112
54	WEA8*	V層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り	口唇部起線			112
55	WEA4*	V層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り	縁線多	口唇部起線状正突		112
56	WEB7d	V層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り	口唇部起線			112
57	WEB1*	V層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り	口唇部起線			112
58	T3東	IV層	深鉢	縁線 B 草部 L.回り	口唇部起線			112

60	VB8a	V層	群	群	経緯日小半影 L回り口唇部領域状況 継続	II2
61	VB3a	V層	群	群	経緯日 半影 L回り 継続多	II2
62	VB3a	V層	群	群	経緯日 半影 L回り 継続多	II2
63	VB1a	V層	群	群	経緯日 半影 L回り 継続多	II2
64	VB8e	V層	群	群	経緯日 半影 L回り 継続多	II2
65	VB2h	V層	群	群	経緯日 半影 L回り 継続	II2
66	VB A	IV層	群	群	経緯日半影L.R縦 継続	II2
67	VB A 1 j	IV層	群	群	経緯日 半影 L.R 縦い面体か 継続多	II6
68	VB A 3 a	V層	群	群	経緯日 半影 L.R 縦い面体か 継続多	II2
69	VB7 f	V層	群	群	経緯日 半影 L.R 縦い面体か 継続多	II2
70	VB8 b	V層	群	群	経緯日 半影 L.R 縦い面体か 継続多	II2
71	VB A 1 j	V層	群	群	経緯日か? 縦影 R回りか? 継続	II2
72	VB B	V層	群	群	経緯日 縦影 L回り 口唇部領域状況 継続多	II2
73	VB B	IV層	群	群	経緯日 L.R 縦影 縦影孔部一層結合せ	II2
74	VB A 8 f	1*層	群	群	経緯日 縦影 L回り口唇部群の存在 継続多	II2
75	VB7 C	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影の存在 継続多	II2
76	VB8 d	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 口唇部領域状況 継続多	II2
77	VB8	IV層	群	群	経緯日 L.R 縦影 口唇部領域状況 継続多	II2
78	VB8 C	V層	群	群	経緯日 L.R 縦影 口唇部領域状況 継続	II2
79	VB A 9 i	IV層	群	群	経緯日 L.R 縦影 口唇部領域状況 縦影 継続	II2
80	VB B	IV層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 口唇部領域 継続	II2
81	VB B	IV層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 口唇部領域のみに穴 継続	II2
82	VB d	IV層	群	群	経緯日 R 縦影 L.R 縦影 口唇部外側3mm程度の数文 継続	II2
83	VB B	IV層	群	群	経緯日か? 半影 L.R 縦影 L.R 縦影 口唇部外側に帯状工具で存在	II2
84	VB8 b	V層	群	群	経緯日か? 縦影 L.R 縦影	II2
85	VB C	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影	II2
86	VB A 4 a	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 継続多	II2
87	VB8 a	V層	群	群	経緯日か? 縦影 L.R 縦影 継続	II2
88	VB1 b	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影	II2
89	VB B	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 継続多	II2
90	VB B	IV層	群	群	経緯日か? 縦影 L.R 縦影 継続多	II2
91	VB8 a c d	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 継続多	II2
92	VB B	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 継続多	II2
93	VB A 4 a	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影	II2
94	VB A 4 e	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影	II2
95	VB A 2 a	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 継続多	II2
96	VB A 2 d	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影	II2
97	VB A 4 e	V層	群	群	経緯日 縦影 L.R 縦影 継続	II2
98	VB8 a	IV層	群	群	縦影? 継続	II2
99	VB8 a	IV層	群	群	縦影? 継続	II2
100	VB A 2 d	表皮土	群	群	縦影か? 縦影 継続	II2
101	VB8 c	V層	群	群	縦影? 継続	II2
102	VB A 2 i	V層	群	群	縦影の東 LとR Rのみ0段多か? 4本か 継続	II4
103	VB1 a	V層	群	群	縦影の東 RとL Rのみ 0段多か 2本か4本 継続	II4
104	VB7 f	深層	群	群	縦影の東 RとL 0段多か(4本) 2本か4本 継続多	II4
105	VB B	IV層	群	群	縦影の東 RとL 0段多か 4本か 継続多	II4
106	VB A 3 e f	V層	群	群	縦影の東 RとL 0段多か(4本) 2本か4本 継続多	II4
107	VB8 d	V層	群	群	縦影の東 RとL 0段多か 継続多	II4
108	VB A 0 j	V層	群	群	L.R 縦影の段差より戻しなし 口唇部領域状況 継続	II5
109	VI	V層	群	群	L.R 縦影の段差より戻しなし 口唇部領域 継続少	II5
110	VB8 b	V層	群	群	L.R 縦影の段差より戻しなしか 継続多	II5
111	VB8 C	IV層	群	群	L.R 縦影の段差より戻しなしか あるいは経緯 継続 補充孔	II5
112	VB B	IV層	群	群	L.R 縦影の段差より戻しなしか あるいは経緯 継続	II5
113	VB A 4 c	V層	群	群	L.R 縦影の段差より戻しなし 継続	II5
114	VB7 b	V層	群	群	L.R 縦影の段差より戻しなし 継続多	II5
115	VB B	V層	群	群	R.L 縦影の段差より戻しなしかあるいは経緯 口唇部領域状況 継続多	II5
116	VB A 0 j	V層	群	群	R.L 縦影の段差より戻しなし 継続	II5
117	VB B	IV層	群	群	R.L 縦影の段差より戻しなし 継続多	II6
118	VB B a	IV層	群	群	縦影の段差より戻しなし L.R(L.R) 継続	II6
119	VB A 1 a	IV層	群	群	縦影の段差より戻しなし L.L.R 口唇部領域状況or口唇 継続	II7

120	VIB	V層	鋼 鉄	柱々段反照か	L R R	鋼筋多	II 8		
121	VIB	埋土	鋼 鉄	柱々段反照か	L R R	鋼筋多	II 8		
122	VIB 8 C	埋土	鋼 鉄	柱々段反照か	L R R	鋼筋多	II 8		
123	VIB 8 e	V層	鋼 鉄	柱々段反照か	L R R	□管部厚肉円板 鋼筋多	II 8		
124	VIC	V層	鋼 鉄	L R R 柱々段反照か	0段多か	鋼筋	II 8		
125	VIB 8 C	V層	鋼 鉄	□管部上端に附いた板	L R段用板	鋼筋	II 9		
126	VIB 2 a	V層	鋼 鉄	L R段	□縁部に厚肉の附いた板	□縁部厚肉円板 鋼筋	II 9		
127	VIB、VIB	V層	鋼 鉄	L R段	□管部厚肉	鋼筋多	II 9		
128	VIB 9 d	V層	鋼 鉄	L R段	0段多か	□管部厚肉の鋼筋圧板(両A4)	鋼筋多	II 9	
129	VIB 8 d	V層	鋼 鉄	L R段	0段多か	□管部厚肉円板	鋼筋	II 9	
130	VIB 1 C	V層	鋼 鉄	L R段	□管部厚肉円板	鋼筋多	II 9		
131	VIA 3 h	V層	鋼 鉄	L R段	□管部厚肉圧板	鋼筋	II 9		
132	VIB g	V層	鋼 鉄	L R段	□管部厚肉圧板	鋼筋多	II 9		
133	VIB 9 C	V層	鋼 鉄	L R段	0段多か	□管部外周圧板	鋼筋多	II 9	
134	VIB 9 b	V層	鋼 鉄	L R段	□管部厚肉実用圧板	鋼筋多	II 9		
135	VIB 0 C	覆瓦	鋼 鉄	板太厚肉	L R段	□管部厚肉円板	鋼筋	II 9	
136	VIB 9 b	V層	鋼 鉄	L R段	0段多か	□管部外周圧板	鋼筋多	II 9	
137	VIB 8 e	V層	鋼 鉄	L R段か	□管部厚肉	鋼筋多	II 9		
138	VIB 1 b	埋土	鋼 鉄	L R段	0段多か	鋼筋多	II 9		
139	VIA 3 g h	V層	鋼 鉄	L R段	0段多か	厚肉の端が□管部外周にみえる	鋼筋	II 9	
140	VIA 2 a	埋土	鋼 鉄	L R段	0段多か	鋼筋多	II 9		
141	VIB 8 a	V層	鋼 鉄	L R段	鋼筋	鋼筋	II 9		
142	VIA 3 b	埋土	鋼 鉄	L R段	補強孔	鋼筋	II 9		
143	VIA 9 J	V層	鋼 鉄	L R段	0段多か	鋼筋	II 9		
144	II B 4 h	床板	鋼 鉄	板太厚肉	L R段	鋼筋多	II 9		
145	VIA 9 J	V層	鋼 鉄	L R段	高筋筋文	L R段	鋼筋多	II 9	
146	VIA	IV層	鋼 鉄	L R	尖結		II 9		
147	VIA	IV層	鋼 鉄	L R	鋼筋	尖結	II 9		
148	VIB 1 b	V層	鋼 鉄	L R L段	□管部厚肉円板	鋼筋多	II 10		
149	VIB 8 e	V層	鋼 鉄	L R L段	□管部厚肉円板	鋼筋多	II 10		
150	VIB 8 C	V層	鋼 鉄	L R L段	□管部厚肉円板	鋼筋多	II 10		
151	VIB	IV層	鋼 鉄	L R L段	□管部厚肉円板	鋼筋多	II 10		
152	VIB	IV層	鋼 鉄	L R L段	□管部外周に厚肉実用圧板	鋼筋	II 10		
153	VIB	IV層	鋼 鉄	L R L段	□管部厚肉圧板	鋼筋	II 10		
154	VIA 1 a	V層	鋼 鉄	0段多かの断面	R L R	鋼筋多	II 10		
155	VIA 1 a	V層	鋼 鉄	L R L段	□管部厚肉圧板	鋼筋	II 10		
156	VIA 2 J	V層	鋼 鉄	L R L段	□管部厚肉の削代	鋼筋多	厚肉の端が□管部にみえる	II 10	
157	VIB 8 a	V層	鋼 鉄	L R段	0段多か	鋼筋多	II 10		
158	VIA 9 J	V層	鋼 鉄	L R L段	鋼筋		II 10		
159	VIA 2 b	IV層	鋼 鉄	0段多かの断面	R L R	鋼筋多	II 10		
160	VIB 8 a	IV層	鋼 鉄	L R L段	鋼筋多		II 10		
161	VIA 3 []	V層	鋼 鉄	L R L段	鋼筋		II 10		
162	VIA	IV層	鋼 鉄	L R L段	鋼筋多		II 10		
163	VIB 8 b	V層	鋼 鉄	L R Lか	柱々段の端が平直	尖結	鋼筋	II 10	
164	VIB 8 b	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	0段多か	R L L段+L R段	鋼筋多	II 11	
165	VIA 0 d	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R段+新田板	鋼筋多		II 11	
166	VIB 8 b	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	0段多か	R L+L R段	鋼筋多	II 11	
167	VIA 1 a	IV層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R段円板+L R段用板	R L段用板	鋼筋多	II 11	
168	VIA 1 I	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	R L 0段多か	L R 0段多か		II 11	
169	VIB 7 a	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R段+新田板	鋼筋多		II 11	
170	VIB 9 d	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R段+新田板	鋼筋多	□管部厚肉の削代	II 11	
171	VIB 1 a	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	0段多か	R L+L R段	鋼筋多	II 11	
172	VIB 9 a	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R L段+新田板	鋼筋多		II 11	
173	VIA	IV層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R+L R L段	鋼筋		II 11	
174	VIA 3 I	埋土	鋼 鉄	結束のない羽状	L R-L R	0段多か	新田板	鋼筋多	II 11
175	VIA	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R R+L R L	鋼筋		II 11	
176	VIB	IV層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R L+L R L段	鋼筋		II 11	
177	VIB 9 C	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	0段多か(両か)	R L R+L R L段	鋼筋	II 11	
178	VIB 9 C	V層	鋼 鉄	結束のない羽状	L R R+L R L段	鋼筋多		II 11	
179	土捨て場	I a層	鋼 鉄	結束のある羽状	(L R+R L)新田板	鋼筋多		II 12	

180	T 3 西	V 音	探	録	録	結東ある羽状(R L + L R)後部転	継続少	II 12		
181	VID	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + R L)後部転	口唇部 凡部制	継続少	II 12	
182	VID A 3 h	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + R L)後部転	継続	II 12		
183	VID	V 音	探	録	録	結東ある羽状(R L + L R)後部転	口唇部	凡部制	継続少	II 12
184	VIA	IV 音	探	録	録	結東ある羽状(R L + L R)後部転	II 12			
185	VID 7 C	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + L R)後部転	口唇部	凡部制	継続	II 12
186	VID A 3 I	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + L R)後部転	継続	II 12		
187	VID 4 h 後部転	理上	探	録	録	結東ある羽状(L R + L R)後部転	金部	II 12		
188	VID 7 e	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + L R)後部転	継続	II 12		
189	VID 0 b	III 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + L R)後部転	口唇部	凡部制	継続少	II 12
190	VID 9 e	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + L R)後部転	継続	II 12		
191	VIA 1 e	IV 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + R L) 後部転	継続	II 12		
192	VID 0 b	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + R L) 上下を定めて後部転	継続少	II 12		
193	VID	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + R L) 0 段多音後部転	継続	II 12		
194	VID 9 d	V 音	探	録	録	結東ある羽状 0 段多音(L R + R L)後部転	継続	II 12		
195	VIA 0 d	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + L R)後部転	結東のみが立つ 5 段	II 12		
196	VIA 2 j	V 音	探	録	録	結東ある羽状 R L + L R 0 段多音	準羽の羽状	II 12		
197	VIA 3 e	V 音	探	録	録	結東ある羽状(L R + L R) 上下を定めて後部転	継続	II 12		
198	VID 8 a	V 音下位	探	録	録	ループ4 段 + 結尾 R 後部	L 回り	II 12		
199	VID 0 C	V 音	探	録	録	ループ4 段	結尾 R 後部	L 回り	II 12	
200	VID 8 e	V 音	探	録	録	ループ3 段	前々後部	L R 後部	II 12	
201	VIA 2 j	V 音	探	録	録	ループ3 段	L R 後部	II 12		
202	VID	IV 音	探	録	録	ループ3 段	L R 後部	II 12		
203	VIA 4 a	V 音	探	録	録	ループ3 段	L R 後部	II 12		
204	VI	V 音	探	録	録	ループ5 段	L R 後部	II 12		
205	VID 1 C	V 音	探	録	録	ループ5 段	L R 後部	II 12		
206	VID 0 b	V 音	探	録	録	ループ6 段	R L 後部	0 段多音	II 12	
207	VID	V 音	探	録	録	ループ3 段	R L 後部	II 12		
208	VID 8 b	V 音	探	録	録	ループ4 段	L R 後部	II 12		
209	VID 8 a	V 音	探	録	録	ループ1 段	L R 後部	II 12		
210	VIA 3 h	V 音	探	録	録	ループ2 段	L R 後部	II 12		
211	VIA 3 C	V 音	探	録	録	ループ2 段	L R 後部	II 12		
212	VID 8 a	V 音	探	録	録	ループ1 段	L R 後部	II 12		
213	VIA 2 b	V 音	探	録	録	ループ2 段	L R 後部	II 12		
214	VID	V 音	探	録	録	ループ2 段	L R 後部	II 12		
215	VID 0 b	V 音	探	録	録	ループ3 段	L R 後部	II 12		
216	VID	V 音	探	録	録	ループ6 段	L R 後部	II 12		
217	VIA 2 j	V 音	探	録	録	結東のない羽状 0 段多音	R L + L R 後部	II 14		
218	VID 9 b	V 音	探	録	録	結東のない羽状 0 段多音	R L + L R 後部	II 14		
219	VIA 1 j	V 音	探	録	録	結東のない羽状 L R + L R 後部	II 14			
220	VIA 3	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
221	VID 9 a	V 音	探	録	録	結東のない羽状 0 段多音	R L + L R 後部	II 14		
222	VIA、VID	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
223	VID 8 b	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
224	VID 9 b	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
225	VI	IV 音	探	録	録	口唇部	II 14			
226	VIA 4 e	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
227	VIA 2 d	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
228	VID 9 b	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
229	VID 9 a	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
230	VID	IV 音	探	録	録	口唇部	II 14			
231	VIA 2 j	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
232	VID 8 b	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
233	VID 8 d	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
234	VID 9 C	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
235	VID	IV 音	探	録	録	口唇部	II 14			
236	VIA 3	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
237	VID 9 C	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
238	VIA 3 d	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			
239	VIA 3 h	V 音	探	録	録	口唇部	II 14			

240	VIA 9	V冊	新 録	成り合合明か? R (5→R L (5+0段多糸LR横田)	1116
241	VE 4 d	V冊	新 録	瓦状紙永文 縦線	1114
242	VIB 9 b	V冊	新 録	口縁部文等のみか? 平巻紙糸 縦線	1114
243	VIB 1 a	V冊	新 録	瓦状紙永文 縦線	1114
244	IID 1 a	T日冊	新 録	瓦状紙永文 不巻紙糸に近い 縦線	1118 a
245	VIA 3 b	V冊	新 録	瓦状紙永文 縦線	1118 a
247	VIA 2 d	V冊	新 録	瓦状紙永文 縦線	1120 a
248	VIB 8 a	口巾冊	新 録	口縁部 互折紙糸 縦線多	1118 b
249	VIA 2 a	V冊	新 録	口縁部 互折紙糸+R L紙か? 縦線	1118 b
250	VIA 4 e	横土	新 録	口縁部 互折紙糸+L R紙か? 縦線多	1118 b
251	VIB	V冊	新 録	口縁部及び口唇部 互折紙糸 縦線多	1118 b
252	VIA 0 1	V冊	新 録	変形 紙永文 R 縦線多	1118 c
253	トレンプ西から2目	不明	新 録	変形 紙永文 R 横線 縦線多	1118 c
254	VIB	V冊	新 録	網目状紙永文 補綴孔 口唇部指環状圧痕 縦線多	1118 d
256	VIB 7 d	IV冊	新 録	網目状紙糸 縦線	1118 d
256	VIB 8 b	V冊	新 録	網目状紙糸 ランダムに施文 縦線	1118 d
257	VIA	IV冊	新 録	網目状紙永文	1118 d
258	VIB	IV冊	新 録	網目状紙永文 縦線	1118 d
259	VIA 4 C	V冊	新 録	互折紙糸 縦線多	1118 e
260	VIB 8 b	V冊	新 録	網目状紙糸 ランダムに施文 縦線	1118 d
261	VIB	V冊	新 録	紙永文 L 縦線をわずかに含む	1118 e
262	VIB 8 C	IV冊	新 録	L R 縦線り文 斜帯 縦線多	1117
263	VIB 8 e	横土	新 録	体部縦線り文 縦線	1117
264	VIB 8 f	V冊	新 録	網目 縦線り文+L R 縦線をごくわずかに含む	1117
265	VIB 7 d	V冊	新 録	L R紙 縦線り文	1117
266	II c 3 d	T日冊	新 録	沈線	111
267	c 3 d	T日冊	新 録	粘土絶給付 L R 0段多糸か	111
268	VIB 8 a	口巾冊	新 録	R L紙 粘土絶給付の口縁部隆帯と口縁部に宛て刺目文	IV 1
269	VIA	IV冊	新 録	R L紙 縦線り文(縦)	IV a
270	VIA 0 1	V冊	新 録	R L紙 縦線り文	IV1 a
271	VIB 8 a	V冊	新 録	R L紙 縦線り文	IV1 a
272	II c 8 a	T日冊	新 録	L R糸め 沈線 交互刺目文	761
273	VIA 8 J	V冊	新 録	R L紙 0段多糸 粘土絶給付	IV2 a
274	VIB	IV冊	新 録	R L紙 0段多糸 粘土絶給付	IV2 a
275	VIB 8 d	V冊	新 録	キャリバー面 口縁部L R紙 粘土絶給付の隆帯	IV2 a
276	VIB 9 b	V冊	新 録	L R紙 0段多糸 粘土絶給付の隆帯 変形文	IV2 a
277	VIA	IV冊	新 録	口縁部R L R紙 網目状L R紙 粘土絶給付	IV2 a
278	VIB 7 a	口巾冊	新 録	キャリバー面 L R紙 粘土絶給付の隆帯	IV2 a
279	VIA 3 a f	V冊	新 録	L R (0段多糸か?)紙 粘土絶給付の隆帯	IV2 a
280	VIA 0 d	V冊	新 録	キャリバー面 L R紙 粘土絶給付の隆帯	IV2 a
281	VIA 2 d	陶壁土	新 録	キャリバー面 口縁部L R紙 粘土絶給付の隆帯	IV2 a
282	VIA 0 1	V冊	新 録	R Lか? 網目状 粘土絶給付の隆帯	IV2 a
283	VIB d	IV冊	新 録	R L 0段多糸 斜め 粘土絶給付の隆帯	IV2 a
284	VIB 9 C	V冊	新 録	キャリバー面 口縁部L R紙 網目状L R紙 粘土絶給付の隆帯	IV2 a
285	VIA	IV冊	新 録	R L紙 施文後 横帯給付	IV2 a
286	VIB	IV冊	新 録	R L 0段多糸か? 縦 隆帯	IV2 a
287	VIA 8 1	口巾冊	新 録	全体についていない網目 隆帯	IV2 a
288	VIB	V冊	新 録	R L R紙 沈線 口唇部隆帯と給付 口唇上部に沈線	IV2 b
289	VIB	IV冊	新 録	R L R紙 沈線 3本	IV2 b
290	VIB 8 C d	V冊	新 録	R L R紙 沈線文 横帯口縁	IV2 b
291	VIB	V冊	新 録	R L R紙 沈線	IV2 b
292	VIA 8 1	横土	新 録	R L R紙 沈線	IV2 b
293	VIA	IV冊	新 録	R L R紙 横沈線	IV2 b
294	VIA	IV冊	新 録	沈線	IV2 b
295	VIA 1 e	IV冊	新 録	沈線 R L光線	IV2 b
296	VIB	IV冊	新 録	R L R紙 沈線による沈線	IV2 b
297	VIB 8 a	IV冊	新 録	L R紙 3本線の沈線	IV2 b
298	VIB	V冊	新 録	R L R紙 3本単位沈線文	IV2 b
299	VIB	IV冊	新 録	R L R紙 3本単位沈線文	IV2 b
300	VIB 8 d	IV冊	新 録	R L R紙 沈線 横帯沈線を伴う	IV2 b

301	VI B	IV冊	挿	挿	口絵部 挿巻状(巻込挿)	IV2 c
302	不明	挿紙	挿	挿	R L 綴 挿巻状(巻込挿)	IV2 c
303	VI B 8 b	IV冊	挿	挿	表紙口縁 地文なし ミダキ 巻込挿 すす状の竹管付 巻状口縁	IV2 c
304	不明	挿紙	挿	挿	挿巻状(巻込挿)	IV2 c
305	VI A	IV冊	挿	挿	R L 綴の両面 巻込挿	IV2 c
306	VI A 8 a b	IV冊	挿	挿	R L R ? 綴 巻込挿 巻状口縁	IV2 c
307	VI B	IV冊	挿	挿	キャリバー型 口縁部 R L 綴両面 巻込挿	IV2 c
308	VI B 8 d	V冊	挿	挿	表紙口縁 L R 綴 巻込挿	IV2 c
309	VI A	IV冊	挿	挿	R L 綴 巻込挿	IV2 c
310	VI B	IV冊	挿	挿	R L 綴 巻込挿 キャリバー	IV2 c
311	VI B d	IV冊	挿	挿	L R 綴の 巻込挿	IV2 c
312	VI B 8 d	IV冊	挿	挿	口縁部 L R 綴 体部 L R 綴 巻込挿(貼付)	IV2 c
313	VI B 0 e	V冊	挿	挿	キャリバー型 口縁部 R L 綴両面 巻込挿	IV2 c
314	VI A 9 I J	IV冊	挿	挿	口縁部(無文等) 巻込挿のみで	IV2 c
315	T 3 西10W	V冊	挿	挿	R L 綴(加) 巻込挿 てい(わ)い(な)ミダキ	IV2 c
316	VI B 0 b	V冊	挿	挿	R L R 綴 巻帯(貼付)後施文 巻帯上に沈線	IV2 c
317	VI B	V冊	挿	挿	巻帯(貼付)後施文 R L R 綴 巻込挿	IV2 c
318	VI B	IV冊	挿	挿	2枚挿等 口縁部(無文) 表紙口縁 R L R 綴両面	IV2 c
319	VI B C	V冊	挿	挿	口縁部(折り返し)無文等 巻込挿 L R 綴両面	IV2 c
320	VI B 9 a	V冊	挿	挿	巻込挿 口縁部 L R 綴 体部 L R 綴	IV2 c
321	VI A 9 d	IV冊	挿	挿	口縁部 L R 綴 体部 L R 綴 巻込挿	IV2 c
322	VI B	IV冊	挿	挿	R L R 綴 施文後 巻込挿	IV2 c
323	VI C	V冊	挿	挿	R L R 綴 巻込挿	IV2 c
324	VI A	IV冊	挿	挿	R L 綴 巻込挿	IV2 c
325	VI B	IV冊	挿	挿	R L 綴 表紙(2枚挿)等	IV2 c
326	VI A	IV冊	挿	挿	R L 綴 巻込挿 挿紙	IV2 c
327	VI B	IV冊	挿	挿	R L 綴 施文後 巻込挿	IV2 c
328	VI B	IV冊	挿	挿	R L 綴 巻込挿 表紙口縁	IV2 c
329	VI A	IV冊	挿	挿	巻帯に挿紙(貼付)	IV2 d
330	VI A, VI A	V冊	挿	挿	挿紙(貼付) R L 綴 施文後(貼付) 口縁部と挿紙の間に2本の巻帯 8 b	IV2 d
331	VI B	IV冊	挿	挿	巻帯	IV2 d
332	VI B 0 a	V冊	挿	挿	巻帯(貼付) 口縁部と挿紙(貼付)2本の巻帯	IV2 d
333	VI B	IV冊	挿	挿	巻帯に挿紙(貼付) R L 綴	IV2 d
334	VI A 3 d	IV冊	挿	挿	巻帯によるわらび字状文及び区画 口縁部(無文等) R L 施文後(挿紙)	IV3 a
335	VI B 1 c	V冊	挿	挿	表紙口縁 巻帯によるわらび字文 沈線(区画) R L	IV3 a
336	VI B 5-7 e	IV冊	挿	挿	表紙口縁 沈線による区画 わらび字文 L R 綴	IV3 a
337	VI A 1 i	V冊	挿	挿	口縁部(無文) 巻帯によるわらび字文 区画 R L 綴	IV3 a
338	VI A II a	V冊	挿	挿	R L 綴 沈い沈線 裏手状文 表紙口縁	IV3 a
339	VI B 8 a	IV冊	挿	挿	R L 綴 巻込挿 裏手状 表紙口縁文	IV3 a
340	VI A	IV冊	挿	挿	口縁部 2 巻込挿による区画内に射突 表紙口縁	IV3 b
341	VI A	IV冊	挿	挿	口縁部 2 巻込挿による区画内に射突	IV3 b
342	VI B	IV冊	挿	挿	沈線 L R 綴 裏手状文	IV3 a
343	VI A 1 d	不明	挿	挿	沈線 射突 裏手状文	IV3 a
344	VI A	IV冊	挿	挿	巻込挿による区画内に射突(表紙口縁)	IV3 b
345	VI B	IV冊	挿	挿	射突	IV3 b
346	VI A	IV冊	挿	挿	沈線と施文で囲まれた区画内に射突 R L 綴	IV3 b
347	VI A 3 b	V冊	挿	挿	キャリバー型 巻込挿 L R 綴	IV3 b
348	VI B 8 a	III b 冊	挿	挿	沈い沈線による区画 竹管状の射突 表紙口縁	IV3 b
349	VI A 4 b	V冊	挿	挿	表紙口縁 L R 綴 沈い沈線	IV3 b
350	VI	IV冊	挿	挿	巻込挿による区画 区画内射突 表紙口縁	IV3 b
351	VI B 9 d	IV冊	挿	挿	表紙口縁 沈線による区画 L R 光線	IV3 b
352	VI A 1 a	V冊	挿	挿	沈い沈線による区画 R L R 綴	IV3 b
353	VI A 0 J	挿	挿	挿	L R 綴 沈線	IV3 b
354	VI B	IV冊	挿	挿	沈線 L R 綴	IV3 b
355	VI B 1 b	V冊	挿	挿	沈線による区画 L R 綴 磨り出し	IV3 b
356	VI B 1 C	V冊	挿	挿	沈線による区画 L R 光線	IV3 b
357	VI A 1 d	IV冊	挿	挿	L R 沈線による区画内を光線	IV3 b
358	VI A 3 e	V冊	挿	挿	沈線による区画 R L R 綴 施文後(区画)	IV3 b
359	VI B	IV冊	挿	挿	沈線 R L R	IV3 b
360	VI A 9 h	IV冊	挿	挿	L R 綴 施文後(巻込挿)で区画し(磨り)	IV3 b

362	WA 2 b	V冊	新 録	沈跡による区画	L.R.版		IV3b	
363	VIA 9 i j	IV冊	新 録	沈跡による区画	口縁部に一偏斜状の工具による異め方向からの削突がみえる		IV3b	
364	VIA 9 a	V冊	新 録	沈跡による区画	L.R.版施文した後に区画 磨り直し		IV3b	
364	VEA	IV冊	新 録	沈跡による区画内	R.L.光面		IV3b	
365	VIA	IV冊	新 録	R.L.版	充塞 沈跡		IV3b	
366	VIA 9 b	IV冊	新 録	R.L.版の斜め	施文後沈跡で区画し区画外を磨き		IV3b	
367	VIA	IV冊	新 録	キャリバー	沈跡による区画	L.R.版	IV3b	
368	VIA 2 d	V冊	新 録	R.L.R.版用紙	施文後沈跡で区画		IV3b	
369	VIA 9 a	不明	新 録	強い沈跡	R.L.R.版		IV3b	
370	VIA 9 j	III冊	新 録	L.R.版	沈跡		IV3b	
371	VIC 8 b	V冊	新 録	L.R.版	沈跡部削代底		IV3b	
372	VIB	IV冊	新 録	沈跡	L.R.		IV4a	
373	VIB	IV冊	新 録	破状口縁	R.L.0段多条	強い沈跡で区画 磨り直し	IV4a	
374	VIB	IV冊	新 録	R.L.	0段多条	沈跡	L.G.キ	IV4a
375	VIB 1 C	V冊	新 録	L.R.版	強い沈跡による区画		IV4a	
376	VIB 9 b	V冊	新 録	沈跡による区画	R.L.版施文沈跡で区画 磨り直し		IV4a	
377	VIA	IV冊	新 録	R.L.R.版	施文後 沈跡		IV4a	
378	VIA	IV冊	新 録	R.L.R.版	三月状陥付		IV4a	
379	VIA 1 d	不明	ミニチュア	沈跡による区画			IV4a	
380	VIC 1 b	V冊	新 録	沈跡による区画内	L.R.充塞	施文後に削突	IV4a	
381	VIA 4 b	IV冊	新 録	沈跡による区画	強い沈跡の中へ削突		IV4a	
382	VIA 9 a	III冊	新 録	丸みをもつ破状口縁	沈跡による区画	沈跡間に右方向から削突	IV4a	
383	VIB	IV冊	新 録	口縁部	沈跡に接して内凹の削突		IV4a	
384	VIB 9 b	V冊	新 録	区画沈跡による区画	隆起は粘土網状付	隆起間に削突	IV4a	
385	VIA 9 i j	IV冊	新 録	充塞施文	L.R.版	沈跡	削突	IV4a
386	WA 2 1	V冊	新 録	充塞施文	R.L.版	沈跡	削突	IV4a
387	VIC	IV冊	新 録	沈跡による区画内	削突		IV4a	
388	VIA	IV冊	新 録	沈跡に照って削突			IV4a	
389	VIB	IV冊	新 録	R.L.R.版用紙	隆起による区画施文		IV4b	
390	VIB 8 b	V冊	新 録	R.L.R.版一側	隆起(溝部 三角形)		IV4b	
391	VIB	IV冊	新 録	隆起(溝部 三角形)			IV4b	
392	VIA 9 i j	IV冊	新 録	隆起で区画	R.L.版隆起の断面は強い三角形		IV4b	
393	VIB	IV冊	新 録	隆起			IV4b	
394	VIB 9 b	V冊	新 録	隆起で区画	L.R.版隆起の断面三角形	ベンガラ?付着	IV4b	
395	VIB 9 b	III冊	新 録	隆起による区画	R.L.R.版		IV4b	
396	VIB	V冊	新 録	隆起で区画	R.L.版		IV4b	
397	VIA 3 b	IV	新 録	破状口縁	削突		IV4b	
398	VIA	IV冊	新 録	R.L.R.	斜め施文	強い沈跡で区画充塞施文	IV4a	
399	WA 1 e	覆乱	新 録	L.R.充塞	沈跡による区画		IV4a	
400	VIB 9 a	不明	古 付	R.L.R.版			IV5	
401	VIB d	IV冊	新 録	破状口縁	R.L.版用紙		IV5	
402	VIB 9 b	V冊	新 録	R.L.版用紙	口縁部隆起		IV5	
403	VIB	V冊	新 録	口縁部異方向にL.G.キ	裏面に陥づら痕が残る	L(無彫)版	口縁部隆起	IV5
404	VIB 9 C	V冊	新 録	L.R.版	口唇部削り直し		IV5	
405	VIA	IV冊	新 録	L.R.版	破状口縁		V	
406	VIB 9 b	V冊	新 録	口唇部やや外反	唇部が膨らむ	R.L.版用紙	IV5	
407	VIA	IV冊	新 録	口唇部やや外反	L.R.版用紙		IV5	
408	VIB	IV冊	新 録	口唇部やや外反	R.L.版用紙		IV5	
409	VIA 4 b	V冊	新 録	口唇部外反	R.L.版用紙		IV5	
410	VIB 8 e 覆面	覆土	新 録	R.L.版	口唇部削り直し		IV5	
411	VIB	V冊	新 録	口唇部やや外反	R.L.版用紙		IV5	
412	VIB 1 C	V冊	新 録	L.R.版	口唇部やや外反		IV5	
413	VIA 1 g	V冊	新 録	R.L.版用紙			IV5	
414	VIA 8 i	V冊	新 録	L.R.	0段多条	口唇部やや外反	IV5	
415	VIB	IV冊	新 録	L.R.版			IV5	
416	VIB 1 b	V冊	新 録	L.R.版	縁部入り?		IV5	
417	VIA 9 i	V冊	新 録	L.R.版	口唇部1.5cm程度して施文	覆面	IV5	
418	VIA 9 b	IV冊	新 録	R.L.版	口唇部1.5cm程度して施文	縁部孔裏面からあける	IV5	
419	VIA 4 d	V冊	新 録	R.L.版用紙			IV5	
420	VIB 1 a	V冊	新 録	L.R.版用紙	口唇部やや外反		IV5	

421	VI B 3 a	V層	漆	漆	黒 L.R. 漆	口縁部中央外反	IV5
422	VI B	V層	漆	漆	L.R. 漆	口縁部わずかに外反	IV5
423	VI B 3 b	IVb層	漆	漆	L.R. 漆	口縁部縮文帯 彫刻	IV5
424	VI B 1 b	V層	漆	漆	黒赤文		IV5
425	VI A	IV層	漆	漆	黒赤文		IV5
426	VI B	V層	漆	漆	黒 L.R. 漆		IV5
427	VI C	V層	漆	漆	L.R. 漆 赤紋(黒り戻し)か L.R. 0 段多糸		IV5
428	VI B 0 a	V層	漆	漆	黒 L.R. 漆		IV5
429	VI C	V層	漆	漆	L. 黒部		IV5
430	VI B	IV層	漆	漆	L.R. 漆 黒部 黒部 黒部 黒部		IV5
431	VI	IV層	漆	漆	L.R. 漆 黒部 黒部の圧痕		IV5
432	VI A	V層	漆	漆	L.R. 漆 黒部 黒部		IV5
433	VI A 2 C	IV層	漆	漆	L.R. 漆		IV5
434	VI A	IV層	漆	漆	口縁部半段竹管 削位に剥突		V
435	VI A	IV層	漆	漆	黒赤しを塗り削している		V
436	VI B	IV層	漆	漆	黒赤状貼付文		V
437	VI A d e	IV層	漆	漆	L.R. 漆 沈線		V
438	VI A	IV層	漆	漆	L.R. 漆 漆状口縁		V
439	VI A	I + II層	漆	漆	沈線		V
440	VI A 4 c	V層	漆	漆	黒赤目、沈線		V
441	VI A 3 b	黒土	漆	漆	黒赤目、沈線		V
442	VI A	IV層	漆	漆	沈線 ミダキ 輪彫孔		V
443	VI A 3 b	黒土	漆	漆	沈線		V
444	VI A 3 b	V層	不	不	把字		V
445	VI B 3 C	IV層	漆	漆	半黒赤文 L.R.		VI
446	不明	脱臼	合付	漆	L.R. 沈線 剥突		VI
447	II c 1 i	丁目層	脱	漆	漆状黒文 L.R.		VI
448	II C 1 e	IV層	漆	漆	沈線 剥突不明		VI
449	不明	脱臼	脱	漆	外装ミダキ		VI

第17表 遺構外出土遺物観察表(2)土製品(縄文時代)

品名	出土地点	層位等	種類	文 様	考 察
450	VI A 3 b	I + II層	円筒状土製品	L.R. 黒線を含む	早期末～前期前期か
451	VI B d	IV 層	円筒状土製品	L.R.	早期末～前期前期か
452	VI	IV 層	円筒状土製品	L.R. 黒線を帯くわずかに含む	

第18表 遺構外出土遺物観察表(3)土師器

品名	出土位置	層位	形状	外 面 調 査		内 面 調 査		法 量			ロクロ	備 考
				口縁部	体 部	口縁部	体 部	口 径	底 径	體 高		
453	II B 3 h	T II 層	壺	コナダ	ハケ目	コナダ	ヘラナダ	径17.2	7.0	径29.2	有	木炭灰
454	II B 3 h	T II 層	瓶	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	10.5	5.3	7.4	有	内装は外装と同様も 透け赤褐色→黒→ナズリ
455	VI A 4 b	IV 層	杯	コナダ	コナダ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	径15.3	-	-	有	内装黒色結膜
456	VI A 0 i	IV 層	杯	-	コナダ	-	ヘラミダキ	-	径16.6	-	有	内装赤切り黒炭灰
457	VI A 0 i	IV 層	壺	-	ヘラケズリ	-	ハケ目	-	径19.2	-	有	
458	II C 2 a	T II 層	壺	-	ハケ目	-	ヘラナダ	-	7.5	-	有	胎土に砂鉄を多く含む
459	II C 1 e-Tフロッ	不明	壺	-	ヘラケズリ	-	ヘラナダ	-	-	-	有	胎土に砂鉄を多く含む

第19表 遺構外出土遺物観察表(4)須恵器

品名	出土位置	層位	形状	外 面 調 査		内 面 調 査		法 量			ロクロ	備 考
				口縁部	体 部	口縁部	体 部	口 径	底 径	體 高		
460	VI A	IV 層	壺	-	ヘラケズリ	-	コナダ	-	-	-	有	体部破片
461	VI A	IV 層	壺	-	ヘラケズリ	-	コナダ	-	-	-	有	胎部
462	VI A	IV 層	壺	-	ヘラケズリ	-	コナダ	-	-	-	有	体部破片

第20表 遺構外出土遺物観察表(5) 石器、石製品(縄文時代)

()内は発見層

順号	出土地点	層位	層様	長さ	幅	厚さ	重量	材質	産地、生成年代	特徴	分類
1	VIC	V層	石碇	1.5	1.3	0.3	0.3	粘板岩	北上山地古生界		OAa
2	VIA2j	V層	石碇	1.5	(1.3)	0.3	(0.4)	粘板岩	北上山地古生界	西基 基部の一欠欠	OAb
3	VIC	IV層	石碇	1.9	1.4	0.3	0.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAa
4	VIA5a粘土付遺	V層	石碇	1.9	1.2	0.3	0.4	粘板岩	北上山地古生界	基部の一欠欠	OAa
5	VIA1f	V層	石碇	(1.7)	1.8	0.5	(1.1)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	西基	OAa
6	VIA2b	V層	石碇	1.6	1.7	0.5	0.8	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	西基	OAa
7	IIc1e	IV層	石碇	2.3	1.9	0.5	1.2	チャート質粘板岩	北上山地古生界	西基 基部の一欠欠	OAa
8	VIA3d	V層	石碇	2.1	1.8	0.5	0.9	粘板岩	北上山地古生界	西基	OAa
9	VIB8b	V層	石碇	(2.4)	1.6	0.3	(0.8)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先端部及び基部の一欠欠	OAa
10	VIA2j	IIIa層	石碇	2.2	1.3	0.3	0.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	西基	OAa
11	VIA3f	V層	石碇	2.5	1.6	0.5	1.1	粘板岩	北上山地古生界	西基	OAa
12	VIB8c	V層	石碇	(2.3)	1.7	0.7	(1.3)	粘板岩	北上山地古生界	先端一欠欠	OAa
13	VIB5a	VIB8a以下	石碇	2.4	1.9	0.5	1.6	粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部 平製品か	OAb
14	VIB8a	V層	石碇	1.4	1.2	0.2	0.2	粘板岩	北上山地古生界	先端欠く	OAb
15	VIB8a	V層	石碇	1.6	1.3	0.3	0.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
16	VIB	IV層	石碇	1.8	1.3	0.3	0.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAb
17	VIA3a粘土付遺	埋土	石碇	1.8	1.2	0.3	0.5	粘板岩	北上山地古生界	一欠欠	OAb
18	VIA3J	V層	石碇	2.0	1.3	0.4	0.7	粘板岩	北上山地古生界	基部の一欠欠狭い凹部	OAb
19	VIA、VIA	IV層	石碇	2.1	1.5	0.3	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
20	VIB1b	V層	石碇	(2.1)	1.4	0.4	(0.8)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先端凹部	OAb
21	VIB7f	V層	石碇	2.4	1.4	0.6	1.1	粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部	OAb
22	VIA3b粘土付遺	埋土	石碇	2.0	2.2	0.4	0.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
23	VIB4a粘土付遺	埋土上段	石碇	(1.9)	1.4	0.3	(0.6)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	凹部	OAb
24	VIA2f	V層	石碇	2.2	1.4	0.3	0.6	凝灰岩	北上山地古生界	狭い凹部一側欠欠	OAb
25	VIA1f	V層	石碇	2.2	1.5	0.3	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部基部の一欠欠	OAb
26	VIA	IV層	石碇	2.3	1.3	0.3	0.9	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAa
27	VIC	IV層	石碇	2.3	1.5	0.5	1.2	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAa
28	VIB8a	V層	石碇	2.5	1.8	0.4	0.8	粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
29	VIC5d	T I層	石碇	3.4	1.7	0.4	1.8	粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
30	VIA2a粘土付遺	埋土	石碇	2.5	1.5	0.3	0.9	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
31	VIA4c	V層	石碇	2.4	1.5	0.4	0.9	粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
32	IIc2h	T I層	石碇	2.4	1.5	0.4	1.0	粘板岩	北上山地古生界	平基	OAb
33	VIB1a	V層	石碇	2.7	1.5	0.4	1.0	粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
34	VIA2b	IV層	石碇	2.9	1.7	0.3	1.7	粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部	OAb
35	VIA	IV層	石碇	3.2	1.5	0.5	2.2	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAb
36	VIB8a	V層	石碇	1.8	1.2	0.2	0.5	粘板岩	北上山地古生界	先欠	OAb
37	VIA1b	埋土	石碇	1.8	1.3	0.3	0.5	粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部	OAb
38	VIB8a	V層	石碇	2.2	1.4	0.2	0.7	粘板岩	北上山地古生界	ごく狭い凹部先端欠(わずか)	OAb
39	VIB8c	IIIa層	石碇	2.1	1.3	0.2	0.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAb
40	VIA3f	V層	石碇	2.1	(1.5)	0.5	(0.9)	粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部	OAb
41	VIB4d	IV層	石碇	2.2	1.3	0.6	1.3	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	西基ごく狭い	OAb
42	VIA2a粘土付遺	埋土	石碇	2.2	1.5	0.3	0.7	粘板岩	北上山地古生界	一欠欠	OAb
43	T3a5m	V層	石碇	2.1	1.5	0.3	0.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAb
44	表層	I a層	石碇	1.6	1.3	0.3	0.6	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OAb
45	VIA3f	V層	石碇	1.9	1.4	0.4	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部	OAb
46	VIB4d	V層	石碇	(2.0)	1.6	0.3	(0.8)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先端部少し欠狭い凹部	OAb
47	VIB8c	V層	石碇	(2.2)	1.6	0.4	(1.1)	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	先端欠一側欠平基	OAb
48	VIB8c	IIIa層	石碇	2.1	1.6	0.3	0.8	粘板岩	北上山地古生界	西基	OAb
49	VIA2a粘土付遺	埋土	石碇	1.9	1.4	0.4	0.7	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部 先端欠	OAb
50	VIA2a粘土付遺	埋土	石碇	1.2	1.1	0.3	0.3	粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部	OAb
51	VIA8g	V層	石碇	1.3	1.3	0.7	0.4	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	基部の一欠欠	OAb
52	VIB7f	IV層	石碇	1.6	1.3	0.3	0.6	粘板岩	北上山地古生界	凹部	OAb
53	VIB4b	V層	石碇	1.5	1.3	0.2	0.4	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	基部の一欠欠	OAb
54	VIA1d	V層	石碇	1.5	1.3	0.3	0.4	粘板岩	北上山地古生界	先端欠	OAb
55	VIB4d	V層	石碇	2.5	2.4	0.6	3.0	粘板岩	北上山地古生界	狭い凹部	OAb
56	VIB7f	IV層	石碇	1.4	1.2	0.3	0.4	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	平基	OB
57	VIA	IV層	石碇	1.4	1.2	0.3	0.5	凝灰質粘板岩	北上山地古生界		OB

58	VIA3b	住居用	雑土	石積	1.7	1.0	0.3	0.4	耐久賃料低額	北上山地古生界	平基	先期欠	OB
59	VIA3g	V層	石積	1.7	1.3	0.3	0.5	粘板積	北上山地古生界	基部の一階欠			OB+
60	VIA3i	IV層	石積	2.0	1.5	0.6	(3.2)	粘板積	北上山地古生界	一階欠			OB+
61	VIA1f	V層	石積	2.1	1.4	0.3	0.7	耐久賃料低額	北上山地古生界	平基基部の一階欠			OB+
62	VIB9a	IIIa層	石積	2.5	2.4	0.3	0.7	耐久賃料低額	北上山地古生界	平基			OB
63	VIA3g	V層	石積	(2.3)	1.5	0.3	(0.8)	石積賃料低額	北上山地古生界	先期欠平基			OB
64	VIB2c	VI層	石積	2.3	1.5	3.5	0.8	耐久賃料低額	北上山地古生界	平基			OB
65	VIA	IX層	石積	2.4	1.1	0.4	0.8	耐久賃料低額	北上山地古生界				OB
66	VIC2f	IV層	石積	2.2	1.3	0.4	0.7	粘板積	北上山地古生界	平基			OB
67	VIC	IV層	石積	2.0	1.1	0.4	1.4	粘板積	北上山地古生界				OB
68	IIcAc	T1層	石積	3.2	1.7	0.7	2.7	耐久賃料低額	北上山地古生界	平基			OB
69	VIAOf	VI層	石積	2.4	1.7	0.3	1.3	耐久賃料低額	北上山地古生界				OB
70	VIA2f	IV層	石積	3.1	2.5	0.4	3.8	粘板積	北上山地古生界	平基			OB
71	VIA3b	住居用	雑土	石積	(2.3)	1.4	0.5	(1.8)	粘板積	北上山地古生界	自然開閉先期わずかに欠凸部		OC
72	VIA3h	V層	石積	2.4	1.9	0.9	1.8	耐久賃料低額	北上山地古生界	基部欠凸部			1b
73	不明	不明	石積	3.4	1.1	4.5	1.0	耐久賃料低額	北上山地古生界	突基礎			1
74	VIB9c	IIIa層	石積	3.9	1.4	0.6	2.2	チャート質粘板積	北上山地古生界	有基			1
75	VIAOd	V層	石積	(2.9)	1.1	0.4	(1.1)	粘板積	北上山地古生界	基部欠段差			1
76	VIA	IV層	石積	4.1	1.2	0.6	2.1	チャート質粘板積	北上山地古生界				1
77	VIB9c	V層	石積	2.4	1.7	0.3	0.7	チャート質粘板積	北上山地古生界	平基(加工途中か?)			2
78	VIB6c	雑土	石積	2.9	1.6	0.2	1.6	粘板積	北上山地古生界	基部欠凸			2
79	VIA1f	VI層	突基礎	(2.6)	2.1	1.3	(7.5)	耐久賃料低額	北上山地古生界	基部			
80	VIB9b	IV層	突基礎	(4.4)	2.4	0.7	(8.3)	チャート質粘板積	北上山地古生界	上半欠陥			
81	VIB9b_9ab	IV層	突基礎	(5.6)	3.0	1.3	(18.4)	耐久賃料低額	北上山地古生界	先期部の凸			
82	VIA	IV層	突基礎	5.5	1.8	1.0	7.2	耐久賃料低額	北上山地古生界				
83	VIB9b	IV層	突基礎	(9.1)	2.5	1.1	(21)	耐久賃料低額	北上山地古生界	網の部分のみ			
84	VIA	IV層	突基礎	10.6	2.8	1.0	29.4	粘板積	北上山地古生界				
85	VIB	IV層	石積	6.0	1.3	0.6	5.2	耐久賃料低額	北上山地古生界				1a7
86	VIA2b	V層	石積	8.2	1.6	0.7	7.4	粘板積	北上山地古生界				1a7
87	VIA3b	住居用	雑土	石積	7.9	1.6	0.9	11.4	粘板積	北上山地古生界	先期少欠		1a7
88	VIB9e	V層	石積	5.2	1.7	0.9	8.0	耐久賃料低額	北上山地古生界				1a7
89	VIB9a	V層	石積	6.9	1.8	1.0	9.0	チャート質粘板積	北上山地古生界				1a7
90	VIA	IV層	石積	6.2	2.0	1.0	11.8	粘板積	北上山地古生界				1a7
91	VIB9a	V層	石積	8.3	2.3	1.1	17.9	チャート質粘板積	北上山地古生界				1a7
92	VIB9e	V層	石積	(9.3)	2.5	1.2	(25.5)	粘板積	北上山地古生界	欠欠			1a7
93	VIA2b	IV層	石積	9.4	2.5	0.9	17.2	耐久賃料低額	北上山地古生界				1a7
94	VIB9e	IV層	石積	(7.0)	2.5	0.9	(16.4)	粘板積	北上山地古生界	先期欠陥			1a7
95	VIA6h	V層	石積	6.5	2.5	0.8	11.8	チャート質粘板積	北上山地古生界				1a7
96	VIB9c	V層	石積	5.6	2.5	0.6	6.8	耐久賃料低額	北上山地古生界				1b7
97	VIB9b	V層	石積	5.5	2.1	0.7	6.0	粘板積	北上山地古生界	打点つまみと壁			1b7
98	VIA4b	V層	石積	(6.4)	2.4	0.7	(9.5)	耐久賃料低額	北上山地古生界	つまみ穴・タール付骨物			1b7
99	IIcAf	T1層	石積	7.8	2.9	0.7	13.7	耐久賃料低額	北上山地古生界	タール付骨物少量			1b7
100	VIA	IV層	石積	5.7	2.8	1.0	13.0	耐久賃料低額	北上山地古生界				1b7
101	VIB	IV層	石積	5.5	3.1	0.4	8.2	耐久賃料低額	北上山地古生界				1b7
102	VIB9e	V層	石積	4.6	2.1	0.8	5.7	粘板積	北上山地古生界				1b7
103	VIB9b	V層	石積	3.6	2.3	0.8	4.3	石積賃料低額	北上山地古生界	打点つまみと壁付			1b7
104	YIC	IX層	石積	4.9	1.8	0.6	5.6	粘板積	北上山地古生界				1b7
105	VIA3d	V層	石積	5.0	1.8	0.6	5.6	耐久賃料低額	北上山地古生界	タール付骨物			1b7
106	VIB7c	V層	石積	4.7	2.3	0.5	4.8	耐久賃料低額	北上山地古生界	タール付骨物			1b7
107	VIA3i	V層	石積	4.4	2.1	0.6	4.4	粘板積	北上山地古生界	打点つまみに直交			1b7
108	VIB9a	V層	石積	5.0	3.1	0.9	12.1	粘板積	北上山地古生界				1b7
109	VIB9a	V層	石積	5.0	1.5	0.8	4.3	チャート	北上山地古生界				1b7
110	VIB9b	IV層	石積	5.8	1.4	0.8	4.5	チャート質粘板積	北上山地古生界				1a7
111	VIB9a	V層	石積	5.7	1.4	0.9	6.1	チャート質粘板積	北上山地古生界				1b7
112	VIB9a	V層	石積	6.3	1.6	0.5	7.5	耐久賃料低額	北上山地古生界	壁につまみとその周辺にタール付骨物			1b7
113	VIB6c	V層	石積	6.4	1.8	0.8	7.5	粘板積	北上山地古生界	タール付骨物少量			1b7
114	VIB9a	V層	石積	5.1	2.0	0.7	5.7	耐久賃料低額	北上山地古生界				1b7
115	VIB9e	V層	石積	3.9	3.3	1.1	6.9	耐久賃料低額	北上山地古生界				1b7
116	VIB9a	V層	石積	6.4	1.9	0.9	9.5	耐久賃料低額	北上山地古生界				1a7
117	VIA4c	V層	石積	(3.2)	1.7	0.7	(3.9)	チャート質粘板積	北上山地古生界	つまみ及び上半欠			1a7

1118	VIB5b	V層	石炭	5.8	2.3	0.5	4.7	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A1b-f
1119	VEA2b	V層	石炭	5.1	2.1	0.7	6.6	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A1b-f
1120	VIA2i	V層	石炭	5.7	3.0	0.8	11.8	粘板岩	北上山地古生界		A1b-f
1121	VIB0c	IV層	石炭	7.4	3.5	0.9	23.7	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A1b-f
1122	VIB0a	V層	石炭	7.0	3.5	1.1	16.6	粘板岩	北上山地古生界	ゲル付粘岩物	A1b-f
1123	VIB	IV層	石炭	5.6	2.6	0.7	8.2	粘板岩	北上山地古生界		A1b-f
1124	VIBa	IV層	石炭	6.3	2.3	0.9	12.8	粘板岩	北上山地古生界		A1b-f
1125	VIBa_d,e,f	V層	石炭?	5.6	2.5	0.7	7.2	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠割ゲル付粘岩物	A1b-f
1126	VIBf	IV層	石炭	4.6	2.0	0.6	4.1	粘板岩	北上山地古生界		A1b-f
1127	VIA3b自然層	礫土	石炭	4.5	2.0	0.5	3.0	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	ゲル付粘岩物	A1b-f
1128	VEA3d	V層	石炭	4.7	2.1	0.5	4.4	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A1b-w
1129	VIBRa	V層	石炭 (4.4)	3.4	0.6	(5.2)		粘板岩	北上山地古生界	刃割欠割	A1b-w
1130	VIBRa_9_ab	IV層	石炭 (4.0)	3.2	0.5	(7.1)		粘板岩	北上山地古生界	平層欠割?	A1b-w
1131	VIB7f	IV層	石炭	4.9	3.4	1.1	14.3	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A1b-w
1132	VIA7	IV層	石炭	7.6	2.7	0.7	18.0	チャート質粘板岩	北上山地古生界		A1b-w
1133	VIC4b	T1層	石炭	8.2	3.8	0.9	22.3	粘板岩	北上山地古生界		A1b-w
1134	VIA5e	V層	石炭	8.3	1.8	1.0	7.3	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	自然層を覆す	A1b-w
1135	VIA	IV層	石炭	5.7	2.1	0.7	8.5	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A1b-w
1136	VIC	IV層	石炭	5.3	1.6	0.8	6.4	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A1b-w
1137	VIA3i	V層	石炭	6.0	2.5	0.7	8.5	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A1b-w
1138	VIA1b	V層	石炭	3.8	2.2	0.6	4.4	粘板岩	北上山地古生界		A2a
1139	VIB7f_8_d,e,f	V層	石炭	4.0	2.2	0.4	(4.0)	石灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠割	A2a
1140	VIA2b	V層	石炭	4.5	2.6	0.6	7.2	粘板岩	北上山地古生界		A2
1141	VIB8b	V層	石炭	3.7	1.9	1.1	(4.1)	チャート質粘板岩	北上山地古生界	片割欠割 打点はつまみとずれる	A2
1142	VIA4a	V層	石炭	4.3	2.3	0.6	6.5	粘板岩	北上山地古生界		A2
1143	VIB7a	V層	石炭	5.7	2.3	1.0	8.8	粘板岩	北上山地古生界		A2
1144	VIB8b	V層	石炭	2.2	2.6	0.6	6.4	粘板岩	北上山地古生界		A2
1145	VIB9a	V層上位	石炭	5.5	2.4	0.9	9.6	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	打点つまみと違	A2
1146	VIA1g	V層	石炭	5.8	2.8	1.1	15.7	粘板岩	北上山地古生界		A2
1147	VEA3d	IV層	石炭	6.4	2.8	1.2	16.7	粘板岩	北上山地古生界		A2
1148	VIB0c	V層	石炭	7.2	2.7	1.2	18.3	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	VEA9bの7-9割割 VE A2Eの4E割割	A2
1149	VIB	V層	石炭	7.2	3.7	1.6	23.6	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A2
1150	VIB8b	V層	石炭	5.6	3.5	0.6	10.3	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A2
1151	VEA2h	V層	石炭	5.5	2.8	0.5	7.3	粘板岩	北上山地古生界	ゲル付粘岩物少量	A2
1152	VIA8i	V層	石炭 (0.5)	1.9	0.9	(7.1)		チャート質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠	A2
1153	VIB8c	V層	石炭	5.4	2.1	0.8	7.5	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A2
1154	VIA3j	V層	石炭	6.2	1.8	0.9	9.5	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	アスファルト付層	A2a
1155	VIA9b	V層	石炭	5.1	2.1	0.7	6.3	粘板岩	北上山地古生界		A2
1156	VEA1f	V層	石炭	5.0	2.5	1.1	5.5	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A3
1157	VIB7e	V層	石炭	5.5	2.9	0.9	8.7	粘板岩	北上山地古生界	割割打点はつまみの底対割	A3a
1158	VIB8b	V層	石炭	6.2	3.2	0.6	9.5	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ部分にゲル付粘岩物	A3
1159	VEA4a	V層	石炭	5.2	2.6	0.6	4.3	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A3
1160	VIBnd	V層	石炭	5.4	3.0	0.5	6.1	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A3a
1161	VIB9a	V層	石炭	4.8	2.8	1.0	8.8	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	VEA9bの7-9割割 VE A2Eの4E割割	A3a
1162	VIA	IV層	石炭	6.7	4.8	1.0	21.5	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		A3a
1163	VIB1b	V層	石炭 (4.3)	2.2	0.7	(6.6)		瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	先欠	不明
1164	VIB9a	V層	石炭 (4.0)	2.0	0.9	(4.4)		瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	先欠	不明
1165	VIB8c	V層	石炭 (0.1)	2.8	0.7	(5.7)		粘板岩	北上山地古生界	先層部欠割	不明
1166	VIA9j	V層	石炭	4.0	3.6	0.6	7.9	粘板岩	北上山地古生界		A3
1167	VIB1b	V層	石炭 (3.0)	2.4	0.5	(3.4)		瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	割割	A3
1168	VIC	IV層	石炭	6.9	2.7	0.6	8.3	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		不明
1169	VIB7e	V層	石炭?	10.4	3.3	1.4	52.1	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	先層欠割	不明
1170	VEA3d	V層	石炭	4.1	2.2	0.8	4.6	石灰質粘板岩	北上山地古生界		B1a
1171	VIB8c	礫土	石炭	2.1	5.0	0.4	4.6	粘板岩	北上山地古生界		B1a
1172	VIA1f	V層	石炭	3.8	5.3	1.5	14.8	粘板岩	北上山地古生界		B1a
1173	VIB7f	V層	石炭	5.3	2.7	1.1	9.4	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	ゲル付粘岩物	B1a
1174	VIA7f	V層	石炭	5.4	2.0	0.9	6.2	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		B1a
1175	VIA3e	V層	石炭	3.9	5.5	0.9	12.6	瀬灰質粘板岩	北上山地古生界		B1a
1176	VIA3g	V層	石炭 (2.7)	5.8	0.8	(9.5)		瀬灰質粘板岩	北上山地古生界	つまみ欠	B1a
1177	VIB8b	V層	石炭	3.3	4.4	1.0	7.5	粘板岩	北上山地古生界		B1a

179	YIB	IV層	石炭	2.9	4.1	0.6	5.8	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1a	
179	YIA	IV層	石炭	2.4	3.7	0.4	3.3	粘板岩	北上山崎古生界		B1a	
180	YIA	IV層	石炭	2.9	4.0	0.9	5.9	粘板岩	北上山崎古生界		B1a	
181	YIBa	V層	石炭	2.8	4.0	0.8	3.9	粘板岩	北上山崎古生界	打点つまみと反対の層部	B1b	
182	YIA3b(岩部)	礫土	下層	3.1	3.8	0.8	4.7	粘板岩	北上山崎古生界		B1b	
183	YIA6LJ	V層	石炭	3.8	3.6	0.8	7.8	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1b-b	
184	YIA3b(成層部)	礫土	石炭	3.5	4.1	0.4	0.5	粘板岩	北上山崎古生界		B1a	
185	YIB2C	V層	石炭	3.1	4.5	0.6	7.1	粘板岩	北上山崎古生界		B1b	
186	YIA	IV層	石炭	3.2	4.9	0.7	6.5	粘板岩	北上山崎古生界		B1b	
187	YIB0a	V層	石炭	3.2	5.4	1.1	13.6	粘板岩	北上山崎古生界		B1b	
188	YIB0_b,c,d	V層	石炭	3.9	(6.0)	1.0	(12.1)	粘板岩	北上山崎古生界	層部欠損	B1b-b	
189	YIA0	III層	石炭	4.1	3.5	0.9	19.1	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	ターム状付層物少量	B1b	
190	YIB2b	IV層	石炭	3.5	5.3	0.7	3.5	粘板岩	北上山崎古生界		B1b	
191	YIB9c	V層	石炭	3.1	5.0	0.7	8.3	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1b-a	
192	YIB9d,e,f	V層	石炭	(4.3)	2.3	0.7	(6.0)	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	YIB-9動脈はYIB9fからYIB9dまで	B1c	
193	YIB2b	V層	石炭	3.3	2.1	0.1	5.9	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1c-b	
194	YIB6c	X層	石炭	3.0	4.0	0.3	4.6	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1c-b	
195	YIA1-2(柱状部)	礫土	石炭	3.2	3.6	0.8	5.8	粘板岩	北上山崎古生界		B1c-b	
196	YIA	IV層	石炭	6.1	3.5	0.5	7.7	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1c	
197	YIB0f	V層	石炭	3.7	5.3	0.7	11.4	石炭質粘板岩	北上山崎古生界		B1c	
198	YIB1b	IX層	石炭	2.2	4.3	0.8	4.7	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1c	
199	YIA2f	IV層	石炭	2.8	3.8	0.6	3.5	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	ターム状付層物少量	B1c	
200	YIB	IV層	石炭	5.4	2.6	0.7	9.2	粘板岩	北上山崎古生界		B1c	
201	YIB7f	V層	石炭	2.8	4.4	0.8	6.3	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1c	
202	YIA3b	V層	石炭	2.7	4.7	0.9	6.2	ターム状付粘板岩	北上山崎古生界	打点つまみと連	B1c	
203	YIB9a	V層	石炭	4.9	5.0	0.5	7.1	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B1c	
204	YIA6d	V層	石炭	3.5	5.3	0.8	11.3	粘板岩	北上山崎古生界		B1c-b	
205	YIA3c	V層	石炭	4.7	2.3	0.8	7.9	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B2a	
206	YIA6e	V層	石炭	2.3	5.5	0.8	6.3	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	層部	B2a	
207	YIA3b(成層部)	礫土	石炭	3.2	4.4	0.6	4.9	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	ひとつの先頭部欠損	B2a	
208	YIC	IX層	石炭	2.2	3.4	0.4	2.9	粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
209	YIC	IV層	石炭	2.6	4.3	0.6	4.9	粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
210	YIB	IV層	石炭	2.6	4.5	0.7	6.5	粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
211	YIA3f	V層	石炭	3.8	4.7	0.8	6.7	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	層部欠損 打点つまみとややずれる	B2b	
212	YIC	IX層	石炭	3.0	5.2	0.8	9.3	粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
213	YIA4a	V層	石炭	2.8	(6.6)	0.9	(9.1)	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	層部欠損ターム状付層物	B2b	
214	YIB	IV層	石炭	3.1	5.0	0.6	6.2	粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
215	YIA	IV層	石炭	3.4	5.4	0.6	7.9	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
216	YIA3f	V層	石炭	4.1	6.4	1.0	14.8	粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
217	YIB0a	IV層	石炭	2.0	4.3	0.5	6.3	粘板岩	北上山崎古生界	打点つまみと反対側	ターム状付層物	B2b
218	YIB0a	V層	石炭	3.7	3.9	0.9	5.1	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
219	YIA3b	V層	石炭	3.8	5.0	0.8	8.0	粘板岩	北上山崎古生界	打点つまみと反対	B2b	
220	YIB1c	V層	石炭	2.9	4.0	0.9	7.6	粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
221	YIA3b	礫土	石炭	3.9	5.0	0.8	9.1	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	層部の一部欠損ごぼれか	B2b	
222	YIB3a	不明	石炭	3.4	(3.7)	0.8	(5.7)	粘板岩	北上山崎古生界	一部欠	B2b	
223	YIA2f	V層	石炭	3.9	4.8	0.9	9.4	ターム状粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
224	YIB0c	V層	石炭	3.1	4.4	0.7	2.8	粘板岩	北上山崎古生界		B2b	
225	岩部	V層	石炭	3.8	4.7	0.8	10.7	粘板岩	北上山崎古生界	打点つまみに直交	B2b	
226	YIA4c	V層	石炭	2.9	4.1	0.9	6.8	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	層部 打点つまみと直交	B2b	
227	YIB1c	V層	石炭	4.9	2.9	0.6	9.3	粘板岩	北上山崎古生界	層部 打点つまみと少しずれる	B2b	
228	YIB1c	V層	石炭	4.9	5.6	1.0	21.2	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	層部	B2b-b	
229	YIA2f	V層	石炭	4.6	5.3	0.8	18.2	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	打点つまみと反対側	B2f	
230	YIA5f	V層	石炭	(3.8)	3.2	0.6	(3.4)	ターム状粘板岩	北上山崎古生界	下層欠	不明	
231	YIB1b	IV層	石炭	(3.2)	4.2	0.7	(9.5)	ターム状粘板岩	北上山崎古生界	石炭の可能性有	つまみ欠	不明
232	YIB7c	V層	石炭	4.6	3.5	0.6	10.0	粘板岩	北上山崎古生界			
233	YIB1a	V層	南層部	3.7	3.3	0.8	9.6	粘板岩	北上山崎古生界	上層欠損		
234	YIB9a	V層	層部	3.5	2.4	0.7	5.6	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	一部に調整		
235	YIA0	III層上	層部	4.2	3.5	1.1	17.3	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	一部欠 層大部部に層部あり		
236	YIB0f	III層	層部	5.1	3.1	1.1	14.4	粘板岩	北上山崎古生界			
237	YIB9f	IV層	石炭	(3.8)	6.9	0.8	(1.8)	瀬灰質粘板岩	北上山崎古生界	つまみなし		

238	VI9c	V層	石塊	5.4	2.1	8.9	7.5	褐色質粘板岩	北上山地古生界	つまみ部分大	
239	VIa1e土層集中部	V層	石塊	3.5	1.5	8.9	4.3	粘板岩	北上山地古生界	先端部欠	尖延
240	VIa3g	V層	石塊	1.2	2.7	8.3	1.1	粘板岩	北上山地古生界	先端部少し磨滅	
241	VIc	IX層	石塊	4.4	3.1	8.7	9.6	粘板岩	北上山地古生界		
242	VIa2f	V層	石塊	5.3	3.7	1.7	44.5	石灰質粘板岩	北上山地古生界		
243	VIa3g	V層	石塊	6.5	4.3	2.2	69.0	粘板岩	北上山地古生界		
244	VIa3g	V層	石塊	9.8	4.3	1.7	64.0	緑色粘板岩	北上山地古生界		
245	VI9b	IIIa層	石塊	4.6	3.9	1.5	36.2	緑色粘板岩	北上山地古生界		
246	VI9d	V層	cbb-cbb-f	3.1	3.8	0.7	8.6	粘板岩	北上山地古生界		
247	VIa3d	V層	cbb-cbb-f	2.3	2.5	0.7	4.8	褐色質粘板岩	北上山地古生界		
248	VIa3g	板孔	cbb-cbb-f	3.0	2.6	1.3	11.5	褐色質粘板岩	北上山地古生界	自然面が露る	
249	VIc	IX層	不定形石塊	3.1	1.3	3.5	1.6	粘板岩	北上山地古生界		1
250	VI9b	V層	不定形	2.8	1.7	0.6	2.8	褐色質粘板岩	北上山地古生界	ハク片の1個縁に貫通	1
251	VIa3b	V層	割片	2.8	1.5	0.4	1.9	粘板岩	北上山地古生界		1
252	VIa3d	IIIa層	割片	3.8	1.8	0.6	4.3	粘板岩	北上山地古生界	1個縁を加工	1
253	VI9f,d,c,e,f	V層	割片	3.7	2.2	0.8	4.9	粘板岩	北上山地古生界	両側縁に使用痕	5
254	VIa8,1g,h	土石混上	不定形	3.3	2.0	0.5	2.9	粘板岩	北上山地古生界	2個縁を加工	1
255	VIa5,6,7	V層	不定形	3.9	2.3	0.7	4.3	粘板岩	北上山地古生界	本の割片のハク片の2個縁調整	1
256	VI9b,d,c,e,f	V層	不定形	3.8	1.5	0.5	2.6	北上山地古生界	石塊の可能性もある自然面あり		1
257	VIa5	V層	不定形	4.7	3.4	0.5	15.6	赤褐色粘板岩	北上山地古生界	1個縁を加工	1
258	VIa5	V層	不定形	4.6	4.3	0.6	22.1	チャート質粘板岩	北上山地古生界	1個縁を加工	1
259	VIc	IX層	不定形石塊	4.5	5.2	0.6	16.1	褐色質粘板岩	北上山地古生界		1
260	VIa3b土層集中部	埋土	割片	(4.8)	2.9	0.5	(6.9)	褐色質粘板岩	北上山地古生界	両側縁に使用痕ケール収付層物少	5
261	VIa2d,e,1de	IV層	不定形?	(4.2)	2.0	0.9	(6.0)	褐色質粘板岩	北上山地古生界	上半欠損	2
262	VIa9j,VI9a	IV層	不定形	2.8	2.5	0.7	3.7	褐色質粘板岩	北上山地古生界	1個縁を加工	2
263	VI9b	V層	不定形	2.5	4.2	0.4	3.7	粘板岩	北上山地古生界		2
264	VIa7i	IIIa層	不定形	2.9	2.6	0.3	2.6	褐色質粘板岩	北上山地古生界	2個縁を加工	3
265	VI9e	V層	不定形	2.0	2.1	0.8	2.3	粘板岩	北上山地古生界	ほぼ全周を加工	4
266	VI9b	V層	不定形	2.5	3.5	0.6	4.5	褐色質粘板岩	北上山地古生界	1個縁を加工	4
267	VIa1d	再地敷層	不定形	2.8	3.9	0.8	8.1	粘板岩	北上山地古生界	底面のハク片の2個縁を加工	4
268	VI9f	V層	不定形?	2.1	3.2	0.6	4.0	褐色質粘板岩	北上山地古生界	2個縁に刃部欠損	4
269	VIa9	V層	不定形	3.1	1.7	0.6	2.2	粘板岩	北上山地古生界	2個縁を加工	4
270	VIa3i	V層	不定形	2.4	4.2	0.6	4.5	赤褐色粘板岩	北上山地古生界		4
271	VI9a	V層	不定形	4.7	3.5	0.9	9.9	褐色質粘板岩	北上山地古生界		4
272	VI9b	V層	不定形	4.5	3.1	0.9	1134.0	チャート質粘板岩	北上山地古生界	ほぼ全周を加工	4
273	VIa2b	Va層上	不定形	4.1	1.4	0.2	12.4	チャート質粘板岩	北上山地古生界	ほぼ全周を加工	4
274	1ch,207ブロック	T目録	割片	5.3	4.7	1.8	19.8	褐色質粘板岩	北上山地古生界	1個縁に多くの打痕を有する	5
275	VIc	IX層	尖頭部	4.9	2.8	1.4	11.5	粘板岩	北上山地古生界		5
276	VI9	IV層	割片	2.9	2.3	0.7	6.1	粘板岩	不詳		5
277	VIa3i	V層	石塊	5.6	4.9	4.2	112.6	褐色質粘板岩	北上山地古生界	自然面が露る塊	
278	VIa	IV層	石片	3.8	3.2	1.5	27.0	緑褐色粘板岩	北上山地古生界		
279	VIc	IX層	石片	4.1	3.7	1.2	33.8	緑褐色粘板岩	北上山地古生界		
280	VIa5	IX層	磨製石片	(5.4)	2.5	1.1	(26.8)	褐色質粘板岩	北上山地古生界	先欠	
281	VIa	IV層	石片	5.6	4.0	2.3	69.3	緑褐色粘板岩	北上山地古生界		
282	VIa5	板孔	磨製石片	(3.4)	3.6	1.8	(25.5)	緑褐色粘板岩	北上山地古生界	基部のみ	ケール収付層物
283	VIa	IV層	石片	6.2	4.3	1.1	50.0	実質性磨製石片	北上山地古生界		
284	VI9b	V層	磨製石片	8.8	4.7	2.8	135.0	緑褐色粘板岩	北上山地古生界	刃部欠損	
285	VIa9	IV層	磨製石片	(7.3)	4.9	3.0	(446.0)	緑褐色粘板岩	北上山地古生界	基部刃部欠	
286	VIa4a	IV	磨製石片	(5.8)	3.9	2.0	(79.0)	輝石質山岩	尾辺中生界	基部欠損	一部割削刃部/磨削層物
287	VIa9,1inc	IIIb層	磨製石片	(6.9)	4.2	1.7	(209.0)	緑褐色粘板岩	北上山地古生界	基部	刃部欠損
288	VIa3i	V層	磨製石片	8.0	4.8	3.3	190.0	緑褐色粘板岩	北上山地古生界	基部欠損	
289	VI9b	板孔	磨製石片	7.4	4.8	2.9	(136.0)	緑褐色粘板岩	北上山地古生界	基部欠	
290	VI9c	V層	磨製石片	(7.2)	4.7	3	(146.0)	IV層物	尾辺中生界	基部欠損	
291	VIa5	IIIb層	磨製石片	(7.0)	4.8	2.4	(159.0)	IV層物	尾辺中生界	基部欠損	
292	VIa9j	V層	磨製石片	(11.0)	5.6	3.2	(329.0)	粘板岩	北上山地古生界	基部欠損	
293	VIa1土層集中部	埋土	石片	4.3	4.6	2.3	77.0	磨製層	北上山地古生界		
294	VIa5	V層	磨製石片	(12.6)	4.7	2.8	(290.0)	磨製層物粘板岩	北上山地古生界	基部刃部欠ケール収付層物	磨削層物
295	VIc	IX層	石片	6.8	4.1	1.8	59.7	緑褐色粘板岩	北上山地古生界		
296	VI9a	VI層	磨石, 磨石	(13.4)	7.7	4.4	(727.0)	平花粘板岩	尾辺中生界		
297	VIa5,VIa1,inc	V層	磨石	15.4	7.7	7.6	1199.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界	両縁に磨打痕	

296	YIB0a	V層	礫石	11.9	5.3	7.5	712.8	福沢層	北上山地古生界	平門寺 御所野城	
299	不明	Ia層	礫石	12.9	8.1	6.1	875.8	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
300	YIB0a	V層	礫石	12	7.4	3.7	436.9	花崗閃緑岩	尾辺中生界	御所を中心使用	
301	YIA3a	V層	礫石	16.2	5.3	3.9	296.9	枕状貫斜状岩	尾辺中生界		
302	YIB1a	不明	礫石	12	5.7	6.7	672.8	平花崗岩	尾辺中生界		
303	YIB9a,0,e,f	V層	礫石	16.7	9.6	6.5	1646.6	平花崗岩	尾辺中生界		
304	YIA	IV層	礫石	16.5	9.4	5.4	1133.5	花崗閃緑岩	山田・東茂中生界		
305	YIA2a	V層	礫石	11.7	7.8	4.5	338.6	平花崗岩	尾辺中生界	御所の縁部を中心使用	
306	YIA2a(枕状岩)	礫石	礫石・礫石	(13.0)	6.1	6.2	(371.4)	花崗閃緑岩	尾辺中生界	欠割	
307	YIB0a	V層	礫石	(12.0)	8.0	6.7	(736.0)	花崗閃緑岩	尾辺中生界	欠割	
308	YIB0a	V層	礫石	(9.2)	7.0	5.1	(452.0)	平花崗岩	尾辺中生界	欠割	
309	YIC	IX層	礫石	11.2	6.2	5.9	745.0	凝灰質砂岩	三輪層古生界		
312	YIB0a	V層	礫石	(8.0)	8.4	6.9	(300.0)	砂岩	中生界	ほとんどの層に糸貫有	
313	YIB7a,d,e,f	V層	礫石・礫石	8.9	10.0	3.9	566.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界	貫通に閉み	
314	YIA2a	V層	礫石	(9.8)	9.6	4.5	(699.0)	閃緑岩	尾辺中生界	貫通に閉み	
315	IIc2a	T1層	礫石	7.3	6.7	3.9	278.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
316	YIA	IX層	礫石	8.9	6.1	5.7	340.0	花崗閃緑岩	山田・東茂中生界		
317	YIA	IV層	礫石	9.3	7.7	7.8	690.0	花崗閃緑岩	山田・東茂中生界		
318	YIA2a	V層	礫石	11.4	11.0	5.1	953.0	グイサイト	北上山地古生界	糸貫も使用	
319	YIA5a	不明	礫石	12.0	18.2	8.7	1020.0	花崗閃緑岩	山田・東茂中生界		
320	YIB0a	IX層	礫石・礫石	9.1	5.6	3.8	285.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
321	YIA2a	V層	礫石	10.3	6.5	3.8	(389.0)	花崗閃緑岩	尾辺中生界	欠割	
322	YIA2b,3c	V層	礫石	9.5	5.8	2.7	250.0	平花崗岩	尾辺中生界		
323	YIB0a(枕状岩)	礫石	礫石・礫石	(10.0)	5.3	4.0	(302.0)	花崗閃緑岩	尾辺中生界	縁状貫有	
324	YIB0a	V層	礫石・礫石	11.1	5.6	4.3	429.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
325	YIB0a	礫石	礫石	8.5	5.5	3.7	280.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
328	YIA6a	V層	礫石	8.3	4.8	3.1	192.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
329	YIA(粘土層中部)	IV層	礫石	10.1	6.2	4.3	387.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
329	YIA6a	礫石	礫石	10.3	7.1	3.9	432.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
329	YIA6a,f	IX層	礫石	9.8	8.7	3.7	482.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
330	YIB7d	V層	礫石・礫石	12.7	7.8	5.2	725.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
331	谷部T1層	V層	礫石	11.9	8.5	5.1	915.9	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
331	YIB0a	V層	礫石	12.7	8.7	5.0	758.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
333	YIB	IV層	礫石	12.3	9.2	6.1	929.9	花崗閃緑岩	山田・東茂中生界		
334	YIBa	V層	礫石	(12.0)	9.7	5.6	(1819.9)	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
335	YIBa	IV層	礫石	10.3	4.0	12.7	846.8	花崗閃緑岩	山田・東茂中生界		
336	YIB0a	V層	礫石	11.7	9.6	4.9	770.6	平花崗岩	尾辺・中生界		
337	YIC	IX層	礫石	12.7	6.0	11.4	1132.6	花崗閃緑岩	山田・東茂中生界		
338	YIA	IV層	礫石	13.4	11.4	5.3	1128.6	花崗閃緑岩	山田・東茂中生界		
339	YIA	IV層	礫石	7.6	7.9	4.1	465.0	砂岩	北上山地古生界		
340	YIB9a,0,e,f	V層	礫石	14.9	15.6	6.9	2159.0	花崗閃緑岩	尾辺中生界		
341	YIB7d	不明	礫岩	(10.0)	9.9	6.2	(880.0)	凝灰質砂岩	北上山地古生界		
342	不明	V層	礫岩	(7.7)	11.4	7.8	(910.0)	凝灰質角礫岩	北上山地古生界		
343	YIA6a	IX層	礫岩	(10.8)	10.4	5.3	(964.0)	凝灰質砂岩	北上山地古生界		
344	YIB0a	IV層	礫岩	8.0	7.8	5.2	445.0	凝灰質砂岩	北上山地古生界		
345	YIB0a(ペレット)	IV~V層	礫岩	(9.4)	8.8	6.8	(720.0)	凝灰質砂岩	北上山地古生界		
346	YIA(粘土層中部)	IV層	石炭	20.7	17.7	3.6	2547.0	花崗閃緑岩	北上山地中生界	主に東方の領域	
347	YIA5a	礫土	石砂	31.8	6.7	8.3	3430.0	凝灰質砂岩	北上山地古生界		
348	YIA	IX層	礫石	8.1	4.0	2.9	149.0	砂岩	北上山地古生界		
349	YIA2b	V層	礫岩	4.0	1.8	0.9	23.8	凝灰質砂岩	北上山地古生界	半分欠割 縁状 刃部有	

第21表 鏡

番号	出土位置	層位	種類	年代	材質・製造年代等
350	YIA	IV層	瓦水蓮瓦	鏡鏡 1層=古寛永 (1636~1699年)	
351	IIc3d	T1	瓦水蓮瓦	鏡鏡 1層=古寛永 (1636~1699年)	

第22表 鉄製品

Y26	出土位置	層位	種類	備考
352	不明	不明	不明	

VI ま と め

1. 遺構

(1) 縄文時代

住居跡

本遺跡で検出された縄文時代の住居跡は21棟であるが、そのうち中期末と考えられる住居跡は8棟、中期後葉から末葉と考えられる住居跡は5棟、中期後葉と考えられる住居跡は3棟、中期中葉から末葉までに位置づけられる住居跡は3棟である。また、前期前葉と考えられる住居跡が1棟検出されている。前期の住居は1棟のみなので、ここでは山ノ内III遺跡で検出された縄文時代中期の住居について、本遺跡より北へ約500m離れた位置の山ノ内II遺跡との比較を加えながら述べる。

【平面形】 斜面に構築されている住居がほとんどであるため、形の不明なものも多いが、円形か楕円形を呈すると思われる。円形を基調としながらもやや角ばっていると思われる住居はVIC0a-2住居跡、VIC3f住居跡の2棟のみである。

【規模】 規模のわかる18棟のうち最小の住居はVIB0j住居跡で2.38m、最大は6m前後と推定されるVIIA8i住居跡である。平均は4mから5m前後である。そのうち中期末と思われる8棟の平均は4.5mである。この数字は山ノ内II遺跡の前期の住居跡15棟の平均5.4mよりも1m近く小さい。また、山ノ内IIの住居跡は直径6m以上の住居が6棟、5mに満たない住居跡が5棟と住居の規模にばらつきがあるのに対し、本遺跡では平均値にまよっている。

【床】 すべての住居が貼り床を持たない。斜面に構築されている住居は斜面下方に床がやや傾斜する傾向がある。床面に段を持つ住居が1棟ある。

【柱穴】 1基～21基までばらつきがある。柱穴のない住居跡もあるが、これは調査者の力不足で検出できなかったためと考えられる。

【炉】 地床炉1、石囲炉11、石組複式炉7である。石囲炉と石組みの複式炉は次のように分類した。

1 石囲炉

- ①円形を基調とするもの・VII B 2 a-2住居跡（以下「住」と略）、VII A 1 e-1住、VII B 0 b住か、VII B 8 j住、VIC 0 a-1住
- ②方形を基調とするもの・VIC 7 d住か、VIC 0 b住、VIC 7 a住、VII C 1 b住か、VII C 0 c住
- ③不明のもの・VII B 0 j住

2 石組み複式炉

- ①石組炉+石組炉・VII B 8 b住、VII C 3 f住
- ②石組炉+石組炉+石組炉・VII A 0 d住、VII B 3 a住か
- ③石組炉+石組炉+前庭部・VII A 8 i住、VII B 2 a-1住か
- ④石組炉+石組炉+石組炉+前庭部・VIC 0 a-2住

時期が推定できるものから述べると、中期後葉の住居は地床炉1基、石囲炉1-①1基、1-

②1基である。1-①は埋設した板状の花崗岩が花卉のように上部がやや開く。中央に位置している。1-②は隣り合う2つの隅の石が長辺を炉の外側に向かって設置しているのが特徴的で、壁に寄る。炉の位置は前者が中央、後者が中央から斜面下位による。

中期末と思われる住居の炉は石囲炉5基、複式炉3基である。石囲炉は1-①が2基、1-②が2基、不明1基である。石は全周集せず、抜けているものがほとんどである。炉の位置はほぼ中央が3基、壁によるものが2基である。複式炉は3者3様で、2-①が埋設土器を伴う2-③が1基、2-④が1基、2分される石囲炉1基である。炉の位置はすべて壁に寄っている。壁に寄る炉

そのほかの中期後葉から末葉に位置づけられる住居の炉、あるいは中期中葉から末葉に位置づけられる住居の炉は石囲炉3基、複式炉4基である。石囲炉は1-①が3基、1-②が1基で、位置は中央が1基、壁によるものが2基である。1-①のうち1基は炉内部ではなく石組みのとなり土壌が形成されるものである。複式炉は2-①で日の字形を呈するものが1基、2-②が2基、住居の半分が削平されているため、形態は不明であるがおそらく2-③に分類されるものが1基である。この2-③に分類される炉は斜面上方の壁に向かって開いている点斜面上方に他と異なる。これらは壁が検出できなかったために住居の規模が不明な1基を除き、壁に寄って位置している。開く炉

本遺跡で検出された石組みの複式炉で前庭部をもつかある方向に向かって開く形をとるものは、斜面上方に向かって開く1例を除き、下方に向かって開くのが一般的である。

本遺跡の住居の炉については時期が確定できないものが多いため、時代による変遷を追うことは難しい。

【その他の施設】住居内土坑をもつ住居は2基である。周溝が検出された住居は3棟である。入口位置の入口と考えられるような施設は検出されていないが、雨水の流入の問題などを考えると本遺跡では立地条件などから斜面下方にあるのではないかと推測されるが、証明することはできなかった。推定

土坑

本遺跡で検出された縄文時代の土坑は11基である。時期が特定できないものが多いが、おそらく周辺状況から縄文時代中期中葉から末葉の間におさまると考えられる。平面形は円形、あるいは長円形を基調としている。断面形態は皿状の土坑が3基、逆台形状が4基、筒形が1基、フラスコ状が3基である。規模は最小の長径が0.98m、最大が2.86mで、平均は1.83mである。

これらのうちフラスコ状土坑は、調査区東側の斜面に1基、北側の尾根上に2基検出されている。周辺には住居跡が多く検出されているが住居の数に対し、土坑数が極めて少ない。例えば、北へ400m離れた山ノ内II遺跡の場合、中期中葉～末葉の住居20棟に対し29基検出されている。また、北西へ約5.1km離れた大畑II遺跡の場合縄文時代中期後葉～末葉の住居15棟に対し、土坑34基検出されている。少ないフラスコ状

本遺跡の場合住居が多く検出される北側尾根上と東斜面の間が調査区外となっており、この部分の様相は不明なので、断定は避けたいが、周辺の遺跡と比較すると山ノ内III遺跡のフラスコ状土坑の検出状況は特徴的な様相を呈している。

プラスチック土坑は貯蔵穴としての用途が想定されている(今村1988)。もし、そうだとすればこのような検出状況から察すると、山ノ内III遺跡に住んでいた人々は土坑を掘って食料を貯蔵する必要のない居住形態—想定されるのは一時的あるいは季節的な居住などをとっていたという可能性も考えられる。

焼土

37基のうち36基が調査区中央の谷筋斜面からまともな検出されており、北側の尾根上にはなく、東側の斜面からは1基のみ検出された。時期は不明なものが多いが、中期の遺構のほか前期の遺構も存在するようである。壁や柱穴を周辺に伴うものではなく、単独で使用されているらしい。焼土が検出されている区域は谷筋斜面の中でも縄文時代の住居跡や廃棄土が検出されている場所と重なっている。おそらくこの周辺は地形的に他に比して平坦であるとか、土石流に見まわれることの少ない場所であるとかの何らかの利便性があるのではないかと考えられる。調査の進行上、この周辺に傾斜方向に沿ったベルトを残すことは困難であったので、残念ながら確かめることができなかった。

その他の遺構

縄文時代の遺構にはそのほかに竪穴状遺構2、炉跡2、集石1、廃棄土2がある。

竪穴状遺構のうちVII B 1 c 竪穴状遺構は埋土から前期の土器が数多く、詰まったように出土していることから最終的には捨て場のような使われ方をしたのではないかと考えられるが、復元できる土器がなく、ほとんど破片のみである。

VII A 2 d 廃棄土はVII A 1 e-1、-2 住居跡に隣接しており、関連が予想される。VII B 9 b 廃棄土は焼土の項で述べた住居、焼土の密集地の斜面下方に位置していることからそれらとの関連が考えられる。

炉跡は住居に伴うものであろう。集石は1基のみであり、使用された石が酸化したことから火熱を受けている可能性があることだけを述べておく。

(2) 古代 (平安時代)

本遺跡で検出された平安時代の遺構は住居跡3棟、土坑2基、製鉄炉群(炉7基、土坑3基)、炭窯17基、炭置き場1か所、羽口捨て場1か所、焼土遺構4基である。製鉄に関連する遺構が多い。また、住居も工房を兼ねていたり、製鉄に関連する遺物が出土している。

分布は飛び地と調査区北の尾根上、中央の谷筋斜面である。

住居跡

館 状 澤 3棟の住居跡のうち北側尾根上の1棟は炉を持つ住居である。出土した鉄滓は館が冷えて固まったような状態の部分と碗型澤のような部分を持っており、精錬鍛冶のための炉ではないかと考えられる。なお、この炉及び周辺からは鍛錬鍛冶を行う時に産出される鍛造剝片は出土していない。

炭窯、土坑 本住居跡の煙道は炭窯や土坑と切り合っていることからこれら遺構の構築時期には時間差がある。

切り合い 新旧関係は以下のとおりである。

VII A 1 d 住居跡 旧→→→新

| 不明

VMA1e-2炭窯 旧→→→新 VMA1e-1炭窯 旧→→→新 VMA1e-1土坑

\ 不明 | 不明

VMA1e-2土坑 旧→→→新

不明な点もあるが、例えばVMA1e-1炭窯で焼かれた炭がどの施設のために使用されたのかという点を考えると、最も近い施設としてVMA1d住居跡の鍛冶炉がある。尾根上にはそれ以外に炭を使うような施設は検出されていない。西側の調査区外に存在する可能性もあるが、住居としての機能が終了後も鍛冶炉が使用された可能性もある。

谷筋の住居は特に施設は持っていないが、住居内から羽口や鉄滓が出土することから工人や関連する人々が居住していた可能性も考えられる。また、飛び地の住居からは床面から塊状に砂鉄が出土することや、鉄滓の出土、住居に隣接する炭置き場の存在からおそらく製鉄炉を操業していた工人の住居と考えてよいのではないか。また、塊状の砂鉄はその形態から袋状のものに入れて床面におかれたもので、袋が腐食し、砂鉄だけが検出されたものであろう。以上の工人の3棟の住居は土器の年代観から9世紀末から10世紀中葉に位置づけられよう。住居か

製鉄炉

本遺跡で検出された7基の炉を形態で次のように分類した。

- 1類 炉が小型で、前底部との境が明確でないもの（炉底の状況はあまり焼成は強くなかったのではないかという印象を受ける。）・・・a炉、b炉
- 2類 炉が検出例のうちでは大きく、前底部との境が明確で、いわばだるま型を呈するもの。（炉自体がしっかり作られている印象を受ける。）・・・d炉、e炉、g炉
- 3類 どちらも言えない中間的な要素を持つ炉・・・c炉、f炉（本類の2基の炉のうち炉の大きさのみから分類すればc炉は1類に、f炉は2類に近いが他の要素が異なる。）

なお、2類の3基の炉からはほぼ同量の砂鉄が出土している。（第51図）

これらの炉から出土した鉄滓は製錬滓（付圖2、3参照）と胎状を呈する鉄滓、塊状滓があるが、調査時の肉眼による観察でも、とりあげた土の洗浄を行っても鍛造断片は出土していない。これらの結果から本炉群では製錬を行っており、さらに大鍛冶的な精錬も行っていた可能性がある。今回の調査では炉の形態と出土した砂鉄量から少なくとも2種類の炉が存在することがわかった。本炉群から出土する鉄滓がどの炉に所属するものかを知ることは不可能であったため、これらの違いがどのような作業によるものかは不明であるが、今後検出例が増えるにつれて、解明していくものと考えられる。ちなみに山ノ内II遺跡では製鉄炉と考えられる炉のうち、どちらかという①類に属する炉、②類の炉がそれぞれ1基ずつ検出されている。これらの鉄滓との比較は今後の課題である。

炭窯

検出された17基の炭窯はおおよそ2つの形態に分類される。

- 1類 比較的小型の小判状あるいは隅丸長方形を呈すると思われるグループ・・・IIC2d- 小型の炭窯
1炭窯、IIC2g炭窯、VMA1e-1炭窯、VMA1e-2炭窯
- 2類 大型で、草履型のような長円形、あるいは隅丸長方形を呈するグループ・・・上記を除く大型の炉
く13基

以上のように2類の炭窯が圧倒的に多い。

そのほかの遺構は羽口捨て場、土坑、炭置き場、焼土があるが、それぞれ少ない検出数なので割愛する。

2. 遺物

本遺跡で出土した土器のうち最も多かったのは縄文土器であるが、その中では早期末から前期前葉の土器が最も多く、次いで中期の土器、後期の土器、晩期の土器である。

土器の分類については、V遺構外の出土遺物を参照されたい。

早期末から前期前葉に位置づけられる繊維を多く含む土器群はほとんどが遺構外であり、遺構に伴うものはごく少ない。この時期の土器はI層からVII層まで出土しているが、もっとも出土量が多いのはV層である。しかしV層には中期の土器も多く包含されており、VII層は斜面堆積の層のためかほとんど含まれず、VII層も早期末から前期前葉の土器が混在していて、層的に包含されていない。これらの土器は二次的に堆積しているのであろう。

中期の土器は遺構内から出土したものもあるが、床直遺物は少量であり、遺構の時期が確定できるものは少ない。

後期、晩期の土器も出土量や出土状況から二次堆積によるものと考えられる。

古代の遺物については土師器、須恵器、鉄滓、羽口、鉄製品、砂鉄がある。

飛び地の遺構外から出土した453、454は奈良時代末から平安時代に属すると考えられる。

平安時代の土師器はほとんどが遺構内出土である。9C末～10世紀中葉くらいまでの所産と考えられる。II B 4 h 住居跡から検出された土器(462)は筒形の口縁部がやや開いたような器形と外面の輪積み痕が明瞭に残ることが、青森県沿岸部などで出土する製塩土器(北林1983)に極めて類似している。出土状況が、住居のカマド袖部と床面からということもあり、今回は可能性を述べるにとどめるが、今後沿岸部の発掘調査件数が増加するにつれ、出土例が増加していくことであろう。

鉄滓はII C 2 e 製鉄炉群から製錬滓と大鍛冶に伴うと考えられる鍛冶滓が出土しており、それらの作業が行われていたと考えられる。VII A 1 d 住居跡から出土した鉄滓も大鍛冶に伴うものと推定される。なお、鍛冶剣片は検出されていないことから、鍛冶鍛冶は行われていなかったとも考えられる。

II C 2 e 製鉄炉群出土の羽口は想定される装着角度が20°～68°と様々である。行われた作業によって異なると考えられる。傾向を見いだすことはできなかった。吸気部まで残存している羽口は3点であったが、長さは20cm前後が2点、33cmが1点である。作業工程上で、先端が溶け、短くなっていくのだろうが、20cm前後までは使用されたものと考えられる。

VII A 1 d 住居出土の羽口は破片のみであるが、装着角度は2点とも30°前後である。点数が少ないのであくまでも推定の域を出ないが、本住居で行われていた作業で、羽口はおおむねこの角度で装着されていたのであろう。

鉄製品は器種不明な小片4点のみの出土であり、製鉄関連の遺跡としては、出土数が少ない印象を受ける。鍛錬鍛冶を行っていないらしいことと関連するのかもしれない。(高橋佐知子)

引用・参考文献

- | | |
|-------------------------|---|
| 青森県教育委員会 | 1980「長七谷地貝塚発掘調査報告書」(第57集) |
| 秋田県教育委員会 | 1986「カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書」(第136集) |
| 岩手県教育委員会 | 1979大槌野遺跡「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II」(第32集) |
| 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター | 1989「夏本遺跡発掘調査報告書」(第134集) |
| | 1995「大畑Ⅰ・大畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書」(第218集) |
| | 1996「山ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」(第249集) |
| 岩手県立博物館 | 1990「北の鉄文化」 |
| 草間俊一 | 1974「崎山弁天遺跡発掘調査報告書」大館町教育委員会 |
| 今村啓爾 | 1988「土坑性格論」『論争日本の考古学』第2巻 |
| | 1989「群衆貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』 |
| 北林八州晴 | 1973「陸奥阿比野における土器製造」『北奥古代文化』第5号 |
| | 1983「第五章 古代」『青森県の考古学』青森大学出版局 |
| 佐々木清文 | 1990「岩手の製鉄遺跡(1)」『岩手県立博物館研究報告』第8号 |
| | 1994「岩手の製鉄遺跡(2)」『紀要』Ⅳ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 八木光則 | 1989「古代新波郡と爾羅体の土器様相」『北日本における鎌令期の土器様相』第18回古代城跡
官衙遺跡検討会資料 |
| 西井宗孝 | 1987「岩手県北部における縄文中期後葉から後期前葉の住居」『紀要』Ⅶ 岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財センター |
| 中村良幸 | 1982「甕式炉について」『考古風土記』第7号 |
| 小原眞一 | 1993「新上遺跡の炉」『紀要』Ⅹ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |

山田町山ノ内Ⅲ遺跡出土 砂鉄、木炭、鉄滓および炉壁の 分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社
分析・評価センター

岡原 正明
伊藤 俊治

1. はじめに

岩手県埋蔵文化財センター殿で発掘調査されました、下閉伊郡山田町山ノ内Ⅲ遺跡出土の砂鉄、木炭、鉄滓および炉壁について、学術的な記録のために自然科学的な観点での調査のご依頼がありました。

その結果についてご報告いたします。

2. 調査項目および試験・検査方法

(1) 調査資料一覧および調査項目は次のとおりです。

資料 種別 No.	出土遺構	着磁度 1,300G 径30mm	重量 g	成分 分析	工業 分析	X 線 回 折	組 織 写 真	E P M A	耐 火 度	発 熱 量	外 観 写 真
1	砂鉄1 II 2 e-219	-	31.4	○							○
2	砂鉄2 II C 2 e製鉄炉群d炉南西	-	31.5	○							○
3	砂鉄3 IIB 4 h住居跡	-	43.4	○							○
4	砂鉄4 II C 2 e製鉄炉群d炉	-	82.5	○							○
5	木炭1 II C 1 c 炭窯	-	62.3	○						○	○
6	木炭2 I C O e 炭窯	-	36.6	○						○	○
7	木炭3 II C 2 b 炭窯	-	35.9	○						○	○
8	木炭4 IV B 8 f 炭窯	-	41.6	○						○	○
9	木炭5 II C 2 g 炭窯	-	24.7	○						○	○
10	鉄滓1 II C 2 e製鉄炉群b炉	強	399.0	○		○	○				○

11	鉄滓2	II C 2 e 製鉄炉群 b 炉	強	92.1	○		○	○					○
12	鉄滓3	II C 2 e 製鉄炉群 f 炉前部	強	117.4	○		○	○					○
13	鉄滓4	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	中	36.3	○		○	○					○
14	鉄滓5	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	弱	87.4	○		○	○					○
15	鉄滓6	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	中	361.5	○		○	○					○
16	鉄滓7	II C 2 e 製鉄炉群 e 炉	中	118.8	○		○	○	○				○
17	鉄滓8	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	弱	367.6	○		○	○					○
18	鉄滓9	II C 2 e 製鉄炉群 g 炉	強	56.5	○		○	○					○
19	鉄滓10	II C 2 e 製鉄炉群 g 炉	中	402.0	○		○	○					○
20	鉄滓11	II C 2 e 製鉄炉群 g 炉	中一部強	632.1	○		○	○					○
21	鉄滓12	II C 2 e 製鉄炉群 b 炉	やや弱	240.9	○		○	○					○
22	鉄滓13	II C 2 e 製鉄炉群 2号土坑	弱一部強	158.0	○		○	○					○
23	羽口1	II C 2 e 製鉄炉群 g 炉	付着滓強	174.8	○				○				○
24	炉壁1	II C 2 e 製鉄炉群 d 炉	—	236.1	○				○				○
25	炉壁2	II C 2 e 製鉄炉群 e 炉	—	391.8	○				○				○

(2) 重量計測と着磁度調査

計量は電子天秤を使用し、小数点1位で四捨五入してあります。また着磁度調査については、直径30mm・1300 Gauss (0.13 Tesla) のリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで個別調査結果の文中に表示しました。

(3) 外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位まであるスケールを同時写し込みで撮影しました。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行っております。

(4) 化学成分分析

化学成分分析はJISの分析法に準じて行いました。分析方法および分析結果は38、40頁の一覧表に示してありますので、ご参照下さい。

この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行いました。また、羽口に使用されている粘土も特別に選択使用していたのかの判断用に分析しました。

分析項目は、砂鉄12項目、鉄滓18項目、炉壁12項目となっております。

(5) 工業分析

工業分析および化学分析(硫黄と燐)は、JISの分析法に準じて合計6項目行いました。工業分析法の要略は次のとおりであります。

- ①付着水 0.25mm以下に粉砕した試料を、40°Cで食塩飽和溶液と平衡な湿度下に6時間(水分) : 保ったのち、これを基準として105~110°Cで1時間乾燥し、前後の重量差から求める。
- ②灰分 : 乾燥後の試料を空气中750°Cで加熱し灰化させる。試料に対する残留灰分の重量から求める。
- ③揮発分 : 空気を遮断して試料を950°Cで7分間加熱したときの減量を計り、百分率を計算しこの値から付着水分を除いて求める。
- ④固定炭素 : 固定炭素=100 - [水分(%) + 灰分(%) + 揮発分(%)] で求める。

(6) 発熱量測定

試料1gを採取し非断熱式ボンブ熱量計に装入した後、酸素雰囲気中で燃焼させJISの方法に準じて発熱量を求めました。

(7) 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上)します。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、熔融状況や介在物(鉱物)の存在状態等から加工状況や材質を判断します。鉄滓の場合にも同様に処理・観察をおこない、製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにします。原則として100倍と400倍で撮影します。必要に応じ低倍率の実体顕微鏡による観察も行いました。

(8) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれの固有の反射(回折)されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・固定するものです。

多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が固定されます。装置の使用や測定条件、測定結果は60頁以降に添付してあります。

(9) EPMA (X線マイクロアナライザー) による観察

高速電子線を2μmφ程度に絞って、分析対象試料面に照射し、その微小部に存在する元素から発生する特性X線を測定するもので、金属鉄中の介在物や鉄滓の成分構成を視覚から確認するために、二次元の面分析を行いました。

00 耐火度試験

製鉄に使用された炉壁や羽口について、どの程度の耐火性のある粘土（耐火物）を使用していたのかを判断するために試験しました。この調査もJIS規格「耐火れんがの耐火度の試験方法」に準じて実施しました。

3. 調査および考察結果

試料の性格別ごとに調査および考察結果を述べます。

I. 砂鉄（資料1～4）

外観写真No1～3に示した砂粒状のものと、No4のように製鉄炉群d炉から出土した、焼結し粒子が相互に溶着した塊資料とがある。前三者は水洗されたもので、重量はそれぞれ31.4、31.5および43.5gであった。焼結塊資料の重量は82.5gであった。

化学成分分析の結果、この4資料の各成分の間には殆ど差がなく平均で全鉄(T.Fe)は68.6%と高い含有率を示した。シリカ(SiO₂)、アルミナ(Al₂O₃)、カルシア(CaO)、マグネシア(MgO)等の鉱物性不純物も少なく合計しても高々1.65%であった。非常に純度の高い砂鉄といえる。砂鉄に含まれる特有の元素であるチタニウム(TiO₂;チタニアで表示)は0.54%と非常に少ない。バナジウム(V)の含有量は0.21%であった。

東北地方合チタン砂鉄調査委員会発行の「東北のチタン砂鉄資源」(1953)、98頁の「三陸海岸砂鉄分析表」によると、山田湾や船越湾の砂鉄成分も産地によって鉄やチタニウムの含有量が異なるが、今回の資料の分析値と比較してみると、下閉伊郡山田町北浜と船越湾南弁天島の値にもっとも似ていることが明らかになった。

第3表 三陸海岸砂鉄分析表

試料番号	採取場所	Fe%	TiO ₂ %	備 考	
221	田老湾 田老浜	9.53	0.21	サンプラーによる	
229	宮古湾 藤原浜	34.36	1.93	同上(黒砂部分のみ)	
272	山田湾	熊ヶ崎西	8.92	0.22	サンプラーによる
268		山田町北浜	66.02	0.21	黒砂部分
244		大島	54.39	0.33	同上
246		同上	54.93	0.21	同上
248		小島	43.83	1.09	同上
249		同上	54.12	0.43	同上
242		船越湾	北弁天島	12.17	1.63
260	南弁天島		66.29	0.32	黒砂部分

資料4のT.Feの値は他の3つの資料のT.Feに較べやや低く、鉱物性不純物がやや高い。焼結のためか固化しているものの成分的にはそれほど差がなく、資料4の熱による化学的変化は特段認められない。

II. 木炭（資料No5～9）

資料No5～9の外観写真を17～21頁に示した。丁寧に軽く洗浄後水を切って秤量した。それぞれの重量は62.3、36.6、35.9、41.6および24.7gであった。

木炭の形状はいずれも端部から開始するので丸くなる筈である。したがって、この資料は炭焼き破砕された木炭といえる。

木炭の工業分析結果を240頁に示す。

大きく分けて木炭には樫の堅木を減量とした堅炭と櫟や松を原料とした軟炭とがある。双方の木炭とも灰分は1～3%、炭素量(≒固定炭素として)は80%前後である。しかし山の内III遺跡から出土した木炭の灰分は10～17%で非常に高い。また固定炭素量は幅があるが44～56%と低い値を示している。炭焼きの過程で燃焼が進んで灰分が高くなったとも考えられるが、その時には木炭の温度が上昇し木炭中の揮発分は40%以下よりずっと低い値を示す筈であり、このような値が得られた真の原因については不明である。

資料に付着した土は水洗し取り除いたが、木炭の割れ目等に入った土等が充分除去出来なかったために灰分の値が高くなったのかも知れない。もし、そうだとすると揮発分が高く固定炭素が低いことは、炭焼きの温度が低いか焼成時間が短かかったのかのいずれかといえる。

電ヶ馬場遺跡から出土した木炭も、灰分が14.7%と高く、固定炭素は52.4%、揮発分は32.9%であった。山の内III遺跡の資料№6～8の灰分は10～12%とやや低いが、資料№5および9は電ヶ馬場遺跡のそれよりは高かった。揮発分は相対的にやや高く、固定炭素は資料№7を除いてやや低い。

一般に木炭の発熱量は6,700～7,500cal/gといわれている。山の内III遺跡出土の木炭の発熱量は4,850～5,490cal/gであり、灰分が高く固定炭素が低いため発熱量が低くなるものと考えられる。なお、電ヶ馬場遺跡の木炭の発熱量は4,850cal/gであり、これに較べるとやや高い値が得られている。

木炭中の、鉄の特性を低下させる硫黄や燐の元素は非常に少なく、良好な製鉄用還元剤および発熱材といえる。

III. 鉄滓

(1) 資料№10 鉄滓 1

長さ130L×幅80Wmmの海綿状の溶解固化した凹凸の著しい塊である。木炭片の噛み込みや植物根の進入が認められる。メタルチェッカーでは金風鉄の存在は検出されなかった。着磁度は強い。重量は339.0gである。

化学成分分析結果では、T、Feが63.0%と、またウスタイト(FeO)も52.7%と非常に高い含有量を示した。渣滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO)は反対に、10.0%と少ない。TiO₂は0.38%VHA0.076%であった。山田町地方の砂鉄に含まれるTiO₂の含有量が非常に低いことを考えると、炉内に残留していた炉内滓と考えられる。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、一面に灰色白濁状のウスタイトのみが認められ、またX線回折ではウスタイト、マグネタイト(Fe₃O₄=FeO·Fe₂O₃)、ファイヤライト(2FeO·SiO₂)のピークが認められる。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄を原料とする、炉内残留していた製鉄滓と思われる。

(2) 資料No.11 鉄滓 2

120L×50Wmmのやや湾曲し凹凸の激しい中央部が窪んだ偏平な塊である。錆化が進行しておりメタルチェッカーでは金属鉄の反応は認められない。着磁度は強い。重量は92.1gである。

化学成分分析によると、T.Feが55.0%と多いがFeOは21.6%と少ない。Fe₂O₃は54.0%と多く、鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、結合水(C.W.)が5.37%含まれることを考えるとその大部分はオキシ水酸化鉄(FeOOH)の形で存在すると思われる。渣滓成分は14.0%とやや少ない。TiO₂は1.48%、Vは0.26%でやや多かった。

鉄滓断面の顕微鏡による観察で、所々に点する灰白色の偏平なウスタイト、灰色のまだら模様のおキシ水酸化鉄および淡い褐色の鉱物質の存在が認められる。また、鉄滓の中には丸い空孔が所々に存在する。

X線回折によると、ウスタイト、マグネタイトやファイヤライトのピークも検出されている。また、オキシ水酸化鉄(ゲーサイト： α -FeOOH、レピッドクロサイト： γ -FeOOH)の存在も確かめられた。

これらの結果を総合すると、この資料は砂鉄を原料とする製錬滓と思われる。

(3) 資料No.12 鉄滓 3

資料No.10に似た海綿状の溶融焼結した5個からなる資料である。着磁度が強く、全重量は117.4gである。なお、メタルチェッカーによる金属鉄の反応は認められない。

化学成分分析では、T.Feが58.5%と多いがFeOは28.9%とやや少ない。一方Fe₂O₃は51.3%と多く、鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、結合水(C.W.)が3.60%含まれることを考えるとその大部分はオキシ水酸化鉄の形で存在すると思われる。渣滓成分は11.6%とやや少ない。TiO₂は1.08%、Vは0.20%でやや多かった。

鉄滓断面の顕微鏡による観察で、灰白色菌状のウスタイトが一面に存在しているのが判る。この他にオキシ水酸化鉄や鉱物質と思われるものが認められる。また滓の中には空孔が数多く存在しており、滓表面の凹凸が形成された理由が推定できる。

X線回折によると、ウスタイト、ファイヤライトのほかゲーサイトのピークが検出されている。

これらの結果を総合すると、この資料は砂鉄を原料とする製錬滓と思われる。

(4) 資料No.13 鉄滓 4

大きさが65L×35Wmmの黒色で発泡痕のある、一部に酸化鉄が観察される塊である。また、底部に植物の繊維痕が存在する。着磁度は中程度で、重量は36.3gである。

化学成分分析の結果、T.Feは26.7%と非常に低くFeOも7.90%と少ない。しかし、相対的にFe₂O₃は28.9%と多く、鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、結合水(C.W.)が2.50%も含まれることを考えるとその大部分はオキシ水酸化鉄の形で存在するものと思われる。渣滓成分は57.7%と非常に多い。この他に壁などの粘土に含まれるナトリウム分(Na₂O)やカリウム分(K₂O)がそれぞれ1.66%、1.51%も存在することから、この滓は製錬初期の滓

と示唆される。 TiO_2 は0.64%、Vは0.078%であった。

鉄滓断面の低倍率の実体顕微鏡による組織観察から、上述のことが裏付けされる。実体顕微鏡の視野に白く見えるものは金属鉄である。そこで金属顕微鏡を用い球状の金属鉄の観察を行った。炭素の推定含有量が0.4%程度の比較的ゆっくり冷却された金属鉄と見受けられた。

X線回折ではサンプリング位置の関係上か、金属鉄は検出されなかった。マグネタイトとオキシ水酸化鉄、鉱物質のピークが観察された。

これらの結果を総合すると、この資料は砂鉄を原料とした、金属鉄を含む製錬滓と考えられる。

(5) 資料No.14 鉄滓 5

長さが70mmで一端の径が30mm他端の径が20mmの小枝状の資料である。黒色で流出痕のある緻密な鉄滓で、下部には床材の砂粒が付着している。着磁度は弱く、その重量は36.3gである。

化学成分分析の結果によると、T.Feは46.9%でFeOも55.2%と多い。渣滓成分は34.6%と中程度である。しかし、 Na_2O や K_2O がそれぞれ1.04%、0.82%も存在することから、この滓は製錬初期の比較的流動性のよい滓と示唆される。 TiO_2 は1.51%、Vは0.29%であった。

鉄滓断面の形態の実体顕微鏡による組織観察からも、粘性の低いガラス質で構成され、非常に綺麗な空孔が形成されている滓であると観察される。

X線回折の結果によると、ファイヤライトの強いピークの他ウスタイト、マグネタイトや鉱物質の存在が認められる。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした流出製錬滓と言える。

(6) 資料No.15 鉄滓 6

大きさが130L×60Wmmの熔融、凝固し亀の甲羅のような割れ目のある資料である。緻密で重量感があり、付着土もなく滑らかな塊である。着磁度は強く、重量は361.5gである。

化学成分分析の結果によると、T.Feは47.3%でFeOも55.6%と多い。渣滓成分は34.0%と中程度である。 TiO_2 は1.74%、Vは0.33%であった。

資料断面の顕微鏡観察では、灰白色の樹枝状のマグネタイト、淡褐色の角張った板状のウルボスピネルや短冊状のファイヤライトの他、少量のウスタイトの結晶が認められる。比較的製錬の前段の鉄滓と思われ、かつ流動凝固した形状から流出滓といえる。

X線回折によればファイヤライトの強いピークに加え、ウスタイトやマグネタイトの存在が観察される。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした流出製錬滓と言える。

(7) 資料No.16 鉄滓 7

大きさが90L×60Wmmの薄く凹凸の多い鉄滓で下部の突出部に金属鉄の反応がある。上面半分には酸化鉄の付着が著しく、植物繊維痕も多い。着磁度は中程度で、重量は118.8gである。

化学成分分析の結果によると、T.Feは37.1%でFeOも30.1%と少ない。また Fe_2O_3 は19.4%

と相対的に多く、鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、C.W.が1.89%も含まれることからその大部分はオキシ水酸化鉄の形で存在するものと思われる。渣滓成分は44.2%と非常に多い。Na₂OやK₂Oがそれぞれ1.25%、1.09%存在することから、この滓は製錬初期の比較的流動性のよい滓と示唆される。TiO₂は1.70%、Vは0.26%であった。

低倍率の実体顕微鏡による観察から、鉄滓の中には小さな空孔が数多く点在しているが、マクロ的視点では一様な組織に見える。残念ながら金属鉄の存在は確認できなかった。高倍率の顕微鏡による観察で、ファイヤライトを主とし少量のマグネタイトやウルボスピネルの小さな結晶が認められる。

X線回折では、ファイヤライトや石英の強いピーク他にマグネタイト、オキシ水酸化鉄であるゲーサイトやレピッドクロサイトおよび鉱物質の存在が検出されている。

EPMAによる面分析で、マグネシウム(Mg)を少量含む鉄(Fe)、珪素(Si)と酸素(O)の化合物である短冊状のガイヤライト、Fe、Oとチタニウム(Ti)の化合物であるウルボスピネルの存在が観察される。ウスボスピネルにはバナジウム(V)が共存している。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした製錬滓と言える。

(8) 資料No.17 鉄滓 8

大きさが135L×75Wmmの粗鬆で黒色の発泡した鉄滓で、ごま塩状の鉱物を噛み込んだ資料である。着磁度は弱く、重量は376.6gである。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、一面に細かいファイヤライトの結晶が存在し、所々に少量のマグネタイトやウルボスピネルと推定される結晶が認められる。

化学成分分析の結果、T.Feは42.5%、FeOは48.8%であった。またFe₂O₃は6.3%と少ない。しかし渣滓成分は40.6%と非常に多い。Na₂OやK₂Oがそれぞれ1.11%、1.03%存在することから、この滓は製錬初期の比較的流動性のよい滓と示唆される。なおTiO₂は1.56%、Vは0.30%であった。

X線回折では、強いファイヤライトのピークが、またウスタイト、マグネタイトのほか鉱物質の存在が検出されている。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした製錬滓と言える。

(9) 資料No.18 鉄滓 9

大きさが50L×25Wmm前後の3個からなる資料である。錆化が進行し酸化鉄の発生が著しい。メタルチェッカーによる金属反応は認められなかった。着磁度は強く、合計の重量は56.5gである。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、海綿状の灰白色の部分が数多く認められる。これは炉内で溶融までには至らないが、砂鉄が還元されて海綿状の金属鉄になったものが酸化・錆化してオキシ水酸化鉄になった部分と推定される。滓の部分にはファイヤライトおよび樹枝状のマグネタイトが観察される。

化学成分分析の結果、T.Feは35.8%と低く、FeOの19.0%に較べFe₂O₃が30.0%と非常に多い。鉄分の多くが酸化して第二鉄に変化しており、C.W.が2.83%も含まれることからその大

部分はオキシ水酸化鉄の形で存在するものと思われる。造滓成分は42.5%と非常に多い。また、 Na_2O や K_2O がそれぞれ1.33%、1.03%存在することから、この滓は比較的流動性のよい滓と示唆される。なお TiO_2 は1.89%、Vは0.12%であった。

X線回折の結果では、多量のファイヤライトの強いピークが認められたほか、オキシ水酸化鉄であるゲーサイトやレピッドクロサイトおよび弱いマグネタイトの存在ピークも検出されている。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とし、還元途中の海綿鉄がオキシ水酸化鉄に変化（酸化）した製錬滓と言える。

00 資料No.19 鉄滓10

大きさが135L×100Wmmのし餅状の流出滓と考えられる黒い資料である。表面は平滑であるが裏面はボツボツとあばた状を呈している。着磁度は中程度で、合計の重量は402.0gである。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、短冊状のファイヤライト、樹枝状のマグネタイトと角状のウルボスピネルが認められる。

化学成分分析の結果、T.Feは47.3%、FeOは55.3%であった。造滓成分は34.9%とやや少ない。また、 Na_2O や K_2O がそれぞれ1.12%、0.83%存在することから、この滓は比較的流動性のよい滓と示唆される。なお TiO_2 は1.14%、Vは0.21%であった。

X線回折の結果では、ウスタイト、マグネタイトのほかにファイヤライトの強いピークが認められる。鉱物質も検出される。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした流出製錬滓と言える。

01 資料No.20 鉄滓11

大きさが105L×90Wmmのごま塩状の炉材を噛み込んだ重量感のある鉄滓である。着磁度は中程度であるが一部に強い部分がある。重量は632.1gである。

鉄滓断面の顕微鏡観察では、灰白色團型のウスタイトの大きな結晶とその間を埋めるようにファイヤライトの結晶が存在している。

化学成分分析の結果、T.Feは56.2%でFeOも63.4%と高い値を示した。造滓成分は20.2%と非常に少ない。 Na_2O や K_2O もそれぞれ0.54%、0.40%と低い。なお TiO_2 は2.79%と多く、Vは0.35%であった。精錬滓とも考えられるが、 TiO_2 の値が高いので炉内に残存していた製錬滓であろう。

X線回折の結果、マグネタイトとファイヤライトの強いピークに加え、マグネタイトのピークも検出された。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とした製錬滓と言える。

02 資料No.21 鉄滓12

大きさが120L×70Wmmの凹凸のある灰黒色で発泡膜のある資料である。底面には酸化鉄の付着や炉床材を巻き込んでいる。着磁度はやや弱く、重量は240.9gである。

鉄滓断面の低倍率の実体顕微鏡による観察では、大小の空孔が多く存在する比較的流動性の良い滓が凝固したものと認められる。白く光っているものは金属鉄である。高倍率の顕微鏡観察では、金属鉄はやや溶融が開始しはじめた状態で凝固している。この金属鉄は炭素がまだ殆ど含まれていない純鉄と思われる。

化学成分分析の結果では、金属鉄(M.Fe)は検出されなかった。T.Feは僅か10.8%であり、造滓成分は80.9%と非常に多い。Na₂OやK₂Oもそれぞれ3.47%、1.95%と極めて多い。炉壁に近い部分の滓ではないかと考えられる。なお、TiO₂は0.63%、Vは0.03%であった。

X線回折の結果、滓に含まれる化合物は大部分が鉱物質であり、僅かマグネタイトのピークが検出されたにすぎなかった。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とし、金属鉄粒を含むが製鉄初期の製鉄滓と言える。

09資料No22 鉄滓18

大きさが85L×65Wmmの資料No21に似た、耐火物を噛み込んだ軽量発泡、粗粒な資料である。上部には酸化鉄が付着している。着磁度は弱いが一部強い箇所がある。しかし、メタルチェッカーによる金属鉄の反応はなかった。重量は158.0gである。

鉄滓断面の低倍率の実体顕微鏡による観察では、視野の上部は耐火物、中央は鉄滓であり、下部は金属鉄が酸化・錆化したオキシ水酸化鉄と認められる。

化学成分分析の結果、T.Feは僅か13.5%であり、その大部分はFe₂O₃で16.8%と相対的に多い。酸化して第二鉄に変化しており、C.W.が1.57%も含まれることからその大部分はオキシ水酸化鉄の形で存在するものと思われる。また、造滓成分は74.7%と非常に多い。Na₂OやK₂Oもそれぞれ2.57%、1.73%と極めて多い。炉壁に近いまたは炉底部の滓ではないかと考えられる。なお、TiO₂は0.73%、Vは0.054%であった。

X線回折の結果、滓に含まれる化合物は大部分が鉱物質であり、僅かにマグネタイト、オキシ水酸化鉄であるゲーサイトやレピッドクロサイトのピークが検出されたにすぎなかった。

これらの結果を総合すると、この鉄滓は砂鉄を原料とし、金属鉄の錆化物と一体となった製鉄炉壁または炉底部に近い製鉄滓と考えられる。

鉄滓に関する考察結果の纏め

- (1)製鉄は砂鉄を鉄源としていた。
- (2)鉄滓は製鉄滓が多く、製鉄の初期段階で流動性に富むものが多い。
- (3)鉄滓の工程上の分類は次のようになった。

製鉄滓 (T.Feが50%未満) ……………	(資料No13~19、21、22)	9件
(内流出滓と判定されるもの	[資料No14、15、19]	3件)
製鉄滓 (T.Feが50%以上) ……………	(資料No10~12、20)	4件
	合 計	13件
内金属鉄の存在が確認されたもの	[資料No13、21]	2件
内金属鉄が存在したが錆化したもの	[資料No18、22]	2件

III. 耐火物

(1) 資料No23 羽口 1

外径65mmの外、内径30mmの内面が完全に被熱した羽口で、その先端半分は溶融鉄滓が固着している。ノ口の垂れの角度から30°で炉内に挿入されていたと考えられる。付着鉄滓部は強い着磁度を示した。重量は174.8gである。

低倍率の実体顕微鏡による滓が付着していない部分の観察で、黒い部分が被熱された箇所では溶融はされていない。褐色部分は母材の耐火物（粘土）部分である。

耐火物の母材と付着物について化学成分分析を行った。その結果によると、母材のシリカ（ SiO_2 ）が60.0%含有されるのに対しアルミナ（ Al_2O_3 ）が25.4%と非常に多く、耐火性に優れた成分と考えられる。付着物部分でのT.Feは15.8%の高い値を示すことから、鉄滓であるといえる。

羽口の母材粘土部分の耐火度試験結果によると、耐火温度は1,280°C強であった。当時の製鉄用耐火物としては耐火度が高く、材質を吟味して使用したと考えられる。

(2) 資料No24 炉壁 1

溶融部が見受けられるスサ痕のある炉壁材である。溶融部は磁石に感応する。粘土内に白く細かい砂塵が観察される。重量は236.1gである。

低倍率の実体顕微鏡による炉壁断面の観察で、耐火物に含まれる鉱物質の粒子が認められる。

化学成分分析結果では、ガラス質のシリカが65.7%とやや多いが、アルミナも20.2%と高い値を示しかなりの耐火温度を有するものと推定される。

耐火度試験によると、耐火温度は1,280°C強であった。資料No23～25といずれも高い耐火度を示し、使用する粘土の吟味を良くしているが、この製鉄遺跡の近傍に良質の粘土を産出する地域があるものと考えられる。

(3) 資料No25 炉壁 2

溶融部が見受けられるスサ痕のある炉壁材である。溶融部の着磁度は弱い。重量は391.1gである。

低倍率の実体顕微鏡による炉壁断面の観察で、粒子が比較的細かく良く選別された粘土を使用している。

化学成分分析によると、シリカが61.8%とやや多いが、アルミナも20.2%と高い値を示しかなりの耐火温度を有するものと推定される。

耐火度試験によると、耐火温度は1,280°C弱であった。資料No23～25といずれも高い耐火度を示し、使用する粘土の吟味を良くしているが、この製鉄遺跡の近傍に良質の粘土を算出する地域があるものと考えられる。

4. 参 考

- (1) 鉄滓の発生を鉄の生産工程から大きく分類すると、

- ①製錬滓 砂鉄や鉄鉱石を木炭等の炭素で還元して、酸素を取り除き、金属鉄を取り出す時に発生するもので、炉内滓や炉底滓および炉外流出滓などがある。
- ②製錬鍛冶滓 ①で出来た鉄塊から、さらに不純物を取り出して加工しやすい状態の鉄素材(大鍛冶滓)(鉄塊)にする時に生成するもので、成分的には①の製錬滓に近い。
- ③製錬鍛冶滓 ②で出来た鉄素材や製品の鉄を加熱・鍛打して、鉄製品を作っていく過程で(小鍛冶滓)生成する鉄滓で、その生成過程により、板型鍛冶滓・鍛造剥片、粒状鉄滓(通称湯玉)等の形となる。
- ④鈍物滓 鉄を溶解し、鋳型に流し込んで鋳型を作る時に生成するもの。等があります。

鉄は当初より再加工(いわゆるリサイクル)の可能な素材として利用されて来たと考えられるので、鍛冶場には各所で生産された鉄が持ち込まれてきたと、考えるのが妥当であります。

素材である鉄や鉄塊がどこで生産されたものか、製鉄技術の進歩の状況等については、特定製鉄遺跡に付随する鍛冶工房や、製品としての鉄器類での追跡調査研究を進めて行く過程で更に解明されることを期待したいと思います。

(2) 鉄の分析結果について

分析結果表に記載されている全鉄分(Total Fe=T.Feと表示)の量と、その後に記載されている金属鉄(M.Fe)、酸化第一鉄(FeO)および酸化第二鉄(Fe₂O₃)との関係を簡単に述べると、後者の二つは酸化鉄(鉄と酸素の化合物)を示しており、それらの中の鉄(Fe)の量と金属鉄(M.Fe)を合計したものが前者の全鉄分(T.Fe)となります。

したがって、分析値を合計する場合には全鉄分を除外して集計する必要があります。

また、酸化鉄にはこの他にもいろいろな形態をしたものがあり、鉄滓中の鉄の成分量を見られる場合には、全鉄分(T.Fe)が重要になります。

とくに水分との接触が多い鉄滓には、水分と酸化第二鉄とが結合したオキシ水酸化鉄(Fe₂O₃・H₂O=2FeOOH)が生成する。その時の鉄錆の形として、ゲーサイト[Goethite:α-FeOOH]、アカゴナイト[Aka gonite:β-FeOOH]、レピッドクロサイト[Lepidocrocite:γ-FeOOH]の3種があり、生成環境や条件により変化します。

(3) 鉄滓の化合物について

鉄滓を構成する化合物は一般に次のようなものであり、顕微鏡写真およびX線回折の結果によると、原則としてこれらの存在がいずれかの組み合わせで認められます。なお、このほかにガラス質の化合物も存在します。

ウスタイト	: Wustaitte(FeO)	白色の蘆玉又は葡萄の房状の結晶
ファイヤライト	: Fayalite(2FeO・SiO ₂)	褐色針状やレース状の長い結晶
マグネタイト	: Magnetite(Fe ₃ O ₄)	白色、多角盤状または樹枝状の結晶
ヘマタイト	: Hematite(α-Fe ₂ O ₃)	赤褐色～赤紫色
マグヘマイト	: Maghemite(γ-Fe ₂ O ₃)	赤紫色～黒紫色
ウルボスピネル	: Ulvospinel(2FeO・TiO ₂)	淡褐色、角尖状～六角形状結晶

イルミナイト	: Ilmenite ($\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)	短冊状
シュードブルッカイト	: Pseudobrookite ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$)	針状、板状
ゲーサイト	: Gothite ($\alpha\text{-FeOOH}$)	黄赤色錆
アカゴナイト	: Akagonite ($\beta\text{-FeOOH}$)	黄色錆
レピッドクロサイト	: Lepidocrocite ($\gamma\text{-FeOOH}$)	橙赤色錆
ヘーシナイト	: Hercynite ($\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)	ウスタイト中に多く析出。胡麻粒状

この他、石英=クォーツ (SiO_2)、ルーサイト (KAlSi_2O_7)、ドロマイト [$\text{CaMg}(\text{CO}_3)_2$]、ブラギオレーゼ [$(\text{Na,Ca})(\text{Al,Si})_4\text{O}_{10}$]等の粘土鉱物やガラス質のものがある。なお、色調は前記したものと若干異なることもあります。

試験報告書

1. 件名

X線回折による、遺跡出土品の定性分析

2. 試料記号

- ①No.10~22 (山ノ内Ⅲ遺跡…13本)
②Sawada-6~7 (沢田Ⅰ遺跡…2本) 合計15本

3. 測定装置

理学電気株式会社製ガイガーフレックス (RAD-IIA型)

4. 測定条件

① 使用X線	Co-K α (波長=1.79021Å)
② K β 線吸収フィルター	Fe
③ 管電圧・管電流	50 kV・35mA
④ スキャンング・スピード	2°/min
⑤ サンプリング・インターバル	0.020°
⑥ D, S, スリット	1°
⑦ R, S, スリット	0.3mm
⑧ S, S, スリット	1°
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

5. 測定結果

同定された物質は、チャートに記入致しましたので、チャートを御参照下さい。

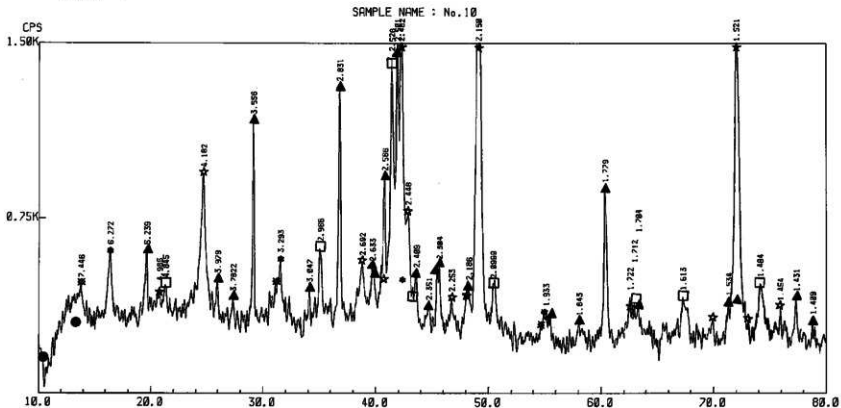
6. 測定者のコメント

- ①Sawada-6の試料につきましては、量が少ないので、ガラス製試料ホルダーを使用して測定致しました。
②●印のピークは、試料ホルダーからのものと思われます。

MEASUREMENT DATE : 95. 2.15
 FILE NAME : RM4418B
 TARGET : Co
 VOL. en4 CUR : 50KV 35mA
 SLITS : 03 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED : 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL. : .02 DEG
 PRESET TIME : 0 SEC
 SAMPLE NAME : No.10
 SAMPLE MEMO : G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO. : 11
 THRESH. INTEN. : 326 CPS
 2nd DERIV. : 00 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH : .09 DEG
 S. G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

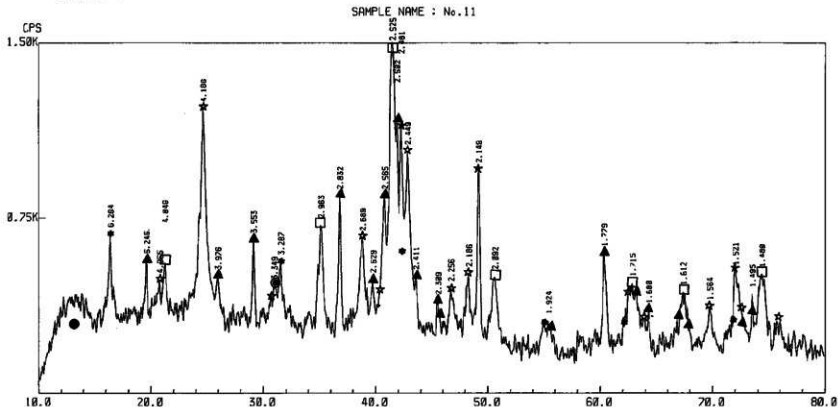
- ★ FeO (Muscite)
- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- Fe₂O₃ (Magnetite)
- ☆ α-Fe₂O₃ (Goethite)
- * γ-Fe₂O₃ (Lepidocrocite)
- ⊠ β-Fe₂O₃ (Akaganeite)



MEASUREMENT DATE : 95. 2.15
 FILE NAME : AH45199
 TARGET : Ca
 VOL. and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .5 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 8 SEC
 SAMPLE NAME: No.11
 SAMPLE MEMO: G003589
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 92-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. (INTEN.): 323 CPS
 2nd. DERIV.: 08 CPS/(DEG. DEG)
 WIDTH: 89 DEG
 B. G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

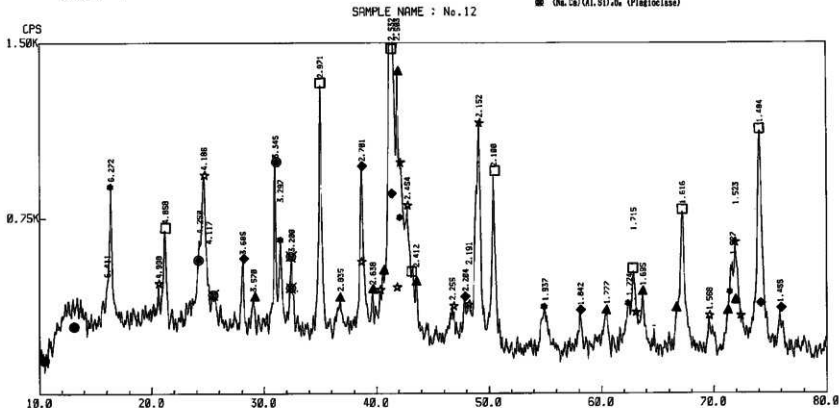
- FeO₂ (Magnetite)
- ☆ α-FeO (Goethite)
- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- ★ FeO (Muscovite)
- * γ-FeO (Lepidocrocite)
- SiO₂ (Quartz. Im)



MEASUREMENT DATE : 95. 2. 15
 FILE NAME : R45188
 TARGET : Ca
 VOL and CUR : 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.12
 SAMPLE WTD: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SHOOTING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 322 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- FeO (Magnetite)
- ▲ FeSiO₃ (Fayalite)
- ★ FeO (Wustite)
- SiO₂ (Quartz Ion)
- ◆ α-Fe₂O₃ (Hematite)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- (Na,Ca)(Al,Si)₃O₈ (Plagioclase)

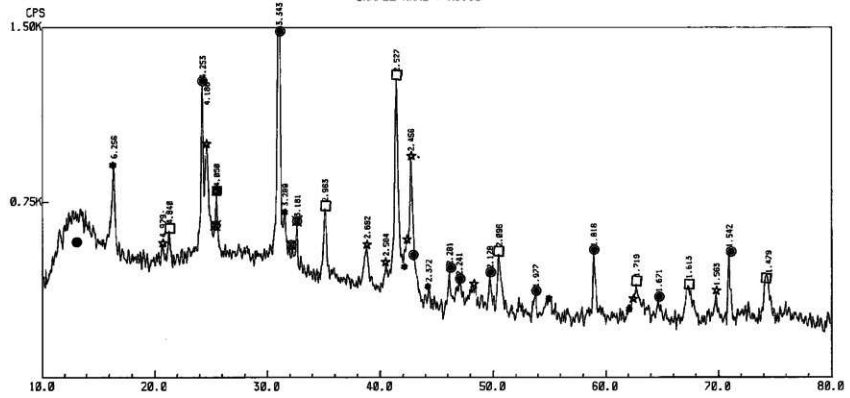


MEASUREMENT DATE : 95. 2.15
 FILE NAME : AH47100
 TARGET : Co
 VOL and CUR : 50KV 35mA
 SLITS : 05 1 AS .3 SS 1
 SCAN SPEED : 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL. : .02 DEG
 PRESET TIME : 0 SEC
 SAMPLE NAME : No.13
 SAMPLE MEMO : G00360
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO. : 11
 THRESH. INTEN. : 270 CPS
 2nd. DERIV. : 00 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH : .09 DEG
 A. G. REDUCTION : EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- SiO₂ (Quartz, low)
- Fe₃O₄ (Magnetite)
- ★ α-Fe₂O₃ (Goethite)
- γ-Fe₂O₃ (Lepidocrocite)
- SiO₂ (Cristobalite)
- ▣ Ca, Ca (Al, Si)₂O₆ (Pangolite?)

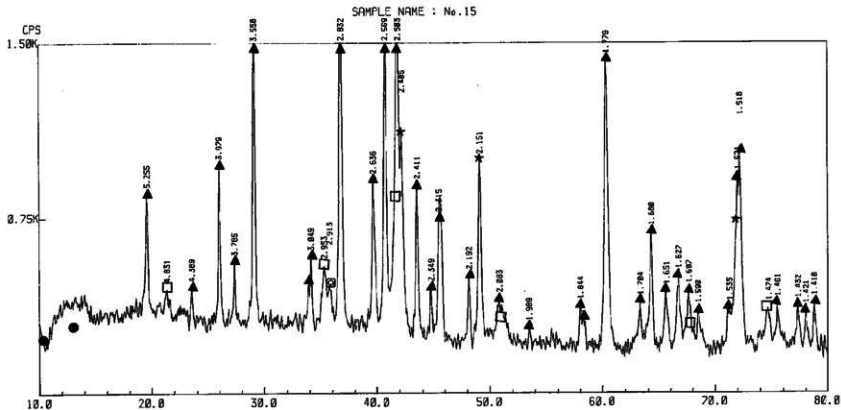
SAMPLE NAME : No.13



MEASUREMENT DATE : 85. 2.16
 FILE NAME : AH49188
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 8 SEC
 SAMPLE NAME: No. 15
 SAMPLE MEMO: G88369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 82-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 297 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B. G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

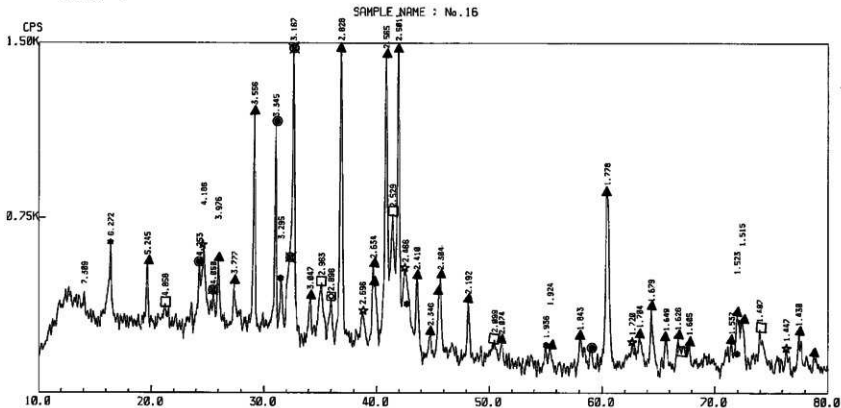
▲ FeSiO₃ (Fayalite)
 ★ FeO (Wustite)
 □ FeO (Cementite)
 ⊠ CaFe(CO₃)₂ (Dolomite)?



MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AHS0100
 TARGET : Co
 VOL. and CUR: 5KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .5 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL. : .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.16
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 289 CPS
 2nd DERIV.: 88 CPS/(DEG*DEG)
 WIDTH: .89 DEG
 B. G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

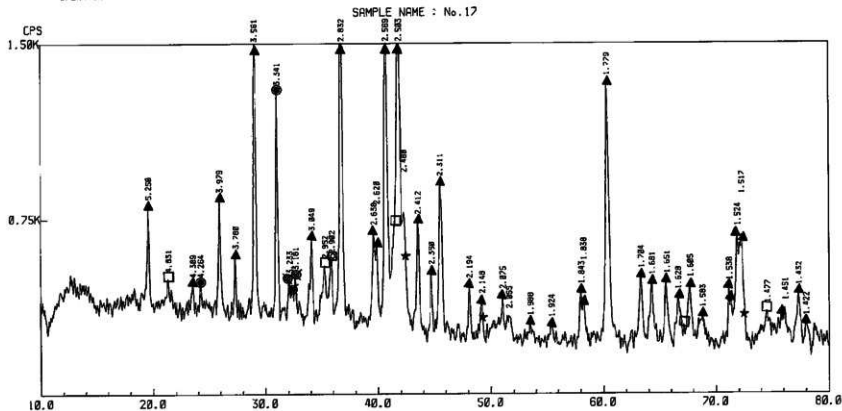
- ▲ Fe₃SiO₅ (Cayalite)
- SiO₂ (Quartz. Ion)
- Fe₂O₃ (Magnetite)
- * γ-Fe₂O₃ (Lepidocrocite)
- ☆ α-Fe₂O₃ (Goethite)
- (Mn, Ca) (Al, Si)₂O₆ (Plagioclase)
- ⊠ CaMg(CO₃)₂ (Dolomite)?



MEASUREMENT DATE : 85. 2.16
 FILE NAME : R451100
 TARGET : Ca
 VOL and CUR : 50KV 35mA
 SLITS : 05 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.17
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 82-16-1995
 SHOOTING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 200 CPS
 2nd DERIV.: 80 CPS/(DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

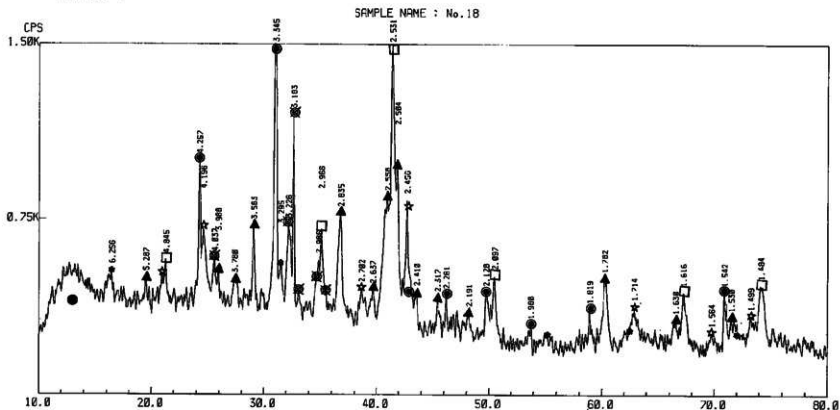
- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- SiO₂ (Quartz.10m)
- ★ FeO (Wustite)
- Fe₂O₃ (Hematite)
- ⊙ Ca₂(Al, Si)₂O₇ (Jugositse)?
- ⊠ Ca₂(CO)₃ (Oenite)?



MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : AHS2100
 TARGET : Ca
 VOL and CUR : 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED : 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL. : .02 DEG
 PRESET TIME : 0 SEC
 SAMPLE NAME : No.18
 SAMPLE MEMO : G08369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO. : 11
 THRESH. INTEN. : 289 CPS
 2nd DERIV. : 89 CPS/(DEG*DEG)
 VIOT : .05 DEG
 S. G. REDUCTION : EXECUTION
 OUTPUT FILE :

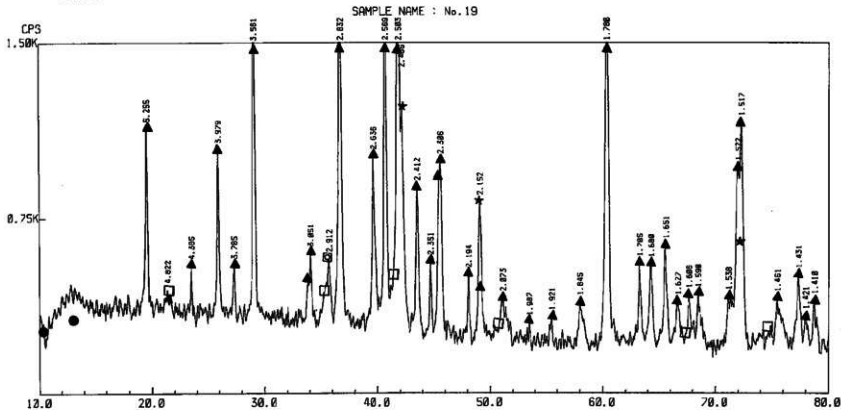
- SiO₂ (Quartz low)
- Fe₂O₃ (Magnetite)
- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- ☆ α-Fe₂O₃ (Goethite)
- * γ-Fe₂O₃ (Lepidocrocite)
- Ca, Ca (Al, Si)₂O₆ (Pillingerite)



MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : RH53188
 TARGET : Ca
 VOL and CUR: 5KV 35mA
 SLITS : 05 1 RS, 3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No.19
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 300 CPS
 2nd DERIV.: 00 CPS/(DEGxDEG)
 VIOTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- ▲ Fe₂SiO₄ (Fayalite)
- ★ FeO (Wustite)
- Fe₂O₃ (Magnetite)
- ▣ CaMg(CO₃) (Dolomite)?

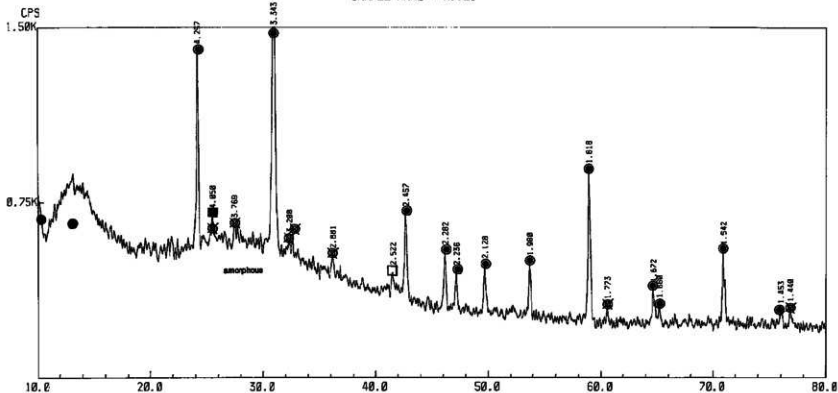


MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : RH55100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : 0S 1 RS .3 9S 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 8 SEC
 SAMPLE NAME: No.21
 SAMPLE MEMO: 300369
 OPERATOR :

DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 224 CPS
 2nd DERIV.: 80 CPS/1DEGxDEG)
 WIDTH: .09 DES
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

- SiO₂ (Quartz low)
- SiO₂ (Cristobalite)?
- ▣ Ca₂Ca(Al₂Si₂)₆ (Plagioclase)?
- Fe₂O₃ (Magnetite)?

SAMPLE NAME : No. 21

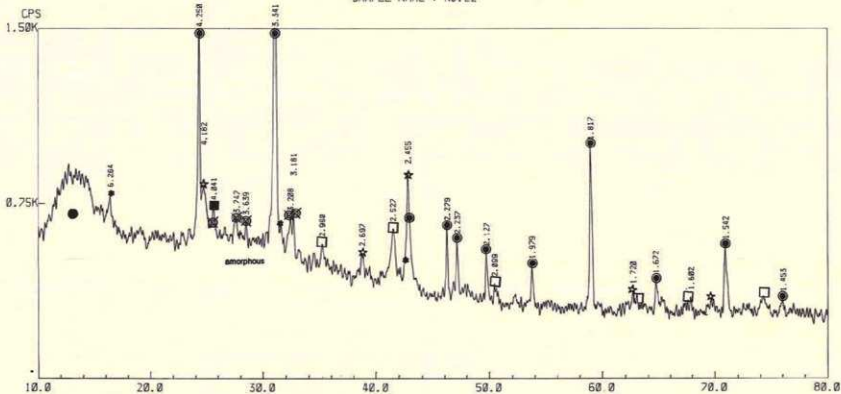


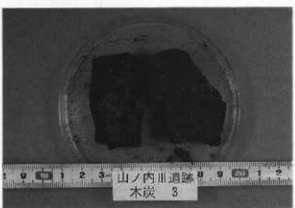
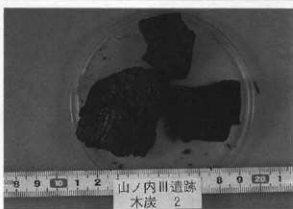
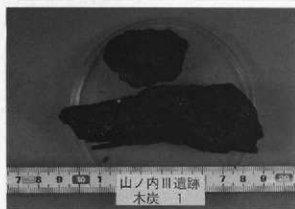
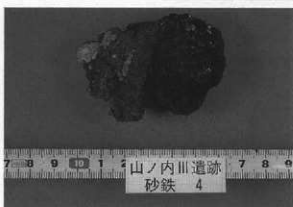
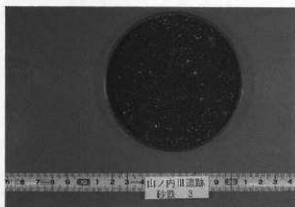
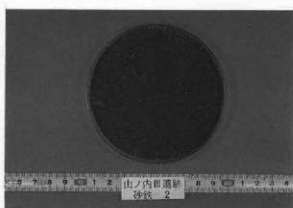
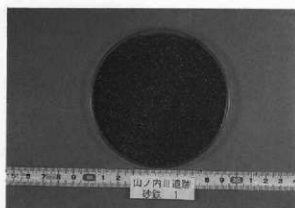
MEASUREMENT DATE : 95. 2.16
 FILE NAME : RH56100
 TARGET : Co
 VOL and CUR: 50KV 35mA
 SLITS : DS 1 RS .3 SS 1
 SCAN SPEED: 2 DEG/MIN.
 STEP/SAMPL.: .02 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SAMPLE NAME: No. 22
 SAMPLE MEMO: G00369
 OPERATOR :

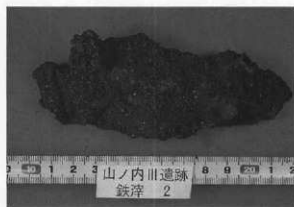
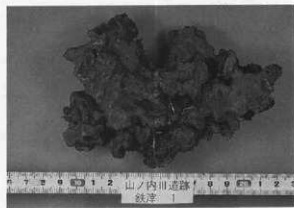
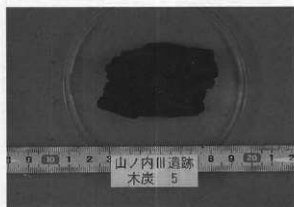
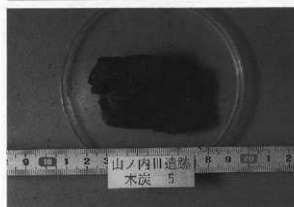
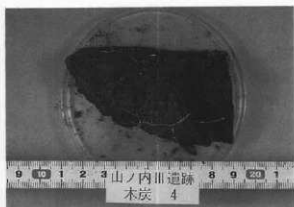
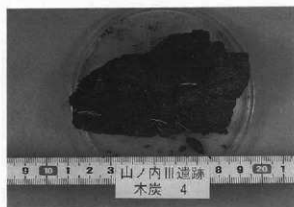
DATA DRAWING DATE : 02-16-1995
 SMOOTHING NO.: 11
 THRESH. INTEN.: 252 CPS
 2nd DERIV.: 80 CPS/(DEG*DEG)
 WIDTH: .09 DEG
 B.G. REDUCTION: EXECUTION
 OUTPUT FILE :

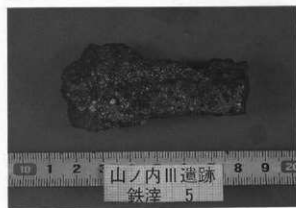
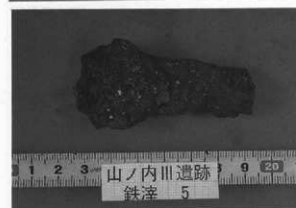
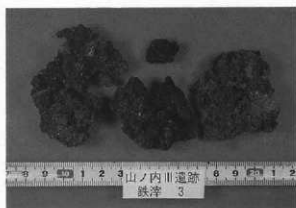
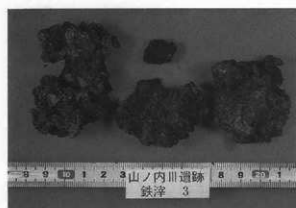
- SiO₂ (Quartz low)
- ☆ α-FeO(OH) (Goethite)
- Fe₂O₃ (Magnetite)
- * γ-FeO(OH) (Lepidocrocite)
- ⊗ (Ca, Co)(Al, Si)₂O₆ (Plagioclase)
- SiO₂ (Cristobalite)?

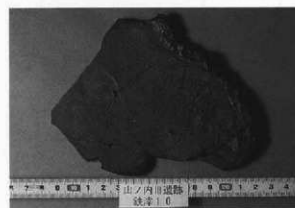
SAMPLE NAME : No. 22

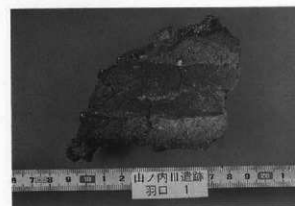
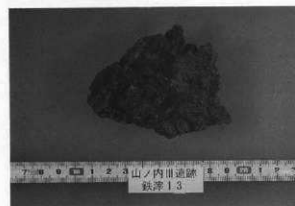
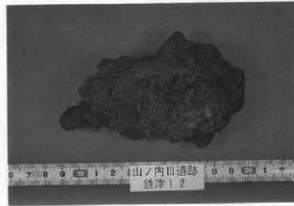
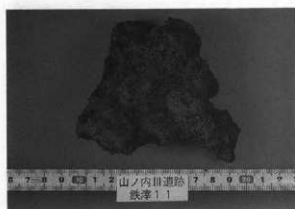














分析結果 (山ノ内田道跡調査)

試料No.	成分	%(m/m)						cal/g
		灰分	揮発分	固定C	付着水	S	P	
5		15.5	40.0	44.5	47.3	0.03	0.017	4850
6		10.4	40.8	51.2	18.0	0.02	0.004	5180
7		11.0	32.7	56.3	17.1	0.02	0.006	5260
8		11.6	42.3	46.1	18.0	0.02	0.004	5490
9		16.9	38.7	44.4	16.2	0.03	0.006	4900

【分析方法】 分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。
 灰分：重量法 S：燃焼-中和滴定法
 揮発分：重量法 P：ガラスビード蛍光X線分析法
 固定炭素：計算 発熱量：B型熱量計を使用
 付着水：熱乾燥法

分析結果 (山ノ内田道跡調査)

試料No.	成分	単位：%(m/m)											
		C	SiO ₂	MnO	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	Na ₂ O	K ₂ O	T.Fe	C・W	Igloss
23	母材	0.17	60.0	0.12	25.4	0.41	0.84	1.04	0.70	1.63	5.90	0.99	1.28
23	固着物	0.065	50.7	0.17	19.4	1.16	0.72	0.95	1.30	2.42	15.8	0.23	0.80
24		0.070	65.7	0.10	21.8	1.19	0.58	0.52	2.12	1.98	3.52	0.41	0.44
25		0.31	61.8	0.09	20.2	0.90	0.29	0.57	1.70	1.73	3.97	2.55	3.99

【分析方法】 粘土の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。
 C：燃焼-赤外線吸収法 SiO₂, MnO, Al₂O₃
 C・W：カルッフフィッシャー法 CaO, MgO, TiO₂ }：ガラスビード蛍光X線分析法
 Igloss：重量法 Na₂O, K₂O, T, Fe

分 析 結 果 (山ノ内III遺跡調査)

砂鉄関係		単位: % (m/m)											
試料№	成分	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	V	MnO	P ₂ O ₅	Na ₂ O	K ₂ O	T.Fe	C - W
1		0.53	0.08	0.62	<0.01	0.39	0.20	0.35	0.518	0.018	0.04	69.1	0.12
2		1.39	0.48	0.48	0.04	0.43	0.22	0.33	0.422	0.044	0.08	58.3	0.25
3		0.48	0.12	0.29	<0.01	0.39	0.20	0.34	0.303	0.016	0.04	69.3	0.11
4		1.28	0.33	0.46	0.04	0.96	0.22	0.37	0.384	0.053	0.05	67.6	0.21

【分析方法】 砂鉄等の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。

SiO₂, Al₂O₃, CaO

MgO, TiO₂, MnO } : ガラスビード蛍光X線分析法

P₂O₅, K₂O

T.Fe : 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法

C・W : コールフィッシャー法

Na₂O, V : 原子吸光法

分 析 結 果 (山ノ内III遺跡調査)

砂鉄関係		単位: % (m/m)																	
試料№	成分	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	C - W	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	C	V	Cu
10		63.0	0.11	52.74	31.3	2.47	7.56	2.06	0.36	0.02	0.38	0.14	0.315	0.001	0.23	0.15	0.44	0.076	0.002
11		55.0	0.45	21.63	54.0	5.37	10.4	2.76	0.79	0.37	1.48	0.33	0.529	0.055	0.40	0.18	0.27	0.26	0.001
12		58.5	0.22	28.88	51.3	3.60	8.22	2.27	0.95	0.18	1.08	0.39	0.930	0.015	0.27	0.19	0.19	0.20	0.001
13		26.7	0.34	7.90	28.9	2.50	43.9	12.2	1.14	0.49	0.64	0.23	0.363	0.004	1.66	1.51	0.30	0.078	0.001
14		46.9	0.17	55.25	5.44	0.19	24.9	6.65	2.52	0.51	1.51	0.51	0.938	0.028	1.04	0.82	0.020	0.29	0.001
15		47.3	0.17	55.61	5.61	0.13	23.9	6.54	2.95	0.56	1.74	0.60	1.07	0.034	0.95	0.86	0.021	0.33	0.001
16		37.1	0.17	30.10	19.4	1.89	32.1	9.09	2.40	0.61	1.70	0.45	0.631	0.031	1.25	1.09	0.46	0.26	0.002
17		42.5	0.17	48.79	6.32	0.28	29.5	7.76	2.66	0.55	1.56	0.52	0.924	0.032	1.11	1.03	0.026	0.30	0.001
18		35.8	0.11	18.97	30.0	2.83	31.5	8.09	2.22	0.72	1.89	0.40	0.826	0.006	1.33	1.03	0.23	0.12	0.001
19		47.3	0.17	55.32	5.93	0.25	25.6	6.61	2.21	0.44	1.14	0.41	0.761	0.024	1.12	0.83	0.021	0.21	0.001
20		56.2	0.22	63.37	9.64	0.30	13.8	3.30	2.42	0.68	2.79	0.48	0.678	0.044	0.54	0.40	0.015	0.35	0.001
21		10.8	0.34	7.76	6.34	0.26	60.9	17.4	1.85	0.77	0.63	0.18	0.163	0.016	3.47	1.95	0.043	0.030	0.001
22		13.5	0.34	1.80	16.8	1.57	57.6	14.5	1.93	0.65	0.73	0.27	0.268	0.006	2.57	1.73	0.23	0.054	0.001

【分析方法】 鉄律等の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。

T.Fe : 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法

M.Fe : 臭素メタン分解-EDTA滴定法

FeO : ニクロム酸カリウム滴定法

Fe₂O₃ : 計 算

C・W : コールフィッシャー法

C : 燃焼-赤外線吸収法

CaO, MgO

MnO, Cr₂O₃ } : ICP発光分光分析法

Na₂O, V, Cu

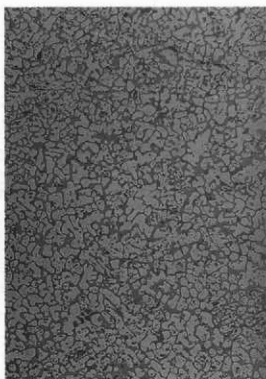
SiO₂, Al₂O₃, CaO

MgO, TiO₂, MnO } : ガラスビード蛍光X線分析法

P₂O₅, K₂O

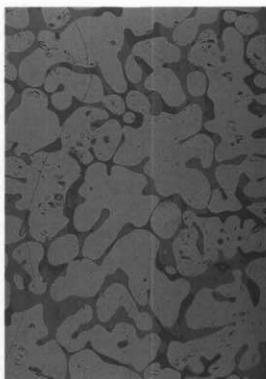
*CaO, MgO, MnOは含有率に応じ、

ICP法又はX線法で分析しています。

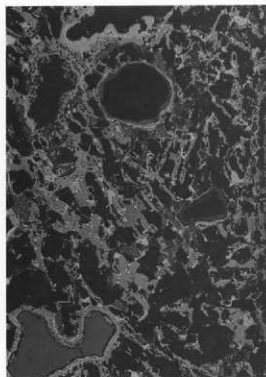


×75

顯微鏡写真 試料番号10 鉄滓1

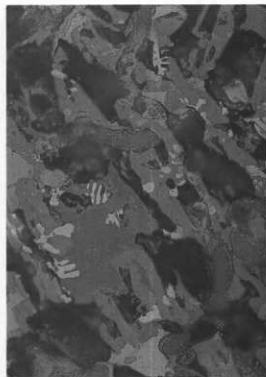


×300

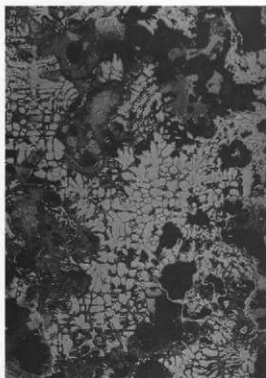


×75

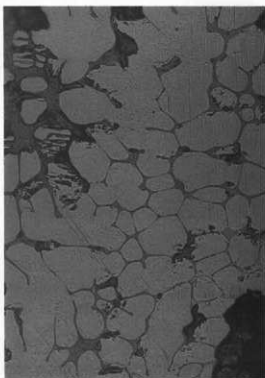
顯微鏡写真 試料番号11 鉄滓2



×300

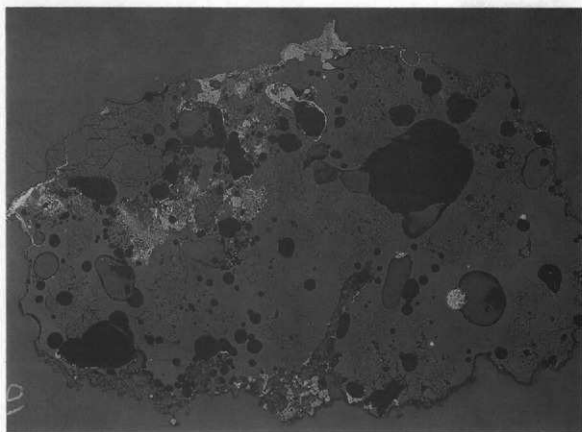


×75



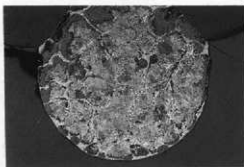
×300

顕微鏡写真 試料番号12 鉄滓3



顕微鏡写真 試料番号13 鉄滓4

×10



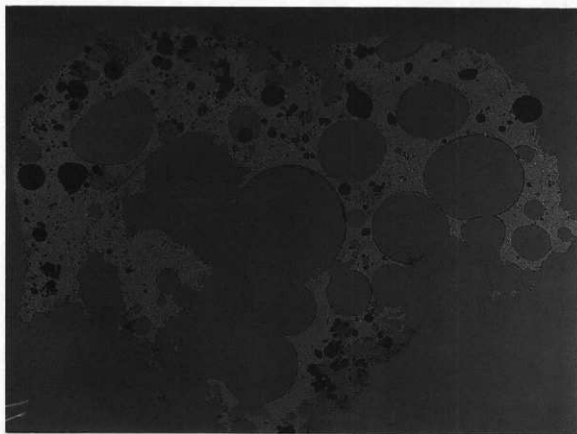
×75

顕微鏡写真 試料番号13 鉄滓4

金属顕微鏡組織

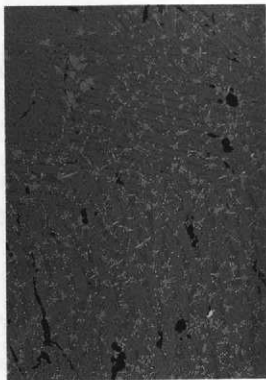


×300



顕微鏡写真 試料番号14 鉄滓5

×10

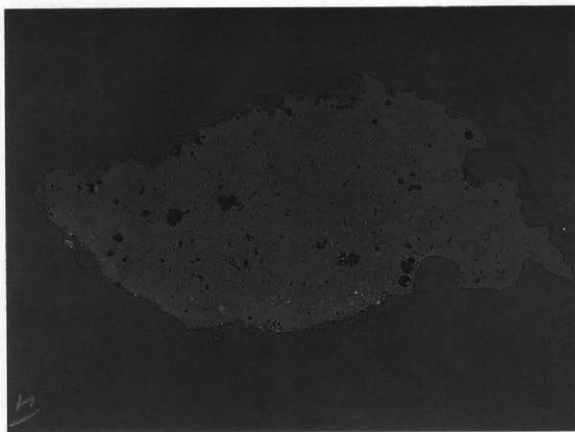


×75



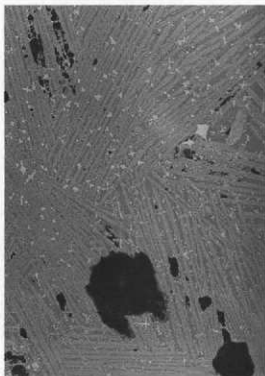
×300

顕微鏡写真 試料番号15 鉄滓6



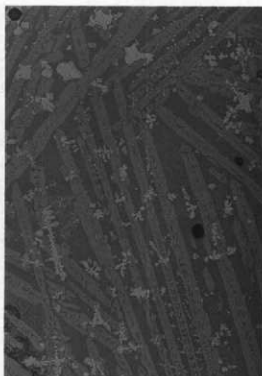
×10

顕微鏡写真 試料番号16 鉄滓7

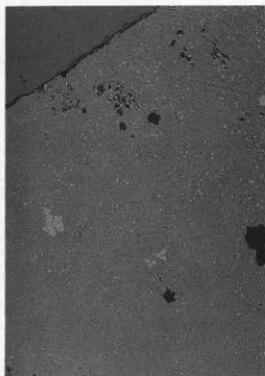


×75

顯微鏡写真 試料番号16 鉄滓7

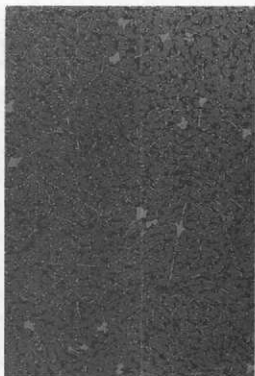


×300

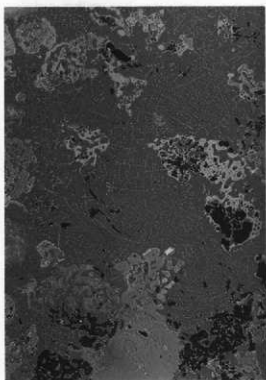


×75

顯微鏡写真 試料番号17 鉄滓8



×300

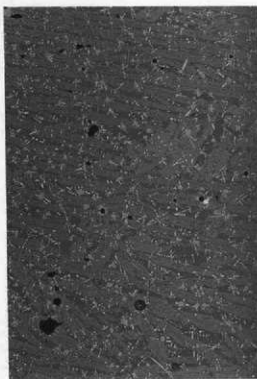


×75

顯微鏡写真 試料番号18 鉄滓9

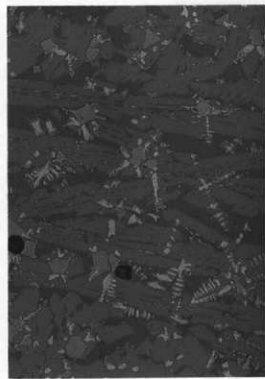


×300



×75

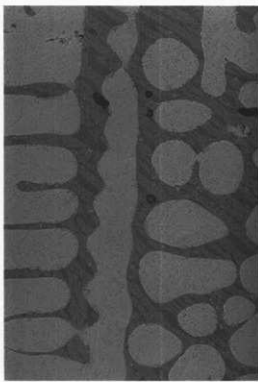
顯微鏡写真 試料番号19 鉄滓10



×300

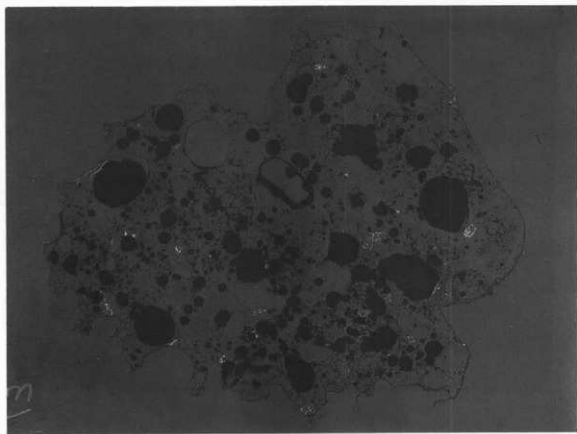


×75



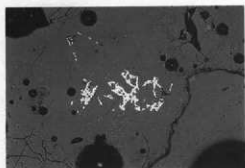
×300

顕微鏡写真 試料番号20 鉄滓11



顕微鏡写真 試料番号21 鉄滓12

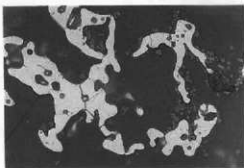
×10



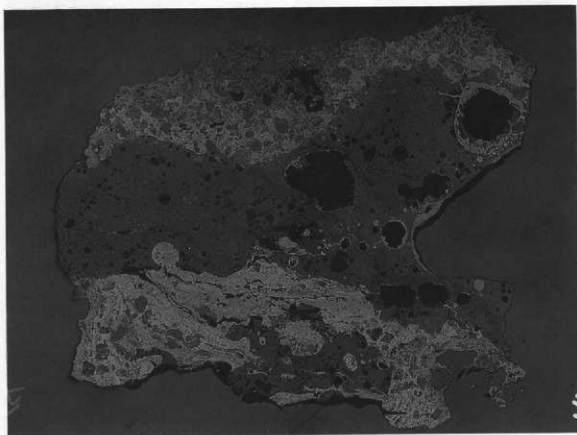
×75

顯微鏡写真 試料番号21 鉄滓12

金屬顯微鏡組織

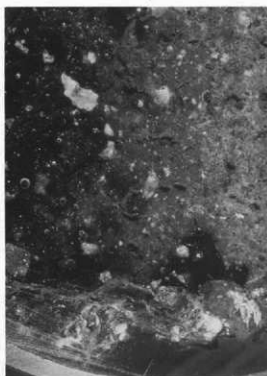


×300



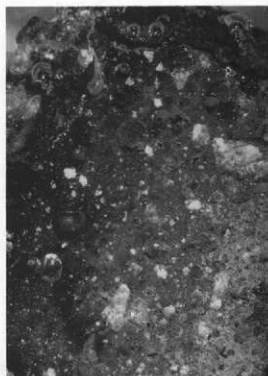
×10

顯微鏡写真 試料番号22 鉄滓13

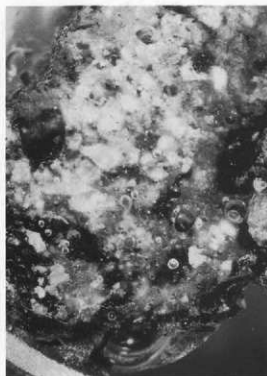


×7.5

試料番号23 羽口 (実体顕微鏡写真)

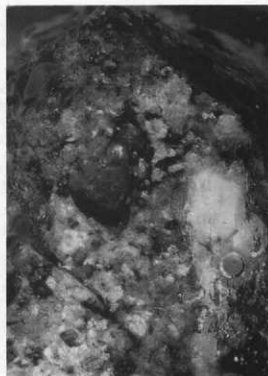


×7.5

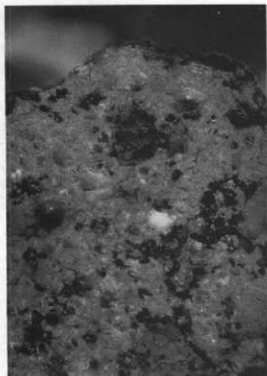


×7.5

試料番号24 炉壁1 (実体顕微鏡写真)

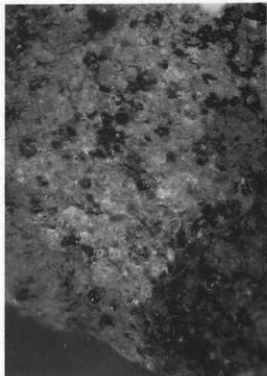


×7.5

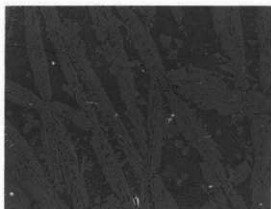


×7.5

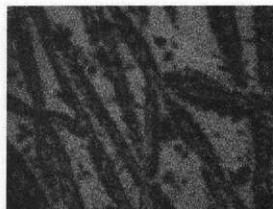
顯微鏡写真 試料番号25 炉壁2 (実体顕微鏡写真)



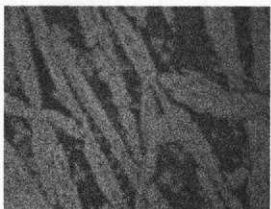
×7.5



SE



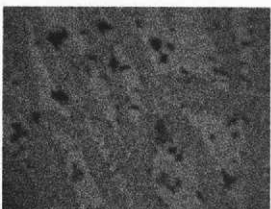
Ca



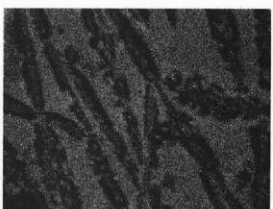
Fe



O



Si



Al

ERMAによる面分析結果(1) 試料番号16 鉄滓7

×300 25μm



S



P



Mg



V



Ti



Cu

ERMAによる面分析結果(2) 試料番号16 鉄薄7

×300  25μm

耐火度試験結果 (山ノ内田遺跡)

試料番号	耐火度(SK)	色調	膨張	試験後の状況
23 羽口1	9+	茶褐色	普通	普通
24 炉壁1	9+	茶褐色	普通	普通
24 炉壁2	9-	茶褐色	普通	普通

試験条件：酸素プロパン炉法

ゼーゲルコーン温度比較表

温度(°C)	コーン番号	温度(°C)	コーン番号	温度(°C)	コーン番号	温度(°C)	コーン番号
600	022	940	08 a		3		23
650	021		08	1160	4 a	1580	26
670	020	960	07 a		4	1610	27
690	019		07	1180	5 a	1630	28
710	018	980	06 a		5	1650	29
730	017		06	1200	6 a	1670	30
750	016	1000	05 a		6	1690	31½
790	015 a		05	1230	7		31
	015	1020	04 a	1250	8	1710	32½
815	014 a		04	1280	9		32
	014	1040	03 a	1300	10	1730	33
835	013 a		03	1320	11	1750	34
	013	1060	02 a	1350	12	1770	35
855	012 a		02	1380	13	1790	36
	012	1080	01 a	1410	14	1825	37
880	011 a		01	1435	15	1850	38
	011	1100	1 a	1460	16	1880	39
900	010 a		1	1480	17	1920	40
	010	1120	2 a	1500	18	1960	41
920	09 a		2	1520	19	2000	42
	09	1140	3 a	1530	20		

注；コーンでは正確な温度の測定はできない。

耐火度の数値を概略の温度で示す場合のみ上表の温度が使われる。

写 真 图 版



平成5年度調査

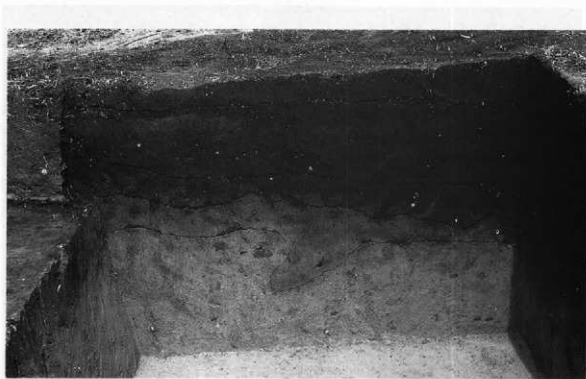


平成6年度調査

写真図版1 調査区全景（航空写真）



遺跡遠景（船越湾上空より）



遺跡土層

写真図版 2 遺跡遠景、遺跡土層



平面



断面

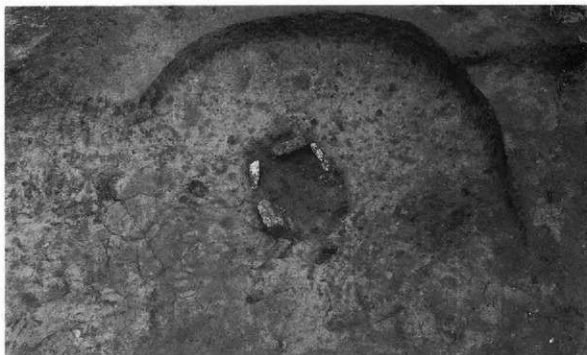


炉平面

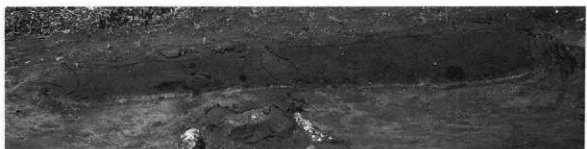


炉断面

写真図版3 VIB 8 j 住居跡



平面



断面

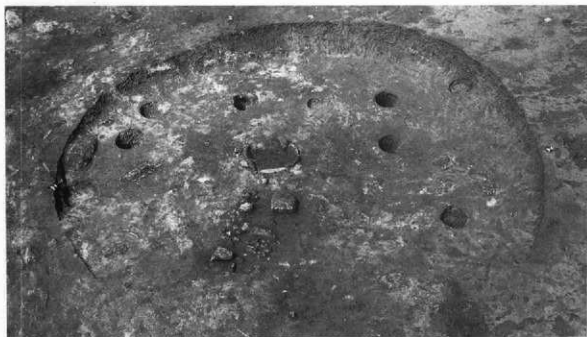


炉平面



炉断面

写真図版4 VIB 0 j 住居跡



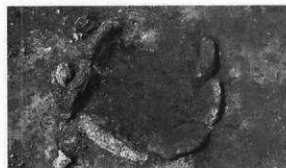
平面



断面（南から北）



断面（西から東）



炉平面



炉断面

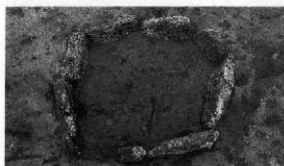
写真図版5 VIC7a住居跡



平面



断面



炉平面



炉断面

写真図版6 VIC 7 d 住居跡



平面



断面（北から南）



断面（西から東）



炉平面



炉断面

写真図版7 VIC0a-1住居跡



平面



断面



炉平面



炉断面

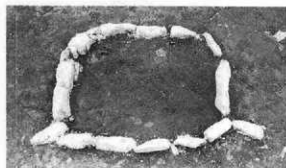
写真图版8 VIC 0 a-2 住居跡



平面



断面



炉平面



炉断面

写真図版9 VIC 0 b 住居跡



平面



石圈炉

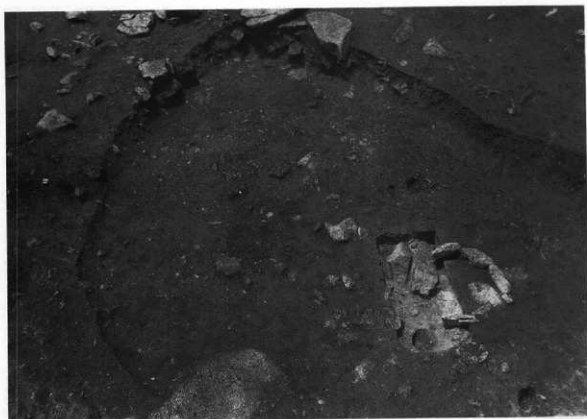


炉石設置状況



炉断面

写真図版10 VIIA1①-1住居跡



平面

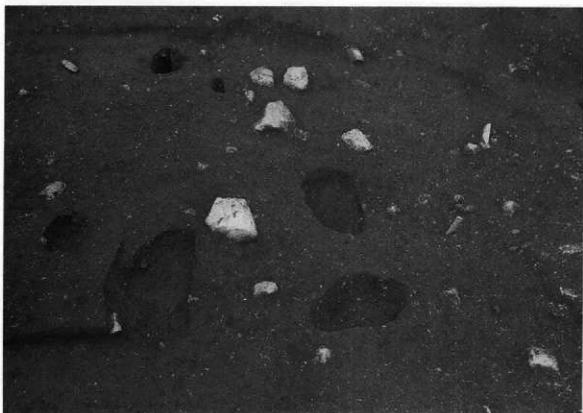


埋土断面



調査風景

写真図版11 VIIA 1e-2 住居跡



平面



炉断面



現場風景 (調査区中央谷筋)

写真図版12 VIIA 3 : 住居跡



平面



埋土断面



炉平面



炉断面（北から南）



炉断面（西から東）

写真図版13 VIIA 8 | 住居跡



平面



埋土断面



炉平面

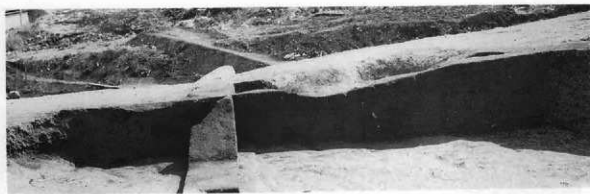


炉断面

写真图版14 VIIA0c住居跡



平面



埋土断面

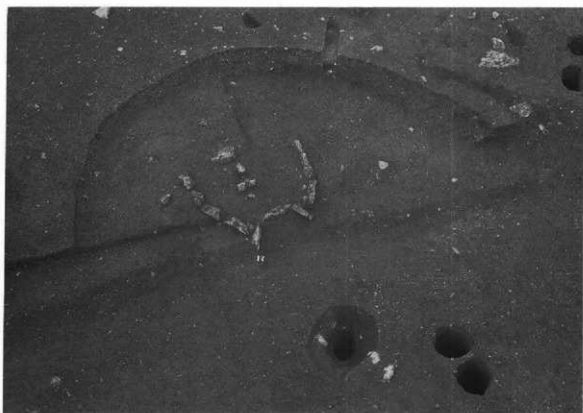


炉平面

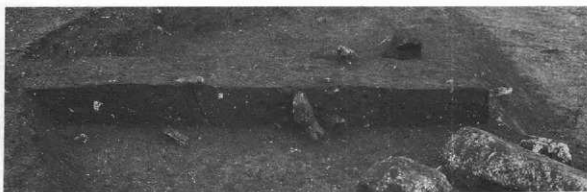


炉断面

写真图版15 VIIA 0 d 住居跡



平面



埋土断面



炉平面



炉断面

写真图版16 VII B 2 a-1 住居跡



平面



炉平面



炉断面



調査風景（飛び地）

写真図版17 VII B 2 a-2 住居跡



平面



埋土断面



炉平面



炉断面

写真図版 18 VII B 3 a 住居跡



平面



断面

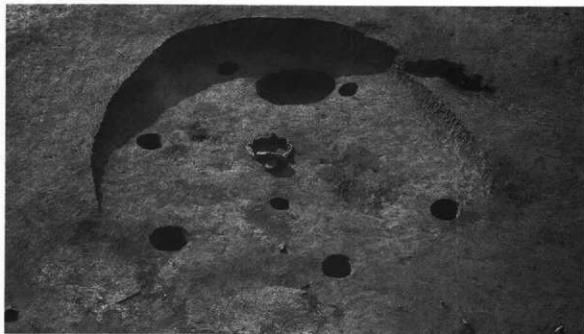


炉平面



炉断面

写真図版19 VII B 8 b 住居跡



平面



断面（北から南）



断面（西から東）



炉平面



炉断面

写真図版20 VII B 0 b 住居跡



平面



断面



炉平面



炉断面

写真図版21 VIC 1 b 住居跡



平面



断面



炉平面



炉断面

写真図版22 VII C 3 f 住居跡



平面



断面

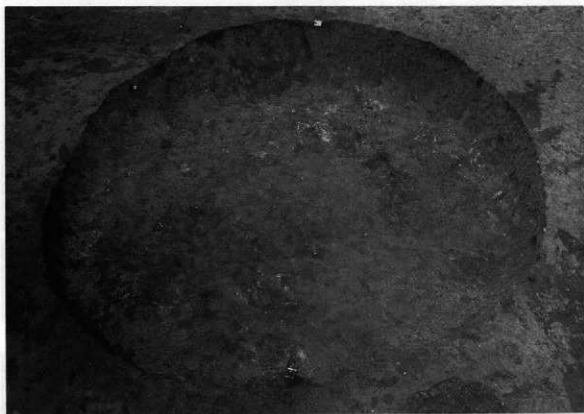


調査区北側尾根上の住居
より船越湾南側を望む

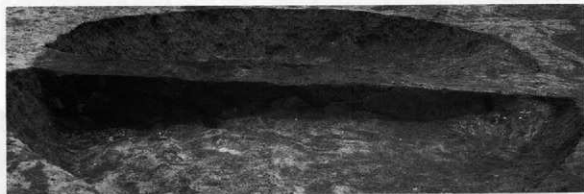


飛び地調査区

写真図版23 VII C 5 f 住居跡



平面



断面

写真図版24 VIC 7 b 壑穴状遺構



平面



埋土断面 (B - B')



埋土断面 (A - A')

写真図版25 VII B 1 c 竪穴状遺構



VIC9b 土坑断面



VIC9b 土坑平面



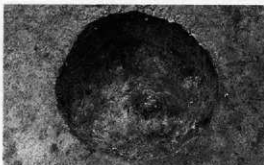
VIIA8i 土坑断面



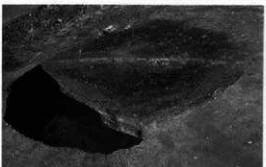
VIIA8i 土坑平面



VIIA0f 土坑断面



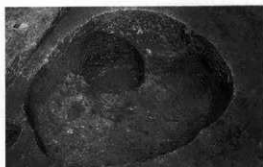
VIIA0f 土坑平面



VIIA0i 土坑断面



VII B7b-1 土坑断面



VII B7b-1 土坑平面



VII B7b-2 土坑断面



VII B7b-2 土坑平面



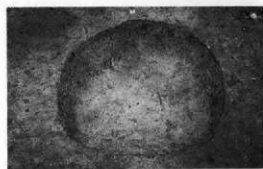
VII C1a 土坑断面



VII C1a 土坑平面



VII C1c 土坑断面



VII C1c 土坑平面

写真図版27 土坑(縄文時代)(2)



VIIc1d 土坑断面



VIIc1d 土坑平面



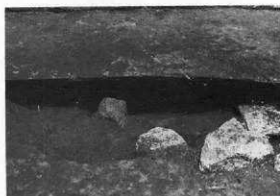
VIIc3c 土坑断面



VIIc3c 土坑平面



VIIb0d 土坑断面



VIIb0d 土坑平面

写真図版28 土坑(縄文時代)(3)



VIC7e 炉跡断面



VIC7e 炉跡平面



VIC0b 炉跡断面



VIC0b 炉跡平面



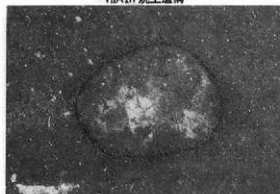
道跡からみた船越湾
写真図版29 炉跡



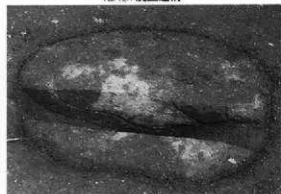
VIIA1h 焼土遺構



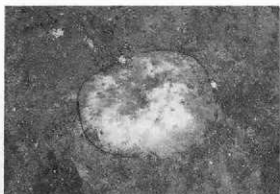
VIIA1h 焼土遺構



VIB9a-1 焼土遺構平面



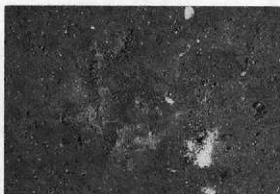
VIB9a-1 焼土遺構断面



VIB9b-1 焼土遺構平面



VIB9b-1 焼土遺構断面



VIB0a-1 焼土遺構平面



VIB0a-1 焼土遺構断面

写真図版30 焼土遺構（縄文時代）(1)



VIB0c 焼土遺構平面



VIB0c 焼土遺構断面



VIA1c 焼土遺構断面



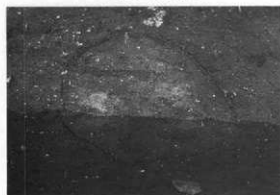
VIA2j-4 焼土遺構断面



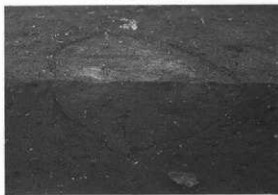
VIA1j 焼土遺構平面



VIA1j 焼土遺構断面



VIA2i-1 焼土遺構平面



VIA2i-1 焼土遺構断面

写真図版31 焼土遺構（縄文時代）(2)



VIIA2i-2、-3 焼土遺構平面



VIIA2i-2、-3 焼土遺構断面



VIIA2j-1 焼土遺構平面



VIIA2j-1 焼土遺構断面



VIIA2j-3 焼土遺構平面



VIIA2j-3 焼土遺構断面



VIIA3g-1 焼土遺構断面



VIIA3h-1 焼土遺構断面

写真図版32 焼土遺構（縄文時代）(3)



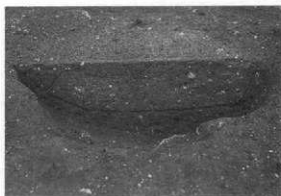
VIIA3h-2 焼土遺構平面



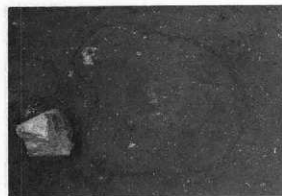
VIIA3h-2 焼土遺断面



VIIA3i-1 焼土遺構平面



VIIA3i-1 焼土遺断面



VIIA3i-4 焼土遺構平面



VIIA3i-4 焼土遺断面

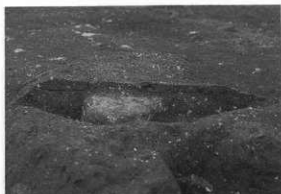


VIIA3i-5 焼土遺構平面

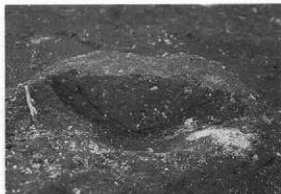


VIIA3i-5 焼土遺断面

写真図版33 焼土遺構（縄文時代）(4)



VIIA3i-6 焼土遺構断面



VIIA3i-7 焼土遺構断面



VIIA3j-1 焼土遺構断面



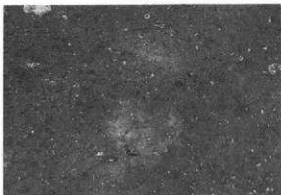
VIIA3j-2 焼土遺構断面



VIIA4d-1 焼土遺構断面



VIIB2b-5 焼土遺構断面



VIIB1a-4 焼土遺構平面



VIIB1a-4 焼土遺構断面

写真図版34 焼土遺構 (縄文時代) (5)



VII B1a-5 烧土遺構平面



VII B1a-5 烧土遺構断面



VII B1c-1、-2 烧土遺構平面



VII B1c-2 烧土遺構断面



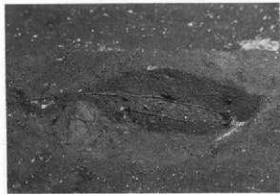
VII B1c-3 烧土遺構平面



VII B1c-3 烧土遺構断面



VII B2a 烧土遺構平面



VII B2a 烧土遺構断面

写真図版35 烧土遺構 (縄文時代) (6)



VIIb2b-1 焼土遺構平面



VIIb2b-1 焼土遺構断面



VIIb2b-3、-4 焼土遺構平面



VIIb2b-3 焼土遺構断面



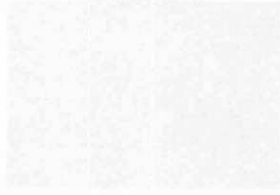
VIIb3a-1 焼土遺構平面



VIIb3a-1 焼土遺構断面



VIIb2b-4 焼土遺構断面



写真図版36 焼土遺構（縄文時代）(7)



VII C3c 焼土遺構



VII C3c 焼土遺構断面



VII B1d 集石



VII B1d 集石断面

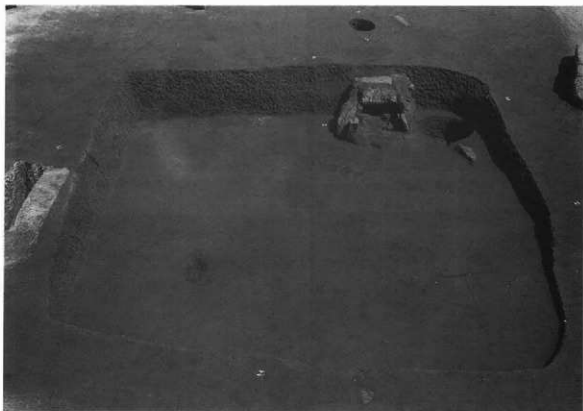


VII A2d 廃棄土断面 (A-A) 南側



VII A2d 廃棄土断面 (A-A) 北側

写真図版37 焼土遺構(縄文時代) (8)、VII B 1 d 集石、VII A 2 d 廃棄土



平面



断面 (A-A')



断面 (A-A') 貼り床

写真図版38 II B 4 h 住居跡(1)



断面 (B-B')



遺物出土状況



砂鉄塊断面



砂鉄塊、礫石出土状況



カマド



カマド断面

写真図版39 II B 4 h 住居跡(2)



平面



カマド



カマド断面



住居内土坑

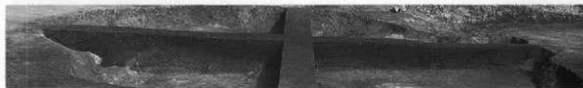
写真図版40 VIIA 3 b 住居跡



平面



断面 (A-A)



断面 (B-B)



住居内土坑 3



住居内土坑 4

写真図版41 VIII A 1 d 住居跡(1)



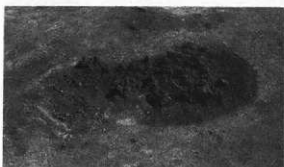
カマド平面 (完掘)



カマド燃烧部断面



カマド煙道部断面



鏡冶炉平面 (検出)



鏡冶炉平面 (完掘)



鏡冶炉断面



鏡冶炉半截



VIIIAd 住居内土坑 1



VIIIAd 住居内土坑 2



VIII Ae-1、-2 土坑



VIII Ae-1、-2 土坑断面

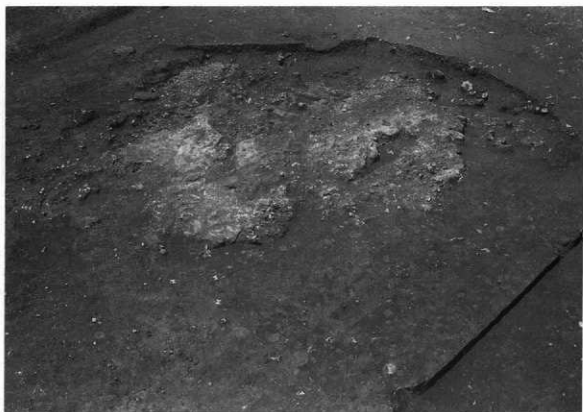


調査風景



調査区北側屋根

写真図版43 VIII Ad 住居跡(3)、土坑(古代)



炉群檢出状況



b炉



b炉断面

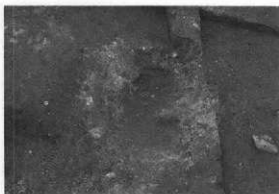


a炉

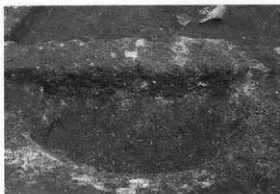


a炉断面

写真図版44 IIC 2 ●製鉄炉群(1) a 炉、b 炉



c 炉



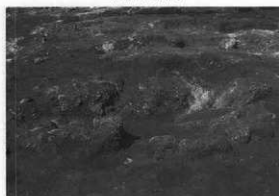
c 炉埋土断面



c 炉掘り方断面



e 炉



e 炉埋土断面



e 炉掘り方断面

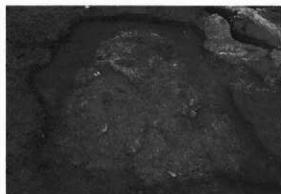


d 炉

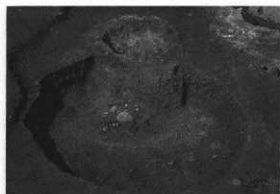


d 炉断面

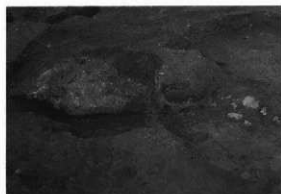
写真図版45 II C 2 e 製鉄伊群(2) c 炉、d 炉、e 炉



8炉檢出状況



8炉



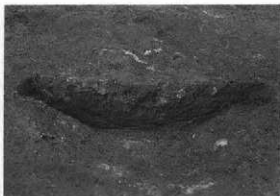
8炉断面



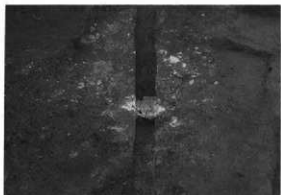
f炉炉底と前庭部断面



1号土坑



1号土坑断面



2号土坑



2号土坑断面

写真図版46 II C 2 e 製鉄炉群(3) f 炉、8 炉、1～2号土坑



II C2e 製鉄炉群完掘



II C1e 羽口捨て場 1



II C1c 羽口捨て場 2



II B5h 炭置き場



II B3h グリット土篩器出土状況



調査風景 (飛び地 1 区)



調査風景 (II B4h 住居跡)

写真図版47 II C 2 e 製鉄炉群(4)羽口捨て場、炭置き場、遺構外遺物出土状況



I C0e 炭窠



I C0g 炭窠



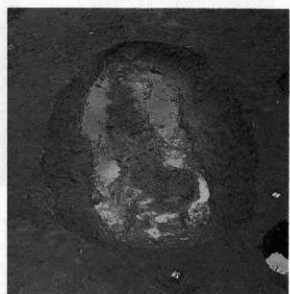
断面



断面



II C1c 炭窠



II C1d 炭窠



断面



断面



II C1f 炭窟



断面



II C2c 炭窟断面



II C2c 炭窟断面



II C2b 炭窟



II C2d-2 炭窟

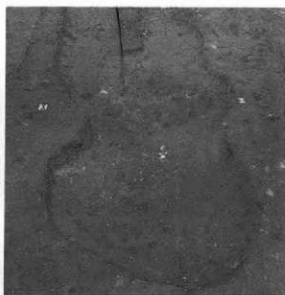


断面

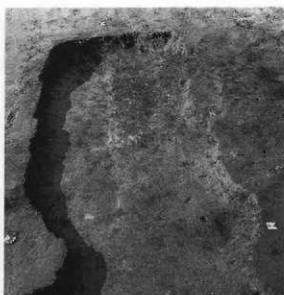


断面

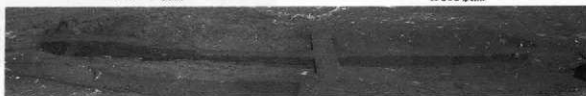
写真図版49 炭窟(2)



II C2d-1 炭窟



II C3d 炭窟



II C2d-1 炭窟、II C3d 炭窟断面



II C2g 炭窟



II C2a 炭窟

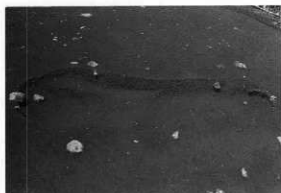


断面



断面

写真图版50 炭窟(3)



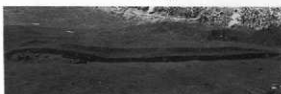
VI B8e 炭竈



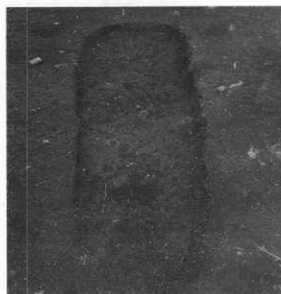
VI B8f 炭竈



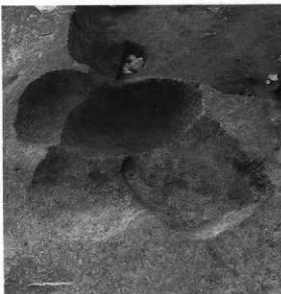
断面



断面



VI B9c 炭竈



VII A1e-1、2 炭竈

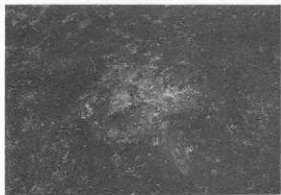


断面



断面

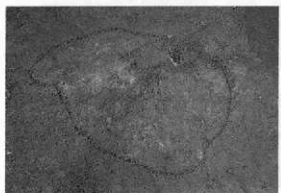
写真図版51 炭竈(4)



II B2g 焼土遺構



II B2g 焼土遺構断面



II C2f 焼土遺構



II C2f 焼土遺構断面



VII A1d 焼土遺構



飛び地 (I、II区) 完備状況

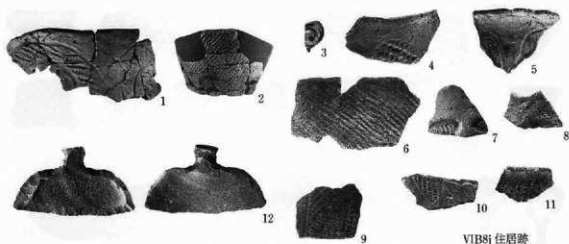


VII A2b 焼土遺構

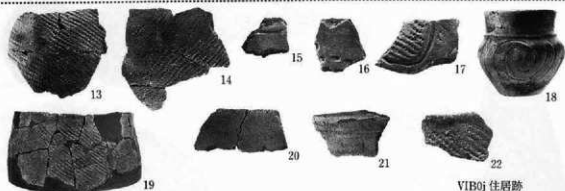


VII A2b 焼土遺構断面

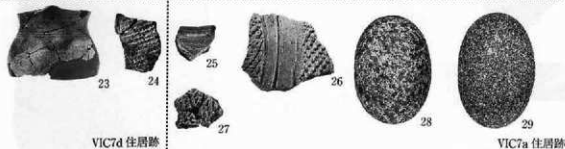
写真図版52 焼土遺構 (古代)



VIB8j 住居跡

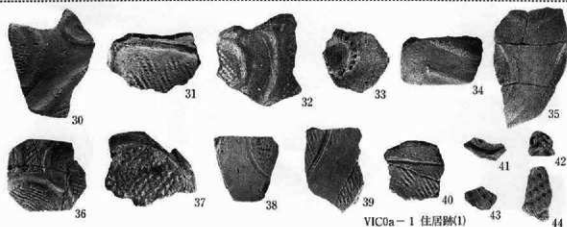


VIB0j 住居跡



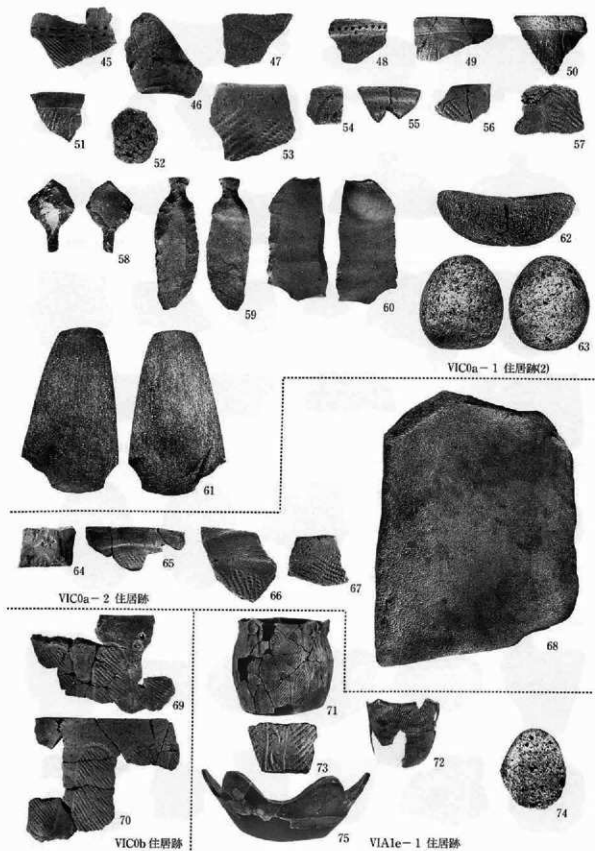
VIC7d 住居跡

VIC7a 住居跡

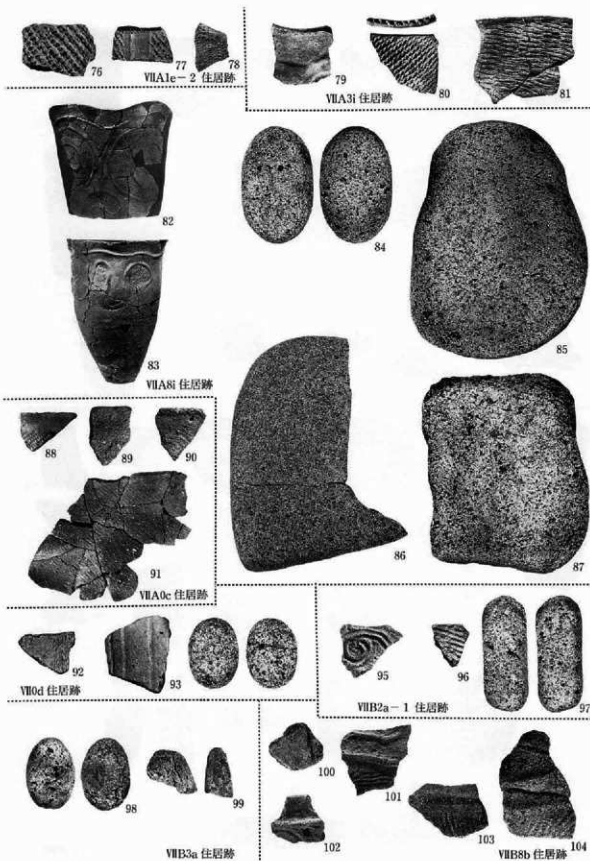


VIC0a-1 住居跡(1)

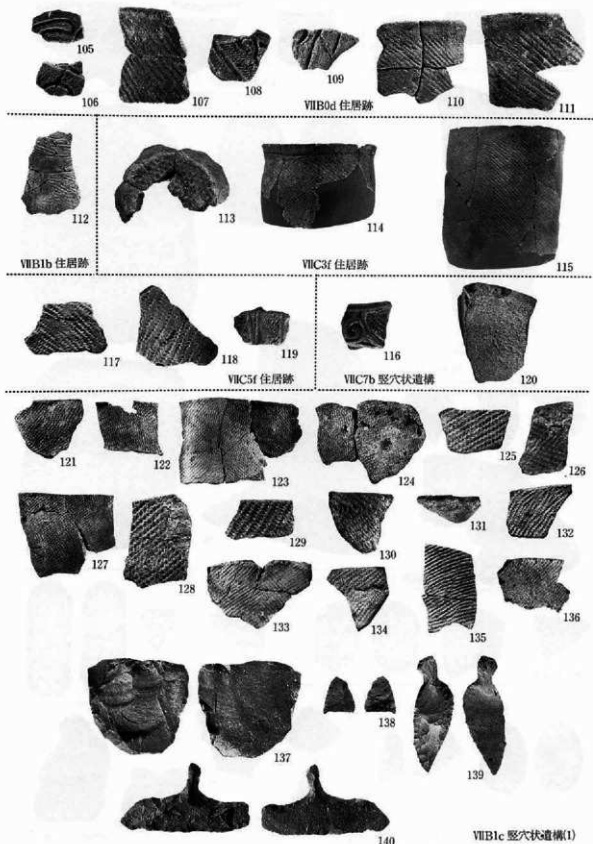
写真図版53 遺構内出土遺物 VIB 8 j 住居跡、VIB 0 j 住居跡、VIC 7 a 住居跡、VIC 7 d 住居跡、VIC 0 a-1 住居跡(1)



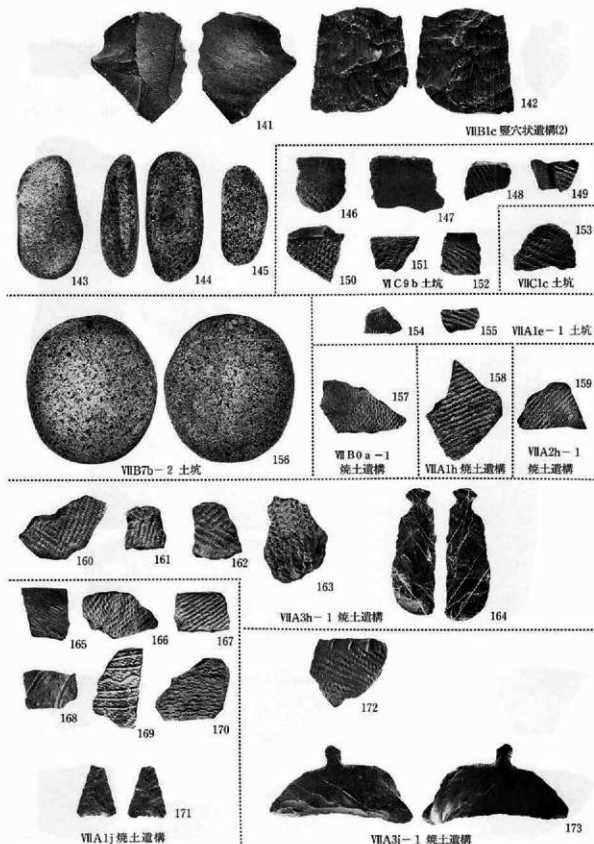
写真図版54 遺構内出土遺物 VIC0 a-1住居跡(2)、VIC0 a-2住居跡、VIC0 b住居跡、VIA1 e-1住居跡



写真図版55 遺構内出土遺物 VIIA1e-2住居跡、VIIA3i住居跡、VIIA8i住居跡、VIIA0c住居跡、VIIA0d住居跡、VII B2a-1住居跡、VII B3a住居跡、VII B8b住居跡



写真図版56 遺構内出土遺物 VII B 0 b 住居跡、VII C 1 b 住居跡、VII C 3 f 住居跡、VII C 5 f 住居跡、VII C 7 b 竪穴状遺構、VII B 1 c 竪穴状遺構(1)



写真図版57 遺構内出土遺物 VII B 1 c 竖穴状遺構(2)、VII C 9 b 土坑、VII C 1 c 土坑、VII A 1 e-1 土坑、VII A 1 e-2 土坑、VII B 7 b-2 土坑、烧土遺構(1)



174

VIA3i-6 燒土遺構



175



176



177

VIA3j-1 燒土遺構

178



179

VIB1c-3 燒土遺構



180



181



182



183



184



185

II B4h 住居跡



186



187



188



189



190



191



192



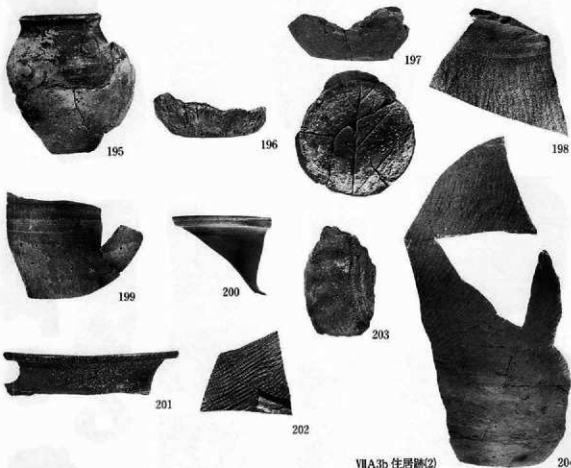
193



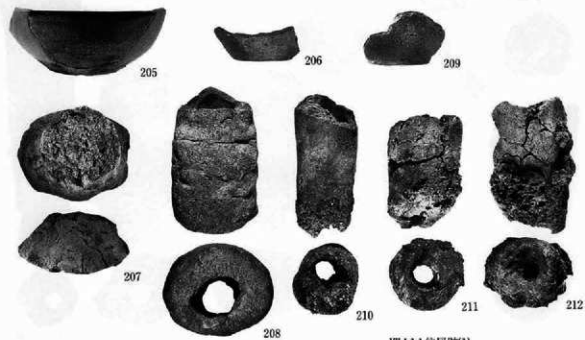
194

VIA.3 b 住居跡(1)

写真図版58 遺構内出土遺物 燒土遺構(2)、II B4 h 住居跡、VIA 3 b 住居跡(1)

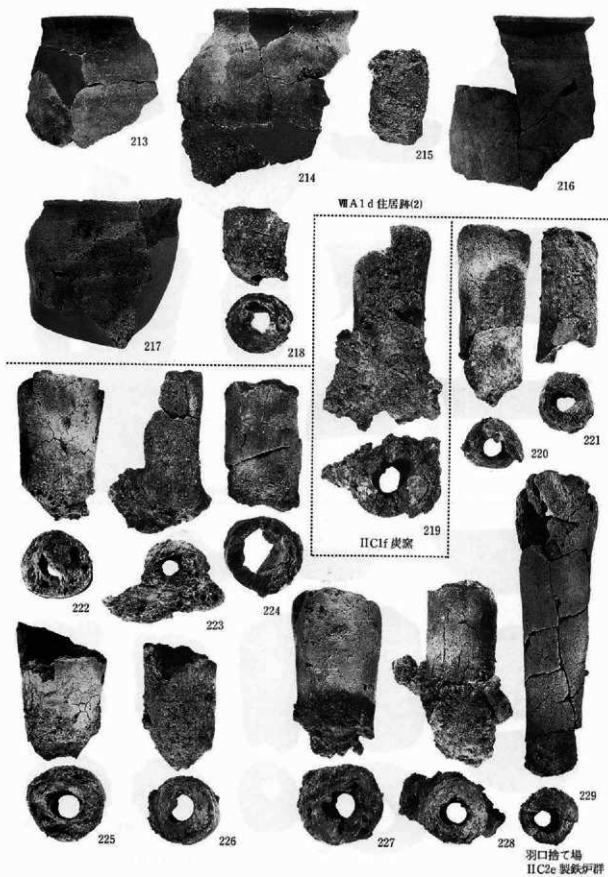


VIA3b 住居跡(2)

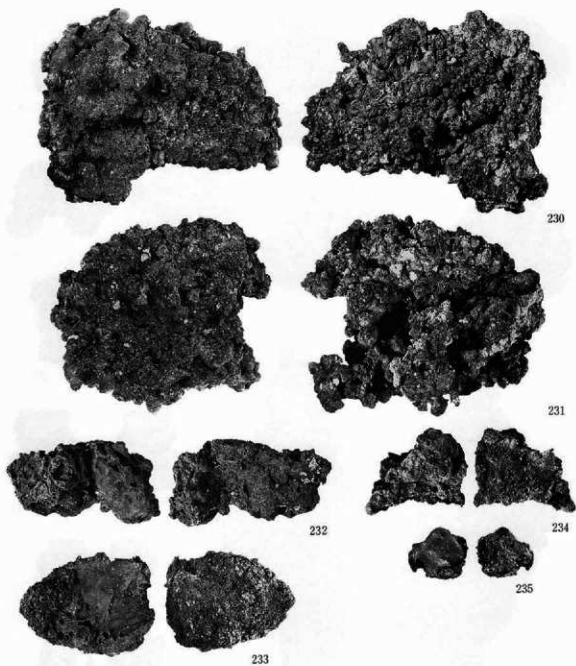


VIA1d 住居跡(1)

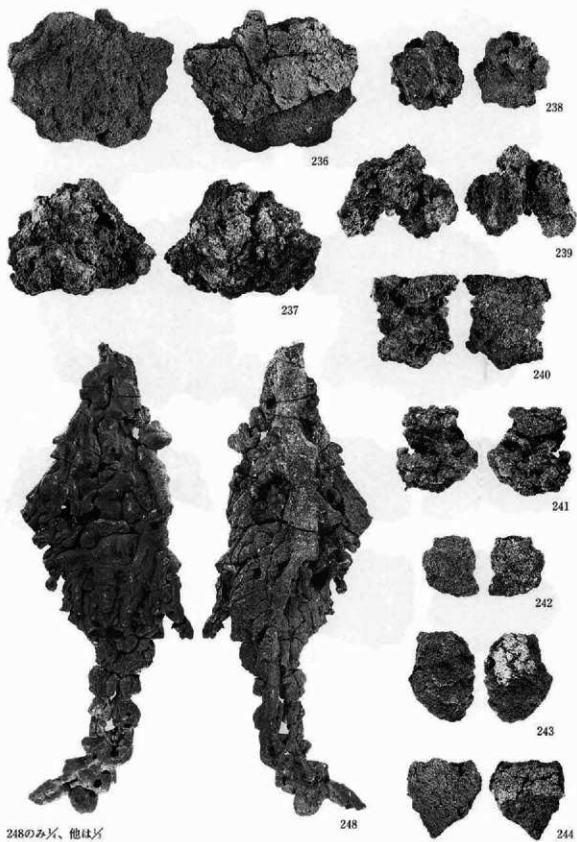
写真図版59 遺構内出土遺物 VIIA3b住居跡(2)、VIIA1d住居跡(1)



写真図版60 遺構内出土遺物 VII A 1 d 住居跡(2)、IIC1f 炭窟、IIC2e 製鉄炉群、羽口捨て場

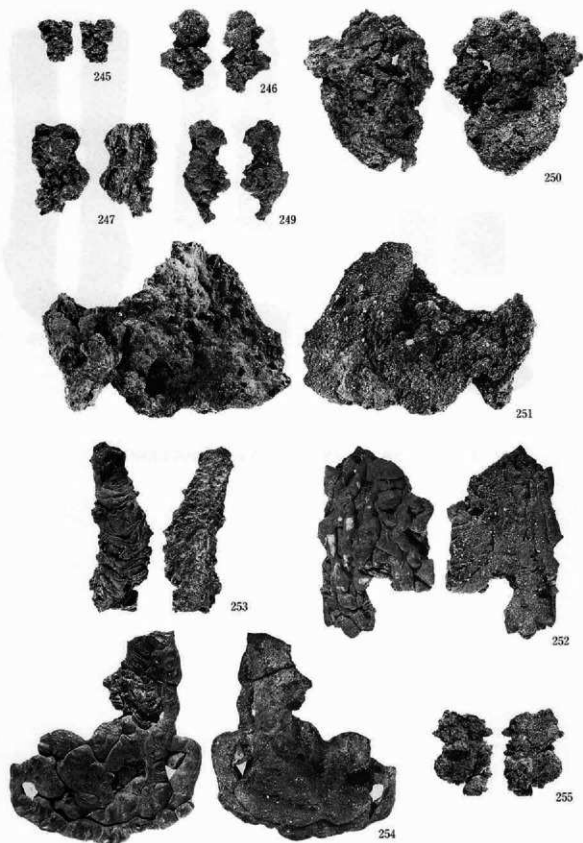


写真図版61 遺構内出土遺物 VIIA 1 d 住居跡(3)



248のみは、他は

写真図版62 遺構内出土遺物 II C 2 ●製鉄炉群製鉄関連遺物(1)



写真図版63 遺構内出土遺物 II C 2 ●製鉄炉群製鉄関連遺物(2)



256



259



260



257

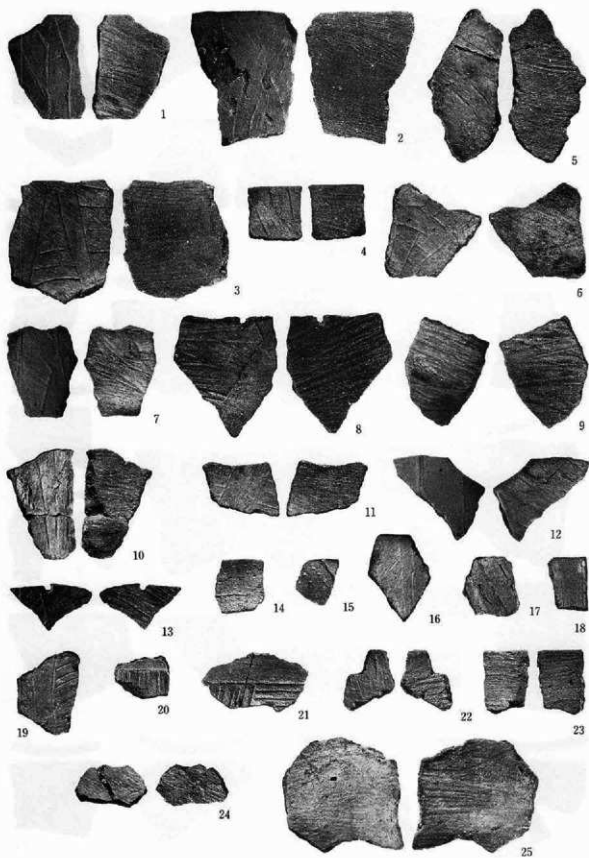


258

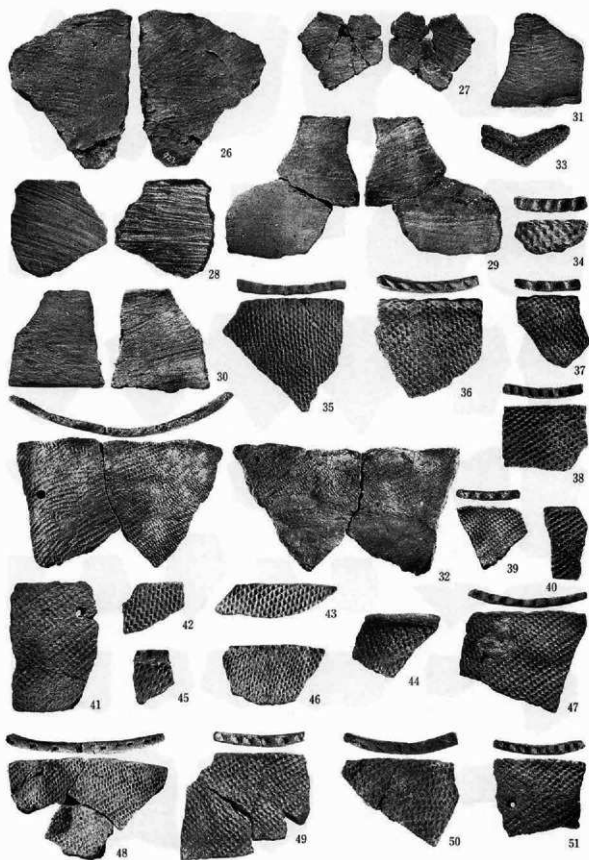


261

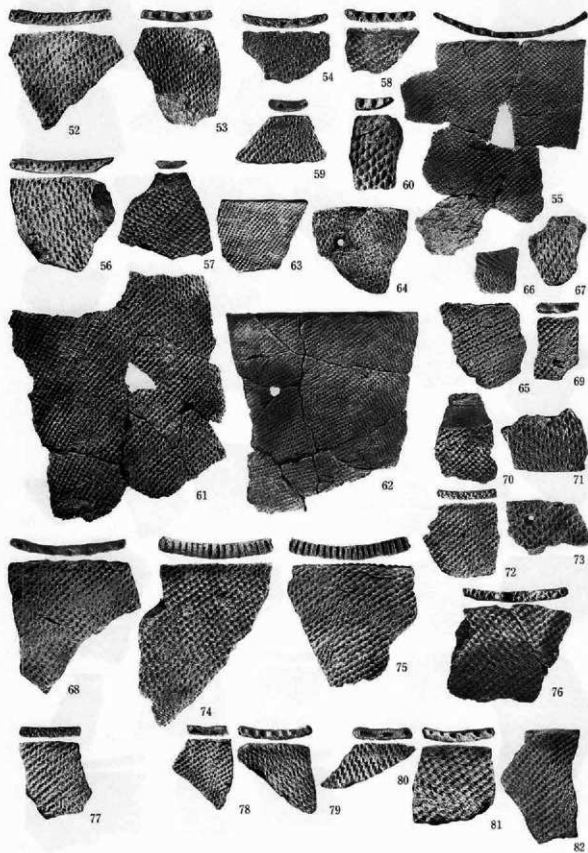
写真図版64 遺構内出土遺物 II C 2 e 製鉄炉群製鉄関連遺物(3)



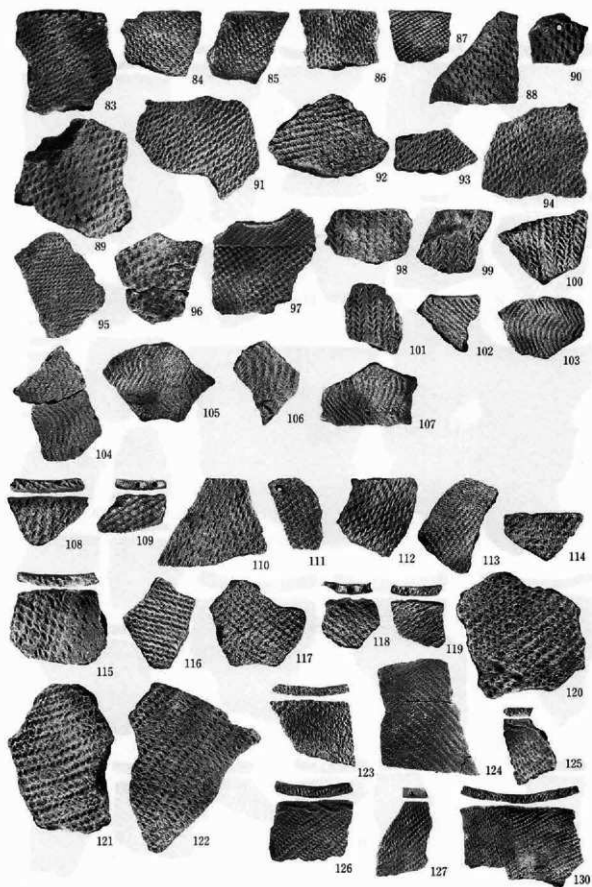
写真図版65 遺構外出土遺物 土器 I



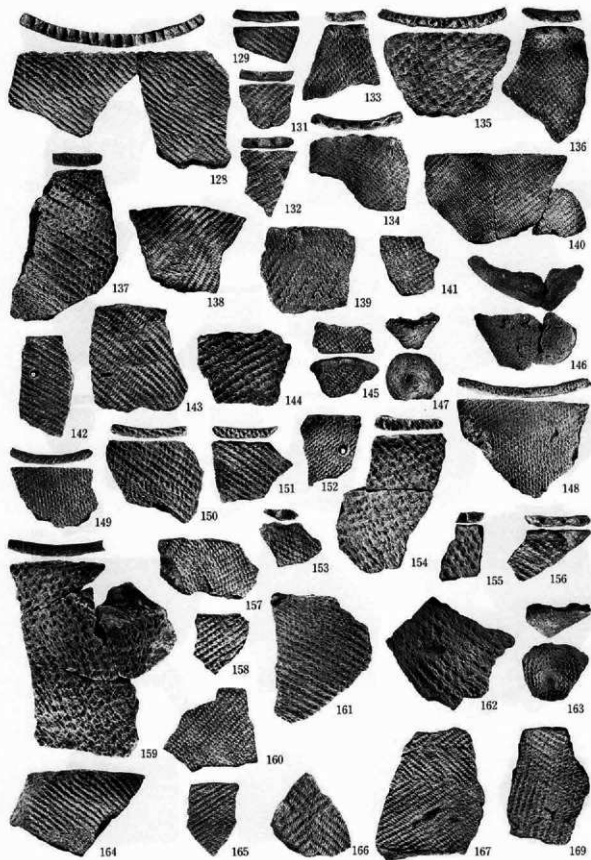
写真図版66 遺構外出土遺物 土器 2



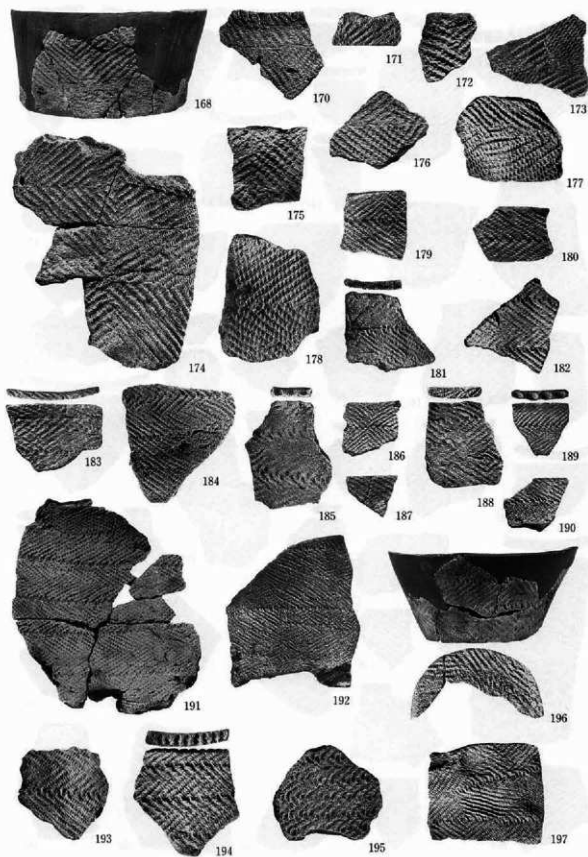
写真図版67 遺構外出土遺物 土器3



写真図版68 遺構外出土遺物 土器 4



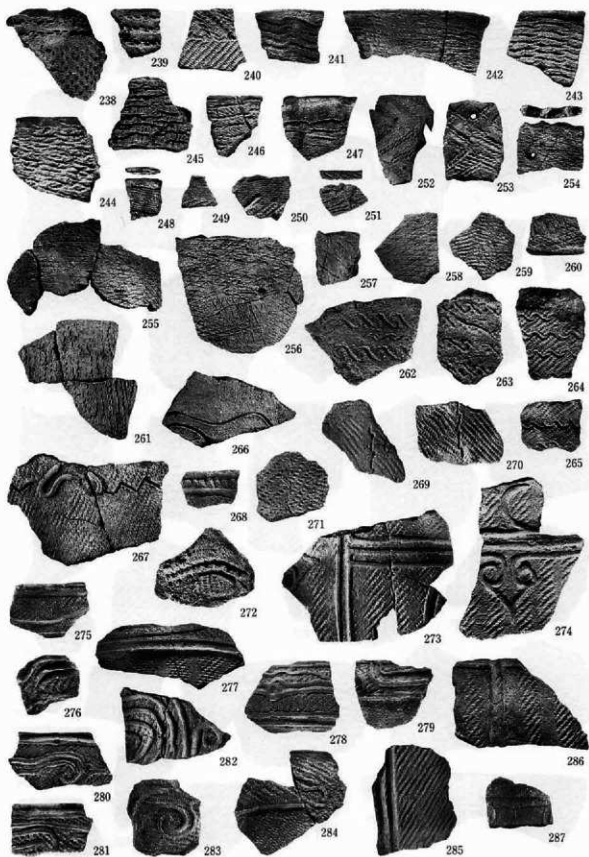
写真图版69 遼東外出土遺物 土器 5



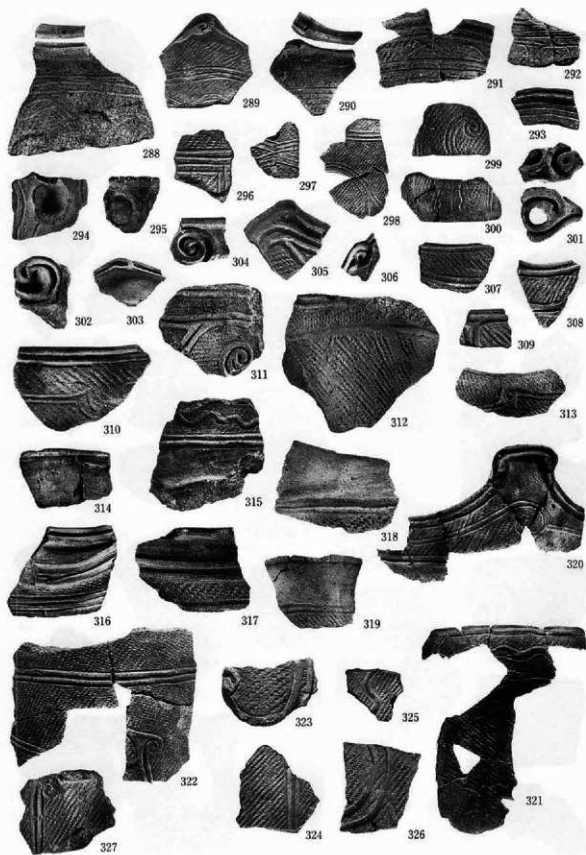
写真図版70 遺構外出土遺物 土器 6



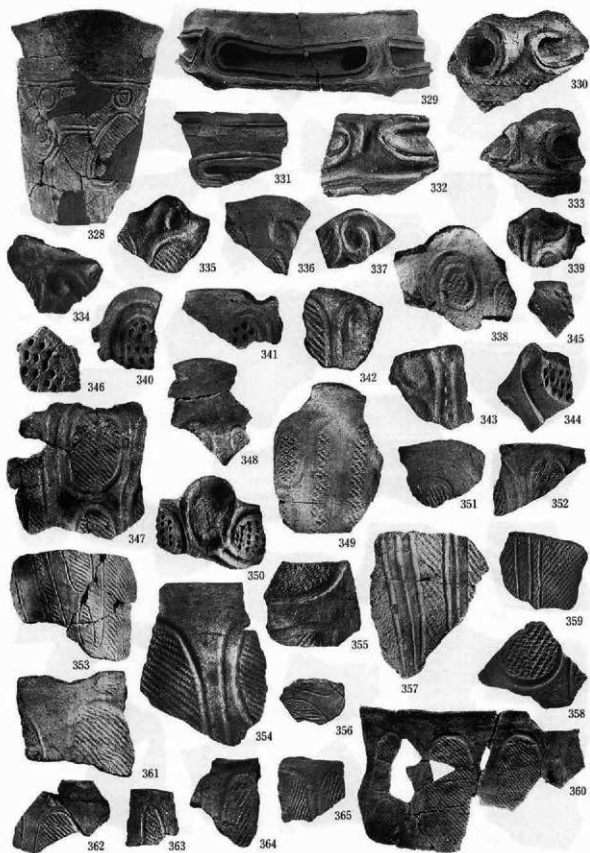
写真図版71 遺構外出土遺物 土器7



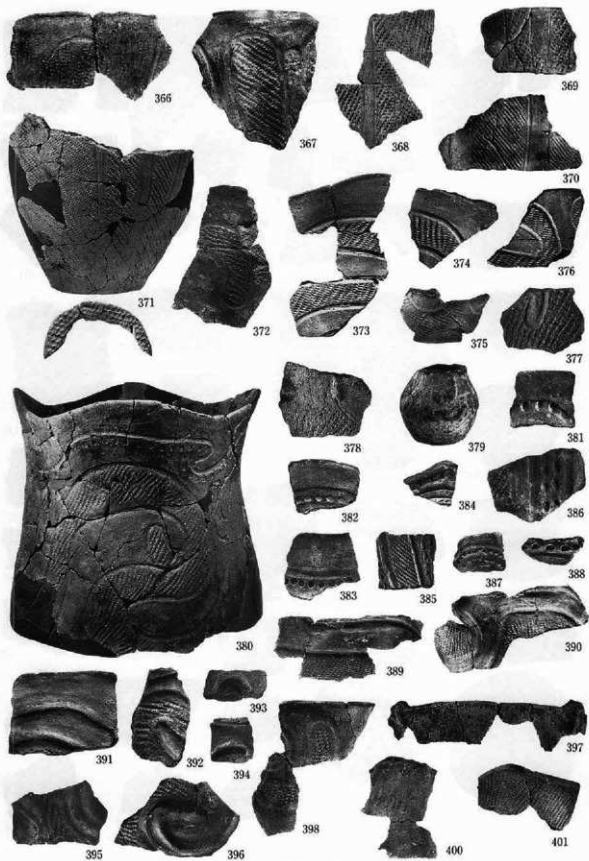
写真图版72 遺構外出土遺物 土器 8



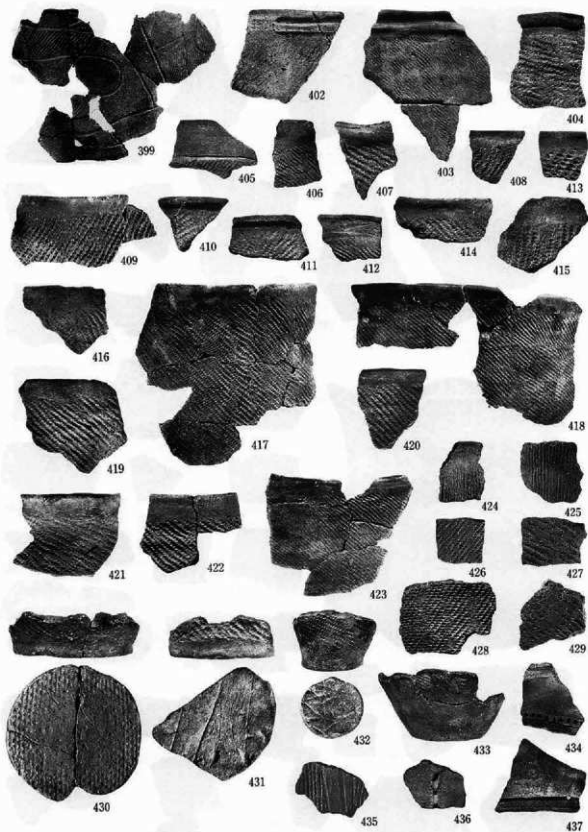
写真図版73 遺構外出土遺物 土器9



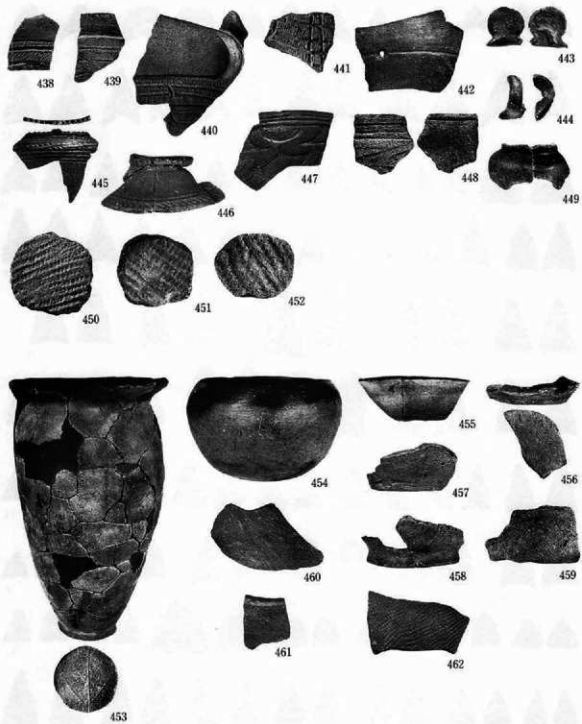
写真図版74 遺構外出土遺物 土器10



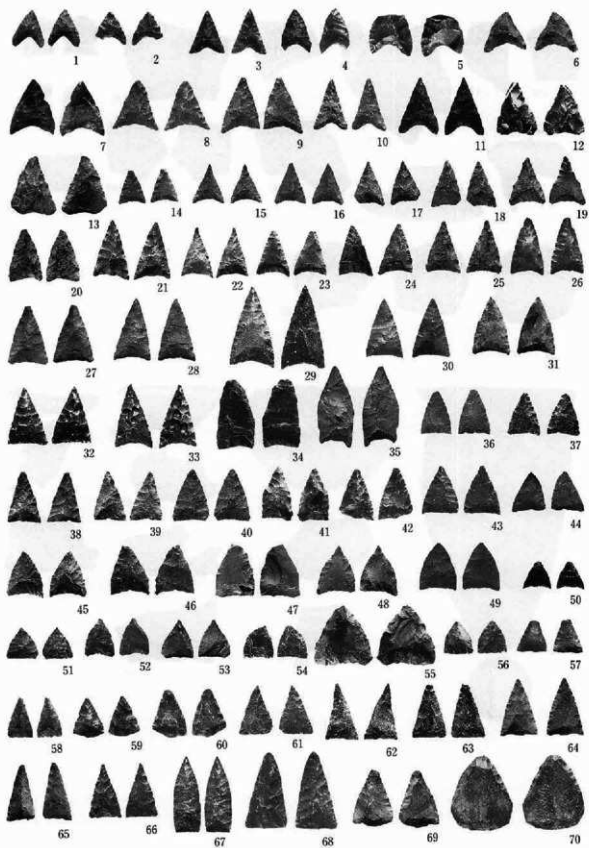
写真図版75 遺構外出土遺物 土器11



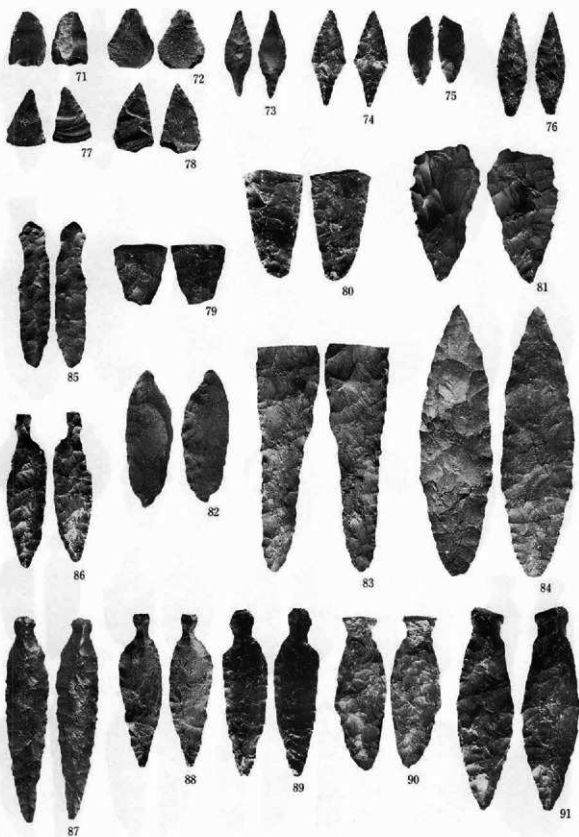
写真図版76 遺構外出土遺物 土器12



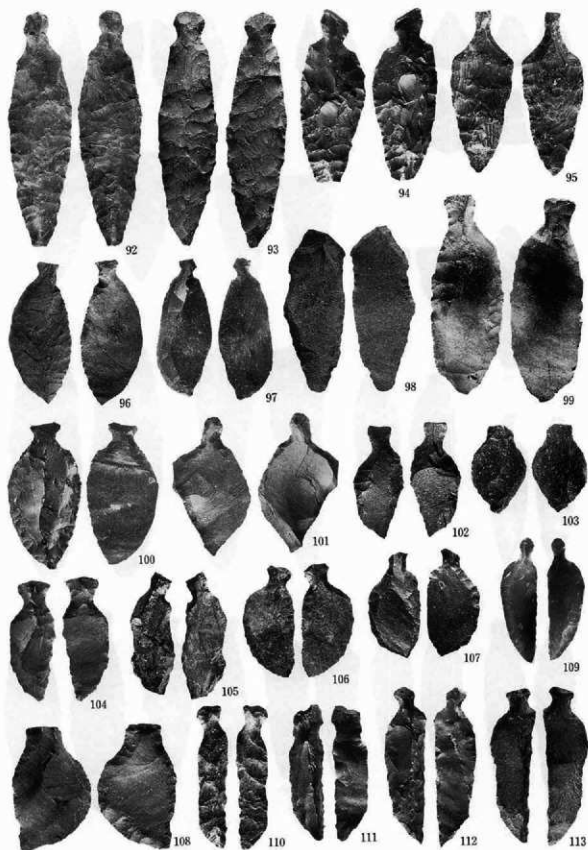
写真図版77 遺構外出土遺物 土器13、土製品



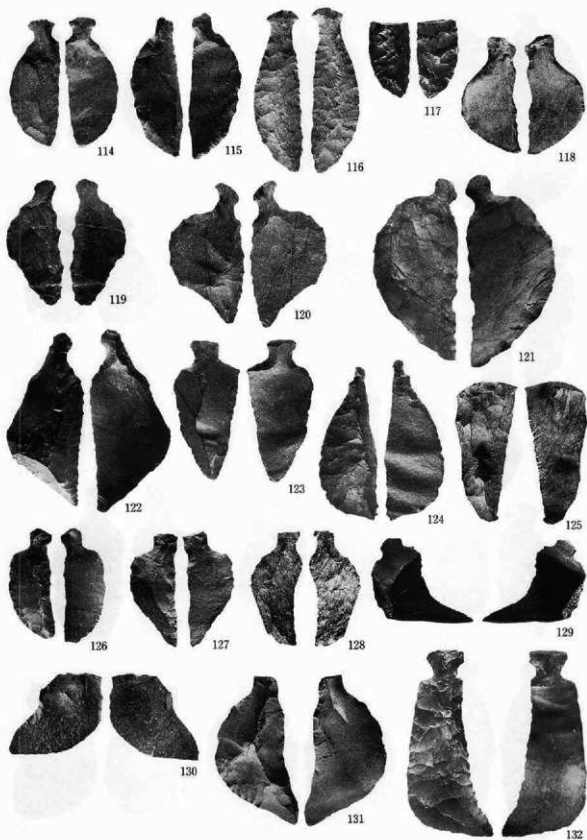
写真図版78 遺構外出土遺物 石器 1



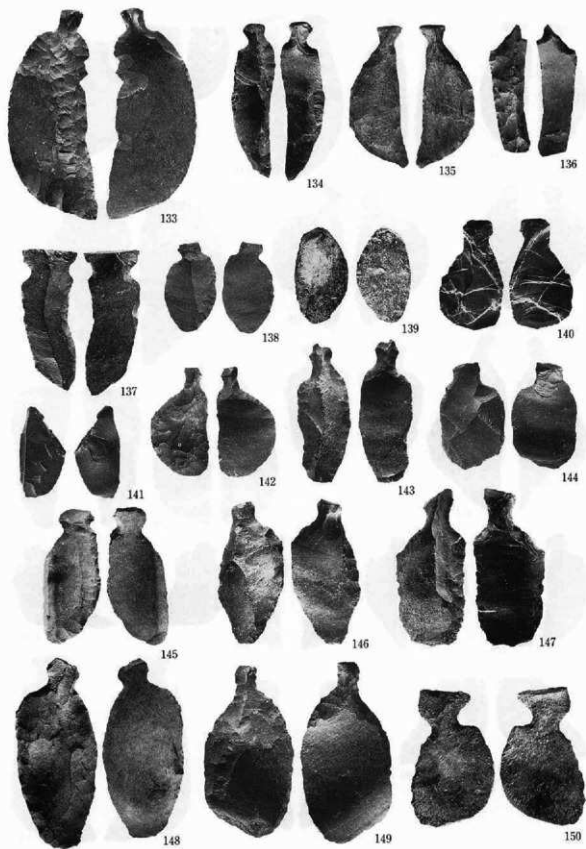
写真図版79 遺構外出土遺物 石器 2



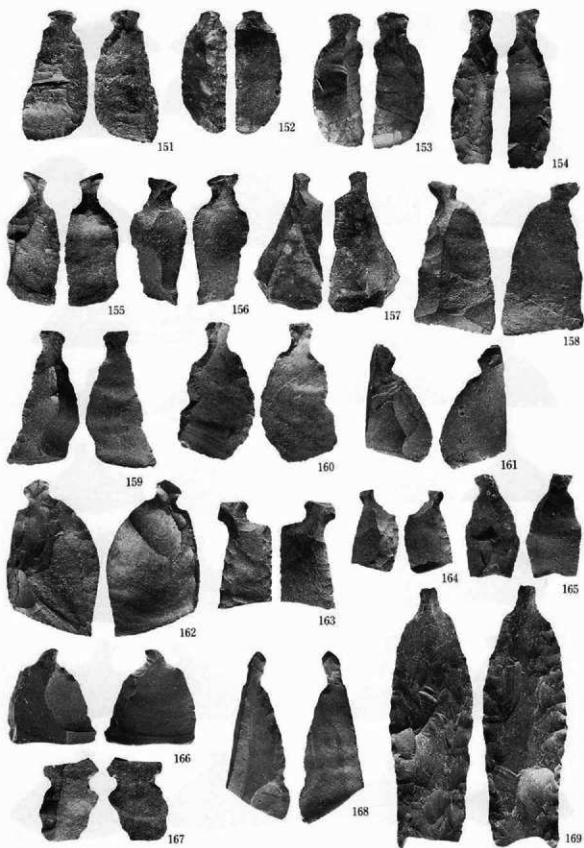
写真図版80 遺構外出土遺物 石器3



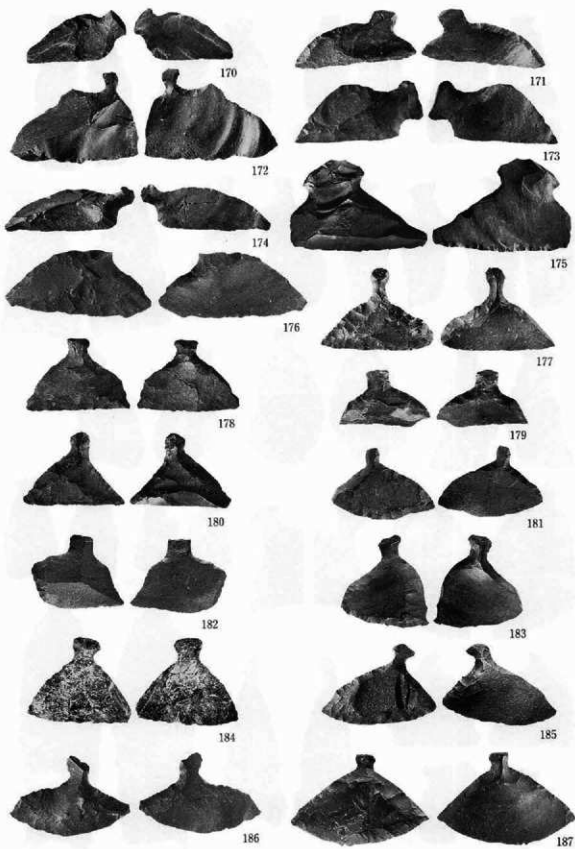
写真図版81 遺構外出土遺物 石器4



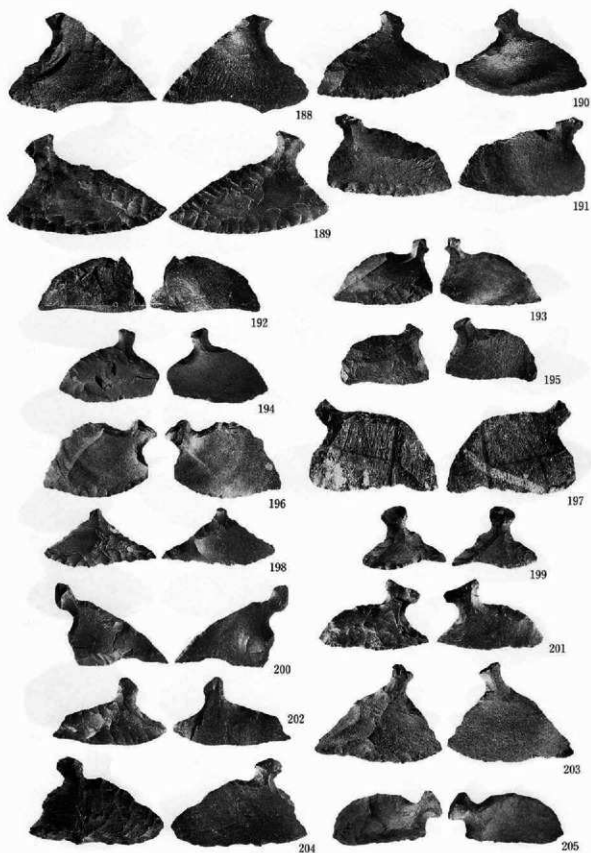
写真図版82 遺構外出土遺物 石器 5



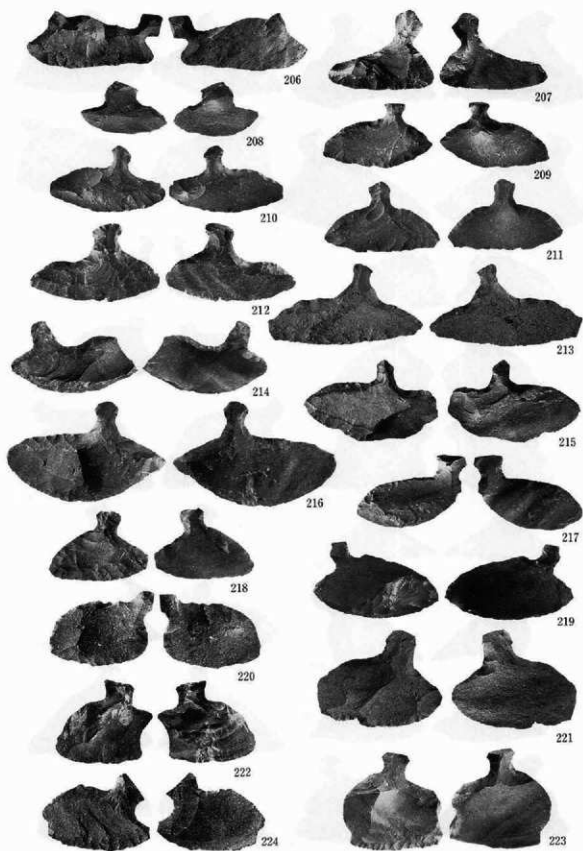
写真図版83 遺構外出土遺物 石器 6



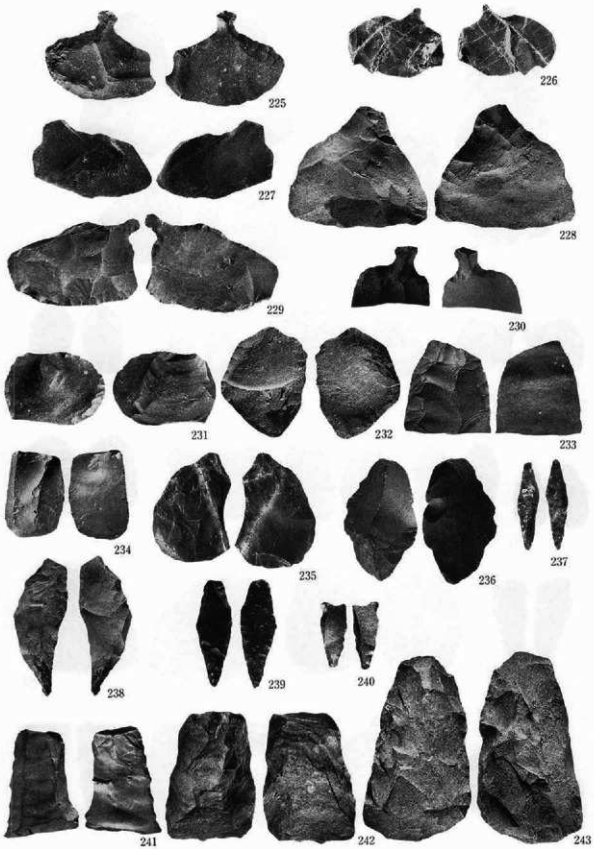
写真図版84 遺構外出土遺物 石器7



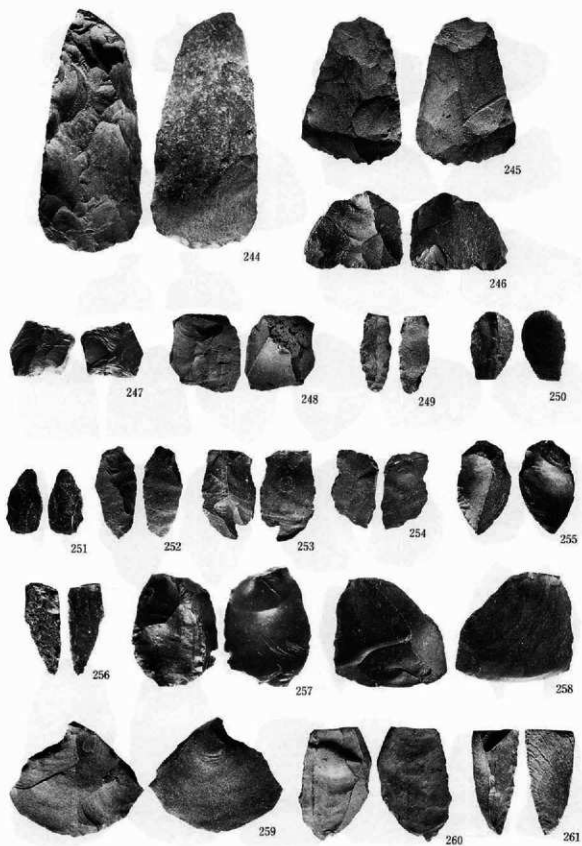
写真図版85 遺構外出土遺物 石器 8



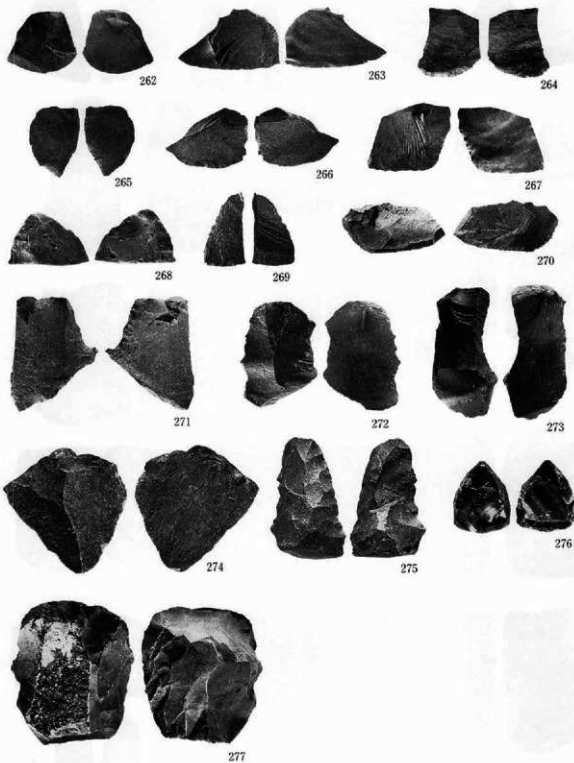
写真図版86 遺構外出土遺物 石器9



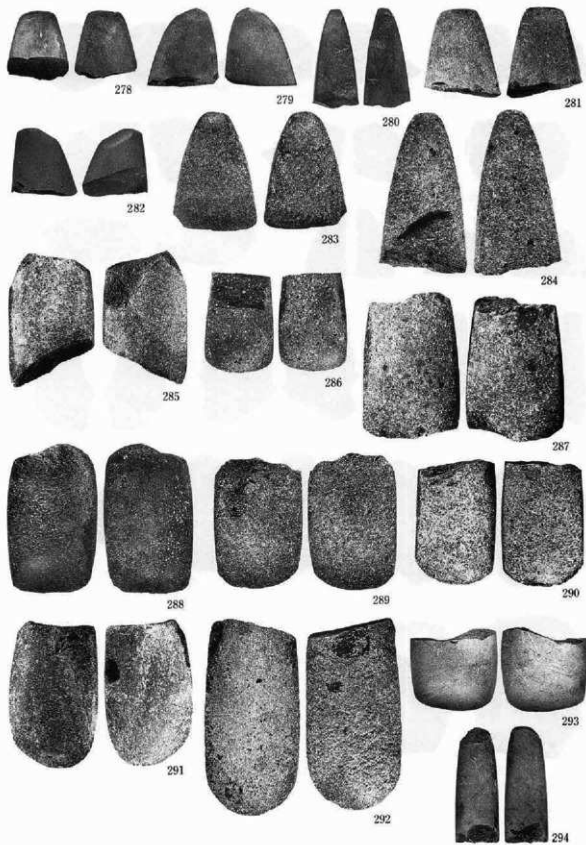
写真図版87 遺構外出土遺物 石器10



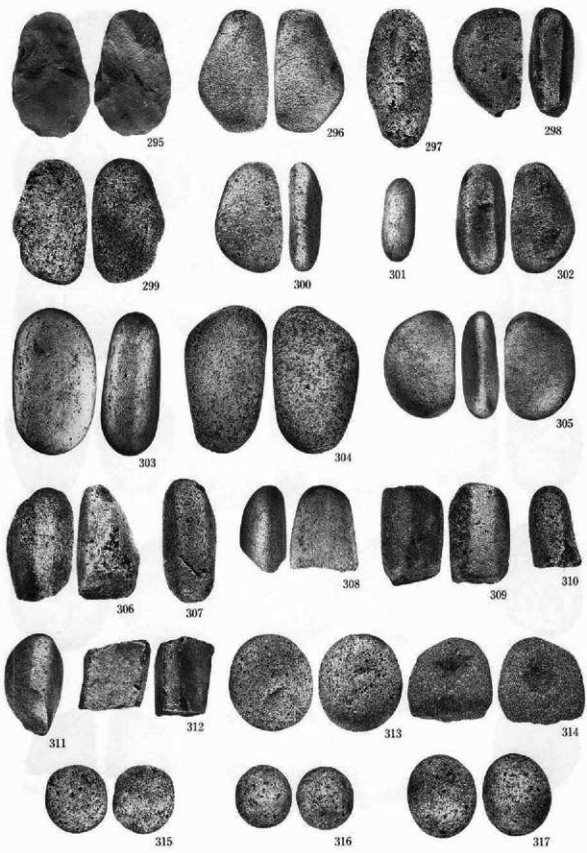
写真図版88 遺構外出土遺物 石器II



写真図版89 遺構外出土遺物 石器12



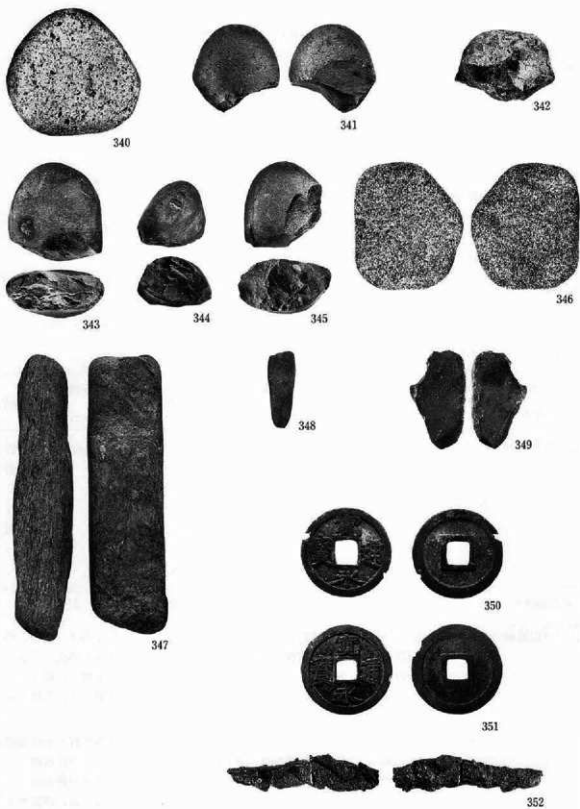
写真図版90 遺構外出土遺物 石器13



写真図版91 遺構外出土遺物 石器14



写真図版92 遺構外出土遺物 石器15



写真図版93 遼東外出土遺物 石器16、錢、鉄製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまのうちさんいせむつにつらじのむくくし							
書名	山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第250集							
編著者名	神 敏明・高橋佐知子・工藤利幸							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019)638-9001・9002							
発行年月日	西暦 1997年3月 25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村	北 緯 遺跡番号	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
やまのうちさんいせむつにつらじのむくくし 山ノ内Ⅲ遺跡	やまのうちさんいせむつにつらじのむくくし 岩手県下閉 伊都山田町 船越 第2地帯	03482	MG18-0281	39度 29分 11秒	141度 58分 21秒	1993. 7. 26 ～ 1993. 10. 28 1994. 4. 5 ～ 1994. 8. 12	9,000㎡	三陸縦貫 自動車道 (山田道路) 建設に伴 なう事前 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
やまのうちさんいせむつにつらじのむくくし 山ノ内Ⅲ遺跡	集 落	縄文時代 早期末～ 前期初頭 中期後葉 ～末葉	竪穴住居跡21棟 竪穴状遺構2基 土坑 11基 焼土遺構 37基	縄文土器 (早・前・中・後・晩期) 円盤状土製品 石器・石製品	縄文時代の尾根の鞍 部から斜面に広がる 集落域と谷筋から多 数検出された焼土群			
	生産遺跡	平安時代 (9C末～ 10C中葉)	竪穴住居跡3棟 土坑 2基 製鉄炉 8基 炭窯 17基 炭置き場1か所 焼土遺構 4基	土師器 須恵器 鉄滓、砂鉄、羽口 支脚	製鉄炉群と製鉄関連 の工人の住居跡 住居内の鍛冶炉 製塩土器に類似する 土器の出土			

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	山 影 源 吉		
副 所 長	鷹 羽 康 造		
〔管理課〕			
管理課長	澤 田 寛		
主 任	横 山 文 彦		
主 事	千 葉 勝 彦		
〔調査課〕			
調査課長	小 田 野 哲 憲	文 化 財	羽 柴 直 人
課長補佐	高 橋 興右衛門	専門調査員	星 雅 之
〃	工 藤 利 幸	〃	高 木 晃
主任文化財	中 川 重 紀	〃	杉 沢 昭太郎
専門調査員	佐々木 清 文	〃	大 濵 篤 史
〃	高 橋 義 介	〃	瀬 浩 二郎
〃	酒 井 宗 孝	〃	村 上 拓
〃	菊 池 人 見	〃	中 村 直 美子
文 化 財	小 山 内 透	期 限 付	川 向 聖 子
専門調査員	高 橋 佐知子	専 門 職 員	〃
〃	松 本 建 速	〃	〃
〃	菊 地 榮 壽	〃	〃
〃	宮 本 節 子	〃	〃
〃	下 田 隆 衛	〃	〃
〃	濱 田 宏	〃	〃
〃	金 子 昭 彦	〃	〃
〃	晴 山 雅 光	〃	〃
〃	木 戸 口 俊 子	〃	〃
〃	阿 部 勝 則	〃	〃
〔資料課〕			
資料課長	菊 池 強 一		
文化財	伊 藤 拓		
専門調査員			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第250集

山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

印刷 平成9年3月17日

発行 平成9年3月25日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

印刷 株式会社 社 駿 印刷

〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22-50

TEL (019) 641-8000代

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1997